

地域志向教育研究プロジェクト

# 研究成果論文集

2014 ~ 2018



十文字学園女子大学

JUMONJI UNIVERSITY



# 目次

発刊のことば	学長 志村 二三夫	03
■地域志向教育研究プロジェクト成果論文		
地域志向科目のためのカリキュラムと実践状況		05
安達 一寿、鈴木 晴子、長田 瑞恵、上垣内 伸子、山本 悟、綿井 雅康 宮内 寿彦、太田 真智子、宮城 道子、徳野 裕子、井上 久美子、竹嶋 伸之輔 山崎 優子、石川 敬史、松永 修一、込江 雅彦、石野 栄一		
「新座歴史探訪」報告		21
池間 里代子		
地域学習補助教材としての冊子作成		27
石野 栄一		
介護保険施設での傾聴ボランティア活動を通じた傾聴技術の評価		31
大山 博幸		
「NPO 法人暮らしネット・えん えん食卓」食事サービスの改善への取り組み		37
岡本 節子、金高 有里、名倉 秀子		
新座市の健康長寿に向けた取り組みとその評価に関する地域連携研究		43
加藤 則子、志村 二三夫、長澤 伸江、井上 久美子、布施 晴美、富井 友子、 名塚 清、横山 徹爾、藤田 誠一		
乳幼児を子育て中の保育者が行うピアサポートとしての子育て支援事業		
「+（プラス）ママの子育てサロン」開催と有効性の検討		49
上垣内 伸子、金勝 裕子、向井 美穂、横井 紘子、鈴木 晴子、渡邊 孝枝、 近藤 有紀子、山田 陽子、川喜田 昌代、権 明愛、伊集院 理子、関根 佐也佳、 加藤 陽子、松野 さおり、中谷 えりか、辻 あゆみ		
地域交流力を育む教育課程の創造		59
狩野 浩二		
産学民連携による地域の食材を使った商品の開発		71
金高 有里、岡本 節子、堀井 貴子、中島 万季、名倉 秀子		
大学と地域の連携による教育及び表現活動の展開		
「公共ホールのピアノを活用した新座市の取り組みから」		77
久保田 葉子		

地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用 曾矢 麻理子、小林 三智子	89
子育てをキーワードとした豊かな社会システムのあり方について 鈴木 康弘、宮野 周、藪崎 伸一郎、川瀬 基寛、大山 博幸、名塚 清、 山本 悟、竹迫 久美子	99
聴覚障害を抱える幼児への運動援助について 鈴木 康弘、山本 悟	111
「地域密着型メディアによる情報発信」への取り組み 棚谷 祐一	117
小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合 日出間 均、山本 悟、富山 哲也	123
本学における放課後児童クラブとの協働を考える 布施 晴美、風間 文明、安田 哲也、加藤 陽子、平田 智秋、長田 瑞恵	129
地域環境を生かした子どものための自然体験活動の実践と評価 星野 敦子	135
大学マスコットキャラクターを活用した地域連携活動 星野 祐子	145
親子支援プロジェクト 山口 由美	157
学生のジェネリックスキル伸長状況の分析 安達 一寿	165
■資料	
地域活動に関する学生アンケートの集計 安達 一寿、星野 敦子、名塚 清	175

## 地域志向教育研究プロジェクト 研究成果論文集 2014～2018 発行にあたって

学長／地域連携推進機構長  
志村 二三夫

「地域志向教育研究プロジェクト 研究成果論文集 2014～2018」をお届けします。この論文集は、平成 26 年度に“新座市をキャンパスに！+（プラス）となる人づくり，街づくり”というテーマで採択され、5 年間にわたり取り組んできた文部科学省の「十文字学園女子大学 地（知）の拠点整備事業（COC 事業）」が今年度で最終年度となることから、同事業の一環として行われた研究プロジェクトの成果を取りまとめたものです。大学 COC（Center of Community）事業は、文部科学省が国内の大学を対象として、「地域社会との連携強化による地域の課題解決」や「地域振興策の立案・実施を視野に入れた取り組み」を推進し、大学を中核とする地域における知の拠点づくりをバックアップする施策です。

本学は短期大学の設置以来、半世紀以上に亘り、地域に根ざす大学として教育研究を行う中で、地域社会との連携協力につとめ、地域の皆様に支えられ、地域とともに発展してきました。現在は、1 学部 9 学科を擁する中規模大学へと発展し、また大学院が置かれ、この 3 月には博士課程の学生に初の博士号を授与して送り出すに至り、教育研究機関として一応の成熟を達成することができました。継続は力なりといいますが、新座の地に誕生した短期大学からのこうした長年の弛みない地道な歩みの積み重ねが、COC 事業採択に繋がりました。COC 事業への取り組みは、本学が地域における知の拠点として地域の諸問題に関する学術研究を通じ、地域社会の活性化・発展に寄与する上でまたとないブースターとなりました。

本論文集の作成にあたっては、平成 26 年度～平成 30 年度 COC 事業 地域志向教育研究費に採択されたプロジェクトのうち、原則として 4 年以上継続の研究プロジェクトについては必須投稿、これ以外の研究プロジェクトについては応募投稿としました。その結果、必須投稿論文 15 本、応募投稿論文 6 本が掲載されることとなりました。論文集としては、現段階では玉石混交でしょうが、石と思っていた研究プロジェクトがさらなる鍛えをとおして玉へとトランスフォーム！すればありがたいことです。そのためにも、忌憚のないご意見・ご提案等をお寄せ頂けると幸いです。

文部科学省の COC 事業は今年度で終了しますが、Center of Community: 地域における知の拠点となること、これは本学の使命であり、また本学が進化し続け淘汰から生き残るための目標でもあります。本論文集は、地域とともに本学が、Sustainable Development (持続可能な開発・発展)をめざし、今後さらに踏み出す上で堅固なスターティングブロックになることでしょう。



## 地域志向科目のためのカリキュラムと実践状況

## Curriculum for community-oriented subjects and practical situation of class

安達 一寿<sup>1)\*</sup> 鈴木 晴子<sup>2)</sup> 長田 瑞恵<sup>2)</sup> 上垣内 伸子<sup>2)</sup> 山本 悟<sup>3)</sup>  
 Kazuhisa ADACHI Haruko SUZUKI Mizue NAGATA Nobuko KAMIGAICHI Satoru YAMAMOTO  
 綿井 雅康<sup>4)</sup> 宮内 寿彦<sup>5)</sup> 太田 真智子<sup>5)</sup> 宮城 道子<sup>5)</sup> 徳野 裕子<sup>6)</sup>  
 Masayasu WATAI Toshihiko MIYAUCHI Machiko OTA Michiko MIYAGI Yuko TOKUNO  
 井上 久美子<sup>7)</sup> 竹嶋 伸之輔<sup>7)</sup> 山崎 優子<sup>7)</sup> 石川 敬史<sup>8)</sup>  
 Kumiko INOUE Shinnosuke TAKESHIMA Yuko YAMAZAKI Takashi ISHIKAWA  
 松永 修一<sup>8)</sup> 込江 雅彦<sup>9)</sup> 石野 榮一<sup>1)</sup>  
 Shuichi MATUNAGA Masahiko KOMIE Eiichi ISHINO

キーワード：地域志向科目、カリキュラム、授業、教育方法、COC

**要旨：**本研究では、2014～2018年度の5年間で実施したCOC事業での地域志向科目の実施状況、また学生育成モデルの開発で運用したeポートフォリオの活用状況について報告する。地域志向科目の実施では、共通科目・専門科目とも学生の育成方針に沿った内容がおこなわれ、様々な教育上の知見を得ることができた。eポートフォリオの運用では、学生の利用状況は更なる改善が必要であるが、学修の可視化ツールとしての可能性やルーブリックでの自己評価ツールとしての利用を確認することができた。今後は、これからのカリキュラムでどのように発展・拡充させていくかといった課題がある。

## 1 はじめに

本学は、2014～2018年度の5年間に渡り、文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC(Center of community)事業)」(以下、COC事業)を推進してきた。この事業を通して、2015年度におこなった学部・学科改組を軸とした教育改革では、全学のカリキュラムを抜本的に見直し、地域志向型の一貫性ある教育活動、研究活動、社会貢献活動をおこない、それらを往還させる環境を作り出すことを狙いの一つとしている。また、本学が目指す学生の育成方針として「”地的好奇心”に満ちた、活力・実践力のあるpro-act型の学生」を定義し、「地域を学ぶ：地域を理解、地域の課題解決を通して、社会人としての基礎力養成」・「地域で学ぶ：地域とのふれあい・活動を通して、コミュニケーション力養成」・「地域に活かす：自らの「可能性＝伸びしろ」に気づき、積極的に地域に貢献する心の養成」の領域で教育課程を構築し、さらに地域貢献活動の一層の強化に取り組むこととした。

教育分野では、取り組み内容として、「地域コアカリキュラム・地域志向科目」の開発と、学生育成モデルの開発(eポートフォリオ、ルーブリックを含む)の2つを大きな柱としてきた。また、これらを遂行するために、学科・関連部署代表による「地域教育開発部門」を組織し、管理・運営・実働にあたってきた。本稿ではこの取り組みの内、地域志向科目の状況と実践状況、並びにeポートフォリオの利用状況を中心に報告をおこない、COC事業で得られた知見についてまとめることを目的とする。

1)十文字学園女子大学 メディアコミュニケーション学科 2)十文字学園女子大学 幼児教育学科  
 3)十文字学園女子大学 児童教育学科 4)十文字学園女子大学 人間発達心理学科  
 5)十文字学園女子大学 人間福祉学科 6)十文字学園女子大学 健康栄養学科  
 7)十文字学園女子大学 食物栄養学科 8)十文字学園女子大学 文芸文化学科  
 9)十文字学園女子大学 生活情報学科 \*地域連携推進機構 地域教育開発部門長

## 2 共通科目での実施状況と評価

### 2.1 地域コアカリキュラムと地域志向科目の概要

本学COC事業では、地域志向科目の定義を「本事業の目的に沿った人材育成のために必要な学修を実施する科目」とし、表1に示すように地域コアカリキュラムを組織、地域志向科目を配置した。「地域を学ぶ」領域の「入門ゼミナール」は全員必修、「地域と社会を学ぶ」領域は1科目以上を選択必修とした。表2に直近3か年の地域志向科目の延べ履修者を示す。

表1 地域コアカリキュラムの概要

地域志向の領域	領域と科目名
地域を学ぶ	<b>全学共通科目</b> 「地域で学ぶ基礎づくり」 入門ゼミナール 「地域と社会を学ぶ」 埼玉の地理・歴史・文化、現代社会と教育、現代社会と福祉、現代社会とグローバル化、くらしのなかの日本国憲法、情報とネットワーク社会
地域で学ぶ	<b>全学共通科目</b> 「学びの基礎をつくる」 地域で学ぶ 「職業人としての資質・能力を高める」総合科目、自主社会活動、キャリア関連科目
地域を活かす	学科専門科目内で、該当科目を配置 9学科 62科目

表2 地域志向科目延べ履修者数

		2016	2017	2018
地域志向科目	共通科目	15	16	16
	上段/科目数	3,054	3,568	3,928
地域志向科目	専門科目	40	47	51
	下段/延べ履修者数	2,332	2,902	2,978
地域志向科目延べ履修者数		5,386	6,470	6,906
学生総数(各年度5月時点)		3,375	3,141	3,068

### 2.2 「地域で学ぶ」授業概要

共通科目「学びの基礎をつくる」領域の「地域で学ぶ」は、COC事業により強化拡充を図ってきた科目の1つである。授業のねらいは、新座市や大学近隣地域の特徴について、「少子化、高齢化対策」「観光都市としてのあり方」などの地域課題から学び、自ら何ができるのかを模索していくことである。

実際に、地域で活躍している方たち（ゲスト講師）を招聘し、学生は、講義を受講して課題解決のための糸口を探る。ゲスト講師は、地域自治体、NPO、商工会、町内会、地元企業、芸術等関係者などと多岐の分野にわたった。また、授業時に社会活動の紹介をおこない、実際に地域での社会活動も実施した。

学生にとっては、地域デビュー的な側面を持ち、履修学生のほぼすべてが何らかの社会活動の体験をおこなうことができた。

## 3 学科専門科目での実施状況と評価

表1で示した通り、学科専門科目内にも地域志向科目を配置し、授業実践をおこなってきた。学科の学修の性格から、それぞれに内容・方法とも特徴がみられるが、各学科での代表的な科目に関して、実施状況や工夫した点、評価と課題について以下に述べる。

### 3.1 幼児教育学科「児童学演習」

#### 3.1.1 科目のねらい

本学科では、平成14年の4年制改組時に、2年制時代からの「子どもから学ぶ、子どもとともに育つ」というアドミッションポリシーに基づき、子どもとの関わりから学ぶことを基盤に置くカリキュラムを継続・発展させ、実習を縦糸とした4年間の保育者養成を構想して、1年次から実際の保育現場での体験学習を行っている（1年次「児童学演習」、2年次「幼児教育基礎実習」）。

特に、1年次通年の卒業必修の専門科目である「児童学演習」は、大学所在地域の協力を得て、新座市で生まれた子ども達がどこで、誰に見守られ、どのように育っていくのかを、自分たちが実際に子どもが育つ現場に出かけて子どもとかかわり、保育者や保護者と交流しながら学ぶことを大切にしてきた。この科目のもつ保育の専門性の育成のためのねらいは以下2点である。

- ① 人間の成長と保育という文化・社会的営みは、地域特性（自然、歴史・文化、産業、人口動態等）に根差しており、保育者にはこの地域の中で育つ・育むという視点と、保育施設も地域特性を形成していく存在であり、そのための行動も保育者には求められるというESD（持続可能な開発のための教育）の視点をもつ。新座市をそのフィールドとして学ぶ。
- ② 保育の主体は「子ども」であり、子どもの自発性・主体性の尊重から保育が始まるという本学科が目指す保育者の在り方を、養成教育の初期段階から、実際の保育者の関わりを観察し、自らも行動しながら体得する。記録に基づき、教員の提示する学びのねらいについて考察する。この体験学習によって、これまでの素朴子ども観・保育観からの意識変革を図る。

平成26年度からのCOC事業においては、新座市子育て支援課、新座市公立保育所、NPO法人新座子育てネットワークの協力、在学生に対するインタビュー調査の実施から上記2点のねらいを達成する取り組みとその評価を、より積極的に行うことが可能となった。

#### 3.1.2 実施状況・履修者数

履修者は、幼児教育学科1年生全員（H26：180名、H27：189名、H28：197名、H29：177名、H30：199名）である。前期に、新座市内の公立保育所6園と児童センター2か所に各1回実習に行く。事前に施設責任者の特別講義を受け、実習後は記録に基づくグループワークを行う。担当教員は事前及び事後に施設側との打ち合わせと学生の学びのフィードバックを行い、改善につなげる。

#### 3.1.3 地域志向科目としての特色・工夫

平成14年度の科目開設時から、新座市の協力により実現しているものであり、学生は、地域に赴き、地域によって育てられる中で、保育や子どもの育ちを学ぶ機会を得ている。平成27年度からは、COC事業によって作成された冊子「いいね！にいざ」を事前学修に活用することで、新座市の地域特性の理解を踏まえた学びというステップアップした授業へと転換が図れた。

新座市内の保育所は、3・4年次の保育士資格取得のための実習施設でもあり、新座市の保育士として活躍する卒業生も多い。教員自身も新座市で児童健全育成関連施設を利用しながら子育てを行っており、教員も実習指導、就職指導、市民生活という多様な側面から新座市に対する理解を持ち、指導に活かしている。学生自身も地域に対して、COCの他の事業やボランティア、サークル活動などでの関わりが深まっているため、リアリティのある学習環境が保障されている。

#### 3.1.4 評価と課題

年度初めの公立保育所園長会において、保育所の状況と学生情報の交換、前年度の授業検討内容と新年度の実習指導体制の説明を行い、事前指導としての特別講義を依頼することによって、1年次の学生の素朴な姿を尊重する養成環境が実現している。保育者養成の初期にどんなことを感じてほしいかという学生に対する期待と保育の基本の考えについても相互理解が図られた。また、「いい

ね！にいざ」を教材として導入することで、子どもと保護者にとっての生活環境・保育環境として新座市をとらえることができ、実習のねらいと内容が具体的にイメージしやすくなった。

3・4年次の選択科目「保育インターンシップ」を活用した新座市と協働した発展的実習をどのように実現していくかが、今後の課題である。

### 3.2 児童教育学科「教職実践演習」<sup>(1)</sup>

#### 3.2.1 科目のねらい

本科目は児童教育学科で認定する教員免許状（幼稚園・小学校・中学校英語・高校英語・特別支援学校）の取得に関わり、教員免許法に定められた必修科目である。4年生後期に開設し、4年間の教職に関わる学びの総まとめ及び指導要領等の移行に伴う新規内容の補習を意図した授業が実践され、免許取得を希望する全学生が履修している。

#### 3.2.2 実施状況 履修者数

COC事業開設期間中の履修者数は、平成27年度（80名）、28年度（57名）、29年度（61名）30年度（67名）である。児童教育学科所属の全教員が15回のいずれかの授業を担当するオムニバス形式で授業計画を立案し展開した。以下29年度の授業内容を紹介する。

- ①ガイダンス・授業計画説明\*教育実習の振り返り：学生代表の発表 レポートⅠ：教育実習の振り返りシート
- ②教員としての資質、使命、責任（倫理観） ③新学習指導要領とこれからの学校教育
- ④授業研究、教材研究、指導法特講Ⅰ\*模擬授業の実践と協議（省察）
- ⑤教員としての現職教育について \*現職教員研修・研究会紹介 レポートⅡ：研究会等参加と記録作成
- ⑥授業研究、教材研究、指導法特講Ⅱ\*外部講師ワークショップ（国語科・総合的学習の時間）
- ⑦総合的学習の時間、プログラミング教育 ⑧学校行事と安全指導（災害、不審者）
- ⑨保健安全指導（アレルギー問題、他） ⑩学級経営、生徒指導、保護者対応（地域社会）
- ⑪英語教育・授業評価と評定 ⑫特別支援教育と今後の学校教育
- ⑬現職教育：授業研究会参加で代替 ⑭教職について再考する（外部講師：講演）
- ⑮総まとめ：「子供や教育観に関するテーマで論述」 レポートⅢ：テスト形式で実施

#### 3.2.3 地域志向科目としての特色・工夫

学科教員の山本、日出間、富山が、COC事業地域志向教育研究として新座市立野寺小と新開小と合同で進めた研究「小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合」と、上記⑤「教員としての現職教育」の授業内容を連動させた。学科教員が2つの小学校と連携指導した「校外向け研究発表会」や「校内授業研究会」に履修学生を参加させ、研究授業の参観及び授業協議会の実態を分析するレポート提出を求めた。教員研修の実体験を通して、研修の真摯なあり方を学ばせるとともに、卒業までに自らの資質や能力を高める必要性を意識づけた。

また⑦「総合的学習の時間」に関する授業では、新座市内の小学校で実践された総合的学習の実施実践事例を題材にした。さらに⑭「教職に関する講演会」では、十文字短大OGで近隣小学校勤務の女性校長先生から「女性教員として小学校教育に携わるノウハウ」を学ぶ機会を設けた。地域の人材や教育環境を活用し、地域志向科目としての特色が具現化する工夫を凝らした。

#### 3.2.4 評価と課題

平成29年度に野寺小の算数科研修会（3回）と理科研究会（1回）に参加した学生は合計19名、新開小の国語科研修会（3回）、体育科研修会（2回）は合計32名であった。その他、学校インターンシップで連携する新座市や和光市立小学校の校内研究会に参加した学生の実績も認められ、本科目はCOC事業地域志向科目の実践事例に該当すると言える。以下、レポートから感想を紹介する。

- ・児童が見通しを持って学ぶ姿が印象的で、児童が教師や仲間の言葉から考えを深められる授業を自分もできるようになりたいと感じた。教壇に立つまでの自分の課題が明確化した。
- ・初任者の授業参観より1年後の自分の姿を重ね合わせ、自己の力不足を自覚した。また授業協議会で検討される授業づくりの内容とレベルの高さに驚き、研修の厳しさを実感した。

今後の課題としては、本科目に招く外部講師を近隣小学校現職教員等に依頼するだけでなく、上記授業計画の内容を題材に現職教員と履修学生が学び合う授業展開（アクティブ・ラーニング）の実現に向けても工夫すべきだと考える。

### 3.3 人間発達心理学科「発達支援活動」

#### 3.3.1 科目のねらい

本科目のねらいは、心理学科の専門科目のうち、発達および臨床領域で学んだ専門的な知識や技法を基礎として、支援活動の実践に取り組む科目である。実践の場として、新座市教育委員会・朝霞市教育委員会・志木市養護部会・埼玉県教育局による学校支援および不登校支援ボランティア活動を設定し、学科教員が応募取りまとめ・申込・活動中の相談を担っている。

ボランティア活動を通じて、学生は、1) 学校教育において、心理的側面から支援・援助活動に取り組む意義を理解するとともに、2) 対象となる児童生徒との交流を深めるなかで、専門科目で学んできた心理学的な知見・理論・技法の理解を深化充実させることを目指している。

#### 3.3.2 実施状況 履修者数

COC 事業開設期間中の履修者数は、平成 27 年度（11 名）、28 年度（23 名）、29 年度（56 名）30 年度（14 名）である。なお、地域における学校支援ボランティア活動等に参加しても、本科目を履修しない学生もいる。

本科目の実施担当は学科教員である綿井が中心となって行ってきた。毎年度、4 月にボランティア参加および本科目に関する説明会を開催して、ボランティア参加応募と履修登録の周知を図っている。実際の活動期間は、受け入れ先（各教育委員会や学校）および学生の状況によって異なるが、5 月から翌年 3 月または 9 月から翌年 3 月が主流となっている。参加学生の配属については、教育委員会から適宜報告を受けてきた。また、参加学生が活動に関して相談を必要とする場合には、学科教員が適切に対応するように努めてきた。

単位認定にあたっては、活動記録（参加校の管理職確認印あり）を提出するとともに、活動の振り返りレポートを提出させて、評価材料としている。

#### 3.3.3 地域志向科目としての特色・工夫

COC 事業開設中、人間発達心理学科 1 年生必修の「入門ゼミナール」において、新座市教育相談センター担当の指導主事を講師として招聘し、地域社会と学校の連携、支援を必要とする児童生徒への接し方を学習する機会を設けている。担当講師は、新座市教育委員会が担っている学校支援ボランティア「ピア・サポーター」に参画した本学科学生の実態などを踏まえ、初学者である 1 年生に対して、地域の様々な人々が学校教育の様々な活動を支援していることに気づかせるとともに、大学生が支援者として児童生徒に接する際の基本的態度や接し方を理解させている。

新座市以外の学校ボランティア活動は、学生の居住地を中心に参加校が割り当てられることが多い。そのために、学生主体の学習や気づきではあるが、地域人材と学校教育支援に取り組むことを理解する機会となっている。

#### 3.3.4 評価と課題

学科学生が地域人材として地域の学校教育活動を支援する体制が整った、という点では、本科目の意義は大きいと考える。各学校および教育委員会からも、参加学生の活動が有用であった旨の評価を頂戴しており、各地域における本学の人間発達「心理学科」学生の存在を認知してもらう機会

となったと言える。このことは、今後、本学科で養成を担う「公認心理師」の教育課程の実践にもつながるものと考えられる。

一方で、学生たちの視点は、対象となる児童生徒や学級の「支援」の面が中心となり、地域志向にまでは思いが至らなかったといえる。参加学校の学区域がもつ特色や特性を踏まえた支援対象の理解、または、市や県の教育施策や方針といった地域性に基づいた支援活動の理解には、到達させることができなかつたことが課題だと言える。

### 3.4 人間福祉学科「人間福祉基礎演習」

#### 3.4.1 科目のねらい

人間福祉学科は、1年次前期の入門ゼミナールは必修であるが、その後の学びは目指す資格（社会福祉士・介護福祉士・保育士）によって履修科目が限定され、学際的な学びを共有する機会は、3・4年生のゼミまで繰り返されるという課題があった。そこで、平成27年度に開始した新たなカリキュラムでは、2年生前期に「人間福祉基礎演習」という必修科目を設置した。コースや資格取得課程を超えて、福祉の学びを共有するために、地域志向教育が有効という共通認識があった。地域を対象として学ぶだけでなく、学ぶ活動そのものを企画し、実行し、評価する（PDCサイクル）を取り入れることをめざした。学修目標としては、①グループ活動を企画し、準備・実行・報告までを主体的に実施できる。②フィールドで学んだ事を福祉の実践的な学びにつなげることができる。③3.4年次の学びのテーマを検討し、主体的なゼミ選択ができる、の3点とする。

#### 3.4.2 実施状況 履修者数

履修人数：平成28年度71人・平成29年度65人・平成30年度47人

シラバス：年度によってフィールドワークの準備・実施・報告会の週数に若干増減あり。

第1週 オリエンテーション

第2～4週 ポートフォリオ作成とメンタリング（クラス担任）

第5～8週 フィールドワークの事前学習・準備活動

第9～12週 フィールドワーク実施（学外活動）

第13週 フィールドワーク報告会（グループごとのプレゼンテーション）

第14週 ゼミ学習に向けて（上級生によるゼミ紹介等）

第15週 まとめ（授業全体の振り返り・レポート作成）

#### 3.4.3 フィールドワークの内容

##### 平成28年度<新座市内を歩いて学ぶ>

事前学習として、本学COCセンター・ボランティアセンターの職員から、地域概況を学んだ。学生8～9人＋教職員2名の8グループに分かれ、新座市内のフィールドワークを計画・実行した。コースの出発は新座駅・北朝霞駅・志木駅のいずれか、ゴールはふるさと新座館とした。グループごとに、学びのテーマを設定し、行程表や役割分担を決めて臨んだ。

##### 平成29年度<ハンセン病の歴史から、社会福祉を学ぶ>

国立ハンセン病資料館から講師を招き、共通理解を深めた。16～17名の4グループにわけ、2グループずつ2日にかけてハンセン病資料館の見学を行った。ハンセン病やその患者に対する差別や偏見の歴史、当時の福祉政策について学ぶとともに、福祉の知見を広げた。

##### 平成30年度<第25回新座市福祉フェスティバルでボランティアを学ぶ>

フェスティバル実行委員会の方を招き、福祉フェスティバルの意義を学んだ。さらに、参加団体について調べ、各団体の目的や活動内容、障がいのある利用者への理解に取り組んだ。当日は、4～5名の10グループに分かれ、7団体の活動にボランティアとして参加した。

#### 3.4.4 地域志向科目としての特徴・工夫

平成 28 年度は、地域志向科目として初めての取り組みであったので、フィールドワーク事前学習や見学先の手配などには、COC センター・ボランティアセンターの協力を得た。フィールドワークの引率は、学科専任教員全員が参加し、学科としての地域志向科目への取り組みを共有し、平成 29・30 年度は、担任・副担任（8 名）を主として実施した。

#### 3.4.5 評価と課題

必修科目で取り組むことにより、学びを共有する集団としての育成をめざしたもののフィールドワークへの動機づけは課題もあった。事前学習の比重を増やしたり、テーマ設定に具体性を持たせるなど、年度ごとの工夫を行った。

### 3.5 健康栄養学科「食文化論、公衆栄養学実習」

#### 3.5.1 科目のねらい

食文化論は、本学科 3 年生対象の選択科目であり、フードコーディネーター 3 級取得の必修科目である。食文化が自然環境や社会環境の上で形成されてきたゆえに、本科目では日本や世界の食文化の変性や特徴を知り、現在の食生活の成り立ちとその背景を考える科目である。公衆栄養学実習は、本学科 4 年生対象の選択科目であり、栄養士資格取得の必修科目である。実習では、集団に対し必要とするコミュニティの健康・栄養関連の問題やニーズを的確に情報収集、課題分析、計画、実施、改善といった公衆栄養マネジメント（PDCA サイクル）を学ぶ実習である。

#### 3.5.2 実施状況 履修者数

COC 事業開設期間中の実施状況は、平成 27 年度に開設された新学科であるため、3 年生は 2 回、4 年生は 1 回の実施であった。食文化論では、平成 29 年度 102 名、平成 30 年度 74 名の履修。15 回の授業の内、授業を通して学んだ知識を基本に、自分自身の所縁のある土地の郷土料理に関するレポートが課せられた。公衆栄養学実習は、平成 30 年度 114 名が履修した。15 回の実習中、公衆栄養マネジメントに必要な知識と技術を学んだ上で、具体的に地域人たちへの健康に関する公衆栄養マネジメントを計画し、実際地域の人たちに実施し、その後実施評価を行うサイクルを勉強した。

#### 3.5.3 地域志向科目としての特色・工夫

科目担当者の小長井、徳野は、COC 事業を特別意識したものではなかった。しかし、両科目共に地域志向教育がとても影響を受ける科目であった。そのため、COC 事業の地域志向科目として設定されたことが、この両科目を発展させることができた。受講する学生は、すでに 1、2 年生の間に、入門ゼミナールや総合科目から地域志向教育を受けてきた。そして 3 年、4 年の専門科目で、地域志向が専門科目の中でもとても重要であることを授業を通し学ぶことができた。食文化論では、履修者の 1/4 が埼玉県出身者で、埼玉県の郷土料理をしっかりと調べることができた。公衆栄養学実習では、自分たちが生活をしている場所で、健康活動を具体的に調べ、必要と思われる対象者に対して必要な健康活動を計画し実施することができた。ふるさと新座館や野火止四丁目集会所で、地域の高齢者の方々への健康教育を、大和田小学校内のココフレンド活動の中で子ども達への健康教育を計画・実施することができた。

#### 3.5.4 評価と課題

食文化論での学生の評価は、「これまで日常的に食していたものが、郷土料理であるということに初めて気が付いた」、「この課題を通して自身の育った環境の中には郷土料理と呼べるものが数多くあることに気づかされた」、「海に面していない埼玉県だからこそ、さまざまな伝統野菜が栽培され、地域に根付いた多くの郷土料理が生まれたことを知った」、「栄養士として埼玉県の郷土料理の普及や伝承に努めていきたい」などの感想も得られ、改めて埼玉県の風土と食文化を認識する機会とな

った。公衆栄養学実習では、「実際に地域にでて私たちの考えたことを伝え、多くの意見や感想をいただくことができとても勉強になった」、「健康教育の活動は、健康に対して意識が少しでもプラスに変化し、地域全体で健康意識が高くなると感じた」、「授業を終えたとき子供たちが真剣に聞いてくれたこと、『楽しかった』と言ってくれたことがとてもうれしく、同時に達成感も感じることで貴重な経験ができた。ありがとうございました」など、地域の中で実習をすることで、参加してくださった方々と学生共に充実感がある実習を行うことができた。今後の課題は、このような実習を通じた活動が、地域の人々に貢献でき、その活動を積み重ねることができる仕組みづくりが必要であると感じた。



写真1 ふるさと新座館にて実習風景

### 3.6 食物栄養学科「入門ゼミナール」

#### 3.6.1 科目のねらい

食物栄養学科の学生が1年生前期に受講する共通科目の「入門ゼミナール」は、大学生としての学びを理解する上で必要な学習技法・技能を身につけること、大学生活を円滑に送るために、自らの将来設計に基づき学修計画を立て、仲間と協力して課題を創造・追及しあう態度を身につけることをねらいとする。

#### 3.6.2 実施状況 履修者数

COC事業開設期間中の履修者は、平成27年度(136名)、平成28年度(131名)、平成29年度(130名)、平成30年度(122名)である。各年度の1年生担任3名で授業計画を立案し、学科全教員が1回以上担当しているが、15回中3回分を地域志向教育の内容とし、管理栄養士として地域と連携しながらどのような活動を展開できるのかを、学生自ら考えさせることをねらいとした。

#### 3.6.3 地域志向科目としての特色・工夫

地域志向教育として、下記の内容を取り入れた。

##### 1 a) 平成27年度～平成29年度

地域で管理栄養士として活躍している卒業生を講師として、乳幼児、障がい者、高齢者などを対象とする地域支援活動についての講演を実施した。

講演 「新座市近隣地域における管理栄養士としての地域活動の実際」

講師 特定非営利活動法人 ぽけっとステーション 山口はるみ氏(卒業生)

##### 1 b) 平成30年度

「食物栄養学科で取り組んでいるCOC活動紹介」と題して、4年生がゼミの中でCOC活動として実施した内容の紹介、また、活動を通じて学んだことを1年生向けに発表した。

小林ゼミ 新座市で収穫された地場野菜を用いた商品開発「にんじん畑ドレッシング」

- 長澤ゼミ 地域での公衆栄養活動「新座市健康まつり」への参加と取り組み  
 井上ゼミ 「新座市立東野小学校ココフレ」における、地域在住児童対象の食育活動  
 金高ゼミ 地域のマルシェや新座のカフェ・イベントの企画・運営の取り組み

## 2) 平成 29 年度～平成 30 年度

食品会社（株式会社 明治 坂戸工場）の工場見学を実施した。

多岐にわたる管理栄養士としての活躍分野の一つとして、食品会社における生産技術、品質管理、商品開発、安全管理などに携わる管理栄養士の役割を学ぶことを目的とした。また、明治のスタッフによる、管理栄養士養成課程 1 年生向けのセミナーの実施を依頼した。

平成 29 年	講演	「明治におけるスポーツ栄養指導と商品開発」
	講師	常松雅子氏（スポーツ栄養マーケティング部普及グループ長）
平成 30 年	講演	「美容関連商品の研究開発」
	講師	深澤朝幸氏（栄養商品開発部開発 2 グループ長）

### 3.6.4 評価と課題

対人業務として働く管理栄養士の集大成となる地域支援活動に携わる卒業生の講演(1a)は意義深いものであったが上級学年にシフトし、30 年度より 4 年生による地域連携での取り組みの成果発表を聞く機会とした(1b)。学科の特徴を活かした地域との連携活動を知り、地域連携における大学のあり方、管理栄養士の関わり方を考える貴重な機会となった。また、工場見学(2)では、消費者ではなく生産者としての立場から、地域社会に安全な食品を提供するために、資格の持つ意味と責任とを学ぶ機会となった。

地域社会において、大学外の人々との関わりを持ち、大学あるいは管理栄養士の役割を考える機会は、自らを振り返りこれからを考える学生にとって有用であった。入門ゼミナールにとどまらず、学年やゼミ活動を越えて、地域に連携する活動に自ら取り組み貢献していけるような機会を増やし提供してることが、今後の課題である。

## 3.7 文芸文化学科「文化財研究」

### 3.7.1 科目の概要

人々の文化的な活動を通して文化財は創出されている。すなわち、文化財は保存し単に存在する文化的所産ではなく、文化財の存在は地域社会のコミュニティを形成し、まちづくりにも関連している。こうした視点を踏まえながら、文化財行政、文化財施策、文化財の定義、現状を理解し、文化財の意義を理解する。加えて、図書館、博物館・美術館、公文書館等の公共的役割とともに、文化財を共有し公共知とする手段（デジタルアーカイブ等）を把握し、市民が文化財を創る事例を通して、文化財の未来を検討した。

### 3.7.2 実施状況

本科目の履修者数を経年で整理すると、平成 28 年：37 人、平成 29 年：37 人、平成 30 年：51 人となる。文芸文化学科専門科目のため、文芸文化学科の学生が 9 割以上を占めているが、平成 30 年のみ、他学科履修者の割合が高くなっている（約 2-3 割）。

### 3.7.3 地域志向としての特徴・工夫

本科目の地域志向としての特徴・工夫として、以下の点をあげることができる。

- ①「文化遺産オンライン」等により、履修者が居住する地域の文化財の名称、種類、概要を調査すると同時に、市区町村や地域住民がどのようにして当該文化財を保存・継承、活用しているのかを履修者のレポート課題とした。これらの調査内容は履修者同士で共有した。
- ②履修者が居住する市区町村の文化芸術振興計画を調査し、ビジョン、重要施策、部署の枠を越えた内容、保存・継承、地域住民の教育・学び等を整理することも履修者のレポート課題

とした。とりわけ、文化芸術の範囲として何が対象になっているのか、地域住民がどのように文化芸術振興に関わっているのかなどを明らかにし、調査内容は履修者同士で共有した。

#### 3.7.4 評価と課題

本科目においては、文芸文化学科で学んでいる文学、言語、歴史、芸術等を背景に、地域でどのように保存・継承、活用がなされ、ここに地域住民がどのように参画しているのか、という視点において、地域志向としての工夫につとめた。履修者の評価は、概ね満足であり、文化財や文化財政策に限らず、劇場も含めた文化芸術について幅広く地域の視点から学ぶことができた。しかし、その一方で本科目の課題として、以下の2点がある。

- ・埼玉県や新座市の事例を取り上げたものの、文化芸術振興計画が無い市区町村があるため、履修者の理解に差が出てしまうこと。
- ・保存や継承、まちづくりなどの社会教育の視角、アーツマネジメントの切り口を重視するように努めたが、一方で個々の文化財や個々の文化芸術の概要まで十分に取りあげることができなかった。

### 3.8 文芸文化学科「フィールドスタディ」

#### 3.8.1 科目の概要

本科目では、コミュニティデザインという観点から、世の中を観察し、インタビュー調査の技法、統計的な手法を学び、実践的にデザイン思考の本質を理解する。その上で、人と人をつなげ課題を解決するコミュニティデザインとは何かを学ぶ。更に、地域社会の課題を自分事として理解し何らかのアクションへと踏み出すきっかけづくりと位置付けた。臨地での調査や体験は埼玉県比企郡小川町をフィールドとして、地域コミュニティの在り方、地域文化を核とした多世代の地域づくりに参画しながら学んだ。

#### 3.8.2 実施状況

平成28年：4人、平成29年：5人、平成30年：9人である。学科専門科目であるため、文芸文化学科の学生のみが履修している。

#### 3.8.3 地域志向としての特徴・工夫

本科目の地域志向としての特徴・工夫として、大きく2つのポイントがあげられる。

- ①現代の地域コミュニティの課題を統計データや文献から、人口減少社会、中山間地や離島地域の先進的事例からまちに関わることの面白さを学んだ。また、「豊かさ」「幸せ」「経済」について考え、各自が自分事として捉え、パブリックとコミュニティの新たな在り方、人が変わることによって地域が変わることを、コミュニティデザインという視点から学んだ。
- ②埼玉県小川町での地域活動に地域の方々と一緒に参加することによって、地域に存在する課題を身近なものとして実感し、地域の皆さんと関わることによってコミュニティ活動の楽しさおよび課題解決の難しさと意義について体感するきっかけを作ることが出来た。

#### 3.8.4 評価と課題

本科目は、座学だけでは学べない実践的学びを重視している。学びをより深いものにするためには、地域住民の方々との継続的信頼関係づくりが必要となる。担当教員としての覚悟と当該コミュニティの一員としての熱量も期待される。その意味でも、学生たちの学びのフィールドの確保は教員の大事な仕事でもある。学生が地域で学んだことにより、地域活動に興味を持ち、自分の関わりのある地域の課題に気付き、自らアクションを起こすといった循環も生まれている。更に、「まちづくり」といった領域の仕事に内定を得た学生も出てきた。しかしながら、体験からの学びの質の保証は未だ不安定である。地域の方々を安定的継続的な教育のリソースとして位置付けるためには、

善意だけに頼るのではなく、学生たちとの活動から得られるリファンドの質も確保できるようにデザインする必要があるだろう。

### 3.9 生活情報学科「生活と産業」

#### 3.9.1 科目のねらい

本科目は生活情報学科専門必修科目であり、学科の1年生が全員履修している。1年時の科目であり、学科の基礎科目として、経済や経営を学びながら、地域社会やグローバル化について学習する。

#### 3.9.2 実施状況 履修者数

以下29年度の授業内容を紹介する。履修者数は、133名であった。

- ① ガイダンス ② 経済学と経営学 ③ 企業とは何か ④ コーポレートガバナンス
- ⑤ 明治、大正期の経済・社会 ⑥ 戦後の経済システム ⑦ 高度経済成長システム
- ⑧ 高度経済成長期の政治 ⑨ 高度経済成長期の社会 ⑩ バブル期の経済
- ⑪ バブル崩壊後の政治・経済 ⑫ 財政赤字と社会 ⑬ 地域経済、社会の変容
- ⑭ まとめ1 ⑮ まとめ2

#### 3.9.3 地域志向科目としての特色・工夫

生活情報学科の基礎科目として、経済学や経営学の基礎を学習する。そこでは、戦後の発展の歴史を振り返りながら社会の変革も学習していく。その中で、地域社会やコミュニティがどのように変化したかを、新座市をモデルに学習していく。

#### 3.9.4 評価と課題

今後の課題としては、過去には新座市商工会の事務局長などに講義をしていただいた。本年度はスケジュールが合わなくてできなかったのが、次年度以降は新座市に関わるゲスト講師を数名お願いして、現場の声を学生に聞かせていきたい。

### 3.10 メディアコミュニケーション学科「企画・インタビュー手法」

#### 3.10.1 科目のねらい

「インタビュー」は、コミュニケーションの一手段としてメディアなど様々な場面で使われる。本科目ではインタビューを行う側（インタビュアー）に立ち、企画を含めた事前準備、質問の仕方、終了後の対応など具体的な場面を想定しながら「実りあるインタビュー」を実現するための手法を学び、最終的にはインタビュー原稿をまとめる。学生のコミュニケーション能力を養成することを目的としている。

#### 3.10.2 科目の特徴 履修者数

本科目は、①講義と教室内での課題作成②インタビューの実践の2分野で進めることを想定した。①はインタビューの役割・効果、インタビューに向けての事前準備、インタビュー心得などを講義形式で伝えた。課題作成は、インタビュー記事が1問1答、3人称、1人称の3形式があることを理解させたうえで、例題を基に3形式のインタビュー記事をまとめさせた。インタビューの実践については、新座市男女共同参画推進プラザの全面協力を基に、17年度は「男女共同参画」をテーマに新座市内の9事業所を訪問し、インタビューを行った。18年度は「異性が多い職場で働くこと」をテーマに、新座市の事業所で勤務する4名の方にインタビューを行った。

両年度のインタビューは男女共同参画が主テーマだったが、インタビュー対象者（インタビューイ）を新座市内に限定したことで、新座市そのものを学ぶ機会となり、市内の事業所の様子を知

る機会にもなった。尚、17年度は、メディアコミュニケーション学科の学生を中心に履修者47名となり、18年度は同じく19名だった。

### 3.10.3 新座市男女共同参画推進プラザとの連携に関する経緯

インタビューの実践に取り組むに当たり、インタビューテーマ、対象者をどのように設定するかが教員側の課題であった。2017年年明けに、男女共同参画推進プラザの所長と懇談した際に、同プラザが市広報誌「広報ニイザ」に年2回（10月号、9月号）特集ページ「FOR YOU」を掲載しているが、紙面のマンネリ化を打破するため本学との連携ができないか、との相談があった。前述したようにインタビューテーマ、対象者の設定について思案していたこと、地域連携事業としても位置付けることが可能なことから、17年度前期の授業で具体的にに取り組むことにした。成果としては、2017年度の授業で学生がまとめたインタビュー記事を「広報ニイザ」2017年10月号、2018年3月号に掲載された。18年度は2018年10月号に掲載され、2019年3月号に掲載予定である。

### 3.10.4 取り組み内容、地域志向科目としての特徴・工夫

前述したように、地域志向科目としての特徴は、新座市内の事業所や市内で働く方々にインタビューすることである。2017年度、18年度の具体的な取り組みは以下の通りである。

#### 【2017年度】

- ・インタビューテーマ  
男女共同参画

- ・インタビュー対象（9グループ）

増木工業株式会社（増木敏政社長、伊藤聖美総務課長ほか）、新座市役所（三上文子監査委員事務局長、橋亜衣リサイクル推進課職員）、新座市役所（山口聡人事課長、飯田英子生涯学習スポーツ課職員）、社会福祉法人千曲会 光第2保育園（山本恵子園長）、株式会社ボン志木店（小河原徳代店長）、十文字学園女子大学（加藤則子副学長）、NPO法人 新座子育てネットワーク（坂本純子代表理事）、社会福祉法人ゆずの木 そらーれ新座（高山良樹施設管理者）、小規模保育施設ぷりえ（佐藤聡子園長）

#### 【2018年度】

- ・インタビューテーマ  
異性が多い職場で働く

- ・インタビュー対象（4グループ）

新座志木中央総合病院 看護師 中島宏樹さん  
新座市役所建築開発課 技師 浜中遼子さん  
埼玉県南西部消防本部 消防副士長 中山翠さん  
北野の森保育園 保育士 浅田理一さん

インタビューに取り組むに当たっては、新座市男女共同参画推進プラザと相談し、インタビュー対象、インタビュー内容、アポイント、インタビューアテンドなどプラザの全面的な協力を得た。インタビューの事前準備として、プラザ職員による「男女共同参画」について講義（1コマ）を実施。さらに、グループごとにインタビュー対象となる事業所、業界、地域とのかかわりなどを主にネット検索させ、質問内容に取り込んだ。

### 3.10.5 成果

学生がまとめたインタビュー記事は、新座市発行の「広報ニイザ」に掲載された。2017年度は、紙面の都合で9グループすべてが掲載できなかった。2017年10月号に、増木工業、小規模保育施設ぷりえ、2018年3月に、本学の加藤副学長、社会福祉法人ゆずの木 そらーれ新座のそれぞれ2本の記事が掲載された。ほかの記事は、プラザの好意により、プラザ内で市民向けに閲覧してもらった。2018年度は、

4 グループが掲載もしくは掲載予定である。2018 年 10 月号に、埼玉県南西部消防本部消防副士長も中山翠さん、新座志木中央総合病院看護師の中島宏樹さんの 2 本の記事が掲載された。2019 年 3 月号には、新座市役所建築開発課技師の浜中遼子さんと北野の森保育園保育士の浅田理一さんの記事が掲載される段取りになっている。(3 回の掲載紙面は次の通り)

2017 年 10 月号	2018 年 3 月号	2018 年 10 月号
		

授業の最終回では、藤澤所長を含めプラザ職員にも同席してもらい、グループごとにインタビューの振り返りを実施した。学生からは、事前準備をしっかりとっておかないと質問内容が通り一辺倒になり十分に話を聞き出せないこと、インタビューではあいさつを含め雑談力が求められることなどが共通した感想だった。また、それぞれの仕事は地域とのかかわりが不可欠ということが理解できたようだ。さらに、インタビューした方々から、働く意味、社会人としての心構えなど多くのアドバイスをいただく機会があり、学生にとって貴重な機会となったことがうかがえた。

### 3.10.6 評価と課題

本科目の狙いを達成する上でインタビュー対象をどう設定するかが 1 つのポイントになるが、本学が所在する新座という地域と密接にかかわる事業所、個人の方々にインタビューできた点は大きな意味があったと思われる。その際、新座市との連携、協力を得られたことは、対象の選定やスムーズなアポイントを取る上で大変役立った。さらに、新座市の広報誌に掲載されることで、本学や学生の姿を新座市民に認知してもらう点で大いに貢献できたのではないかと考える。

今後の課題としては、新座市との連携協力を進めるとともに、近隣自治体や民間団体との連携協力を模索し、地域とかかわるテーマで幅の広いインタビューを実現することができるかである。

## 4 eポートフォリオとルーブリックの状況

### 4.1 ルーブリックの状況

本 COC 事業を通して、共通科目のディプロマ・ポリシーに対応したコンピテンシーに関するルーブリックを開発<sup>(2)</sup>している。開発当初より、学生の状況などを考慮し、改訂をおこなってきた。ルーブリックで設定したコンピテンシーの評価規準を表 3 に示す。ルーブリックでは、コンピテンシーの各評価規準に対応して、4 段階で評価基準を設定している。このルーブリックは、後述する e ポートフォリオの学修成果シートに組み込み、学生の自己評価を行う際の評価規準として利用している。

表3 共通科目のルーブリックでのコンピテンシー評価規準

知的コンピテンシー—知識を活用する力		社会コンピテンシー—対自己領域	
読み解く力	文章を読んで、意味や記述者の意図を理解することができる	前を向く力	自分の感情や気持ちを認識し、客観的に自分の言動をコントロールする
書き表す力	わかりやすい文章を書くことができる。 レポート、論文、発表の資料などわかり易くまとめることができる	自己を理解する力	他者と自己の違いを認め、自己の強みを認識する
資料を活用する力	図表等を用いた表現など状況に合った活用を行なうことができる	就業観を養う力	選択基準としての職業観・勤労感の確立、および主体的な選択をする力
創造する力	これまでのことにとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える	自信を持つ力	自分にやればできるという予測や確信を持つ
論理的に表現する力	論理的に考えたことを、(文章や口頭および視覚的に)的確に相手に伝える	主体的に行動する力	自己の意志や判断において自ら進んで行動する
知的コンピテンシー—問題を解決する力		将来を設計する力	現状を把握し、将来設計をする力
情報を収集する力	幅広い観点から情報源を見定め、適切な手段を用いて情報を収集・調査し、それらを適切に整理・保存する力	社会コンピテンシー—対課題領域	
情報を分析する力	事実と意見を区別し、事実を整理・分類し、それらを統合して隠れた構造を捉え、本質を見極める力	目標を決める力	ゴールイメージを明確にし、目標を立てる
課題を発見する力	広い視野から現象や事実を捉え、それらの原因について考察し、解決すべき課題を発見する力	計画を立てる力	目標の実現や課題解決に向けての見通しを立てる
構想する力	条件・制約を考慮しながら問題解決までのプロセスを構想し、その過程で想定されるリスクやその対処方法を構想する力	実践する力	自ら物事にとりかかる、実行に移す
社会コンピテンシー—対人領域		原因を考える力	さまざまな角度から課題を分析し、原因を明らかにする力
他者を思う力	自分異なる立場や意見でも、共感し、受け入れることができる	計画を評価する力	立案した計画を客観的に評価する力
話し合う力	どんな相手に対しても、相手に合わせて、自分の考えを述べる ことができる	修正・改善する力	状況をみながら、計画や行動を柔軟に変更する
協働する力	自分や周囲の役割を理解し、互いに連携・協力して物事を行う		
情報を共有する力	一緒に物事を進める人達と情報を共有する		
助け合う力	互いに力を貸して助け合う		
議論する力	集団の中で自分の意見を主張する		

※参考文献(2)より引用

#### 4.2 eポートフォリオの状況

eポートフォリオは、到達目標の設定や日々の学修成果の蓄積、学修成果の見える化等が可能である。eポートフォリオの主な機能<sup>(3)</sup>を表4に示す。

表4 eポートフォリオの主な機能

メインメニュー	機能概要
カテゴリTop	・未提出の学修成果シート一覧や新着のLiveノートの一覧が表示
自分史	・今までの自分の振り返りやこれからの自分の未来について入力
Liveノート	・自分が登録した記事一覧を参照 ・活動成果の画像やその他ファイルを添付して記事を登録・公開 ・公開されている他ユーザのLiveノートを検索・参照・コメント
プロフィールシート	・現在の単位修得状況や学修成果シートの達成度・評価状況を参照
学修成果シート	・学期毎に、個人目標と学修成果、自己評価を登録・修正・参照
マイタグ整理	・マイタグの一覧を表示し、修正、削除、並び換え
Webスペース	・アップロードファイルをタグ等により検索、ダウンロード ・ファイルのアップロード、ダウンロード、一括出力 ・Webスペースにファイルを指定してアップロード

※参考文献(3)より引用

eポートフォリオの活用では、学生の学修のエビデンスとしての役割や自己目標設定、アセスメント(自己評価・相互評価等)を通して、リフレクションの誘発から自律的な学修の生起、そして能力開発・成長を促すことをねらいとしている。

システムの導入準備の関係から、2015年度後期を本学eポートフォリオ利用の試行期間とし、一部学科での利用を開始した。また、2016年度からは本格実施開始とし、学科の状況に応じて、順次利用を促進しているところである。表5に基本的なeポートフォリオの活用モデル、表6に2018年度1月現在の利用状況を示す。学科により利用する機能に違いがあるため、各機能にはばらつきがある。なお、教職課程履修者(主として、2015年度の幼児教育学科、児童教育学科、人間発達心理学科の一部)は、本

e ポートフォリオの学修成果シートではなく、教職用の履修カルテを用いているため、本集計には利用状況が含まれていない。) 全体としては、利用状況には改善の余地があるが、学修の可視化ツールとしての可能性やルーブリックでの自己評価ツールとしての利用を確認することができた。

表5 基本的な本学 e ポートフォリオ活用モデル

時期		概要
入学時		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「自分史」への登録 過去の自分の振り返り、自分の長所、短所を把握、未来の目標の設定</li> <li>● 「学修成果シート」への登録 卒業までの目標については、学修成果シートに登録</li> </ul>
在学中	目標設定 年度初め	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「学修成果シート」への登録 年度の初めに目標を学修成果シートに登録 (ルーブリックの参照)</li> </ul>
	日々の学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「Liveノート」への記録 日々の活動の様子をLiveノートに記録 公開することによる、他者からのコメント・評価 インターンシップや自主社会活動の状況の登録</li> <li>● 「Webスペース」の活用 レポートなど成果物のファイルを蓄積し、学修成果の整理</li> </ul>
	達成度確認 年度終わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「学修成果シート」「プロファイルシート」の参照 現状の修得単位状況や達成度、自己評価をグラフで視覚的に参照</li> </ul>
	振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「学修成果シート」「プロファイルシート」の参照と登録 学期または年度の終わりに学修成果シートにて成果を確認、自己評価 自己評価、振り返りをおこなったら、教員よりコメント</li> </ul>
卒業時		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「学修成果シート」への登録 卒業時の成果のとりまとめを学修成果シートに登録 蓄積した成果物を一括出力</li> </ul>

※参考文献(3)より引用

表6 e ポートフォリオの利用状況 (2018 年度 1 月現在)

入学年度	学生数	利用率 (%)			
		自分史	Live ノート	学修成果(目標)	学修成果(成果)
2018 年度生	909	41.0	10.0	60.4	5.6
2017 年度生	818	57.8	17.6	63.9	44.3
2016 年度生	847	33.4	9.1	55.8	36.1
2015 年度生	888	15.1	16.1	5.1	3.9

## 5 まとめと今後の課題

COC 事業での地域志向科目の実施状況地域志向科目の実施では、ここで報告した通り、共通科目・各学科専門科目とも学生の育成方針に沿った内容がおこなわれ、様々な教育上の知見を得ることができた。

e ポートフォリオやルーブリックの運用では、学生の利用状況は更なる改善が必要であるが、学修の可視化ツールとしての可能性やルーブリックでの自己評価ツールとしての利用を確認することができた。

COC 事業を通して培ってきた様々な教育活動での知見を今後のカリキュラムで活かすためには、次の課題がある。

- ・今後の学生育成方針の再構築と目指すべき能力育成の具体化と教育モデルの開発
- ・教育方法の開発と各科目でのノウハウの共有
- ・学修成果のアセスメント方法の再構築

謝辞 本研究では、e ポートフォリオの運用をおこなってきたが、その設定や利用状況の分析で、戸塚勝美氏（教育情報推進課長）には多大なご協力を得た。ここに御礼申し上げる。

<参考文献>

- (1) 田中博之、2016、アクティブ・ラーニング 実践の手引き、教育開発研究所
- (2) 安達一寿、星野祐子、2018、自主社会活動における評価方法の検討と学生のコンピテンシー伸長の分析、十文字学園女子大学紀要, 48(1), 203-212
- (3) 安達一寿、松永修一、2017、本学 e ポートフォリオ活用に関するモデルの検討、十文字学園女子大学紀要, 47, 223-232

## 「新座歴史探訪」報告

## “Niiza History Exploration” Report

池間 里代子<sup>1)</sup>

Riyoko IKEMA

キーワード：野火止用水、平林寺、ひるねの森、菅沢稲荷神社、荒ぶる侘び—松永耳庵

要旨：本報告は平成26年度の「新座歴史探訪」と、平成27年度の「新座歴史探訪Ⅱ」に関するものである。初年度は新座の野火止用水・平林寺・ひるねの森・菅沢稲荷神社と、主として新座市取材した。2年目は松永耳庵が好んだ新座の地を中心に、茶人としての足跡をたどった。

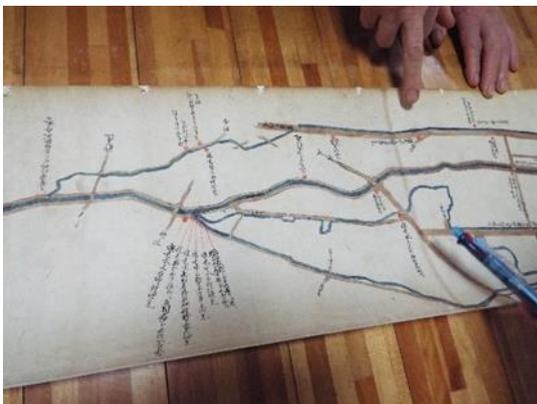
## 1 新座歴史探訪Ⅰ

## 1.1 「新座歴史探訪」研究の動機

平成26年度、十文字学園女子大学（以下、本学）でCOC事業採択されるという事で、ある会議で「あなたは何かができますか」と問われた。私の本学での専門は中国語教育であるが、実際には中国文学・文化・日中文化交流に関する論考の方が多い。そこで、当時私が温めていた研究テーマ「日本における『紅樓夢』受容」についてが若干新座と関連していることから、「私は新座に来て間もない新参者ですから、新座の歴史を研究して発信します」とお答えした。そこから本研究が始まった。

## 1.2 野火止用水

新座といえば野火止用水、新座駅南口には水車のレプリカが動き、「ふるさと新座館」へと続く「ふるさと小道」にはかつての野火止用水を彷彿とさせるミニ用水が流れている。この野火止用水は、徳川三代将軍家光公の時代、玉川上水の三分の一の分水許可を得て、川越藩主松平信綱（知恵伊豆）が野火止の台地に水をもたらし、この地で根菜類を作って新河岸から水路で江戸に送った…という教科書的な事ではなく、地元の方にお話を伺いたくりサーチした。その結果、母校の通信教育部で私の中国語授業をずっと取っていた方が「三男のお嫁さんが菅沢の農家だよ」と教えてくれた。そこで、早速、長谷川正史さんのお宅へお邪魔した。「うちにはね、明治の野火止用水図がありますよ」とお話くださり、早速地図を開くと大変詳細な書き込みがあって驚いた。私の元受講生は「私は栃木出身だけど、土が固くてね。新座の土は古代の富士山火山灰だから軟らかくてうらやましいよ！」と教えてくれた。新座台地は古代の富士山噴火によってできたのだった。だから、根菜の産地となったことが分かった。



①野火止用水図



②齋藤正史ご夫妻

1) 十文字学園女子大学 語学教育セクター

### 1.3 平林寺

関東の紅葉名所として有名な平林寺は色々な見どころがあるが、今回のレポートは主として大河内輝聲(てるな)(最後の高崎藩主、清国大使黄遵憲(こうじゅんけん)と親しい)にゆかりがあるという点からアプローチした。平林寺には松平(大河内)の霊廟が固まっており、大名の墓石は普通④のような形だが、大河内輝聲は中国が大好きなので③のような碑文が墓石になっている。左が輝聲、右が奥方である。



③輝聲夫妻の碑文型墓石

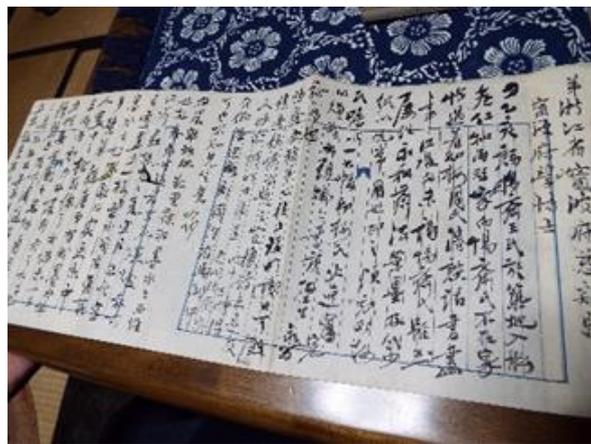


④一般的な墓石

境内にはまた黄遵憲の「日本雑詩最初稿塚」が輝聲隠居所だった浅草今戸より移築され、日中文化交流のシンボルとして公開されている。早稲田大学の実藤恵秀がこれを最初に発見し、一部を翻訳して『大河内文書—明治日中文化人の交遊』(1964年、平凡社東洋文庫)を出版、筆者もこの本によって「『紅樓夢』が読みたい!」と盛んに大使へおねだりした輝聲公を知った。取材で、高崎市宮元町の頼政神社(現在は総代の堤克政宅蔵)にも行ったが、少し前に規模の大きい取材があったと語っていた。それが「東アジア筆談文献資料の整理と研究(中国国家社会科学基金重大プロジェクト:研究代表者は浙江大学の王勇教授)」に2014年に採択され、王宝平主編『日本蔵晚清中日朝筆談資料:大河内文書』全8冊(浙江古籍出版社、144,000円)が2016年に出版された、という報道が最近あった(『東方』452号、2018年10月)中国では高崎まで取材に行っているのだから、そのうち新座の平林寺「日本雑事詩最初稿塚」見学が流行するかも!と期待されるところである。



⑤日本雑事詩最初稿塚



⑥大河内文書(実物)

### 1.4 ひるねの森

平林寺門前の「ひるねの森—竹映」は、半僧坊(毎年4月17日)の日は植木市となり、広い駐車場が満員になる。そこの主、谷山之信(ゆきののぶ)氏は高崎藩士の末裔である。もちろん、輝聲公にお仕えした(残念ながら亡くなった)。

実は、筆者は2018年秋より「竹文化研究会」を組織して、日中の竹文化の研究に着手している。こうした中、関東で「竹が有名な寺院ベスト5」に平林寺が入っていることが分かった。

そこで早速、平林寺へ見に行ったが 2018 年 10 月から竹林あたりは「一般人立入禁止」となっていた（門番の方に特別許可を頂いた）。しかし、平林寺の竹は「ひるねの森」の竹林と道路を挟んで生えており、ほぼ同じである。

筆者もいけばなの為に谷山之信氏にお願いして、竹を売って頂いた経験がある。

今後は「竹の新座」という宣伝方法も良いのではないかと思った。



⑦谷山之信氏<sup>1</sup>

### 1.5 菅沢稲荷神社

新座駅から本学まで行くのには、必ず「恵山通り」を歩く。

その由来は高崎藩士菅谷清章（享保 5 年—？）がこの地に隠居し、みずから「恵山玄忠入道」と称した事が始まりだそうだ。

いまは菅沢稲荷神社となっている。なお、菅谷の弟の子清成（宝暦 4 年—文政 6 年）は帰雲と号し、漢詩人・書家として著名。恵山通りを通行する際、昔を偲びながら歩くと味わいも格別ではないか。



⑧菅沢稲荷神社

## 2 新座歴史探訪Ⅱ

### 2.1 松永耳庵

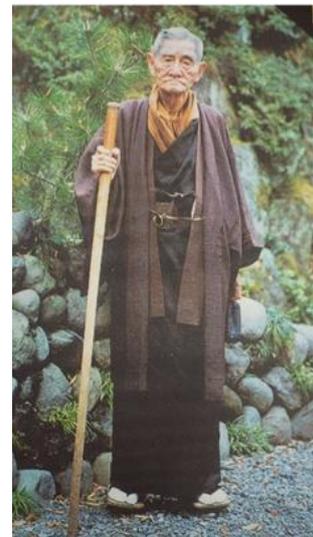
筆者は、東京都世田谷区茶道花道協会の花道部に所属している関係で、茶会の添え花を出品することがあり、茶道に関しては多少の知識がある。しかし、新座には「昭和の大茶人」と大変ゆかりがある事は知らなかった。

ある日、平林寺境内で変わった墓石を見つけ、調べていくうちに「これは是非新座の皆さんにお知らせしなければならぬ」と気づいた。もちろん、古くから住んでいる方々にとっては当たり前で、中には直接話したことがある、などという方もいらっしゃるだろう。

しかし、少なくとも新座ニューカマーとしての筆者が納得するまで取材したい、と考え平成 27 年度は「新座歴史探訪Ⅱ」として茶人松永耳庵を特集することとした。



⑨松永耳庵夫妻+猫の墓



⑩晩年の耳庵<sup>2</sup>

松永耳庵（本名は安左エ門：明治 8 年—昭和 46 年）は長崎県壱岐の豪商に生まれ、福沢諭吉に憧れ、慶應義塾に入学する。しかし、父の急死により安左エ門を襲名、「わが人生は闘争なり」と慶應義塾に書き残して退学した。それ以降、日本の国力はエネルギーにあると看破し、数々の会社設立に関わる。大正 6 年、衆議院議員に当選、1 期を務める。大正 11 年、東邦電力を設立する

も、大東亜戦争への批判をくりかえしたため昭和 17 年に引退し、所沢の柳瀬山荘で茶道三昧の生活を送る。

耳庵の由来は、還暦直前に茶道に目覚めたため、『論語』の「六十にして耳順う」から取ったそうである。平林寺前に「睡足軒」を別荘（兼、茶室）として構築、平林寺へしばしば出向いて茶を嗜んだ。

戦後は小田原に移住し、茶器を中心とする収集した美術品と柳瀬荘を国に寄贈。

また、電力中央研究所の理事長をはじめ、産業計画会議において東名高速道路・名神高速道路・沼田ダム計画などに関わった。

昭和 34 年、財団法人松永記念館を設立し、古美術の公開や『歴史の研究』（アーノルド・J・トインビー）の翻訳刊行に尽力した。

昭和 46 年、慶應大学病院にて死去。享年 96 歳、墓所は平林寺内に夫人と並び立てられている。勲一等瑞宝章、慶應義塾大学名誉博士号。

慶應義塾志木高校の土地は、東邦電気産業研究所（現、サンケン電気株式会社）の一部を耳庵が寄贈したもので、校内に胸像がある。



⑪睡足軒の夜の茶会風景



⑫志木高校の銅像

## 2.2 耳庵流「荒ぶる侘び」

松永耳庵は茶人としてのスタートが遅く、昭和 6 年 60 歳の時。根津嘉一郎（東武鉄道）、五島慶太（東急鉄道）、藤原銀次郎（王子製紙）などにかかわれるほどであった。昭和 12 年に茶界を震撼させる事件が起きた。主役は耳庵。売りに出された大井戸茶碗「有楽（うらく）」を 14 万円余で競り落としたのである。現在の貨幣価値で 6～7 億円。さらに続けて、戦国大名・蒲生氏郷（うじさと）作の茶杓を 1 万 6 千円で、これも落札する。日を置かずにと 10 億円。負けるものかというバサラを演出して見せる度胸も必要なのである。茶道具はその来歴がものをいう。松平不昧（ふまい）、紀州徳川、加賀前田などが箱書きにあり、誰の所有来歴かが最優先。つまり、その後継のような気分になるのであろう。

もうひとつエピソードを持っている。耳庵に書画骨董の手ほどきをしたのが北大路魯山人。陶芸家北大路魯山人からさまざまなことを教わり、料亭「星岡茶寮」にも足繁く通いながら影響を受け続けた耳庵は、彼にすすめられた織部の鉢を皮切りに莫大な資金をかけて、茶道具をはじめたくさんの美術品を手に入れる。ところがある日、酔った魯山人が耳庵の親友小林一三（阪急電鉄）をケチだとののしった。それを聞いた耳庵、魯山人を縁側から放り出して、二度と会うことはなかった。

<荒ぶる侘び>のスタートである。その耳庵、生涯、茶の手前を身につけることはなかった。手前勝手に茶を点てる。その茶はなかなか旨かったらしい。なによりもその道具に位負けすることはなかった。国宝級の道具類を揃え、茶室を持ち、茶会を開く。点前は習ったものの「面倒だから」とすっかり忘れて自分流に点ててしまう。ときどきで点前の順序が変わるので「無勝手流かい？」と問われて「日々変わるから、毎日流さ」とうそぶく。時に古新聞の上にやかんを置いて、度肝を

抜いた。茶とは何か。互いに強い緊張を発散しつつ対面する場であるからこそ、あの狭く、そぎ落とされた空間が必要であり、生きてくる。利休もそう考えていたに違いない。

耳庵は、昭和10年に埼玉県志木に柳瀬山荘を構え（そこに「耳庵」という茶室を設け、それが号の由来にもなっている）、茶道具をはじめとして骨董を集め始める。山荘といっても豪邸である。その後、小田原に引っ越すにあたり、大部分のコレクションを国立博物館に寄付してしまう。簡素な住まいに移り、本来の茶の湯の世界をみずからの生活のなかに実践しようとした。



⑬黄林閣（柳瀬山荘）

### 2.3 睡足軒

睡足軒は白居易の詩「香炉峰下新卜山居 草堂初成偶題東壁」の最初の句「日高睡足猶慵起」に因んでいる。現在は新座市が所有し、茶会や展示などで市民が利用している。



⑭睡足軒の外観<sup>3</sup>



⑮睡足軒の内部<sup>4</sup>

## 3 成果報告

### 3.1 印刷物

#### 3.1.1 パンフレット

- ・「新座歴史探訪 野火止用水／平林寺／ひるねの森／菅沢稲荷神社」

監修：吉田紀生・並木利志和

協力：長谷川正史・亀田力・堤克政・浅野有恒・谷山之信・大東文化大学図書館・早稲田大学図書館・高崎市中央図書館

印刷：望月印刷（株）／2015年（平成27年）3月発行（3,000部）

- ・「新座歴史探訪Ⅱ 一荒ぶる侘び 松永耳庵一」

印刷：望月印刷（株）／2016年（平成28年）3月発行（3,000部）

#### 3.1.2 論文

- ・『大河内輝聲と『紅楼夢』「日中文学文化研究」第5号、2016年3月

#### 3.1.3 実践・調査報告

- ・『新座歴史探訪一松永安左エ門（耳庵）の新座時代を中心に一』「十文字学園女子大学紀要」第47号、2017年3月

### 3.2 講演

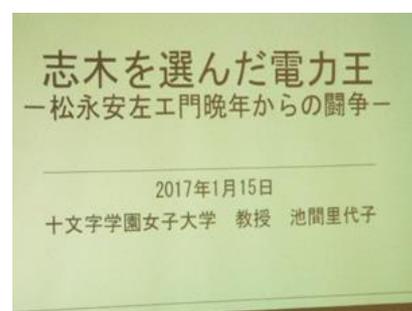
#### 3.2.1 公開講座

2016年7月9日(土)「新座歴史探訪－松永耳庵の新座時代を中心に－」  
本学9417教室にて



#### 3.2.2 招待講演

2017年1月15日(日)「志木を選んだ電力王－松永安左エ門晩年からの闘争－」  
志木いろは遊学館にて



#### <参考文献>

- ・松永安左エ門、1982年12月『松永安左エ門著作集』五月書房
- ・平林寺編、1987年9月『平林寺史』(非売品)
- ・宇佐美省吾、1993年9月『人生の鬼 松永安左エ門』泰流社
- ・1999年2月 福岡市美術館所蔵品目録『松永コレクション』
- ・松永安左エ門、1999年2月『松永安左エ門』日本図書センター
- ・水木楊、2000年12月『爽やかなる熱情 電力王・松永安左エ門の生涯』日本経済新聞社
- ・2001年8月、『茶道雑誌』「特集 松永耳庵－没後三十年によせて－」河原書店
- ・2002年2月、『芸術新潮』「特集 最後の大茶人松永耳庵 荒ぶる侘び」新潮社
- ・小島直記、2003年7月『まかり通る 電力の鬼・松永安左エ門』東洋経済新報社
- ・橘川武郎、2004年11月『松永安左エ門』ミネルヴァ書房
- ・2006年6月、『三溪園100周年 原三溪の描いた風景』神奈川新聞社
- ・藤井孝文、2009年7月『平林寺』平林寺
- ・松永安左エ門、2011年9月『電力の鬼』毎日ワンス
- ・新井恵美子、2011年9月『七十歳からの挑戦 電力の鬼 松永安左エ門』北辰堂出版
- ・逸翁美術館・福岡市美術館編、2013年10月『茶の湯交遊録 小林一三と松永安左エ門 逸翁と耳庵の名品コレクション』、思文閣出版
- ・2014年8月、『なごみ』「特集 横浜と歩んだ近代数寄者 原三溪」淡交社

#### 注

- 1 谷山之信氏の写真はご子息の谷山之康氏より掲載許可を頂いた。
- 2 松永耳庵の写真は子孫である松永安彦氏より掲載許可を頂いた。
- 3 睡足軒の外観写真は新座市ホームページから転載した。
- 4 睡足軒の内部写真は新座市ホームページから転載した。

## 地域学習補助教材としての冊子作成

Create a booklet as a regional learning aid teaching material

石野 榮一<sup>1)</sup>

Eiichi ISHINO

キーワード：地域連携、COC、地域志向科目、補助教材

**要旨：**文部科学省補助事業、地（知）の拠点整備事業（COC 事業）の5年間で毎年度1冊ずつ作成した地域学習テキストの作成目的、掲載内容の特徴をまとめた。また、COC 事業終了後の本学における地域連携活動で必要となるであろう学生向け案内冊子について検討した。

## 1 はじめに

2014年度に採択された文部科学省補助事業、地（知）の拠点整備事業（COC 事業）で初年度から新座市に関する基本的な知識を掲載した学習テキスト「いいね！にいざ」を作成した。採択以前からも新座市や市内の団体・個人と本学教職員や学生が連携活動に取り組む事例は数多くあったが、COC 事業の対象地域が「新座市」と設定され、新座をテーマにした地域連携活動が増えることが確実視されたため、新座市そのものを主に学生に知ってもらふ必要があるとの認識でテキスト作成に取り掛かった。

作成したテキストは、地域志向科目および授業における補助教材という位置づけで、2018年度まで毎年度作成した。本稿では、作成準備中の1冊を含め5冊となったテキストの特徴を紹介するとともに、COC 事業進捗状況によりテキスト作成の目的、内容も変化させてきた点をまとめた。

また、COC 事業が最終年度を迎え、本学の地域連携活動がさらなる進化を遂げ、学生の成長に貢献できるものとなるよう地域連携活動のガイドブックの在り方にも言及したい。

## 2 冊子の紹介と特徴

地域学習テキスト「いいね！にいざ」は、COC 事業開始年度（2014年度）から毎年度作成し、これまで4回作成した。2018年1月現在、最終年度の取り組みとして「地域活動ガイドブック」（仮称）の発行に向けた作業を進めており、計5回の作成となる予定である。便宜上、最初のテキストを第1号とし、以降を2号、3号、4号、5号とする。5冊のテキストを掲載内容で分類すると、3期に分けることができる。

### 2.1 第1期

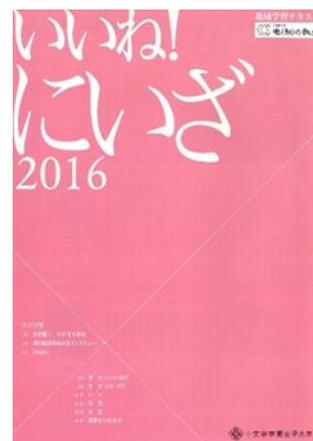
第1期は、第1号および第2号。第1号「いいね！にいざ」（12ページ建て）は、2014年後期から始まったCOC 事業で、学生が新座を知り、理解する手助けになることを目的にテキスト編集に取り組んだ。新座の基礎知識として、「歴史編」（江戸期・近代、古代・中世）、「自然編」（雑木林、農作物）、「今と未来編」をまとめた。各ページに「キークエスチョン」と「調べてみよう」の項目を盛り込み、学生に考えてもらいたい課題やテーマを掲載。さらに、より理解を深めてもらおうと「こらむ」計5本を掲載した。最終ページには新座市と本学の歩みをまとめた。また、国勢調査に基づき新座市の人口・世帯数の推移を



1) 十文字学園女子大学 メディアコミュニケーション学科

掲載した。執筆・編集は本学教員が担当し、新座市と新座市教育委員会から監修などで協力を得た。

第2号「いいね！新座2016」（16ページ建て）は、15年度事業として作成に取り組んだ。第1号の「学生の新座を知り、手助けに」という目的を踏襲したことに加えて、テキスト作成に学生をかかわらせるため、15年度後期「広報論」を受講した学生に新座を題材にしたインタビューに取り組ませた。具体的には、新座市内で活躍する女性5名に「わが街にいざ」をテーマにそれぞれインタビューし、記事化した。また、須田健治新座市長（当時）に新座市の男女共同参画推進の取り組みを聞いた内容を記事化した。また、新座市内の話題をトピックスとして3テーマを取り上げた。



## 2.1 第2期

第2期は、第3号および第4号。2号まで新座市に関する基礎知識を学生に伝えることを最大の目的としたが、学内でのCOC事業が多面化し、活動事例も豊富になったことを踏まえ、本学の地域活動をまとめることも制作目的の1つとした。

第3号「いいね！にいざ2017」（16ページ建て）では、テキスト前半に、①「地域活動への誘い」として地域で学ぶことが学生自身の成長につながることを示し、②「地域がキーワード」としてCOC事業の説明と地域志向科目の授業例を紹介、③「地域貢献活動」として具体的な活動例を紹介、④「日本の課題 地方創成」として我が国の課題が東京一極集中を排し地方を活性化することにある点を紹介した上で、並木傑新座市長に新座市の地方創成の取り組みを聞くインタビュー記事を掲載した。また、「文化編」と「農業編」の2テーマで新座市民の活動例を取材、紹介した。他方、ページの関係で新座市の基礎知識に関しては一部割愛した。なお、市長インタビュー、市民の活動例の取材・記事は16年度後期「広報論」の受講生が担当した。



第4号「いいね！にいざ2018」（16ページ建て）は、第3号の編集方針を踏襲しつつ、学生により親しみを持ってもらうため、従来の「縦書き（右開き）」から「横書き（左開き）」に変えた。さらに、内容も学生により分かりやすくするため、文章の修正やレイアウトの工夫などに取り組んだ。学生の活動事例も極力最新の内容に差し替えた。また、学生が編集にかかわることも踏襲し、17年度後期「広報論」受講生に「ゾウキリン（新座市のイメージキャラクター）Instagram企画 新座愛を届けるゾウ」と新座市役所の新庁舎紹介の2本立ての記事化に取り組んだ。



## 2.3 第3期

2019年1月現在で準備を進めている第5号「地域活動ガイドブック」（仮称）は第3期と位置付けることができる。COC事業の最終年度を迎え、本学の地域連携活動は新たな局面を迎えようとしている。5年間にわたるCOC事業の遺産を今後引き継ぐとともに、本学での地域連携活動を発展させていくことを目的にガイドブックの作成に取り組んでいる。

ガイドブックの構成は、これまでの地域連携活動の事例紹介、地域連携活動にスムーズに取り組むためのロールモデルの紹介を1つの柱とした。2つ目の柱として、今後の地域連携活動の対象地域の拡大

を視野に置いた点である。COC 事業は対象地域を新座市としていたが、これからの地域連携活動はより広い視野に立って対象地域を広げていくことになる。そこで、まずは本学所在地の新座市をはじめとした近隣自治体、いわゆる「朝霞地区4市」との連携を想定して4市の市長に、①各市の特徴②大学との地域連携の考え③本学への要望ないし期待—をインタビューした。インタビューは、18年度後期「広報制作」を受講した学生が担当した。

さらに、本学のCOC事業以降の地域連携活動に生かすために、地域連携推進機構の機構長代理、星野敦子教授に「これからの地域連携活動」をテーマに、同じく「広報制作」受講生がインタビューした。

### 3 冊子の利用

これまで年度ごとに4冊の地域学習テキストを作成した。年度ごとに若干部数は異なるが、印刷部数はおおむね1500部である。新学期が始まる4月に間に合うように3月中に印刷が終了するスケジュールで作業を進めた。

作成したテキストは、各学科の新入生全員に配布した。学科ごとに前期授業「入門ゼミナール」で地域に関する学習の教材として利用、また地域志向科目でも必要に応じて利用してもらった。また教職員全員に1部ずつ配布した。

さらに、新座市をはじめ近隣自治体、新座市内の各種団体に配布した。新座市では職員研修時の資料としても使用したという報告をいただいている。

### 4 他大学「地域活動ガイドブック」との比較

全国の大学で地域連携活動は広く取り組まれている。以下、3大学で作成された冊子と本学で作成したテキストを比較し、本学のテキストの特徴を確認する。

#### 1) 四国大学「地域教育 ガイドブック 2018」(24ページ建て)

作成は、四国大学全学共通教育センターと地域教育・連携センターである。「大学と地域社会」「地域での学生の活動」の2項目で学生に大学が地域教育活動に取り組む意味を解説。さらに地域教育の全体像を紹介する中で、自由科目として位置付ける地域教育関連科目に「地域貢献・ボランティア活動」「地域企業等研究活動」があることを示し、単位数や履修方法を解説している。学生が地域教育科目を履修する際に参考となるよう単位認定の流れや活動時間の計算方法などを説明している点は、参考になると思われる。全体を通してフルカラーで図表を多く用いながら簡潔なレイアウトがされている点も参考となる。

#### 2) 甲南大学「地域活動ガイドブック」(4ページ建て)

編集は、甲南大学地域連携センター(KOREC)。タイトルは、「君の学ぶフィールドは学外にもある 地域の中で学び・活動したい学生へ」とある。8つの活動事例を学生が紹介する形で掲載している。学生に地域活動の情報を提供することを目的にしたガイドブックと思われる。学内向けに地域活動の情報を掲載したメールマガジンの登録を呼びかけている。全学一斉の情報発信と同時に登録者(地域活動により関心が高いと思われる学生)に情報発信する取り組みは参考になる。

#### 3) 秋田大学「学生地域活動ガイド」(4ページ建て)

秋田大学地方創成センター(地域協働・防災部門)が発行している。表紙の冒頭に「地方創成センターでは、地域へ飛び出して様々な体験ができる企画をご用意しています。ここにその一例を紹介します。あなたも参加してみませんか!」とあるように、学生が自主的に取り組むプロジェクトを支援することを目的にした冊子と思われる。プロジェクトの事例紹介とともに、Q&Aで学生の疑問に答える配慮もさ

れている。4 ページと数は少ないがコンパクトなレイアウトは参考になる。

## 5 まとめ

他大学のガイドブックは、地域連携活動に取り組むに際しての案内、文字通りガイド役の特徴がある。これに対し本学のテキストは、制作目的が「地域学習用の補助教材に」ということから、COC 事業の対象地域・新座市に関する基本的な知識を提供することを目的にした。教職員および学生が COC 事業に取り組むにあたり、新座市にかかわる歴史・自然・課題を把握しておくことは研究・教育を進めるにあたり貢献できたと思われる。さらには、具体的な活動に踏み出す前段階で新座を知る機会を提示できた点もテキスト作成の成果と考える。

他方、学内でのテキスト利用は教職員に任せる形で終わってしまった。COC 事業が採択されたのは現行のカリキュラムがスタートした後であり、大学全体のカリキュラムと関連づけた活用方法まで至らなかった。十分活用されたかは疑問の残る結果に終わってしまった。

他大学の冊子を概観すると、学生が地域活動に参加する過程を示す、文字通り「地域活動ガイドブック」の役割を担っている。本学では 2018 年度に COC 事業は終了する。前述したように本学における今後の地域連携活動は新座市にとどまらず様々な地域に広がっていく。その際に学生を支援するツールとしての「ガイドブック」は必需品になることは想像に難くない。現在、制作を進めている「地域活動ガイドブック」(仮称)は、COC 事業のまとめという役割とともに、本学の地域連携活動の案内役を果たすことを期待している。今後、制作されるであろう「地域連携活動の案内」の先駆になればとの思いで、制作を進めていることを記して、本稿を終わる。

### <参考文献>

- ・四国大学地域教育ガイドブック 2018 四国大学全学共通教育センター・地域教育連携センター
- ・甲南大学「地域活動ガイドブック」 甲南大学地域連携センター
- ・秋田大学「学生地域活動ガイド」 秋田大学地方創成センター

## 介護保険施設での傾聴ボランティア活動を通じた傾聴技術の評価

## The Evaluation of the Active-listening skills through Listening volunteer activities in Insurance of the elderly care facilities

大山 博幸<sup>1)</sup>

Hiroyuki OYAMA

キーワード：傾聴技術、傾聴ボランティア、相談援助演習、社会福祉士養成課程

**要旨：**本研究では、介護保険施設（特別養護老人ホーム）での利用者を対象とした傾聴ボランティア体験を学生に課し、傾聴技術習得における調査を行うことで、その学習効果を明らかにすることを試みる。この体験により、全体的に、学生は傾聴技術が向上したといった意識が調査結果からみられた。また傾聴ボランティアを体験することで傾聴に対するイメージが一部より肯定的に変化することがみられた。また自由記述から、傾聴技術修得において学生個々に多様な経験が生じたことがうかがえた。本研究での授業デザインはアウトキャンパススタディの形態であり、同時にサービスマーケティングの形態でもある。それはすなわち、傾聴技術に代表される相談援助の技術習得の学習活動が、地域の実際の場において、より豊かに実施・展開されることの意義を示唆するものでもある。

## 1 はじめに

## 1.1 背景

社会福祉士養成課程指定科目である相談援助演習の教育内容の一つに、相談援助のために基本的な面接技術の習得がある。ソーシャルワーカーが行う基本的な面接技術とは、カウンセリングの基本的な技術とほぼ同義であるが、面接技術習得の初心者にまず求められるものは、すなわち傾聴の技術である。実際、ソーシャルワーカーが行うクライアントとの相談面接は多様な状況となるが、クライアントの主訴やニーズの理解、あるいはクライアントへの共感的理解をしていくにはまずもって、相手（クライアント）の話を十分に聴くこと、がソーシャルワーカーに求められる。

筆者は、傾聴技術を主に、カウンセリングの各技術とその習得のためのトレーニングについて整理し国内に紹介されたイーガン（1998）のカウンセリング論やアイビー（1985）のマикроカウンセリングに基づき、独自に整理し、演習系の授業で教えている。筆者は傾聴の営みを、1）基本姿勢と2）具体的な技術の2水準に分け、前者1）は、イーガンのカウンセラー側の非言語レベルにより示された SOLER や、マクロカウンセリングの4つの関わり行動（①視線を合わせる、②身体言語に気を配る、③声の調子、④言語的追跡）、後者2）は、あいづち、最小限の励まし（オープンリードもしくはプローブ）、適切な質問（閉じた質問、開かれた質問）、言い換え（言葉のリフレクション）、感情の反映（感情のリフレクション）、要約（内容のリフレクション）、意味の反映（意味のリフレクション）、フィードバック（感情伝達、即時性など）、沈黙の対処などとし、これらを演習系の授業内で学生が体験しながら習得することを目指せるような授業展開をしている。

ところで、傾聴の技術は実践の知あるいは臨床の知といえ、その習得には、その概念理解のみにとどまらず、実際の・体験的な学習、あるいは訓練が必要であると考えられる。傾聴を教える教師は特に演習系の科目においてそのような学習環境を設定提供していくことが求められる。筆者は、傾聴技術の習得を目的に、講義収録システムである PF-NOTE を使用した省察的学習に基づく傾聴トレーニングの設計と実施を、演習系授業（ゼミ）において試みた（安達・大山、2014）。PF-NOTE を使用することで、録画した傾聴場面を直後に視聴し振り返ることができること、傾聴場面を観察する他の学生も、傾聴場面の映像に同期して記録されるクリッカーを使用することでトレーニングにより関与・参加できることが確認できた。このように、授業内でも効果的な学習環境を設定することで、

1) 十文字学園女子大学 人間福祉学科

傾聴技術習得のトレーニングは可能となる。しかしながら、より実践的、実地的な状況の中で、傾聴技術の使用が試みられることで、その習得がより促進されるのではないかと筆者は考える。

そこで、今回筆者は、学生が実際に特別養護老人ホーム等で利用者を対象とした傾聴ボランティア体験を学生に課すことにより、より実地的、具体的に傾聴技術の習得の機会を提供することを試みる。

## 1.2 目的

本研究では、介護保険施設（特別養護老人ホーム）での利用者を対象とした傾聴ボランティア体験を学生に課し、傾聴技術習得に対する調査を行うことで、その学習効果を明らかにすることを試みる。

## 2 対象と手続き

### 2.1 調査の対象学生

対象学生は、筆者が担当する演習（ゼミ）を履修した学生を中心とする、本研究の趣旨に同意した人間福祉学科3年生9名である。同学生は平成26年前期に相談援助演習Ⅱを履修し、その授業の中で傾聴における基本的な知識と技術についての学習経験を持つ。なお、本調査においては筆者の所属する大学の研究倫理審査委員会より、承認を得た。

### 2.2 手続き

①筆者が担当する授業（ゼミ）内にて、3コマ（1コマ90分）ほど、傾聴技術を使用したトレーニングを対象者に実施した。

②次に、傾聴ボランティア活動実施前に、三島・久保田（2003）の傾聴学習におけるオブザーバーのチェックリスト13項目を参考にして作成した傾聴技術に関する質問13項目（4：あてはまる、3：ややあてはまる、2：ややあてはまらない、1：あてはまらないの4段階評定）、筆者が独自に作成した傾聴に対するイメージを問うSD法による質問16項目（形容詞の極の5点から、右の形容詞の極の1点までの5.4.3.2.1点のいずれかを選択する5段階評定）によって構成された質問紙による調査を、記名式にて対象学生に実施した。三島・久保田（2003）のチェックリストは傾聴学習場面での観察者がその評価に用いることを目的とするものであるが、質問項目は筆者が傾聴の具体的な技術として示しているものにおよそ対応していること、13項目と比較的少ない項目で構成されていることに注目し、これらの質問項目の語尾表現を、「○○○することができる」と置き換え傾聴技術習得に関する質問項目とした。

③平成27年11月から12月にかけて、新座市内S特別養護老人ホーム内で、対象学生9名による、S施設内に入居する利用者に対して、1回約60分の傾聴ボランティア活動を週1回ごとに計4回実施した。なお、ボランティア初日には施設職員より施設内のボランティア活動におけるガイダンスを受講した。対象学生は、1.2名ごとに施設内の各ユニットのフロアに分かれ、15:00-16:00の時間帯に食堂やフロアで過ごす利用者に対して傾聴活動を行った。対象学生は初対面の場合、当該利用者に対して自己紹介をし、その後非構造的な形態で自由に利用者の話を傾聴することを基本とした。学生は利用者と一対一で傾聴を行うこともあれば、複数の利用者を同時に対象として傾聴することもあった。和やかな雰囲気で歓談が生じていることもあれば、緊張した雰囲気で会話がとぎれとぎれになることもあった。施設利用者の多くは認知症の症状がある様子であった。同じ話を何度も繰り返して話す利用者に対して、学生は慌てることなく丁寧にその話についていこうと努めていた。また脳血管障害後遺症による下肢筋力のため車いすを使用している方も多くみられた。失語症により筆談によるコミュニケーションをすることが求められる利用者もいた。傾聴する時間は特に一定ではなく、終始傾聴がなされることもあれば、利用者が入浴サービスを受ける時間になる、あるいは会話に疲れて自室に戻る等の理由で、中断することもあった。傾聴相手が不在となっ

た際、学生は傾聴が可能と思われる他の利用者のそばに移動し、傾聴を試みていた。下記写真1は学生による傾聴ボランティア活動場面の一部の様子である。

④計4回の傾聴活動終了後、筆者の担当する授業（ゼミ）内で対象学生に対して、①で実施した調査項目に自由記述を追加した質問紙による調査を実施した。さらに、学生相互で傾聴ボランティア活動を実施した感想をシェアした。

⑤後日、調査結果を集計解析した。



写真1 学生による傾聴ボランティア活動の様子

### 3 結果と考察

#### 3.1 傾聴技術に関する質問項目の結果

表1は、傾聴技術に関する質問項目の結果である。13項目における合計平均得点は、実施前に比べ実施後に有意に上昇した。このことから、本傾聴ボランティア活動によって学生は自身の傾聴技術が向上したと意識されたことが示唆された。また13項目中、04「話を発展させる応答ができる」、05「相手が話したポイントを要約して言い返すことができる」、06「話を整理することができる」、08「話の流れがわからなくなったときは素直に聞き返すことができる」の4項目は、傾聴ボランティア活動実施前に比べ、実施後に有意に得点が上昇した。項目04は「最小限の励まし」もしくは「オープンリード」、項目05、06は「要約」、項目08は「質問」といった傾聴技術に対応していると思われるが、学生は全体的に見て、これらの技術が向上したと自ら評価していることが示唆された。

しかしながら、09「相手の気持ちに焦点を当てるような応答ができる」（実施後の平均＝2.78）、13「自分の感じたことを伝えることができる」（実施後の平均＝2.78）といった感情の反映や感情の伝達といった傾聴技術に関連すると思われる項目や、10「相手が気持ちを正確に見つめ、表現できるような応答ができる」（実施後の平均＝2.67）、傾聴の基本的態度の一つといえる共感的理解に関連すると思われる項目の平均得点は、傾聴ボランティア実施後も2点代にとどまっておき、傾聴ボランティア体験後もそれらの技術が使用できた、もしくは向上したという意識が学生には生じなかったことが示唆された。

表1 傾聴技術に関する質問項目の結果

項目	N	平均値		標準偏差		t(8)	有意差
		実施前	実施後	実施前	実施後		
01相手に、一緒に考えようという姿勢を伝えることができる。	9	3.11	3.22	0.78	0.67	0.56	
02相手の話を邪魔せずについていくことができる。	9	3.11	3.33	0.33	0.71	1.00	
03相手に考え(感じ)させることができる。	9	2.67	2.78	0.50	0.67	1.00	
04話を発展させる応答ができる。	9	2.44	3.00	0.73	0.87	3.16	*
05相手が話したポイントを要約して言い返すことができる。	9	2.33	3.11	0.50	0.60	2.80	*
06話を整理することができる。	9	2.33	3.00	0.50	0.50	2.31	*
07相手が沈黙しても邪魔をせずに待つことができた。	9	3.22	3.67	0.44	0.50	1.84	
08話の流れがわからなくなったときは素直に聞き返すことができる。	9	2.67	3.44	0.71	0.73	3.50	**
09相手の気持ちに焦点を当てるような応答ができる。	9	2.89	2.78	0.60	0.67	0.43	
10相手が気持ちを正確に見つめ、表現できるような応答ができる。	9	2.78	2.67	0.67	0.71	0.43	
11相手の気持ちからのひらめきを促すような応答ができる	9	2.33	2.67	0.50	0.50	1.41	
12言葉としては現れていないが、相手から伝わってきた感情を言い返すことができる。	9	3.00	3.22	1.12	0.67	0.69	
13自分の感じたことを伝えることができる。	9	3.00	2.78	0.71	0.83	0.61	
傾聴スキル合計平均得点	9	2.76	3.05	0.32	0.42	2.54	*

\*:p<.05, \*\*:p<.01

### 3.2 傾聴に対するイメージ

表2は、SD法を用いた傾聴に対するイメージを問う質問項目の結果である。

表2 SD法による傾聴に対するイメージを問う質問項目の結果

項目	N	平均値		標準偏差		t(8)	有意差
		実施前	実施後	実施前	実施後		
01やさしい—むずかしい	9	3.11	3.89	1.05	1.05	2.40	*
02たのしい—たいへん	9	2.78	3.78	0.67	0.83	2.45	*
03明るい—暗い	9	3.00	3.56	0.50	0.53	2.29	
04身体的な—精神的な	9	2.00	2.22	0.87	1.20	0.69	
05好き—嫌い	9	3.44	3.89	0.53	0.93	1.32	
06意欲的な—無気力な	9	3.56	3.78	0.73	0.44	0.80	
07あたたかい—冷たい	9	4.00	4.33	0.50	0.71	1.41	
08安心な—不安な	9	3.89	3.89	0.60	0.78	0.00	
09おもしろい—つまらない	9	3.33	3.89	0.50	0.60	1.89	
10近い—遠い	9	3.78	4.11	0.67	0.60	1.41	
11おだやかな—はげしい	9	3.78	3.89	0.44	0.60	0.56	
12落ち着いた—興奮した	9	4.00	4.00	0.50	0.50	0.00	
13静かな—にぎやかな	9	3.67	3.67	0.71	0.87	0.00	
14冷静な—情熱的な	9	4.00	3.89	0.50	0.78	0.56	
15単純な—複雑な	9	2.11	2.67	0.60	1.00	1.89	
16ゆっくりな—急な	9	3.78	4.33	0.44	0.87	1.64	

\*:p<.05, \*\*:p<.01

評定の範囲は左の形容詞の極の5点から右の形容詞の極の1点であり、3点が中央値となる。傾聴ボランティア実施後の結果に着目すると、相対的に見て高いと判断される4点以上の項目に対応する形容詞から、学生は全体的に傾聴に対して、「あたたかい(4.33)」、「近い(4.11)」、「落ち着いた(4.00)」、「ゆっくりな(4.33)」といったイメージを持っていることが示唆された。「あたたかい」「近い」は、傾聴時の相手との関係性における親密さを、「落ち着いた」「ゆっくりな」は、傾聴時にしばしば生じる場の静かな雰囲気や連想させる。学生は傾聴に対して、親密さや静かさといったイメージを持ったことが示唆された。

また、01「やさしい—むずかしい」、02「たのしい—たいへん」の2項目は、傾聴ボランティア実施後、実施前に比較して、平均得点が有意に上昇した。学生は傾聴ボランティアを体験して、傾聴は、「むずかしい」から、より「やさしい」へ、「たいへん」から、より「たのしい」へと傾聴のイメージが、より肯定的に変化したことが示唆された。

### 3.3 自由記述の結果

自由記述は学生9名中7名から何らかの記述があった。自由記述は、一文ごとに区切った。7名の記述において合計14文あった。自由記述は、傾聴ボランティア体験自体における学生個々の多様な経験がうかがえた。

学生Bは、「・・・(省略)・・・無理に話を続けようとするのではなく、まずは自分の中の緊張を解けるように努力した。それをやる事によって、自然と言葉が出てきたり利用者がどのような人であるか見る事ができたと思った」、「・・・(省略)・・・話すきかけを出して利用者が話せるような空間を生み出す事も回数を重ねるごとにできてきた様にも感じる」、「あまり話すほうではないのかと思った利用者や、話が續かない利用者と思った人も故郷の中から深めていくことで会話を積極的にしてくれる様になったと感じる」といった記述から、傾聴時に自分自身の態度や技術的なかわりを修正、工夫し、利用者の語りを引き出せていける手ごたえを感じていることがうかがえる。また、学生Cからは「利用者さんが言いたいことを話してくれるまでは自分が待つことの大切さを学び、相手にとって優しく声をかけることも大切であると気づいた」、「感情的にぶちまけることなく、相手の感情や気持ちの波型に合わせて会話することが何よりも必要性を感じた」といった、傾聴技術を中心とする反省的な記述がみられた。

学生Dの「ほとんどの人が自分のことを馬鹿だからというか頭悪いからみたいな感じに言っていて何故だろうと思った」、「戦争のこととかすごく鮮明に覚えているようだった」といった記述、学生Eの「お孫さんやお子さんの話をしてくださって、訪問状況についてお話ししてもらったが、もっと訪れて欲しいんだろうなと悲しさが捉えられて考えさせられた」といった記述からは、傾聴時の利用者の言動や様子から、利用者への理解や解釈を進める学生の様子がうかがえた。

また、学生Aの「うなずきのみで話を聴いていたら、相手の話をまともに聴いていなかったことがバレた」といった記述から、Aがうまく傾聴できなかった様子がうかがえた。筆談でコミュニケーションを試みた学生Gからは「対象とした利用者は手が不自由であったため、字から本人の意思や、思いを読み取ることが難しく文字を使つての会話が難しかった・・・(省略)・・・」といった記述から、筆談による傾聴の困難さを経験したことがうかがえた。

#### 4 総合考察

以上の本研究において、一回1時間で合計4時間程度の傾聴ボランティア体験ではあったが、この体験により、全体的に、学生は傾聴技術が向上したといった意識が調査結果からみられた。また傾聴ボランティアを体験することで傾聴に対するイメージが一部より肯定的に変化することがみられた。また、自由記述から傾聴ボランティア体験や傾聴技術修得において学生個々に多様な経験が生じたことがうかがえた。特別養護老人ホーム内に入居する、主に認知症の症状を持つ要介護高齢者を対象とした傾聴ではあったが、一般に傾聴技術習得は困難さが生じるといわれている中で、学生が傾聴技術向上を意識することができたことは、意義があると考えられる。

しかしながら、習得したと意識された傾聴技術は一部であった。特に感情レベルに関連するその技術の習得の実感は低く、習得には及ばなかったと意識されたことが示唆された。

ボランティア活動としてではあるが、傾聴を授業内ではなく、福祉領域の場の中で、実際に利用者を対象に体験、実施することで、より深い学習の機会になることが示唆された。

#### 5 おわりに

傾聴技術習得の評価においては、今回は学生の意識を問う形式のみであったが、今後は傾聴の対象者及び第三者からの評価を加えて実施していく必要がある。

大学内での授業を超え、実際の福祉領域の施設の場に参入して、本学習活動を行うことは、アウトキャンパススタディの形態であり、同時に、いわゆるサービ斯拉ーニングの形態でもある。それはすなわち、傾聴技術や面接技術など実践の知（もしくは臨床の知）としての特性をもつ相談援助の技術習得の学習活動が、地域の中の実際の場において、より豊かに実施・展開されることの意義を示唆するものでもある。

※謝辞：本研究におきまして、傾聴ボランティア活動の機会提供とご協力をいただきました、特別養護老人ホームそら一れ新座様に感謝申し上げます。

#### <参考文献>

- 1) 安達一寿、大山博幸、2014、講義収録システムを活用したアクティブラーニングの試行、十文字学園女子大学人間生活学部紀要 12. 75-87
- 2) アレン・E・アイビイ著、福原真知子他訳編、1983、マイクロカウンセリング、川島書店
- 3) ジェラード・イーガン、鳴澤實、飯田栄訳、1998、カウンセリング・テキスト、創元社
- 4) 三島徳雄、久保田進也、2003、積極的傾聴を学ぶ、中央労災防止協会



## 「NPO 法人暮らしネット・えん えん食卓」 食事サービスの改善への取り組み

Activities for the improvement of the meal service  
in Nonprofit Organization Kurashinet En Ensyokutaku

岡本 節子<sup>1)</sup>      金高 有里<sup>1)</sup>      名倉 秀子<sup>1)</sup>  
Setsuko OKAMOTO    Yuri KINTAKA      Hideko NAGURA

**キーワード**：高齢者、食事サービス、献立作成、小規模多機能、実践活動

**要旨**：高齢者を支援する「NPO 法人暮らしネット・えん」の利用者を対象に、低栄養、生活習慣病を予防する栄養管理と食事サービスの満足度を高める目的で、平成 26 年度から、定期的な訪問及び嗜好調査を行い、嗜好に合った献立の作成、料理の試作、利用者との夕食会食、調理作業、衛生管理の指導などの実践活動に取り組んだ。利用者のニーズに合わせて、平成 28 年度は行事食と減塩料理、平成 29 年度は減塩料理と摂食・嚥下しやすい料理をテーマとした献立作成を行った。取り組みによって、利用者の食事の満足度は向上し、学生は地域で施設訪問、献立作成、調理作業などの実践活動を行うことで、社会貢献の重要性を身近に感じ、利用者を対象とした実践力と心を育む機会であったと考える。

## 1 はじめに

平成 29 (2017) 年 10 月 1 日現在、日本の 65 歳以上の高齢者人口は 3,515 万人となり、高齢化率も 27.7% となった。65 歳以上の高齢者のいる世帯別構成割合をみると、平成 28 (2016) 年では夫婦のみの世帯 (31.1%) が一番多く、単独世帯 (27.1%) と合わせると全世帯の半数を超える状況である。昭和 50 年に世帯構造の中で一番割合の多かった三世帯世帯 (13.2%) は減少傾向にあり、単独世帯は今後も増加が続くと予測される<sup>(1)</sup>。単身高齢者の多くは要介護状態となった時に一人で生活を続けていくことへの不安を感じている。

新座市内にある NPO 法人「暮らしネット・えん」は、そのような一人暮らしの高齢者の不安を解消できるよう、これからの超高齢社会に対応し、高齢者・障がい者の支援事業、調査活動、学習会、文化活動などを通じて高齢になっても障がいがあっても、おとなも子どもも共に生きる地域社会を創ることを目的として結成された小規模多機能型施設であり、主に 7 つの事業 (図 1 参照) を展開している。

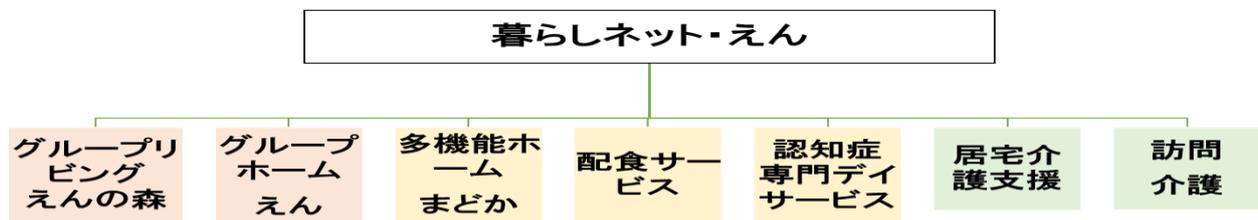


図 1 NPO 法人「暮らしネット・えん」の 7 つの事業

### 1.1 グループリビングえんの森

「暮らしネット・えん」は「えん食卓」として施設内に厨房を持ち、地域で暮らす高齢者の昼食の配食サービス、「グループリビングえんの森」、「グループホームえん」「多機能ホームまどか」の夕食の食事サービスを行っている。

「グループリビングえんの森」は、超高齢社会に対応した新しい住まい方を提案し、ひとり 1 室使用の 10 居室 (ミニキッチン、トイレ、洗面等有) を設置し、コーディネーター 1 名を中心に

1) 十文字学園女子大学 食物栄養学科

それぞれが独立した生活を営む一方で、共有スペースとしてのリビングルーム、会議室、バスなどがあり、利用者が孤立することなく、プライバシーの保たれた共同生活ができる。

「グループリビングえんの森」の利用者は、朝食、昼食は各々で摂っているが、夕食は入居者が共有スペースのリビングルームにて集まり、1日の団欒の場となっている。

## 2 活動の概要

平成26年10月より、グループリビングえんの森（10名）、グループホームえん（9名）の利用者、多機能ホームまどか利用者を対象に、低栄養、生活習慣病の予防のための栄養管理、高齢者の嗜好に合わせ食事サービスの満足度を高めることを目的に活動を開始した。

### 2.1 訪問調査及び質問表による嗜好等の調査の実施

利用者の状況把握のために施設を訪問し、利用者に食事への要望などの聞き取り調査、質問表による嗜好、体調に関する気になる事項等の調査を行った。

### 2.2 料理の試作、献立作成

高齢者の嗜好に合う、栄養のバランスの取れた献立を作成した。給与栄養目標量は、本取り組みの以前からの値を用いた。学生は献立作成後、料理の全体のバランス、食品、調味料の重量などを確認するために献立に基づく料理の試作を行い、献立を修正後、えん食卓の調理スタッフに毎月1ヶ月分の夕食献立をメールで送付した。平成28年度は行事食と減塩料理をテーマに利用者の食事への楽しみと健康を考えた食事の提供を試みた。平成29年度は減塩料理と摂食・嚥下しやすい料理をテーマとした。



写真1 学生の考案した夕食

#### 【夕食の給与栄養目標量】

エネルギー目標量	480kcal
たんぱく質目標量	20.0g
脂質目標量	13.3g

#### 【献立名】

枝豆ご飯 豆腐の味噌汁

豚肉の酢味噌かけ

かぼちゃのいとし煮

かぶと小松菜の和え物 白桃缶

### 2.3 グループリビングえんの森、グループホームえんへの訪問

2～3ヶ月に1回の頻度で施設に訪問し、グループホーム利用者の喫食状況を確認し、グループリビングの利用者と夕食を共にしながら料理の感想や要望等を把握しながら献立に反映させた。

### 2.4 厨房「えん食卓」内での調理作業、衛生管理の指導

「えん食卓」の厨房内で調理作業を行い、献立の適合、食事の量と質、料理の出来栄を評価し、厨房内の調理器具の確認、衛生管理の指導などを実施した。

## 3 活動の成果

### 3.1 訪問調査及び質問表による嗜好等の調査の結果

訪問調査による食事への要望では、「主菜は肉類、魚類を交互に出してほしい」、「野菜料理を多く食べたい」、「焼き魚やお浸しなどシンプルな料理が食べたい」、「主食は麺類でなく、全てご飯が良い」、「だしの利いた汁物が飲みたい」などがあった。

質問表による嗜好調査の結果は、利用者の好きな料理様式は日本料理が多く（図2）、魚の煮付けや野菜の煮物、お寿司、おでんなどの料理を好む人が多かった（図3）。夕食の汁物の頻度は毎日が多く（図4）、果物の頻度は、毎日が4人、週3～4日が7人と果物を好む人が多かった（図5）。食事サービスの食事の量は丁度よい10人、多い3人、少ない1人であった（図6）。食事や体調に関する気になる事項は、食欲がない、硬いものが噛みにくい、むせる・つかえる、食事制限、体重減少などの項目をあげていた（図7）。

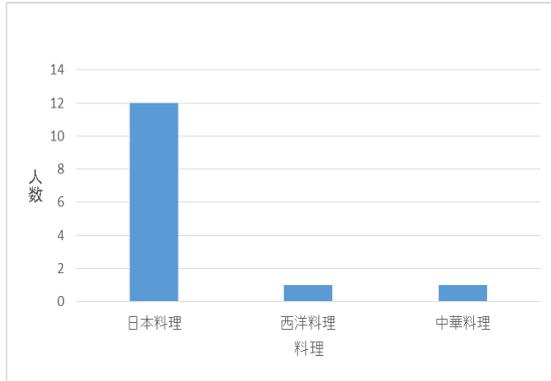


図2 好きな料理様式

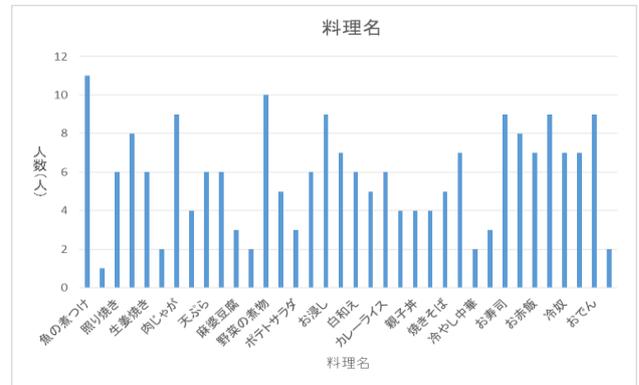


図3 好きな料理名

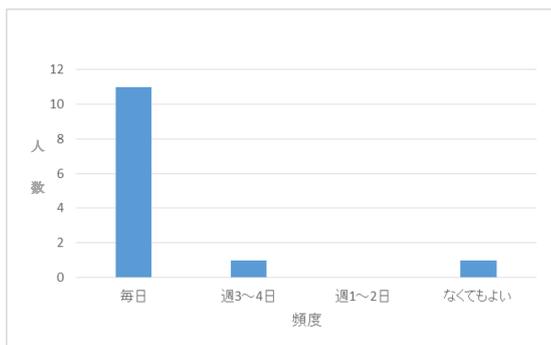


図4 汁物の頻度

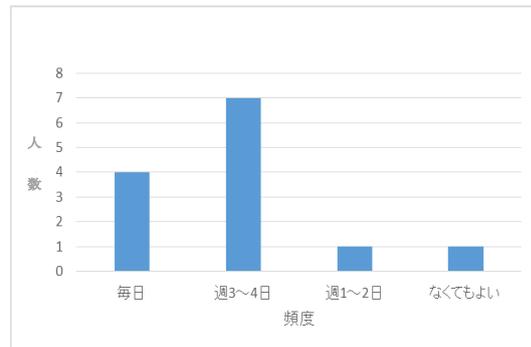


図5 果物の頻度

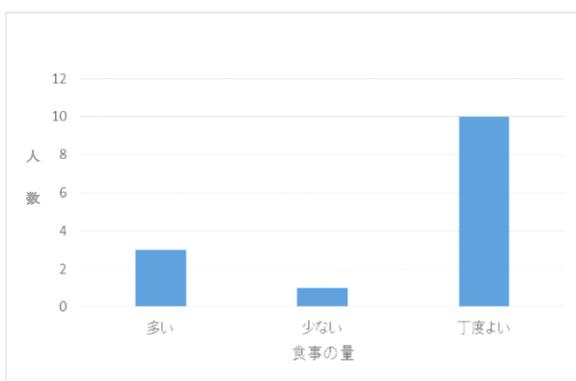


図6 食事サービスの食事の量

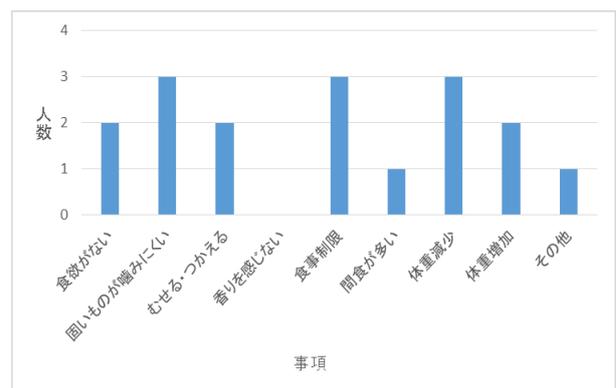


図7 食事や体調に関する気になる事項（複数回答）

### 3.2 料理の試作、献立作成

取り組みを始める以前の食事サービスと同じ給与栄養目標量とし、一汁三菜の日本料理を中心に野菜の多い献立を考案した。考案した献立を試作り、料理の組み合わせや色彩などの確認を繰り返すことで、学生の献立作成能力の向上が見られた。

### 3.3 グループリビングえんの森、グループホームえんへの訪問

定期的な施設の訪問調査より、以前よりも食事のバリエーションが増え、食事が楽しみになったと利用者の声があった。学生は訪問時に食事の意見を伺い、また食事の意見簿と合わせて献立の評価を確認した。また、利用者からの、ステーキなど厚みのある肉が食べたいという要望に対して、調理法を工夫して軟らかい西洋料理献立を取り入れるなどした。小数意見を取り上げることで、次の訪問時には食事の満足度が上がったとの利用者からの声を学生が聞き、利用者を対象とした実践活動が行えた。

### 3.4 厨房内での調理作業、衛生管理の指導

夏休みの期間に「えん食卓」の厨房にて、学生が考案した献立を調理・提供した。考案した献立を利用者に提供することが初めての経験となり、喜びを感じるという学生の意見もあった。



写真2 献立の試作



写真3 「えん食卓」厨房内で

#### 《学生の感想》

①3ヶ月間の献立作成と調理実習をさせて頂いて、授業だけでは分からなかったことを多く学ぶことができました。特に利用者様の満足度の高い献立を立てるためには、年齢層による味付けや辛さの嗜好の差についてもっと勉強するべきだと感じました。たくさんのご意見やご指導、本当にありがとうございました。

②献立作成や調理実習を体験させて頂きました。授業以外で献立を作るのは初めての事で、未熟な部分も多々あったと思いますが、夕飯をご一緒させて頂いたときに、温かい言葉や親身になってアドバイス頂きとても勉強になりました。本当にありがとうございました。

③高齢者向け献立作成をテーマにゼミ活動を行っています。その一環として暮らしネットの方々のご協力の元、嗜好調査、献立作成、実際の調理をさせて頂きました。現場だからこそ学べるものがたくさんあり、作業のコツや給食を作ることの大変さややりがいを学ぶことが出来ました。本当にありがとうございました。

④調理実習では、調理工程などの事も考えて献立を作成すること、また、利用者様の食事に対する様々な率直な意見を頂くことが出来て、より実践的な現場で学ぶ機会を得られとても良い経験となりました。本当にありがとうございました。

(平成29年9月「暮らしネット・えん」だよりに掲載された学生の感想文)

#### 4 まとめ

平成26年度より、「NPO法人暮らしネット・えん えん食卓」の利用者の低栄養、生活習慣病の予防のための栄養管理、高齢者の嗜好に合わせ食事サービスの満足度を高めることを目指して改善に取り組んできた。

利用者の嗜好に合わせた献立を作成し提供することで、利用者の食事に対する満足度が上がった。特に「グループリビングえんの森」の利用者において、夕食は1日の中で利用者同士の唯一の団欒の場となるため、食への期待が高く、行事食への関心も高かった。学生は考案した献立が利用者の夕食となることに喜びと緊張感を感じ、その実践活動が献立作成や高齢者の食事に対する学習意欲を引き出す結果となった。料理の試作を繰り返すことが献立のレパートリーを増やした。

学生が施設に訪問し夕食を一緒に摂り、利用者とのコミュニケーションを図ることは、学生は献立作成に大切な「利用者を理解する」を現実的に学ぶことができ、主菜、副菜などの「料理の組み合わせ」を苦手とする学生が多いなか、利用者からの助言によって料理のバリエーションを豊富にさせ、より幅の広い献立作成につなげることができた。

学生は高齢者施設の環境を知り、社会貢献の重要性を身近に感じる機会となった。学生が地域に出て自ら活動することは、利用者を対象とした実践力と心を育む貴重な機会であったと考える。今後も施設の利用者の食事サービスの向上に寄与するために、実践的な活動を続けていきたい。



写真4 グループリビングでの配膳の様子



写真5 学生を交えた夕食

#### <引用文献>

- (1) 内閣府、2018年、高齢社会白書、日経印刷



## 新座市の健康長寿に向けた取り組みとその評価に関する地域連携研究

The evaluation study of the community activities aiming health  
and longevity in Niiza City

加藤 則子<sup>1)</sup> 志村 二三夫<sup>2)</sup> 長澤 伸江<sup>3)</sup> 井上 久美子<sup>4)</sup> 布施 晴美<sup>5)</sup>  
 Noriko KATO Fumio SHIMURA Nobue NAGASAWA Kumiko INOUE Harumi FUSE  
 富井 友子<sup>6)</sup> 名塚 清<sup>7)</sup> 横山 徹爾<sup>8)</sup> 藤田 誠一<sup>9)</sup>  
 Tomoko TOMII Kiyoshi NAZUKA Tetsuji YOKOYAMA Seiichi FUJITA

キーワード：健康長寿、健康づくり教室、効果判定

**要旨：** 新座市において高齢化が進む中で、生活習慣病やそれに伴っておこる寝たきりや認知症等の要介護状態の人の増加が社会問題となっている。健康日本 21(第 2 次) を背景に、新座市では第 2 次いきいき新座 21 プランが策定され、食育推進をはじめとした各種行動計画に落とし込まれ、様々な取り組みが精力的に展開されている。新座市における健康づくり活動の科学的評価の手始めとして、参加者に基礎的なアンケートを行ったところ、女性がほとんどで、これまでの参加回数が多いことが分かった。

## 1 背景と目的

地域において高齢化が進む中で、生活習慣病やそれに伴っておこる寝たきりや認知症等の増加が問題となっている。

新座市においては、多様な地域活動との連携によって健康長寿を目指したまちづくりを推進するため、新座市版健康日本 21 が策定され、各種取り組みが精力的に展開されている。介護予防・生活習慣病予防・健康増進のための「元気アップ広場」は 65 歳以上で健康増進に関心のある市民を対象とし、内容はミニレクチャーと訓練を受けた市民ボランティアインストラクターによるエクササイズである。市内 16 か所の集会場等の会場で、月 1 回か 2 回実施されている。保健師等による健康増進ミニレクチャー（ワンポイントアドバイス）も同時に行う。

同事業は開始より 4 年目を迎え、年間延べ参加者数も 8,000 を超える広がりとなっていることから、文部科学省「地（知）の拠点事業」の一環として、事業を評価するための予備調査を行った。

## 2 研究方法

### 2.1 研究に至る経過

2017 年 6 月新座市健康福祉関連 4 課の課長および副課長に集まっていたいただき、ニーズを吸い上げた。介護保険課から、介護予防・生活習慣病予防・健康増進のための地域の健康づくりを目指した健康のまちにいきいき推進事業「にいざ元気アップ広場」の事業評価の要望があった。同事業は開始より 4 年目を迎え、年間延べ参加者数も 8,000 を超える広がりとなっている。対象は 65 歳以上で健康増進に関心のある市民。調査計画に先立ち、新座市介護保険課より事業への参加状況のリストの情報提供を受けた。質問紙の作成に当たっては、医中誌 1987 年以降で「健康づくり事業×評価」で検索し、290 件ヒットしたうち要旨から判断して 21 件の本文に当たった。その中で 3 件の文献の内容を参考に質問紙を作成した。新座市いきいき健康部に協力を依頼し、「にいざ元気アップ広場」参加者に質問紙を手渡していただくこととした。同じ人に二度以上手渡すことが起こる可能性を 50%、回収率 50%とした場合、500 件の回答を得る場合には、2,000 人に配布する必要があることが見込まれた。

- 1) 十文字学園女子大学 幼児教育学科 2) 同大学学長 3) 同大学院人間生活学研究科 4) 同大学食物栄養学科  
 5) 同大学人間発達心理学科 6) 同大学人間福祉学科 7) 同大学地域連携推進機構  
 8) 国立保健医療科学院生涯健康研究部 9) 健やか食育エコワーク

## 2.2 研究対象

新座市で2018年3月にのべ25か所の会場で実施された「元気アップ広場」参加者。

## 2.3 研究方法

新座市の協力を得て会場でこの調査の質問紙を手渡し、自宅で回答し、返信用封筒を用いて郵送によって返送してもらった。回答に要する時間は10分程度である。2018年3月に質問紙の手渡しを開始した。3月には各集会場を中心として計25か所で事業が実施された。

設問内容は、最近の健康状態、事業への参加状況、参加してからの変化、参加のきっかけや事業への希望等である。

参加者の身長と体重の平均は平成28年度国民健康栄養調査結果と比較した。

最近の心身の健康と各項目との関連をみるために、

現在の健康状態は良好だ／今の生活に満足している／睡眠が充分にとれている／  
 ストレスは解消できている／趣味や稽古などの生きがいがある

の5項目への答えに対する得点を

そのとおり1 ややそうだ2 ややちがう3 ちがう4

とし、その合計を12以上と11以下に分け、検討した。

有意性の検定には $\chi^2$ 二乗検定を用いた。

## 2.4 倫理的配慮

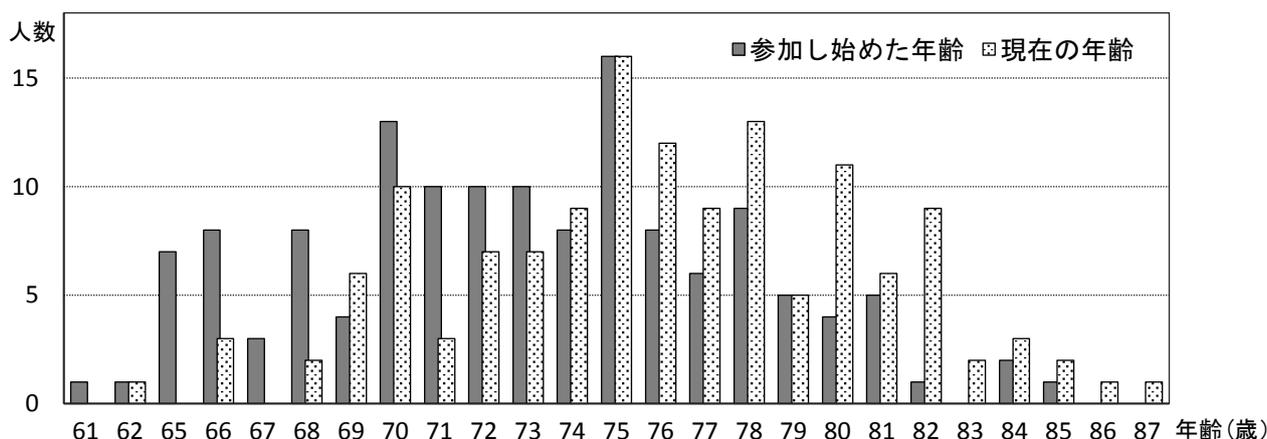
本研究は、十文字学園女子大学研究倫理委員会の承認を得て行った。

## 3 研究結果

2018年3月に実施された事業への参加者149名から回答が得られた。うち女性が128名(85.9%)、年齢は75.9 $\pm$ 5.3(平均 $\pm$ 標準偏差)歳であった。

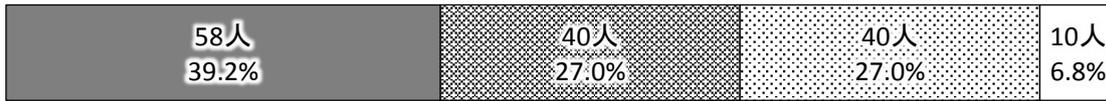
回答数	男性	女性	計
	21名 (14.1%)	128名 (85.9%)	149名

図1 参加者の年齢分布



参加を始めた年齢と現在の年齢の分布のピークには数年の差があった。

図2 同居家族

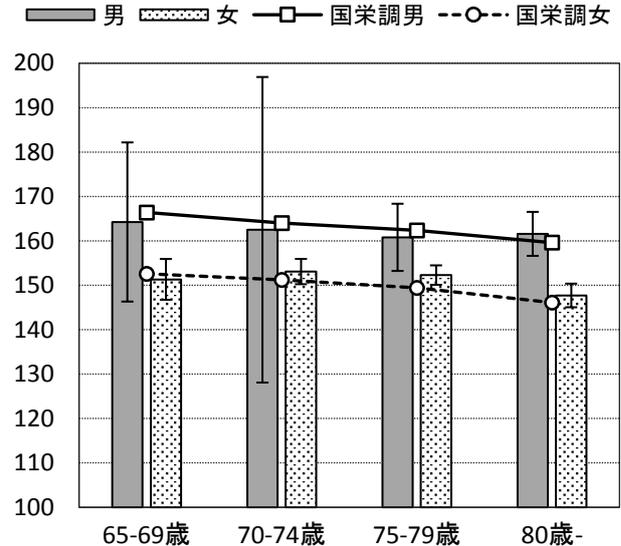
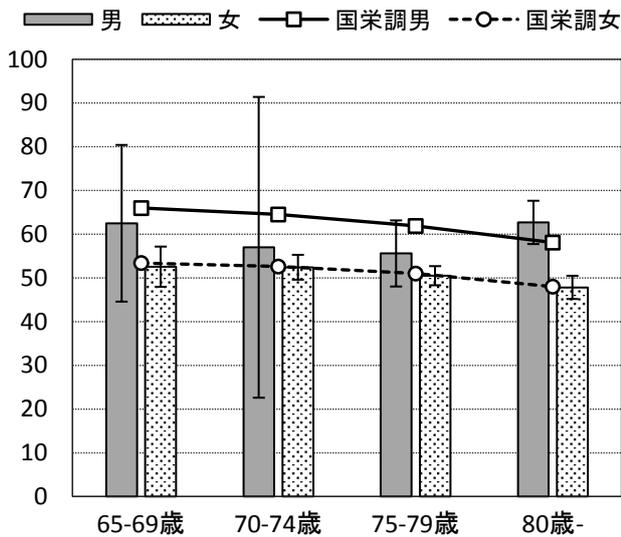


■夫婦二人    ▣一人暮らし    ▤子どもと同居    □その他

同居家族は、夫婦二人との場合が多く、続いて一人暮らしと子供と同居が同数であった。

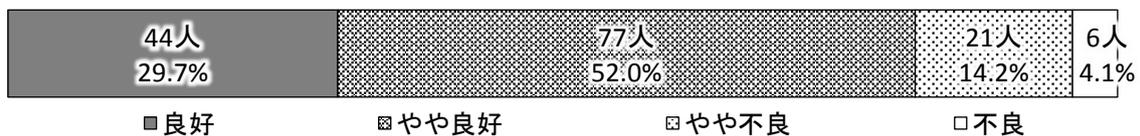
図3 性年齢階級別の体重平均 (kg)

性年齢階級別の身長平均 (cm)



回答時の自己申告の身長・体重の平均は、平成28年国民健康栄養調査結果と有意な差はなかった。

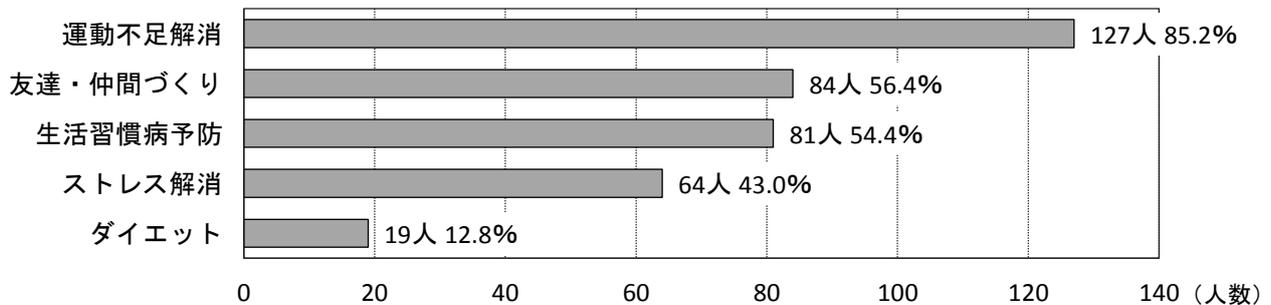
図4 参加者の健康状態



■良好    ▣やや良好    ▤やや不良    □不良

現在の健康状態を良好としたものが44名(29.7%)、やや良好としたものが77名(52.0%)で合わせると8割を超えた。

図5 利用目的 (複数回答)



参加の目的として、85.2%のものが運動不足解消を挙げた。友達・仲間づくりや生活習慣病予防等がそれに続いた。

図6 これまで参加した回数



これまで参加した回数は、106名(72.6%)が10回以上だった。

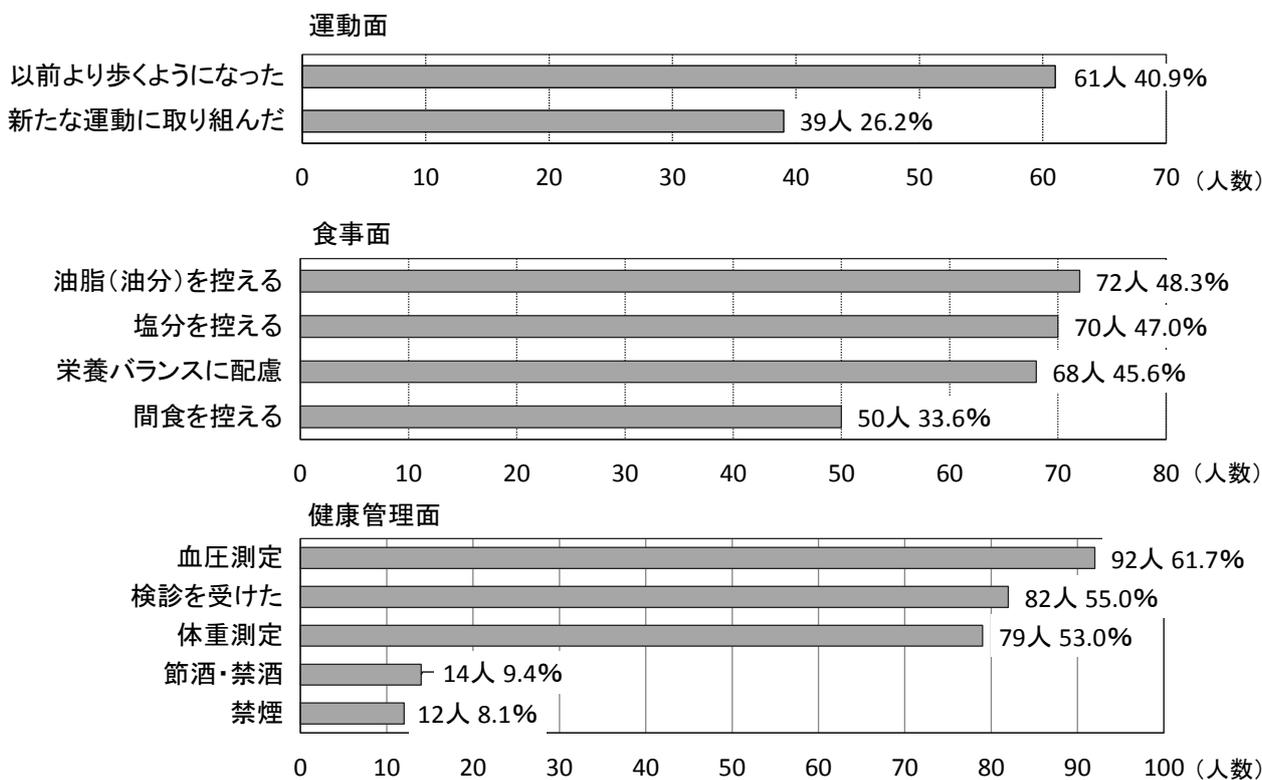
表1 最近の健康状態と有意な関連が見られた項目

		得点の合計				
		11以下		12以上		
		例数	割合	例数	割合	
外出の頻度	毎日一回以上	87	68.0%	7	41.2%	**
	2~3日に一回	40	31.3%	8	47.1%	
	一週間に一回	1	0.8%	2	11.8%	
	ほとんどしない	0	0.0%	0	0.0%	
	合計	128	100.0%	17	100.0%	
散歩や軽い運動	毎日のように	57	44.9%	4	22.2%	**
	一週間に4~6回	42	33.1%	4	22.2%	
	一週間に2~3回	28	22.0%	9	50.0%	
	ほとんどしない	0	0.0%	1	5.6%	
	合計	127	100.0%	18	100.0%	
参加前の関節痛	あり	54	46.2%	13	81.3%	**
	なし	63	53.8%	3	18.8%	
	合計	117	100.0%	16	100.0%	

\*\* p<0.01

最近の健康状態と調査項目との関連を見たところ、合計得点12点以上のより健康でないグループで有意に外出の頻度が少なく、散歩や軽い運動が少なく、参加前の関節痛が多かった。

図7 参加による変化／運動・食事・健康管理（複数回答）



生活習慣での工夫の有無の設問では、参加によって新たに生活習慣で取り組むようになったものが84人で71.8%、うち運動面では以前より歩くようになったとしたものが、食事面では油脂（油分）を控えるとしたものが、健康管理面では血圧を測定するとしたものが最も多かった。

図8 参加による変化／病気や症状の改善（複数回答）

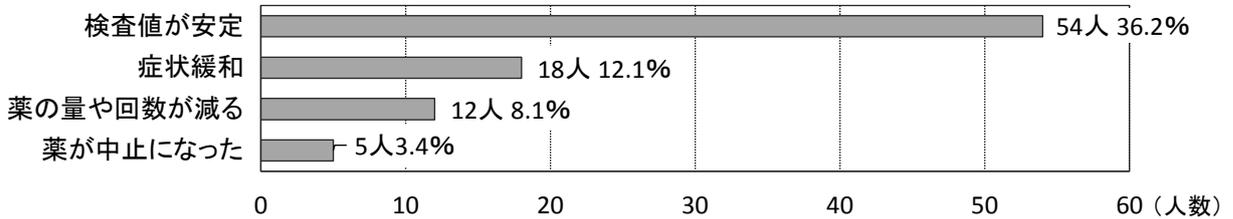
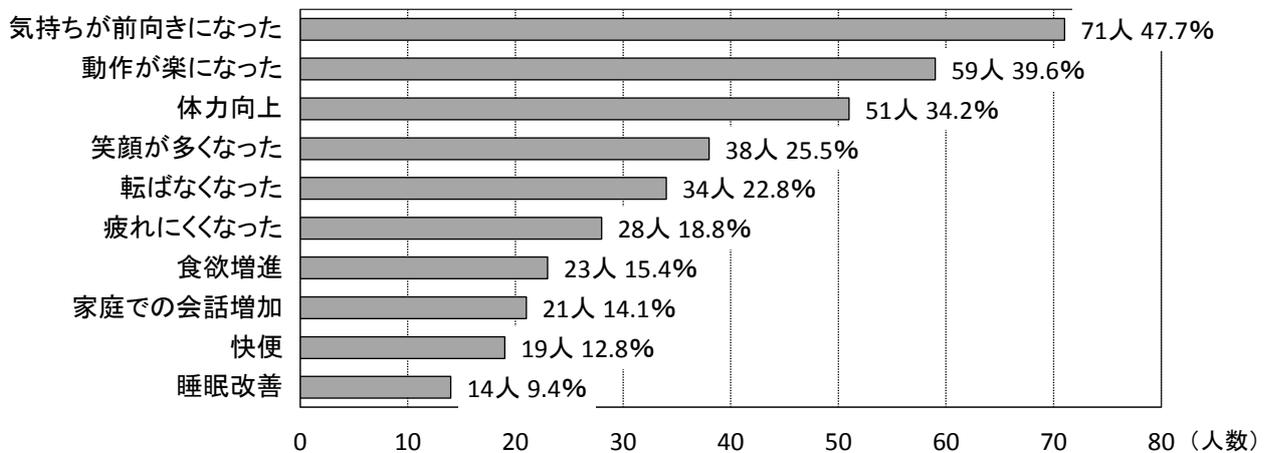
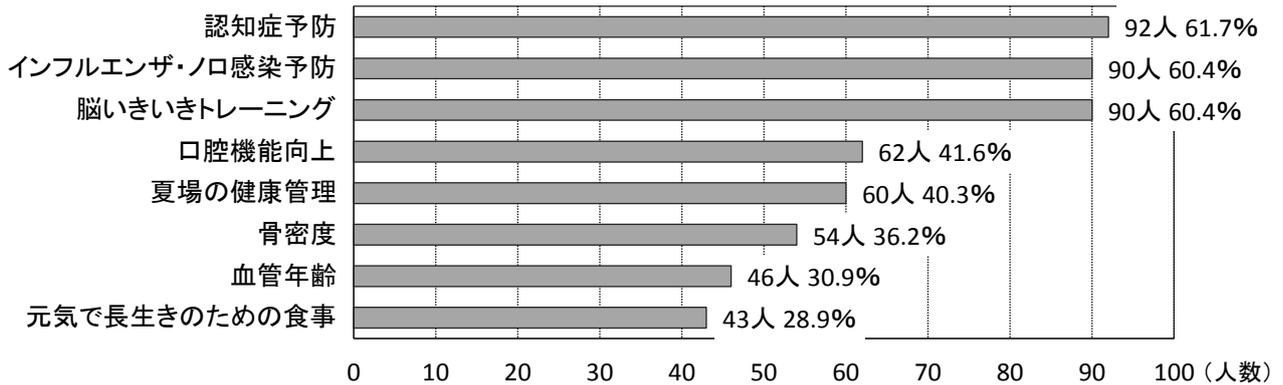


図9 参加による変化／日常生活（複数回答）



参加後に検査値の改善があったものが36.2%で最も多く（図8）、参加することでの日常生活の変化として、気持ちが前向きになったものが47.7%で最も多かった（図9）。

図10 聴講したワンポイントアドバイス（複数回答）



参加したワンポイントアドバイスのテーマとしては、認知症予防、感染予防、脳トレーニングが多く、6割以上が参加していた。

自由記載による事業への要望では、回数をより多くしてほしいというのが、極めて多かった。

#### 4 結論

参加者のほとんどが女性で、すでに繰り返し事業に参加しているという特性が浮かび上がった。また、参加によって知識や意識がある程度変容していることも分かった。参加者はそれ相応の健康度であることが示唆された。より効果的な事業展開に生かせるよう、分析を更に進めたい。

ご協力くださいました新座市介護保険課の職員の皆様、調査に協力してくださった皆様に感謝いたします。

<参考文献>

- ・猫田 泰敏、1998、健康増進事業の評価指標、保健婦雑誌 15(2):102-106
- ・芝田 ゆかり、2010、総合型地域スポーツクラブを活用した運動啓発事業の評価、社会福祉学研究 5号 :57-65
- ・園田 真弓, 吉元 洋一, 島田 裕之、2014、地域在住高齢者を対象とした運動介入の効果検証 鹿児島市における二次予防事業の統計分析、理学療法科学 29(5): 739-743
- ・願法 廣典, 佐藤 学, 小国 晶, 大山 雅子, 清水川 亜季、2010、横手市が取り組む「健康の駅事業」について 健康の駅よこてトレーニングセンター利用者健康調査の報告、秋田理学療法 18(1): 43-49

## 乳幼児を子育て中の保育者が行うピアサポートとしての子育て支援事業 「+（プラス）ママの子育てサロン」開催と有効性の検討

Effectiveness of “Plus Mama no Kosodate Salon”, the Child-rearing Support Program Promoted by Preschool Teachers during Parental Leave as the Peer Support

上垣内 伸子<sup>1)</sup> 金勝 裕子<sup>1)</sup> 向井 美穂<sup>1)</sup> 横井 紘子<sup>1)</sup> 鈴木 晴子<sup>1)</sup>  
Nobuko KAMIGAICHI Hiroko KANEKATSU Miho MUKAI Hiroko YOKOI Haruko SUZUKI  
渡邊 孝枝<sup>1)</sup> 近藤 有紀子<sup>1)</sup> 山田 陽子<sup>1)</sup> 川喜田 昌代<sup>1)</sup> 権 明愛<sup>1)</sup>  
Takae WATANABE Yukiko KONDO Yoko YAMADA Masayo KAWAKITA Ming Ai QUAN  
伊集院 理子<sup>1)</sup> 関根 佐也佳<sup>1)</sup> 加藤 陽子<sup>2)</sup> 松野 さおり<sup>3)</sup> 中谷 えりか<sup>4)</sup> 辻 あゆみ<sup>4)</sup>  
Michiko IJUIN Sayaka SEKINE Akiko KATO Saori MATSUNO Erika NAKATANI Ayumi TSUJI

**キーワード：**子育て支援、ピアサポート、子育て中の保育者、環境構成、OJT（オンザジョブ・トレーニング）

**要旨：**「+（プラス）ママの子育てサロン」の特性は、保育者としての専門性と経験を有する、自身も乳幼児の子育て中のスタッフが、自分の子どもと一緒に参加親子の遊びと子育てをサポートするという、専門職と当事者という2つの要素をもつ支援者によるピアサポートにある。質の高い遊びと出会いの場作りと、子育ての悩みへの高い共感性をもつ支援が可能である。その保育経験をもつ子育て当事者の子育て支援特性と有効性を、観察、参加者へのアンケートや聞き取り、支援者自身の省察とカンファレンスによって検討した。その結果、子どもが自分から遊びたくなるような環境構成の工夫と、+（プラス）ママやその子ども達が醸し出す温かみや遊び心が、子どもの遊ぶ力と親が子どもと共に楽しむ力を育てていくという「環境を通しての子育て支援」が+（プラス）ママの子育てサロンの支援特性であると考えた。学生のオンザジョブ・トレーニング（OJT）の場としての有用性と、大学のインフラや人的環境のもつ潜在的子育て支援力の高さもうかがわれた。

### 1 はじめに

乳幼児を持つ親の育児不安傾向や育児力そのものの弱体化が指摘されて久しい。乳幼児の発達や世話の知識・技能の乏しさにより、乳幼児と遊ぶことを楽しんだり子育てに喜びを感じるという経験が、家庭で親子が向き合うだけの生活の中では得られにくいという現実がある。そのような孤立しがちな親子にとって、高い保育実践力（子どもと遊び子育てを楽しむ力）を持った子育て仲間との交流は、子育てを楽しみ、育児力の獲得につながる意義ある体験となる。

本学幼児教育学科を卒業する学生の約90～95%は、卒業後の進路として幼稚園や保育所に就職しており、他の養成校に比べても専門職就職率が高いという特徴をもつ。また、本学科卒業生の就職後の動向として、結婚・出産した後、子どもの小学校入学などを機に幼稚園、保育所等の保育現場に復職したり、地域の子育て支援事業に携わっていく傾向が見られる。再び保育者として働く際に、子育てのために仕事をやめている期間もしくは育児休業中に、子育て支援にかかわることは、保育者としての専門性を高めることにつながる。

そこで、幼児教育学科卒業生のうち、現在家庭で子育て中の保育経験者が、幼稚園教諭や保育士としてこれまで培ってきた保育実践力（乳幼児と遊んだり適切な世話をしたり、母親の話し相手になったり助言するなど）を活かして行う、新座市とその近隣に住む乳幼児とその親の子育て・子育て支援事業を構想した。大学が卒業生のキャリアを活用しさらにそのエンパワメントを支えつつ、地域の子育てに貢献する子育て支援事業は、他に例を見ない新しい試みであり、幼児教育学科教職員と卒業生が共同で企画、開催し、その有効性の検討を試みた。

1) 十文字学園女子大学幼児教育学科 2) 同大学人間発達心理学学科 3) 同大学教職支援課 4) 同大学附属幼稚園

## 2 目的

保育者の専門性を活かした質の高い子育て支援の在り方を検討する。その際、これまでにない新たな形態の子育て支援事業として、保育経験をもつ子育て中の卒業生によるピアサポートを基盤とした子育てサロンを開設し、その有効性を検討する。また、大学の特質と資源を活用した地域連携の可能性および、学生のOJTの場の可能性を探る。

## 3 方法

本研究は、乳幼児を子育て中の保育経験者が、保育者としての専門性と、同じ子育て中であるという仲間性を生かして行う子育て支援事業のあり方について、幼児教育学科教員と保育者が共同で検討し、環境を設定して試行的に開催し、子育て支援事業のプログラムを開発する第1部と、子育て支援事業の定期開催によって、子育て中の保育経験者による子育て支援の特性とその有効性を検討する第2部によって構成される。

### 3.1 乳幼児を子育て中の保育経験者が行う子育て支援事業のプログラム開発 (H26~27)

子育て支援事業のプログラム開発のために、以下の4点を行った。

- ① 現在0~2歳児を子育て中の保育経験をもつ本学幼児教育学科卒業生7名を対象として、自分自身の妊娠期から現在の子育てまでを概観して子育て支援について考えていること、子育て支援施設の利用経験、保育者時代の保護者支援の実践についてのインタビューを行う。
- ② 近隣地域の地域子育て支援センターを実際に利用して、支援者の特性や環境の特性を知る。
- ③ ①、②に基づいて子育て支援事業の計画立案と環境設定を行う。
- ④ 近隣地域居住の卒業生や知人に参加を呼びかけて、試行的に開催し、この事業の支援特性と課題を整理する。

### 3.2 定期開催による子育て中の保育経験者による子育て支援の特性と有効性の検討 (H28~30)

子育て中の保育経験者による子育て支援の特性と有効性の検討を行うために、①参加親子および支援スタッフの遊びと関わりの観察、②毎回の終了後のカンファレンス、③2回以上本事業を利用している母親へのアンケートを実施する。

## 4. 試行的開催期間(第1部)の結果および考察

### 4.1 結果

インタビュー対象となった卒業生は、7名全員が卒後8年目となる4年制大学2期生であり、5年以上の保育経験を有していた。うち1名が育児休業中で、6名は出産を機に退職していた。支援センターをこれまで利用してきた経験から、スタッフが遊びをリードしていくようなプログラム型の活動ではなく、親子が自由に振る舞える時間を基本におくこと、養育者(本事業参加者はすべて母親であったので、以下母親と記す)が一息つけるような空間やスタッフの関わりを工夫することが望ましいという意見が出された。保育者としては、子ども同士が遊びを通して出会い、一緒に遊ぶことの楽しさを経験できるように援助していくこと、それを母親に伝えたり、母親自身にも楽しんで遊んでもらいたいという意見が出された。また、自分の子どもを連れてきて、子どもと遊びながら参加してきた子どもと関わることに對しては、これまで子育て中の仲間同士で遊んできた経験と保育者としての経験を生かしていきたいという発言があった。

このインタビューと、学科教員との話し合いによって、本事業のフレームが固まっていった。支援事業の名称を「+ (プラス) ママの子育てサロン」とし、支援スタッフを+ (プラス) ママと呼ぶことにした。会場を幼児教育学科のプレイルームとし、必要な遊具や育児用品を購入し、室内環境を整えた。開催時間は10:30~15:00とし、12:00~13:00をランチタイムとした。

平成26年度に1回、平成27年度に3回の子育てサロンを試行的に開催し、支援中の観察とカンファレンスによって課題を整理した。

## 4.2 考察

平成27年度の3回の子育てサロンへの周辺地域の親子の参加はのべ21組（全回参加2組）であった。保育経験者である卒業生の支援者としての対応には、言葉かけや動き、環境構成などにおいて保育者としての専門性が発揮されており、子育て中の保育経験者による支援の質の高さが改めて認識された。また、子育て支援スタッフは一般的には子育てが一段落した子育て経験者が多いが、「+（プラス）ママの子育てサロン」はピアサポート（同じような立場の人によるサポート）という体制をとっており、スタッフである+（プラス）ママ自身が育児真っ只中であるがゆえに参加者と同じ目線で接することができる。そのため、悩みを共有したり一緒に考えたりでき、共感性が高い支援が可能であることが示唆された。

参加者も、新座、和光、朝霞市在住者の参加など、幼児教育学科卒業生以外への広がりがみられ、地域に対する支援事業としての役割も見え始めた。参加者の中には、子どもと遊ぶことが苦手だったり、行動を抑制しがちな母親もいたが、+（プラス）ママの援助で子どもが遊びの輪の中に入って楽しみ始めると、母親も誘われて一緒に遊び、親子の楽しい交流の体験がなされた。帰り際に、母親からは、「これまで、どこに出かけても動きが激しく、また、友だちの遊びに関心が薄いような気がして気になっていたが、今日は本当に友達と楽しそうに遊んでいたの、驚いた。私自身も楽しかった。また来たい」という語りがあった。

今後の課題として、年間を通しての定期開催、学生の参加検討、乳児の居場所や遊びの充実に向けての環境設定、参加呼びかけの工夫、卒業生スタッフの掘り起こし、同窓会HPの活用などがあがった。

## 5. 定期開催期間（第2部）の結果と考察

### 5.1 平成28年度（3年目）の取り組み

平成28年度は、4月～3月に14回の子育てサロンを開催することができた。参加者の延べ数は、保護者150名、子ども166名、スタッフ73名、スタッフの子ども95名、学生42名、子どもの総数261名であった。総参加者数は500名となった。

前半期（4～9月）には、+（プラス）ママの手造りチラシを市内関連施設と子育て支援課に配布したが効果が薄く、2～3組の参加に留まった。新座市子育て支援課から、広報の助言を受けてチラシの内容を検討した。

後半期（10～3月）には、毎月1～2回のペースで、9回開催した。広報効果が第6回（10月28日）から現れ、参加者数も増加して、安定して15～20組程度の参加があり、+（プラス）ママの子ども達も含めると、20人以上の人数となり、初めて出会う子ども同士での遊びや関わりが進展した。

多様な遊び体験ができることに加えて、大学の持つインフラ（グラウンドや雑木林、カフェテリアや生協、図書館、駐車スペースなど）利用という特性も評価され、リピーターが増えた。

また、2歳児の母親中心に、ここでは友達とよく遊べるという声も聞かれた。+（プラス）ママの子どもたちがのびのびと遊んでいるところに自然に入って遊べるのが大きいと考えた。保育経験者である卒業生の支援者としての対応には、言葉かけや動き、環境構成などにおいて保育者としての専門性が発揮されており、子育て中の保育経験者による支援の質の高さが改めて認識された。

課題としては、参加する子どもの年齢層は開催日毎に変動するので、参加児の年齢や動きに応じた適切な環境作りが必要であること、そのため、開催中に子ども達の遊びの様子を見ながら環境を再構成していくことが欠かせないことが認識された。

授業期間の開催によって、学生の参加も可能となり、1～4年生がのべ42名参加し、昼食前の時間に、絵本の読み聞かせやペープサート、手遊びの機会をもち、+（プラス）ママに助言を受けながら親子と関わったり、遊び環境を整えることを経験した。繰り返し参加する学生の保育や子育て支援の実践力が、+（プラス）ママの指導を受けて伸びていくことが確認できた。特に4年

生は、子育て支援の場での援助のポイントを+（プラス）ママの動きからその場で学び取って行動することができていた。経験豊かな+（プラス）ママと共に活動し、見てその場でまねて実際にやってみることができ、カンファレンスにも参加するここでの体験は、OJT ととらえることができると考えた。

表 1. チラシに掲載したプラスママの子育てサロンの概要

<p><b>+（プラス）ママって？</b> 十文字学園女子大学を卒業した子育て中のスタッフのことです。全員が保育経験者+子育て真っ最中！同じ子育て中のママ+保育経験者として、一緒に遊んだり、お話ししたりしています。スタッフの子どもたちも一緒に遊びます。</p> <p><b>時間</b> 10：30～15：00（12：00～13：00 ランチタイム）</p> <p>*事前申込み不要。入退室自由。時間内の好きな時間にご利用ください。</p> <p>*昼食を召し上がる方は、お弁当持参の他に、学内の売店もご利用いただけます。</p> <p><b>対象</b> 0歳児から未就園児のお子様と保護者の方</p> <p><b>会場</b> 十文字学園女子大学内 1号館 122教室（保育実習室）</p> <p>*0歳から楽しめる玩具を用意しています。おむつ替えや授乳、お昼寝もできます。</p> <p>*お天気がよければ、キャンパスに出て遊んだり、芝生でお昼を食べたりします。</p>	
--	---

## 5.2 平成29年度（4年目）の取り組み

平成29年度には、6～3月の期間に12回開催した。新たなスタッフが加わり、8名の+（プラス）ママで運営した。参加者の延べ数は、保護者256名、子ども276名（0～4歳児）、スタッフ69名、スタッフの子ども74名、学生75名であった。12回の参加総数は、昨年度の500名から約1.5倍の783名に増えた。毎回の初参加も合計114組であった。

このように、継続開催も4年目となり、新座市内での知名度の高まりと参加者の定着、同窓会の広報効果による卒業生親子の参加など、卒業生支援の役割も果たし、地域の子育てへの貢献も見え始めてきたと考える。

今年度の参加児の中心年齢層は1歳児、次いで0歳児であった。思い切り体を動かす環境と、0歳児が安心して過ごせる環境作りが課題としてあがった。そのため、のんびりと安心して過ごすことができる赤ちゃんスペースを確保したり、参加児の数が多い回には、グラウンドや雑木林での遊びを充実することに努めた。暑い日には水遊び、秋は落ち葉、冬にはサブアリーナで親子運動遊びなど、季節に応じて、大学ならではの遊びに誘った。こうした活動から、思い切り体を動かして遊べる広いキャンパスの自然が何よりも親子にとっての魅力となっていることがわかった。サブアリーナ、カフェテリアも含めて、本学のキャンパスは、子育てインフラとしても高い価値と有効性を持つことがうかがわれた。

また、インフラに限らず、学内で出会う学生たちの温かく好意的な態度も、教育・福祉等の対人専門職養成中心の本学の特性であり、カフェテリアなど学内で、学生たちから親切にしてもらえることも、うれしいことだという声が多くあがっている。人的環境としても、子育てにやさしい女子大学であると認識された。

今年度は、継続参加者の中の気になる親子（特に母親）に対する支援についても検討を試みた。子どもと遊ぶことが苦手だったり、行動を抑制しがちな母親もいたが、+（プラス）ママの援助で子どもが遊びの輪の中に入って楽しみ始めると、母親も誘われて一緒に遊び、親子の楽しい交流の体験がなされた。保育経験者である卒業生の子どもの保育および親への保育指導の専門性が、今年度は子育てスキルの乏しい母親に対する子育てのモデル機能としても発揮されたといえる。

学生スタッフも継続参加者が増え、OJTとして機能し始めていることがうかがわれた。参加した3年生からは、「子どもと遊びながらどのようにその子どもの親と関わっていけばいいのか、初めは全くわからなかったが、何回か参加するうちに徐々にわかるようになってきた。ここには先輩である+（プラス）ママさんたちがいるので、そばでその姿を見て学ぶことが役立っているように思う」「保育では子どもが自分から自然と遊びに加わるような環境構成が大事だということは、日頃からの授業で学んでいることだが、ここでは、先輩の動きを見て、どういう動線を取ったらいいのかなど、実際に経験できることがありがたい。おもちゃの置き方ひとつで、子どもの反応が全く違ってくる。そうした学んだことを自分でも実践することができるのも大きいし、お母さんたちとお話しできることもいい経験になっていると思う」という声が聞かれた。

### 5.3 平成30年度（5年目）の取り組み

平成30年度には、6～3月の期間に15回開催予定である。育休明けで職場復帰をする者に替わって新たな育休中のスタッフが加わるなどして、9名の+（プラス）ママで運営した。1月末までの12回の参加者の延べ数は、保護者198名、子ども214名、スタッフ81名、スタッフの子ども76名、学生44名、教員その他が21名、参加総数は634名である。毎回の初参加は合計87組である。新座市内各所へのチラシの配布と「広報にいざ」への掲載、大学のHPでの広報、附属幼稚園の協力などによって、継続参加者の増加と同時に広がりもみられてきた。新座市を中心に、地域連携協定市である朝霞市、志木市、和光市、清瀬市など周辺市町村からの参加もみられる。また、昨年を引き続き、大学や同窓会のHPを見た人間発達心理学科、人間福祉学科など幼児教育学科以外の卒業生、附属幼稚園出身の母親の参加もあった。「自分の卒業した大学なので、どんな場所なのかもわかる気安さもあり、室内でも外の広いところでも遊ばせられるのは助かるし、幼児教育学科の先生や学生、卒業生のスタッフの方がいるから安心感もある」という感想が聞かれた。

引き続き、定期的な開催、子どもの自発的な遊びの充実を軸におく子育て支援の追究、気になる親子への支援の充実、自然豊かなキャンパス特性を活用した活動の工夫、新座市こども支援課との連携の緊密化、学生へのOJTの役割の充実化に努めると共に、COC事業最終年であることより、参加者へのアンケート調査（十文字学園女子大学研究倫理審査(2018-021)承認済）を行い、参加者の側から見た「+（プラス）ママの子育てサロン」の支援特性および有効性について、評価することを試みた。

平成30年12月から平成31年3月までの開催時に、2回以上の継続参加者を対象として、属性および参加の動機と、継続的利用の理由などについてのアンケート調査を行っているところである。質問項目は以下の8問である。

表2. 継続参加者へのアンケート調査項目

1	居住地	〇〇市△△（町名まで）
2	参加児の年齢	〇歳△か月
3	参加回数	（ ）回
4	どこで知ったか	自由記述
5	ここの特徴、良さ （複数回答可）	<input type="checkbox"/> 赤ちゃん、幼児が安心して過ごせる <input type="checkbox"/> スタッフの子どもをきっかけに遊びが広がる <input type="checkbox"/> 子ども同士の遊びをきっかけに、親の交流も始まる <input type="checkbox"/> 自然の中でのびのび遊べる <input type="checkbox"/> 一日中過ごせる（ランチもできる） <input type="checkbox"/> その他（ ）

6	子どもが楽しんだこと (複数回答可) *きょうだいで参加の 場合は上の子どものこ とで回答	<input type="checkbox"/> ままごと <input type="checkbox"/> 人形 <input type="checkbox"/> 積み木・ブロック <input type="checkbox"/> 車・電車 <input type="checkbox"/> 絵本 <input type="checkbox"/> パズル <input type="checkbox"/> お絵描き <input type="checkbox"/> 段ボールの乗り物 <input type="checkbox"/> 滑り台 <input type="checkbox"/> ボールプール <input type="checkbox"/> 製作活動 <input type="checkbox"/> 手遊び <input type="checkbox"/> 外遊び <input type="checkbox"/> 水遊び <input type="checkbox"/> お昼ご飯 <input type="checkbox"/> 他の子との関わり <input type="checkbox"/> 保護者との関わり <input type="checkbox"/> スタッフとの関わり <input type="checkbox"/> その他 ( )
7	リピートした理由	自由記述
8	その他希望や意見など	自由記述

## 6 「+ (プラス) ママの子育てサロン」の支援特性と有効性

+ (プラス) ママの子育てサロンの開催から見てきた、質の高い子育て支援とはどのようなものなのか。これまでの子育てサロンの記録と毎回のカンファレンス、参加者の声から、+ (プラス) ママの子育てサロンの支援特性について考察する。

### 6.1 共感性を基盤としたピアサポート

越智 (2016) は、ソーシャルサポートの定義「人に、自分はケアされ、愛され、敬意を払われる存在であり、相互に責務のある紐帯の一員だと信じさせる情報 (Cobb 1976)」およびピアサポートの定義「同じ問題を抱えた人たちで自分たちにお互い助け合うこと (石原 2013)」「仲間による対人関係を利用した支援活動の総称 (西山, 山本 2002)」を紹介し、ピアサポートはソーシャルサポートに包含される概念であると論じている。ピアサポートによる子育て支援とは、乳幼児を子育て中であるという同じ立場と経験をもつことを前提とした子育て支援であり、相互支援の性格を有することに特徴があるといえる。+ (プラス) ママは、保育者としての知識と経験を持ち、子どもの遊びを引き出したり、子ども同士の関係をつなぐ関わりや環境構成を行うことができる。その一方で、自分も親子で参加しているために、時に苦勞しながら我が子に対応し、悩みながら子育てをしている姿も見せることになる。この保育に関する専門性と子育てに取り組む仲間性を併せもち、実際にその姿を示しながら同じ場で過ごすということが、+ (プラス) ママのピアサポートの支援特性であると考えられる。このことを、+ (プラス) ママは、教育情報発信サイト「リセママ」の取材 (2016. 11) に対して、次のように語っている。

Aさん「『+ (プラス) ママ』は自分の子どもと一緒に参加しているので、私たちが自分の子どもとどのように向き合っているかも見てもらえる場だと思うんです。子どもとの接し方に戸惑っているお母さんに『こんなコミュニケーションの方法があるんだな』と知っていただき、自分も同じようにやってみようと思っていただけると嬉しいです」  
Bさん「私自身は上の子どもがまだ3歳ということもあり、参加者の方がベテランの場合もあります。ですので、相談を持ち掛けられたら相談に乗りつつ、自分も、ベテランのお母さんの姿を見ながら学ばせていただいています」

### 6.2 保育者の専門性を活かしたピアサポート

保育の専門性を活かした支援特性として、以下の6点があげられると考えた。

#### 6.2.1 関わりを生み出す環境構成

1つめは、関わりを生み出す環境構成を状況に合わせて行っていくということである。スタッフである+ (プラス) ママたちは、自分が子どもと関わったり遊んであげるのではなく、子ども自身が遊ぶという力を引き出す支援を行うことを最も大切に考えている。そのためには、遊びたくなるような環境を作ることが重要となる。これは、保育の専門職であれば、誰もが知っている「環境を通して行う保育・教育」という保育の基本となる考えであるが、子育て支援においても、これが基本となると感じられた。

**事例 1**

壁につけておいていた台所の流しとコンロ台を、壁から離して向かい合わせにくっつけて、アイランド型キッチンに置き方を変えたことで、遊んでいる友だちの顔が見えるようになり、初めて出会う子ども同士と一緒に遊ぶことができた。

**事例 2**

ままごと遊びでごちそうを食べ始めた時に、そばでその様子をじっと見ていた子どもに気がついた+（プラス）ママが、積木をくっつけてテーブルを長くして座る場所を広げ、「どうぞ」と声をかけた。すると、その子どもがすっと座って、一緒にごちそうを食べ始めた。自然な形で友だちと遊び始めた子どもを見て驚いていたお母さんにも、「お母さんもどうぞ」と声をかけるとお母さんも遊びに加わり、一緒にごちそうを味わった。



環境が人の動きを誘発し、遊びが展開され、関係をつないでいくという事例である。保育の場だけでなく、支援の場においても、初めて出会う子どもや親同士をつないだり、一緒に遊んだりするように環境を作り替えていくことは、保育者の専門性を発揮した支援のあり方であると考えた。

**6.2.2 0・1歳児の心地よい場作り**

参加者に0歳、1歳が多いので、年齢の大きい子ども達が走り回ったりしながら遊ぶ中で、安心して過ごすことのできる場を確保している。そうすると、自分の子どもをゆったりと遊ばせながらも、その場から母親が大きい子ども達の遊ぶ様子を見ることができ、『ああ、あんなふうに大きくなっていくんだな』と、育ちの見通しをもって子育てすることができる。0歳児のいる+（プラス）ママもいるので、ゆったりと語り合える場ともなっている。

**6.2.3 子どもが母親をつないで始まる交流**

母親の話を聞くなど、親支援に力点を置いた支援を行っているところもあるが、+（プラス）ママの子育てサロンは、子ども自身が遊ぶことを大切にした支援内容であるため、まずは子どもが動き回って遊ぶ中で、他の母親にもおもちゃを渡すなど働きかけたり、子ども同士が遊びを通して出会ったり、ちょっとした出したり、まねしたりといった関わりが生じる。そうすると、「あらあらあら・・・」とか「ありがとうございます」などと子どもの動きに応じることで、母親同士の関わりが生じてくる。母親が先導して子どもを他の子どもと遊ばせようとするのではなく、自由に遊ぶ子どもが親同士の関係作りのイニシエーターの役割を果たしているといえる。



#### 6.2.4 遊びの場の雰囲気を作る＋（プラス）ママの子どもたち

上記の子どもが遊ぶことで親同士をつなぐといった状況が生みだされる要因は、＋（プラス）ママの子どもたちにある。＋（プラス）ママの子どもたちはよく遊ぶ。この場所や遊具になじんでよく知っていることと母親がそばにいる安心感で、思う存分好きなことをして遊ぼうとする。このように、よく遊んでいる子どものいるところでは、子どもは思わず誘われて遊び出す。楽しく遊ぶ子どもたちが醸し出す空気が、まわりの子どもたちの遊び心を膨らませていくのだろう。

**事例3：**よく目にする「遊具の奪い合い」ですが、遊具を取られるのが嫌だという一人の男の子がいました。その男の子から遊んでいた遊具をとられた年上の女の子は、取り返す代わりに、男の子に「どうぞ」と遊具をあげ続けました。そして、全ての遊具が自分のものになった男の子は、この後、自分の遊具を女の子にあげ始めました。普段は謝ったり戻すように促すばかりだったお母さんは、「お友達におもちゃをあげているところを初めて見た」と、驚きながらも嬉しそうでした。（十文字学園女子大学同窓会 HP「若桐ダイアリー」（2016.12.6）一部改変）

#### 6.2.5 十文字キャンパスのもつ魅力＝潜在的子育て支援力

＋（プラス）ママの子育てサロンのもつ環境特性として欠かせないのが緑豊かなキャンパスの自然環境である。

広々とした芝生のグラウンドは、安心して思い切り走り回ることができる貴重な空間である。夏には水遊びも楽しむことができる。また、秋にはどんぐりや落ち葉で遊べる雑木林も魅力的な存在である。サブアリーナは、ハイハイの乳児も楽しめる広い空間であり、表現系の教員がリードする親子でのふれあい遊びや運動遊びも好評である。

カフェテリアや学生食堂、生協などを利用することに関して、参加者からは、「学生時代に戻ったようでリフレッシュできる」「飲食店だと周りの目を気にしてしまうけれど、みなさん温かい目で見守ってくれる。かわいいねと声をかけてもらえたりもするから、本当にありがたい」といった感想が聞かれる。こうした学生や教職員の温かいまなざしや応答という人的環境も含め、本学は潜在的子育て支援力を有している大学であるといえるのではないだろうか。



#### 6.2.6 学生の子育て支援のOJTの場

子育て支援は保育者の重要な役割の一つであるが、現行の保育実習の中に「子育て支援」の実習内容が含まれていないため、子育て支援を体験的に学ぶ場の確保は、保育者養成の課題となっている。参加学生の動きを観察していると、1年生や2年生はまだ子育て支援の視点が薄く、子どもと一緒に遊ぶことが中心になっている。しかしながら、保育や子育て支援の学習を重ねた3・4年生になると、子ども自身の遊びを生み出す環境づくりの重要性に気付くことができ、親の気持ちや親子関係に配慮して関わろうとする＋（プラス）ママの姿から学んで、親への関わりも見られるようになる。＋（プラス）ママの動きの意図を読み取り、「遊んであげる」から「子ども自らが遊ぶ環境作り」へと子育て支援者の役割を巡る意識転換が生じる。

卒業研究テーマに子育て支援を取り上げ、ここをフィールドとして実践研究をする学生もあり、昼食前には絵本の読み聞かせなどを学生にやってもらうことで、幼稚園や保育所での実習に

向けてのスキルアップにも役立っているように思われた。他学科（人間発達心理学科）の学生の参加も始まってきた。

どの学びの段階においても、+（プラス）ママから状況に応じての指示や助言を受けたり、支援モデルとなる+（プラス）ママの動きを見て気づき、自らも試しながら子育て支援の要点を理解し体得していくことができるので、+（プラス）ママの子育てサロンはOJTとしての可能性をもつと考える。

子育て支援の重要性が指摘されるようになって以来、学内に子育て支援の場を設けて運営している保育者養成校が増えてきている。本学においても、附属幼稚園以外に、学内で日常的に親子に触れる学習環境を保障することは、学生の学びの機会を広げ、養成の質を高めるという意味において、有意義ではないかと考える。



### 6.3 環境を通しての子育て支援

+（プラス）ママの子育てサロンで行っている子育て支援の有効性として見えてきたことは、子どもが遊ぶことを中心におくことによって、親子の健全な子育てが促されるということであった。保育と同様に、子育て支援事業においても、「子どもが自発的に遊ぶ環境作り」を基本に、サービス提供型支援やプログラム型支援ではない、「子ども自身の遊ぶ力」と「親自身が子どもと友に楽しむ力」を育む支援が求められているのではないだろうか。

子どもが本気で楽しめる経験ができることの意味はとても大きい。この場で楽しんだというだけでなく、家庭での普段の生活にも変化をもたらすことが期待されるからである。また、質のよい遊び経験と、そこでの子どもの充実感を母親が感じることは、親子関係を一層良好なものにしていくという好循環を生み出すのではないだろうか。そのために必要な支援とは、遊びを生み出し、関係をつなぐような環境を構成していくことを基本におくことであろう。そこに+（プラス）ママの子どもたちの遊び心が加わり、子どもが自分から遊び出す。そうすると次に+（プラス）ママが親を遊びに巻き込むような関わりを行って、親も共に遊ぶことを楽しむ——こういった「環境を通しての子育て支援」という図式が見えてきた。

この「環境を通して行う子育て支援」が子育て中の保育経験者が自分の子どもと一緒に過ごしながら支援を行う「+（プラス）ママの子育てサロン」の支援特性であり、有効性ではないかと考えた。それは保育の専門性の高さに裏付けられた支援である。従来から子育て支援者に必要な専門性として指摘されているカウンセリングマインドをもった親への関わり、子育てのリスクに気づく感受性など、主に親支援としてあげられてきた

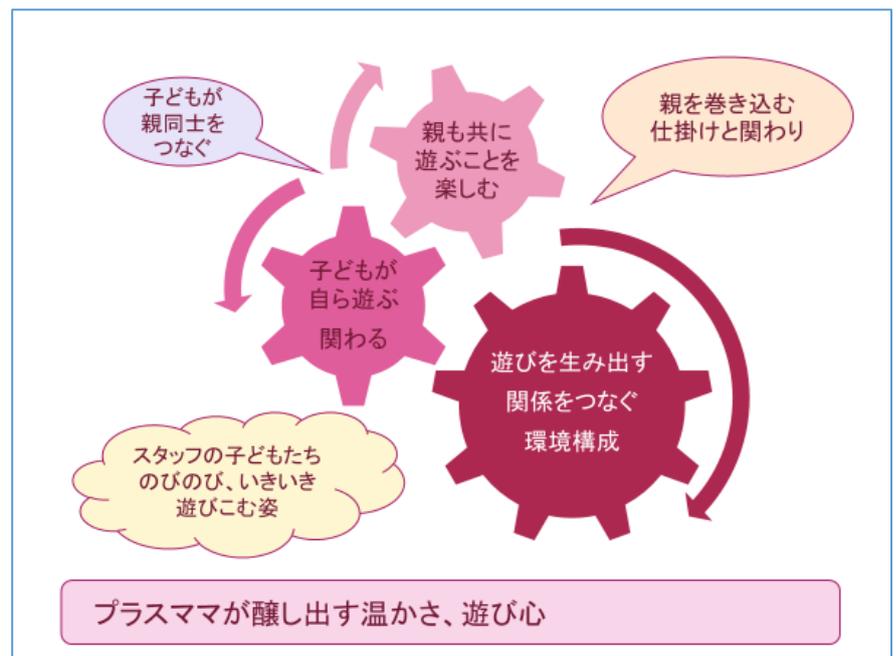


図1. 環境を通して行う子育て支援

専門性に加えて、子どもの遊ぶ力を引き出す「環境を通して行う子育て支援」を実現していくことが、子育てが楽しいと感じられる支援につながるのではないだろうか。

## 7 おわりに：COC 事業としての「+（プラス）ママの子育てサロン」が担う役割

子育て世代に信頼され選ばれる町づくりには、保育/子育て支援の量的充足だけでなく、質保障が不可欠である。そのためには、保育/教育施設だけでなく、妊娠期から就学までの乳幼児と親の生活の質、安心して豊かな子育て環境を保障しうる地域の子育て支援にかかわるインフラの充実が求められる。

新座市においては、保健センター（子育て世代包括支援）、児童センター（児童健全育成事業）、子育て支援センター（地域子育て支援拠点事業）がその役割を担っている。これらの施設と職員が連携して質の高い子育て支援を実現していくことが求められる。その中において、大学が教育・研究力と人的・環境的資源を活用して行う地域連携事業としての「+（プラス）ママの子育てサロン」には、子育て世代に対する子育て支援の質を実践から検証・考察し、追究していく役割を担うことが求められているのではないだろうか。質の高い子育て支援の実践と開発研究が大学の地域連携であり、地域貢献ではないだろうか。

### <+（プラス）ママの子育てサロンスタッフ>

平成 26～30 年度に子育て支援に関わった卒業生は 16 名である。

02 生	池田 愛加	辻 あゆみ	西尾 瑞枝		
03 生	上妻 祥子	荒井 友美	内村 沙耶香	高木 友子	戸塚 綾希
	中谷 えりか	古島 繭子	松尾 香織	山口 美弥	
04 生	島根 直美	西村 由里子			
05 生	榑原 友佳				
06 生	江利川 理恵				

※平成 26 年度は「新座市内の公立保育園および児童センターと協働した実習体験を基盤に置く保育者養成初期段階のカリキュラム検討」（研究代表者：鈴木晴子）の中で、+（プラス）ママの子育てサロンに関わる研究活動を行った。

### <参考文献>

- ・越智祐子（2016）ソーシャルサポートとしてのピアサポートに関する一考察．名古屋学院大学論集 社会科学篇, 第 52 巻第 4 号, p. 189-199.
- ・ReseMom. <https://resemom.jp/article/2017/12/14/41858.html>（2017. 12. 14 掲載記事． 2019. 1. 31 閲覧）：大事にしているのは「ピア・サポート」の視点…十文字学園女子大学の子育て支援「プラスママの子育てサロン」
- ・若桐ダイアリー（2016 年 12 月）.  
[http://www.jumonji-u.ac.jp/campuslife/wakagirikai/diary/diary\\_201612/index.html](http://www.jumonji-u.ac.jp/campuslife/wakagirikai/diary/diary_201612/index.html)  
（2016. 12. 9 掲載記事． 2019. 1. 31 閲覧）

## 地域交流力を育む教育課程の創造

### Creation of the Curriculum which Brings the Area Exchange Power Up

狩野 浩二<sup>1)</sup>

Kouji KARINO

キーワード：地域 交流 人材 育成 教育課程

**要旨：**地域交流力とは、地域間の接着剤、潤滑油となりうる力である。学生たちは、本学において、個々バラバラの地域や地域に関する伝統、文化を学んではいるが、その異なる地域間の交流に関する学修をする機会は少ない。本研究では、主として埼玉県における中山間地域での学びを通して、都市部に生活するものとして、自己の生活圏と中山間地域とを融合、接続する知見を学び取ることを目的としている。今年度（2018年度）から、「総合科目（中山間に学ぶ：本学共通教育科目）」として、その実現を図った。そこに至るまでの教育実践に光をあてる。

#### 1 基盤づくり

##### 1.1 模索期における取り組み

###### 1.1.1 大学で学生を育てる視点

大学における教育活動は、学生を育てるという視点が必要である。特に、COCプログラムのように「地（知）の拠点」としての大学がこの地域（埼玉県新座市）にあるということを意識するうえで学生を育てることが大事である。このことを抜きにして、そもそも大学が存在することはない。では、学生を育てる、あるいは、学生が育つためには、どのようなことが必要となるのであろうか。それには、大学における理論的な学修とともに、大学を離れ、実際の場面において実践的に学ぶことが必要となる。いわば、理論と実践の“融合”、“結合”が必要である。それはなぜか。「経験すること」が学修につながる可能性を大いに孕んでいるからである（横須賀薫「本当の学力を身につけさせるには」『児童教育実践研究』第4巻第1号、2011年3月、73-80ページ）。もちろん、経験しただけでは、それが学修にそのまま繋がるというものではない。経験を“結晶化”させる必要がある。“結晶化”とは、実際の経験が自己の体内において“血”や“肉”になる過程である。そのためには、認識を“表出”、“表現”させる一手間が必要である。一度刺激として受け止められた情報を、表出、表現することにより、思考活動としての成立がみられるようになる。日本教育実践史において、生活綴方や芸術教育の持つ意味が確認され、それが教育実践文化として確立したのは、こうした学修の本来のあり方（体験活動の結晶化、認識の表出・表現）が反映した実践だったからである。経験は、私たちの内部に形成（Forming）作用をもたらす。農作業の体験や地域の人たちと交流する経験は、学生個人の内面に様々な知恵（ちえ）や技（わざ）を形成する。いわば身体化された“知”が学生の内部に構成される。それを教育的に組織しようとしたのが“総合学習”といわれるカリキュラムである。主として初等・中等教育において、1940年代の後半から実験的に取り組まれた生活単元学習（コア・カリキュラム）は、この考え方により取り組まれた。経験によって身体の内部に形成される知恵や技の総体を、表現や表出により結晶化させていく。このプロセスが総合学習の肝である。大学におけるCOC事業の展開においても、こうした教育学上の知見を応用することが必要なのである。

1) 十文字学園女子大学 児童教育学科

### 1.1.2 沖縄と鹿児島

筆者は、2007（平成19）年度に本学に赴任した。かつては1995（平成7）年度から沖縄県において教育研究者としての生活が始まり、そこでの取り組みが今日の新カリキュラム創出に向けての第一歩となる。その後、1998（平成10）年から鹿児島県に異動した。ここでの教育研究の成果が今日ようやく実りつつある。沖縄では、北部山原地域<sup>やんばる</sup>において、人間形成史の調査にあたった（狩野浩二「私の子ども時代（9）沖縄農村の暮らし（眞榮田ツル）」日本幼稚園協会編『幼児の教育』第94巻、第11号、平成7（1995）年、42-47ページ）。沖縄では、伝統的な子育ての習俗が色濃く残り、共同体的な生活がまだまだ現存する。そうした地域の、人々の紐帯により、若者たちの地域行事が継続される。今日では、以前とは異なる形で各地域で沖縄の伝統行事が取り組まれている。しかしながら、そうした伝統行事は、筆者が生活した1990年代においては、まだまだ沖縄の各地域に残っていたのである。そうした共同体的な生活のなかで形成的な作用によって地域の文化が継承される。その典型が伝統行事である。つまり、こうした人間形成の知恵や技を色濃く残す地域には、学生を育てるための知見が豊かに残されているということである（狩野浩二「日本の家族と社会における子ども観の一系譜1879-1930」、財団法人青少年問題研究会『青少年問題』第43巻、第5号、平成8年5月、4-9ページ）。こうした形成の知恵や技を今日の大学教育において活かしていくことが可能であると考えたわけである。

### 1.1.3 粟国島<sup>あぐに</sup>

沖縄の本島から西へ60キロほどのところに粟国島はある。那覇空港から飛行機で30分、泊港から船で4時間ほどかかる場所である。この島では、ヤガンウユミとよばれる伝統行事が行なわれている。島の女性たちにより継承されるノロ（正規の霊能者）によってとり行なわれる行事である。

島は、周囲が5キロほどであり、全体的に平坦である。その島に生活する住民が現在（平成30年）では、702名、世帯数が423世帯である。とはいえ、島には小学校（児童数5名）と中学校（生徒数3名）がある。中学校を卒業するまでは、この島で暮らすことができる。高等学校に進学する際には、この島を離れ、多くの子どもが本島の高等学校へ進学する。

この状況は、離島において一般的である。鹿児島県の場合には、離島に高等学校がある場合があり、例えば、徳之島や沖永良部島、種子島などは、いずれも高等学校がある。奄美大島の場合は、高等学校に加えて、専門学校があり、高等学校卒業者の受け皿にもなっている。こうした実情により、中学校や高等学校進学の際に、若者たちの島外への流出が起こるわけである。

粟国島では、粟国村教育委員会の協力の下で、地域に伝わる行事における人間形成のシステムを大学教育に活かす試みを行なった（1995年～1998年）。

### 1.1.4 沖永良部島

1998年より鹿児島県に移り、そこではいくつかの地域と学生とを繋ぐ仕事にあたった。その大きな一つが沖永良部島である。この島は、一島二町であり、空港のある南部の和泊町が調査の対象地となった。教育社会学の神田嘉延教授とともに、この島をテーマにいくつかの論文を書いた。学生たちは、地域の農家を訪ね、インタビューをするという形式で調査を続けた（狩野浩二「和泊町国頭における情報型共同体づくりと子ども・青年の進路選択」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第11巻、2001年11月、47-53ページ、狩野浩二「農業における人づくりと学習」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第54巻、2003年3月、177-185ページ、神田嘉延編『環境問題と地域の自立的発展—離島・へき地を中心に—』2004年2月、高文堂出版社所収、狩野浩二「自然環境と教材開発—鶴田町の教育実践を通して—」523-532ページ、狩野浩二「農業における人づくりと学習—沖永良部の事例を中心に—」533-546ページ、狩野浩二「沖永良部の家族と子ども・青年の地域自立的発展の役割」547-561ページ、鹿児島大学奄美ニューズレターNo. 20、狩野浩二「沖永良部にお

ける農業と人間形成」、2005年7月、1-7ページ)。ここにおいても、学士課程や修士課程の学生・院生に対する教育実践として地域調査を活用した(1998年～2006年)。

### 1.1.5 喜界島

喜界島では、地域調査とともに学校調査に従事した。一島一町の大変落ち着いた島である。ここでは、学生を直接連れて行くことは叶わなかったが、沖永良部島と同様に農業で成功を収めた地域であり、また篤農家が多いことから、いまま少し時間があれば、調査地域として継続して研究が展開したと思われる(1998年～2006年)。

## 1.2 十文字学園女子大学における展開

### 1.2.1 地域に学ぶ授業の展開

2007(平成19)年より埼玉に異動し、本学での地域貢献活動を主体とする学生教育のあり方についての模索がはじまった。2009(平成21)年に、当時、地域連携の仕事に従事していた際に、埼玉県から学生の活動によって地域づくりを支援できないかとの相談を受けた。中山間地域においてさまざまな施策を県としては行なってきたが、なかなか成果が現れないということである。そこで県内に存在する大学に目をつけたということであった。学生であれば、新鮮な発想で地域づくりを担ってくれるのではないかと考えたのである。早速、当時2008(平成20)年度入学生(2期生)が2年生となり、新3年生となる時期において児童教育学科の「演習」としての授業でこれに取り組むことにした。その後、県の支援が終わるまでの2013(平成25)年度までこの事業を継続する。そして、2014年度からは大学で新規の学生支援活動として新設された「元気プロジェクト」への応募(2014年度～2015年度)、2015(平成27)年度からは、COC事業がはじまった。この過程において、中山間支援による学生教育のあり方を考えてきたわけである。また、これと併行し、2008(平成20)年度からは、込江雅彦先生の協力により、学部教育として地域に学ぶ授業(当初は、込江先生が開講していた「経営経済学基礎」という授業を借りて実践を開始した。その後、「十文字学」という共通教育科目がつくられ、2015(平成27)年度から現行のカリキュラムにおいて「埼玉の地理・歴史・文化」が開設され、この科目において地域と大学教育との関係、融合をはかった。

### 1.2.2 埼玉県の支援

埼玉県は、先述の通り農林部農業ビジネス支援課が主体となり、学生たちによる地域支援活動を展開した。本学は、その当初から参画し、今日まで大きな成果をあげてきている。筆者は、2010(平成22)年度に当時の児童教育学科3年生の必修科目「演習」の担当者として、学生とともにこの活動に従事した。当初は、全くの手探りであった。

まず、対象地域の選定から始めなくてはならない。すでに調査フィールドをもっていれば、そこを起点として展開できるが、しかし、筆者の場合は、先述の通り沖縄、鹿児島において調査フィールドを定めてきた。埼玉に異動し、4年目を迎えてはいたものの、まだ、当地とのかかわりは十分ではなかった。そこで、参加する学生たちにそれぞれ地域選定を任せ、そのなかから埼玉県比企郡小川町腰越地区(3年生の相川怜美さんが懇意にしていた島野伸由氏がこの地域で子ども対象の自然体験教室を開いており、その場を借りて当初の活動を開始したのである)を選定した。

### 1.2.3 地域に学ぶ視点

支援期間の4年間のなかで次第に地域に学ぶ視点が見えてきた。それは、地域の方たちとの膝を交えた交流の大切さである。結果的にみれば、学生たちが世話になっている。学生による地域貢献や、社会貢献というのは、実質的に学生の学修活動となっている。したがって、学生が地域で学ぶ、地域に学ぶということを第一にしなければならない。そこには、地域の人たちが生活している。地域の人たちが生活する場において、学生が学ぶ。そのことに最も大きな意味がある。地域の人々の暮らしそのものから学生が学ぶのである。

そのためには、地域に生活する人たちと私たちとの交流が最も大事である。それも、顔と顔を合

わせた付き合いが必要である。イタリアでは、「塩1トン」という言葉がある。これは須賀敦子のエッセイにある言葉だという。

イタリア人と結婚し、異国での暮らしを多くの随筆に残した須賀敦子さんが書いている。あるとき姑から、こう言われたという。「ひとりの人を理解するまでには、一トンの塩をいっしょに舐めなければだめなのよ」▼たくさんの塩を舐めるということは、数多くの食事をともにすること。伴侶であれ友人であれ、たくさんのうれしさや悲しさを一緒に経験することなのだろう。須賀さんの姑も昔、自分の姑から聞かされたというから、かの国で長く伝わる例え話なのか（天声人語「塩1トンのつきあい」（2018年01月11日『朝日新聞』朝刊）

ここで、須賀敦子がいうように“ひと”と“ひと”との関係づくりには、時間が必要である。それも、ともに汗をかくような活動やともに同じものをいただく体験などである。こうした濃密な時間を通してのみ、“ひと”と“ひと”との繋がりが生まれる。そのなかで学生たちは成長するのである。

#### 1.2.4 つながり求めて

「ふるさと支援隊」、「元気プロジェクト」、「COC」において、取り組まれた活動を列挙すれば、以下の通りである。

旧道（小川町腰上地区）において看板を設置する活動

ハイキングマップの作成（小川町腰上地区）

かるたの作成（小川町腰上地区）

聞き書き集の作成（小川町腰上地区）

ハイキングへの参加（小川町腰上地区）

大河地区民体育大会への参加（小川町腰上地区）

いきいきサロンへの参画（小川町腰上地区）

ふれあい昼食会への参画（小川町腰上地区）

蕎麦の播種、収穫、そばうち、完成したそばの高齢者宅への配達（小川町腰上地区）

うどん打ち（小川町腰上地区）

新座駅前商店会主催のチャリティー餅つき大会における出店（けんちんうどん、柚子味噌ポテト、手作り生芋こんにゃく）

干し芋づくり（皆野町金沢地区）

もろこしまんじゅうづくり（皆野町金沢地区）

ふれあい祭りへの参画（皆野町金沢地区）

つつじ祭りへの参画（皆野町金沢地区）

かたくり祭りへの参画（皆野町金沢地区）

以上が活動の一部である。いずれにしても、地域の方たちとの交流ということが基盤にある。その基盤づくりがこうした活動の最も大事なところである。

### 1.3 地域との共同実践の展開

#### 1.3.1 旧道（小川町腰上地区）において看板を設置する活動

この取り組みは、地域の方たちからの要請を受けて活動したものである。埼玉県比企郡小川町腰越周辺には、旧道が多くある。かつては、その旧道が生活路であった。しかしながら、自家用自動車の普及でかつての道も歩く人が少なくなった。そのために道が次第に廃れてきてしまっていた。そこで旧道の枝分かれする地点にその先の行き先を示す看板を設置することになった。「ふるさと支援隊」の資金を活用し、旧道の往路と復路とにそれぞれ道標となる看板を設置したのである。

### 1.3.2 ハイキングマップの作成

「腰上ハイキングマップ」は、初版と改訂版の二種類を発行した。初版では、小川町駅（東武東上線）から腰上に至る道筋とともに、地元の路線バスであるイーグルバスの時刻表を掲載した。その他、腰上地域の地図とともに、地域の特徴となる場所を図示した。「二十二夜塔」や「湧水」、「館川ダム」、栗山の「榎の木」（町指定文化財）、初夏になるとホテルが乱舞する場所などを紹介している。改訂版においてバス路線（時刻表）を削除し、そのかわりに腰上からの風景を描いた水彩画を載せ、また、地図上の間違いを正すなどし、腰上を訪ねる人たちが増えることを期待しつつ作成したのである。

### 1.3.3 かるたづくり

小川町腰上地区を素材にした「かるたづくり」は、地域の方たちからの要請もあったものの、学生たち自身の発想が活かされた事例である。学生は、毎年はじめて訪ねる地域で、地域の方から地元の歴史や文化の一端を学ぶ。例えば、猫のイラストを象ったお札が毎年発行され、かつては子どもたちがそのお札を売って歩いたということが分かる。猫のお札は、鼠よけである。鼠の害に困っていた時代があったということである。この地域では、古くから“細川紙”とよばれる和紙づくりで賑わっていた。実際、地域を流れる川には、各家へと水が引かれていた跡が残っている。和紙を漉くための、ため池などがある。そして、さらに完成した和紙がネズミによって齧られたり、汚されたりしたことを知る。そうしたなかで「猫のお札」が生まれていったことを知る。この取り組みは、地域の民生委員や地域の住民からの声が反映されている。絵札とともに作成した読み札の言葉には、地域の方から教えていただいた地域の事実が反映している。この資料は、総合科目として授業化した際（2018年度）に教材として使用し、受講生たちが地域を学ぶ材料とした。最近、内田康夫氏（元小川町教育委員会学芸員）から腰越地区でこの「かるた」をみたとの電話をいただいた。地域のお年寄りがこのかるたで遊んでいたのをみたそうである。地域で現在でも活用されているということである。

### 1.3.4 聞き書き集づくり

毎年おこなってきた地域調査では、地域の方たちの“語り”が記録されてきた。録音やノートへのメモ、映像などにより記録してきた。その量は膨大なものがあり、何らかの形で成果として残せないかと考えたのである。その当時（平成24年度）、高校生が農林漁業の先輩から話を伺い、それを文章として残す取り組みが全国的に話題になった。いわゆる「森聞き」とよばれる活動である。農業や林業、漁業などで、達人とよばれる人たちから高校生が話を伺う。例えば、宮崎県の椎葉村では、焼き畑農業を受け継ぐお年寄りから、高校生がその仕事についての話を聞き、また、実際にその焼き畑の現場に立ち合うなどして「森聞き」を完成させるのである。これは先述の通り、日本教育実践史の研究成果としての「生活綴方」や「生活単元学習」などの成果を活かした取り組みである。体験を文章として結晶化させるということと、インタビューにより達人に形成された知恵や技を顕在化させる。このふたつのことが「森聞き」では実現されていたのである。学生たちには、この活動を紹介し、実際に自分たちで腰上地区を対象とした「森聞き」大学生版をやってみることになった。この資料は、その後、総合科目として授業化した際（2018年度）に教材として活かされている。

## 2 展開期におけるカリキュラムの創造

### 2.1 地域との信頼関係

#### 2.1.1 ハイキングへの参加（小川町腰上地区）

腰越地区では、毎年秋から冬にかけて“区民ハイキング”が実施される。今年度（2018年度）は、腰上地区の二十二夜塔を出発し、笠山方面に上り、館川ダムからときがわ町に至るルートを歩いた。今年度の参加者は、「総合科目（中山間に学ぶ）」から、3名の参加があった。引率として、筆者

と児童教育学科の助手が参加した。腰上からは、約 15 名の参加があった。地域の方たちと実際に歩きながら談笑する楽しいひとときである。「総合科目」では、このハイキングの成果を活かして、地域のよさを広報する取り組みが現在進行している。受講生の関心により、グループ（SNS 班、イラスト班、郷土食レシピ班、音楽班、ポスター班、行事支援班）を編成した。これらの取り組みは、COC としての課題と直結している。中山間地域と都市部とをつなぐ組織者として学生を育成するという視点である。学生は、中山間地域と都市部とを往還しつつ、それぞれのよさや課題を発見する。それを各自が得意の分野で結晶化していくという展開である。例えば、音楽班は、歌やダンス、踊りによって地域を盛り上げたいということである。約 15 分間のプログラムをつくっており、それを、毎年 2 月初旬におこなわれる“新座駅前商店会主催のチャリティー餅つき大会”において、披露するというのである。こうした取り組みが生じるとは、正直なところ、想像していなかった。また、レシピ班は、埼玉県特産のシャクシ菜をつかった新たな郷土食レシピを開発している。現在までのところ、レシピは完成し、今後は、栄養計算をしていくという。こうしたことも、これまではなかったことである。行事支援班は、同じく新座駅前商店会主催のチャリティー餅つき大会において、郷土食を新座市民に振る舞おうと考えている。実際に、埼玉県比企郡小川町腰越地区で、生芋蒟蒻づくりを経験し、その蒟蒻を活かした料理を考えている。SNS 班は、当初は、Twitter による広報活動を考えていた。しかし、ハイキングに参加した学生たちが自分たちの取り組みを教室で紹介したのを知り、Instagram による広報を考えはじめた。このように他の学生たちから示唆を得て自分たちの取り組みを柔軟にかえていけるのも、大学生ならではの強みである。イラスト班は、得意の描画により 16 ページの地域紹介パンフレットをつくっている。現在のところ、内容は未詳であるが、手書きのすばらしいパンフレットが完成しそうである。ポスター班は、ハイキングを素材にし、それを紹介するポスターをつくらせようとしている。こうしたことも、実際に地域での活動に参加するなかで刺激を受け、自分たちなりの結晶化の方法を考えているのである。

### 2.1.2 大河地区民体育大会への参加（小川町腰上地区）

大河地区は、小川町の北部に位置する地域である。腰上地区は、腰越のなかの最も山間部であり、大河地区の一部である。大河地区では、毎年秋に地区民による体育大会が開催されている。この活動へは、平成 22 年度から学生が参加している。当初は、お茶をくんだり、お弁当を運んだり、主として地域の女性たちが担ってきた役割を補助していた。それが次第に学生が打ち解けるようになった。地域の方からは、学生に対してさまざまな期待をしてくれるようになってきた。例えば、この体育大会で取り組まれていた「玉入れ」競技では、予め練習会が開かれた。そこへ学生が参加し、玉入れのコツを学生が地域の方たちに指導したのである。当日は、生憎の雨で、体育大会自体がなくなってしまった。それでも学生たちの充実感は、大きなものであった。何より地域の方たちから当てにされ、期待されているということに対してである。自己肯定感が低いのが日本の若者の常である。そういう若者たちにとってみれば、地域から期待されたり、当てにされたり、出番が用意されたりするという経験は、掛け替えのないものになる。そして、次第に競技そのものへの参画が求められるようになった。こうした地域行事へ学生が参画し、行事そのものの企画立案にも携われるようになれば、素晴らしいことであるが、そこに至るには、もう少し工夫が必要である。現在は、授業科目（総合科目、2018 年度）として取り組んでいるわけであり、授業のなかだけでこうした複雑なプロジェクトを実現するには、少し無理がある。やはり、別途有志のグループを構成し、そのグループが年間を通じて取り組んでいくような仕組みが必要である。今年度（2018 年度）からは、有志グループを結成し、埼玉県農林部の公募企画に応募し、採択された。こうした外部からの支援によりプロジェクトを進めていくことと、授業科目により学生を育成することは、ちょうど車の両輪のように地域活動を推進するうえでの梃子になりうる。

### 2.1.3 いきいきサロンへの参画（小川町腰上地区）

“いきいきサロン”は、平日に取り組みされている高齢者福祉の取り組みである。腰上地区において長年にわたり継続されてきた行事である。ここへは、平成23年度から参画している。お茶くみから会場の設営、後片付けと最初は誰にでもできるような内容であった。それが信頼関係が構築されるにつれ、より深い内容へと関わるようになっていった。例えば、プログラムの内容開発や新規の運動プログラムの開発、余興の工夫など、地域の方から様々な要請がくるようになってきた。先述の“かるたづくり”において読み札として採り上げた地域の歴史や文化などは、こうした“いきいきサロン”などへの参加を通して、地域の民生委員の方たちと話し合うなかで学んだことである。さまざまな活動をともに経験するなかで共同体的な紐帯の意味に学生自身が気づいていく。活動の当初には想像もしていなかったような取り組みへと展開していくのである。

### 2.1.4 ふれあい昼食会への参画（小川町腰上地区）

“ふれあい昼食会”は、“いきいきサロン”と同様に高齢者福祉の事業である。昼食会を通して日ごろひとりきりで生活している高齢者の方たちと地域住民とが交流する会である。この会へも当初は、雑用係としての参加であった。それが次第に深い関わりへと繋がっていった。筆者も、カラオケに参加するなど次第に交流の輪が広がっていった。こうした取り組みへも、できるだけ学生を参加させ、顔と名前を覚えてもらうことが肝要である。

## 2.2 長期的視点における教材開発

### 2.2.1 そばの播種、収穫、そば打ち、完成したそばの高齢者宅への配達（小川町腰上地区）

地域ではさまざまな課題を抱えている。その課題解決のために学生たちが知恵を出し合うということは、非常に大事なことである。当時、東日本大震災の後であり、震災被災地の復興がテーマとなっていた。その際、特に福島においては、放射性物質の除染が課題となっていた。たまたま報道で話題になったのが向日葵の種を増やし、福島に送るという活動である。全国各地域で、向日葵を育て、収穫した種を福島に届ける。その種によって福島に向日葵の花を咲かせ、土壌の放射性物質を少しでも多く除染しようという試みである。それをヒントにして小川町腰上地区において耕作放棄された畑を活用し、向日葵を育てることになった。地域でも学生たちの支援に触発され、小川町の支援事業に手を挙げた。その助成金を活用し、向日葵の種を購入する。畑は、あちこちにあるが、特に主要な道路沿いの畑を中心に向日葵の種をまいた。畑は、かなり荒れてしまっており、あちこちに葛が育ち、地下茎も大きく育っている。草取りから始まり、畝をつくり、向日葵の種をまく。こうして腰上地区の主要な道路沿いが向日葵によって美しく生まれ変わった。同時に向日葵をまいた畑には、看板をつくり設置した。その後、その向日葵の畝と畝の間に、蕎麦を播くことになった。向日葵は、かなり背も高くなり大きく育つ。そこで1メートルくらいの間隔で、畝をつくっていた。その空いたスペースに蕎麦を播き、秋口に花を咲かせようという計画である。そして、秋に収穫した蕎麦を使って、蕎麦打ちをし、高齢者宅や独居老人宅へ年越し蕎麦を届けることになったのである。もともとは、耕作放棄地の美化活動が発端だったが、毎年続けるなかでそれが福祉活動にまで発展していく。昨年（2018年）の12月24日には、恒例の蕎麦打ちの会を開催し、学生4名が参加した。そこで使った蕎麦粉は全て、腰上の畑で収穫したものである。昨年は、18キロの収穫があったとのことで、蕎麦打ちに活用するとともに、畑を提供して下さった家には、蕎麦粉をお届けした。参加した学生は、「ふるさと支援隊」として、埼玉県秩父郡皆野町で活動している学生たちである。皆野町の活動と並行し、研修として小川町にも入ったわけである。「総合科目（中山間に学ぶ）」としてカリキュラム化した小川町腰上地区を舞台として、新たな「ふるさと支援隊」の学生が学ぶということも、新たな試みである。腰上の方たちからは、今年参加した学生たちの手際のよさを絶賛する声が上がった。毎年、参加している学生たちであるが、今年の学生は違うというのである。これは、恐らくかつての学生たちが児童教育学科の「演習」や「卒業研究」の一環として取り組んでいたのに対し、今回は全くの有志として希望者のみを集めた（ふるさと支援隊：皆野町金沢地区）

ことが影響しているように思う。今年度（2018年度）再び発足した「ふるさと支援隊皆野町金沢地区」の学生は、自ら希望してこの活動に参加している。また、参加者の出身地域は、新潟県柏崎市、福島県いわき市、郡山市、東京都府中市、山形県高畠町、千葉県柏市、中国四川省と広域にわたっている。埼玉県内の学生は、朝霞市とふじみ野市の2名だけである。こうしたことも、学生の主体性や自主性に大きく関わっているように思われる。その一方で、今年度（2018年度）から新規科目として開設した「総合科目（中山間に学ぶ）」では、27名の学生が参加しているが、参加の動機を聞くと「たまたま、木曜日3限目が空いていたから」という理由が最も多かった。所属学科は、健康栄養学科、人間発達心理学科、児童教育学科、文芸文化学科であるが、児童教育学科の3名と、文芸文化学科の1名は、ある程度科目の内容を理解したうえで参加したということである。最も多くの人数を占める健康栄養学科は、全て“たまたま空いていた派”である。こうしたことも、授業科目としてカリキュラム化したなかで分かってきたことである。

### 2.2.2 もろこしまんじゅうづくり（皆野町金沢地区）

皆野町金沢地区では、獣害により耕作地域が限定されている。シカやイノシシなどが畑を荒らしてしまっ、思うように収穫できない状態であるということである。そこで、国や県の補助により電気柵を張り巡らした農地で、限られた種類の農作物をつくっている。その一つがトウモロコシである。収穫したトウモロコシを原料として、「もろこしまんじゅう」や「もろこし焼酎」をつくってきたということである。焼酎は、委託先の秩父の醸造先がウイスキーの生産に力を入れるなかで、焼酎の醸造ができなくなってしまい、現在では止まっているとのことである。「もろこしまんじゅう」づくりは、地域の「加工センター」において、現在も続けられており、元々は郷土食として食べられてきた。5月5日に毎年開催される「つつじ祭り」に筆者がお邪魔した際は、各家庭ごとにつくった「もろこしまんじゅう」がふるまわれていた。トウモロコシと小麦粉を混ぜた生地を蒸かしてつくる、素朴な郷土食である。一度蒸かした饅頭の表面に焼き色を付けるなどし、また、饅頭の餡には、当地の特産品であるシャクシ菜を入れたものが一般的とのことで、信州の「お焼き」に似ている。この製造は、平日の水曜日から金曜日までとのことで夏休み中の8月24日に実際の作業を手伝った。一連の作業をみるとすべての行程が手作業である。加工センターの方からは、学生の力であらたな商品を開発してほしいとのことで、現在は、「ふるさと支援隊」のメンバーのなかから、プロジェクトチームを編成し、検討している。

こうした取り組みも、やはり授業科目のなかでたまたま集まった学生たちによって、担っていくには荷が重い。やはり、年間を通じて、また、できれば複数年度にわたり、こうした活動を継続できる学生の参画が必要である。活動の継続性や趣旨によっては、大学の正規カリキュラムにはそぐわないものも当然でてくる。そうした場合に、機動性と継続性に富む有志グループがやはり必要である。総合科目（中山間に学ぶ）は、今年度（2018年度）が初めての試みであり、全くの手探りのカリキュラム開発である。そういうなかで得られた知見というものも、実に貴重である。今後の大学教育を考えていくなかで是非とも必要となる知見である。

### 2.2.3 ふれあい祭りへの参画（皆野町金沢地区）

「ふれあい祭」は、皆野町としての全体の取り組みである。会場を町役場とし、ホールでの発表や露天でのイベント、物品販売など、多様なプログラムで構成されている。今年度（2018年度）は、あいにく本学の学園祭（桐華祭）の日曜日と重なってしまい、「総合科目（中山間に学ぶ）」受講生が応援に駆けつけた。具体的には、金沢地区が出店した露店において、“干し椎茸”の販売、椎茸フライの加工と販売があり、特に学生は、椎茸の加工から販売までを支援した。加工の段階では、椎茸の軸を切り取る作業、竹串に椎茸を刺す作業、衣をつけて揚げる作業の3工程である。当日だけのイベントのお手伝いとあって誰でも気軽にお手伝いができる。そのうえ郷土食を御馳走になったり、地域の方とも作業を通じて会話がはずむなど、学生にとっては大事な学修の機会である。今回は、4年生が参加したということもあり、学生自身にとっては今後の社会生活において地域と繋

がっていく視点が得られたとのことである。受け入れる側が受け入れる態勢をつくっているお陰で、学生としては、すぐにその活動に入り込める。こうした時限的な活動は、「総合科目（中山間に学ぶ）」のような限られた時間と空間のなかで一定程度の成果を得る必要があるような大学授業科目のカリキュラムとして大変有効である。

## 2. 3 学生有志による活動の視点

### 2. 3. 1 つつじ祭りへの参画（皆野町金沢地区）

今年度（2018年度）は、あいにく学生の参加がなかったが、皆野町<sup>かねさわ</sup>金沢地区の最も大きな行事がこの「つつじ祭り」である。会場は、金沢の萩神社の境内である。そこに金沢の住民のみならず、各地域に巣立っていった金沢出身者が一堂に会するお祭りとなっている。物品や郷土食の他、この地域の伝統芸能である人形浄瑠璃公演がメインプログラムとなっている。人形浄瑠璃は、一時期途絶えてしまったものの、近年復活させ、地域の方たちが今後も継承していきたいと考えている。「ふれあい祭り」においても人形の展示のみの参加ではあったが、町を代表する伝統文化となっている。人形は、埼玉県有形文化財に指定されている。地域の方は、“無形”文化財化を目指したいとのことであるが、そのためには義太夫節を実際に継承していく（現在は、プロに依頼し、録音した音源を使用している）などの工夫が必要である。筆者がみたところでは、比較的年齢の高い層が関心を持っているものの、若い人たちは、あまり関心を持っていないようにみえた。こうした舞台を継承していくためには、やはり次世代を担う若い人たちへのアピールが必要である。そのためには、義太夫節としての謡いが誰にでも理解される必要がある。例えば、口語訳した字幕をつくるなどである。実際に金沢の人形浄瑠璃では、他の地域で公演した際に字幕を使ったことがある。そうであれば、なおさらのことこの大きなお祭りにおいても、若い人たちに関心を持ってもらうための仕掛けづくりが必要である。例えば、お祭りのパンフレットは、町のウェブサイトに掲載されてはいるものの、そのデータが画像データである。これがSNSにより拡がっていくためには、工夫がやはり必要である。そうしたことについても、単なる授業科目（総合科目等）をたまたま受講した学生では、やはり荷が重い。こうした継続性のある課題については、有志グループを編成し、一定期間で成果が出せるようなプロジェクト型の取り組みが必要である。

### 2. 3. 2 かたくり祭りへの参画（皆野町金沢地区浦山）

金沢地区には、紫陽花や“かたくりの花”をテーマにした地域素材が存在する。金沢地区浦山の有志住民がボランティアで行っている。そこへの支援活動もまた、継続性のある有志グループによって課題の析出、課題の解決を図っていくことが必要である。やはり、単なる授業科目（総合科目）で偶然集まった学生たちによって、こうした取り組みを組織していくのは、難しい。

紫陽花は、初夏にみごとな花を咲かせる。広大な山林の一角に紫陽花が定植されている。地域の方によれば、紫陽花は、ちょっとした病気や害虫によって全滅してしまうほどの被害を受けるといふことである。また、一部の土壤に肥料を播いたせいか、青かった花が次第に白くなってしまった場所がある。そこで、現地調査をふまえ、土壤の分析をすることとなった。これも、やはり有志グループを編成し、長期的に支援していく必要がある。単なる授業科目で偶然に集まった学生では、取り組みが難しい。現在は、「ふるさと支援隊皆野町金沢地区」のメンバーからさらにプロジェクトチームを編成し、土壤の分析等にあたる準備をおこなっている。今年度（2018年度）は、酸度計を入手し、大学内の二つの場所（雑木林とニコニコ農園）で酸度計を試してみた。酸度計は、地面が濡れていることが条件で、たまたま雨の降った次の日に測定できたため、特段の下準備は必要なかった。乾いた土壤の場合は、バケツ一杯分くらいの水を撒き、さらに、30分程度は、時間をおいて測定する必要がある。こうしたことも、テストによって判明したことである。ちなみに雑木林と農園とでは、測定結果が異なっていた。当然ではあるが、雑木林の落ち葉が堆積する土壤は酸性度

が低く、農園は高めであった。今後、長期的な視野で紫陽花の土壌を検討し、最適な土壌環境の実現に寄与していくことができると考えている。

### 2.3.3 時限的活動と長期的活動の差異

これまでの取り組みを総括してわかってきたことは、大学の授業科目（講義科目）として特設して、半年なり一年の活動を組織していく場合、やはり鍵となるのは、その講義期間を超えての活動（長期休業中にしばしば活動が展開する）がしにくいということである。例えば、前期期間は、4月の上旬から7月の下旬までであり、成績提出の8月までは時間的な猶予があるものの、受講生は、受講期間を超えての活動に取り組むことに消極的である。実際、3月末（2019年3月30日）に予定されている「かたくり祭り（埼玉県秩父郡皆野町金沢地区浦山）」への参加は、授業科目である「総合科目（中山間に学ぶ）」において募集したところ現在まで希望者はでていない。期間内であっても、例えば、週末におこなわれる「皆野町ふれあい祭り（4年生が急遽参加したのであり、実質的には総合科目の受講者が参加したことになる）」や「金沢地区芋掘り（2018年11月）」「金沢地区干し芋づくり（2018年12月）」「小川町そばうち（2018年12月）」などの行事へは、授業科目としての受講生からは希望が出ていない。唯一、「小川町腰上区民ハイキング（2018年12月1日実施）」のみ、あらかじめ授業科目としての受講生から参加の希望があり実現したが、やはり、たまたま授業を履修した学生たちの意欲を高め、授業以外での学修機会を選ばせるには、なかなか困難がある。「皆野町干し芋づくり（2018年12月1日実施）」では、あらかじめ参加希望のあった学生が当日になって欠席するなど、体調不良が理由とはいえ、地域との繋がりを考えると心苦しいところである。そうしたことも理解をしてもらったうえで、地域との繋がりを構築していくことが必要となる。そういう点では、2010（平成22）年度から今日までお世話になっている埼玉県比企郡小川町腰越地区腰上のように、筆者や学生たちの実情を十分理解していただいております、当時からお世話になっている区長が今日までに3名（田端氏、福島氏、鯨井氏）代替わりしても、区長が代々本学とのつながりを重視していることにより、学生の受け入れにも積極的に関わって下さっている。こうした信頼関係の構築が何より重要である。そのうえで今年度（2018年度）から試行している授業科目（総合科目）のような取り組みにおいて、長年のつながりが深い埼玉県比企郡小川町腰越地区腰上のような、安定的なカリキュラム創造が可能な地域と、今後新たなつながりを深めていく途上の、埼玉県秩父郡皆野町金沢地区のような学生有志による、長期的視点にたった、息の長い活動というものを同時並行的にすすめられるということは、まったく偶然のことではあるが、大事な視点である。

COC事業においては、2010（平成22）年度から今日に至る教育実践のうち、2014（平成26）・2015（平成27）・2016（平成28）・2017（平成29）年度の4ヶ年にわたり支援をうけた。とくに、「かるたづくり」「ハイキングマップ改訂版づくり」「こんにやく絵本づくり」において、多大なる支援をうけた。詳細は、すでに報告書に述べたとおりである。学生が、中山間地域と都市部とをつなぐ接着剤として活躍し、恒例となった“新座駅前商店会主催のチャリティー餅つき大会”において、郷土食をふるまう活動がほぼ定着してきた。このなかで「腰上ハイキングマップ」を普及したり、「こんにやく絵本」の紹介をおこなうなど、都市部住民が中山間地域の価値に気づく契機を創造することに成功してきている。今後は、時限的活動と長期的活動の差異に着目し、両者の形成的な価値を組織的、意図的に教育的価値へと組織していくカリキュラム開発が展開していくことになる。

今年度（2018年度）に開始した「総合科目（中山間に学ぶ）」は、まだまだ萌芽的な状況である。受講生は、幸いにも当初27名でスタートした。途中で2名のリタイヤがあり、25名が参加している。先述の通り、受講生の受講動機は、“たまたまこの時間が空いていたから”が最も多かった。こうした状況のなかで、中山間地域について何を学び、何を活かしていくのかが問われている。筆者は、先述の通り、1995（平成7）年から沖縄において、1998（平成10）年からは鹿児島において、そして、2007（平成19）年からは埼玉において、地域と繋がりをもちながら学生を育てる実践に携わってきた。そのなかで形成的な価値を教育的価値に編み直していくカリキュラム創造の道筋は明

確になってきた。今後は、これまでの知見を活かし、2020年からはじまる新学部体制のなかで、あらたな教育実践をつくっていききたい。その際、今回得られた時限的活動と長期的視野に立つ活動の両面から、学生を育む視点を活かしつつ、地域とともに成長する大学づくりに邁進していききたい。

【附記】本稿の作成にあたり、埼玉県比企郡小川町腰越地区及び、秩父郡皆野町金沢地区のみなさんには、公私ともにお世話になった。COC事業、十文字学園女子大学元気プロジェクト、総合科目（中山間に学ぶ）では、活動にあたって、多大なる支援をいただいた。鹿児島大学名誉教授の神田嘉延先生には、沖永良部島、喜界島での社会調査にあたり、ご指導をたまわった。本稿は、沖縄国際大学短期大学部、同文学部、鹿児島大学教育学部、本学での同僚や職員の皆様方の協力なしには実現しなかったものである。ここに記して感謝申し上げる。



## 産学民連携による地域の食材を使った商品の開発

## Development of products using regional foodstuffs through cooperation between industry and academia

金高 有里<sup>1)</sup> 岡本 節子<sup>1)</sup> 堀井 貴子<sup>1)</sup> 中島 万季<sup>1)</sup> 名倉 秀子<sup>1)</sup>  
 Yuri KINTAKA Setsuko OKAMOTO Takako HORII Maki NAKAJIMA Hideko NAGURA

**キーワード**：産学民連携、地域の食材、実学教育

**要旨**：実学教育の一環として、食物栄養学科の学生ができるだけ早期に社会との関わりを持ち、即戦力を養うことで、将来の管理栄養士としての活躍の可能性を広げるため、新座市周辺の地域に密着した企業/店舗/住民との共同事業により、地域の食材を用いた商品開発や、イベントの企画を行うこととした。また、地域の食材を扱い、学生が埼玉の食文化や食材の栄養学・調理学的な観点からも食材について学びを深め、地域に住む消費者からの意見や企業側にたった観点を学び、振り返りを行うことで地域の住民へ浸透可能な戦略についても学ぶこととした。

企業と学生、教員、住民でこの取り組みのコンセプトやお互いにとっての意義を確認し、意見交換を行った。学生を主体として、コンセプトに基づいた商品を何点か試作し、企業への試作結果の報告やプレゼンテーションを行った。会議を繰り返し、企業からの意見、改善点の指導を受けた。

開発した商品は、地域マルシェへの出店や企業店舗での販売、イベント開催において地域住民に届けられた。学生は企業の方々、地域の住民の方々の反応と直接向き合うという貴重な経験となった。また、企業・大学・住民が手を取り合い、産学民の連携で地域にアクションを起こすことで、地域からの大きな反響を受けることができた。それぞれの立場の者同士が一つの目標をもって地域へ進出していくことは、多くの成長を得られる良い機会となった。

## 1 背景と目的

### 1.1 産学官連携による実学教育の実践に向けて

#### 1.1.1 実学教育の提案

近年、実学教育<sup>1,2)</sup>の大切さは様々な教育機関で唱えられている。この“実学”の定義は多義にわたるが、一般には“実際生活の役にたつ学問の意”とされる。学生にできるだけ早期に社会との関わりを持ち、即戦力を養うことで、将来の管理栄養士としての活躍の可能性を広げることは実学教育につながるという考えのもと、学生にとっての教育効果を図り、大学と企業との連携による地域活性化を目的として、これまでに地域のベーカリーのメニュー開発や食品企業から依頼を受けた大麦を使ったスイーツレシピ開発に関わるなど、地域企業との共同事業を企画・実践してきた。これらの企画を手がけたきっかけは、“企業でどのように商品が販売に至るのか具体的に知りたい”、“また、そこに栄養士や管理栄養士はどのように関わられるのかを知りたい”という学生の一言から始まった。このように、未来ある学生たちのあふれる好奇心を成長につなげるべく、様々な可能性を検討し、企業との連携による地域の食材を用いた商品の開発に挑戦させて戴く企画を検討した。

今回はさらに、新座周辺の地域の食材を用いることに焦点をあて、①学生が埼玉の食文化や食材の栄養学・調理学的な観点からも食材について学びを深めること。②地域に住む消費者からの意見や企業側にたった観点を学び、振り返りを行うことで地域の住民へ浸透可能な戦略についても学びを深めること。以上の2点についても目的に加え、新座市周辺の地域に密着した企業/店舗/住民との共同事業により、地域の食材を用いた商品開発や、イベントの企画を行うこととした。

1) 十文字学園女子大学 食物栄養学科

## 2 実践方法

### 2.1 連携企業の開拓と実践（一年目）

#### 2.1.1 企業への訪問

大学内にある地域連携推進機構より紹介を受け、株式会社リブランという不動産会社が経営するカフェ「&Livlan てまひまカフェ」を訪問した。「&Livlan てまひまカフェ」は、志木駅から5分の地（新座市東北）に店舗を構え、地域住民の集まるコミュニティの場として活用されている。カフェの店長である三ツ口拓也氏との話し合いにおいて、これまでの活動や検討している企画等をお伝えし、お互いの立場にとっての意義や展望について話し合いを行った。その結果、産学連携の取り組みへの協力について賛同を戴くこととなり、本プロジェクトは開始された。

#### 2.1.2 企業との連携

企業（カフェ）と教員間では、何度か話し合いの場を設け、本プロジェクトについてお互いの立場や、学生の立場についての協議・確認を行った。その後、企業と学生、教員でこの取り組みのコンセプトやお互いにとっての意義を確認し、意見交換（使用する地域食材・内容の決定）を行った。

学生を主体として、コンセプトに基づいた商品を何点か試作し、企業への試作結果の報告やプレゼンテーションを行った。一年目は、学生が店舗における新座市のにんじんを用いたランチメニューを目指し、検討を行った。企業と学生との会議を繰り返す中で、企業からの意見や改善点の指導を受けた。また、カフェで実際にメニュー開発を担当するシェフからの具体的な指摘を受け、衛生面、食材ロス、人手の面、仕込みやランニングコスト等の面から、メニュー化への壁があることを学んだ。

#### 2.1.3 地域マルシェへの出店

会議において販売化に関して地域のマルシェでの出店について提案を受け、2015年10月4日に東武東上線 朝霞駅周辺で行われた「朝霞アートマルシェ 2015」に向けてオリジナルスイーツの試作を繰り返し行った。開発したオリジナルスイーツは、新座市の特産品であるにんじんを用いたスイーツ「キャロコロ」に決定した。内容・味・レシピ決定後、ネーミング、パッケージ、値段、看板、当日のプロモーション等を検討し、カフェからの意見を取り入れながら、販売当日を迎えた。販売当日は、カフェと共同出店という形で販売を行い、地域の住民が手にとり、感想を伺い、学ぶ機会を得た。「キャロコロ」は100食を完売し、大盛況を得た。



### 2.2 企業・住民との連携（二年目）

#### 2.2.1 企業との話し合い

一年目に企業との連携により、レシピ開発、地域のマルシェで受けた反響を踏まえ、次年度は更に連携を深め、新たな企画をたてることとなった。教員と企業との間で改めてこのプロジェクトの意義を確認したうえで、学生との話し合いの機会を設けた。話し合いの結果、二年目は店舗

で出されるメニューの開発を行うことを目標とした。また、メニューに用いる食材は地域のものを使用することとした。

### 2.2.2 連携の実践に向けて

店舗でのメニュー化に向け、学生と教員において、話し合いの上、8つのメニュー候補とレシピを作成した。これらのレシピは、地域の食材として新座市の特産品と言われる「にんじん」、「ほうれんそう」、「さといも」を中心に用いたものとした。メニューの試作を繰り返し、試食を重ねて候補を3つに絞った。絞られたレシピは「さといものスコップコロッケ」、「さといものブラウニー」、「新座野菜のカラフルキッシュ」である。これらは店舗にて三ツ口氏に味の確認をしていただき、メニュー化についての具体的な話し合いを行った。

全てのレシピについて、味の評価は得られたが、実際のメニュー化を検討した際、提供方法や作成にかかる手間や保存方法の面から、冷凍保存による味の劣化が認められない「さといもブラウニー」のメニュー化の方向で話がまとまった。販売時期については、用いる里芋の旬を考え、1～3月の店舗販売を目指すこととなった。セグメンテーション後のターゲティングの検討から、客層として子供が幼稚園に通う母親世代、親子が来ることが多いという状況を考えて、より多くの方に召し上がっていただけることを検討した。アレルギー患児増加<sup>3)</sup>の背景より、研究室では小麦を使わない焼き菓子の開発<sup>4)</sup>を行っていることから、小麦、乳製品などを用いない美味しいスイーツとすることを目指した。

### 2.2.3 連携の広がり

試作の繰り返しにより食材と提供方法を検討する過程において、三ツ口氏からの紹介によって新しい出会いが得られた。&Livlanが不動産会社として扱っている鶴瀬のエコヴィレッジというマンションの住民、藤岡重歳氏である。藤岡氏はエコヴィレッジマンションの屋上において、住民とともにさつまいもを栽培・管理しており、さつまいもの収穫祭の手伝いを学生に行わせていただくこととなった。学生は、収穫祭において、一緒にさつまいもの収穫を行っただけでなく、地域住民とのふれあいの機会を得た。このきっかけから、産学の連携が住民を加えた連携へと広がり、改めてそれぞれの存在の意味を考えることが可能となった。この収穫祭の手伝いに対するお礼として、収穫したさつまいもを戴き、これをメニュー化するレシピに使い、地域住民がカフェに来店した際に提供して還元するという産学民連携を行うこととした。

### 2.2.4 販売に向けて

「さといものブラウニー」に加え、さつまいもを使ったレシピを用いることを考えた結果、一年目にマルシェで販売を行った「キャロコロ」との組み合わせによる新座の野菜を使ったヘルシーなパフェを創作することとした。小麦、乳製品を使わないコンセプトから、パフェに載せるアイスクリームは豆乳アイスクリームとし、それぞれの組み合わせの割合や用いる食材、野菜の品種等を含め、量、盛りつけ、容器を含めた商品戦略を立てた。以上のように開発した商品は、さらにコストや販売価格の検討や、プロモーション戦略を検討し、実際の店舗での販売に向けた準備を進めた。販売に用いる容器や各材料の組み合わせ、提供方法について、店舗と学生と教員、お互いのイメージの確認を行いながら最終的な確認を行っていった。

パフェには、彩りや甘味、酸味のバランスの検討から苺を飾ることとなった。その苺はたまひまカフェの店舗前で毎週地域住民に野菜を販売、店舗との連携を持つY's farmのいちごを使わせていただくこととなった。

様々な連携により完成したパフェは最終確認の上、「ベジパフェ十文字」として期間限定メニューとして販売化が決定した。

## 2.2.5 販売化

「ベジパフェ十文字」は、期間限定で地域住民に届けられた。販売に際しては、学生が喫食した地域の住民の方々の反応を直接感じることができる経験ができるよう、順番に店舗へ赴いて販売、提供を行うこととした。自らの手で提供し、目の前で喫食した地域住民の生の声や反響を聴くことは、学生たちにとってかけがえのない経験となった。



## 2.3 企業・住民との連携（三年目）

### 2.3.1 企業との話し合い

二年間行ってきた企業や住民との連携による経験を踏まえ、三年目も学生の発想を尊重した連携プロジェクトを行うこととなった。企業、学生、教員を含めた話し合いを重ね、地域住民の反応を直に感じることに重点を置き、てまひまカフェの店舗における地域住民参加型のイベントを開催することとした。これまでのコンセプトを引き継ぎ、用いる食材は地域のものとした。

### 2.3.2 連携の実践に向けて

地域住民の反応を感じるイベントの企画において、まずターゲットを絞ることとなった。学生は、保育園における園児との調理実習の経験がとても印象的であったことや、店舗の客層を考え、園児をもつ親子を対象とすることとなった。企業との話し合いの結果、いくつかの提案の中から、最終的に絞られた案は、絵本の読み聞かせを行い、その絵本に出てくるレシピを再現して調理を行い、試食を行うというものであった。数多くの食べ物がでてくる絵本を検討した末、「しろくまちゃんのほっとけーき」に絞られた。

以上の内容を検討し、地域の食材を取り入れたレシピの再現化とともに、前年度に取り入れた小麦粉不使用というコンセプトを取り入れて学生は試作を繰り返した。

### 2.3.3 連携の継続

レシピの検討を行う一方で、企業との話し合いにおいては、企業と大学が連携をして行う意味を再確認してイベント全体の構想を練ることが課題となった。そこで、産学民連携の継続を生かすことが課題となり、前年度から継続して鶴瀬マンション住民、農家である Y' s farm との連携も繋げ、産学民連携を継続していくことを検討した。そこで、三年目も引き続き、鶴瀬マンションにおけるさつまいもの収穫祭のお手伝いを実施し、そのお礼に提供していただいたさつまいもをイベントで活用し、マンション住民にイベント参加の優待を行うこととした。次に、学生と教員で Y' s farm に赴き、そこで収穫された苺の栽培法や苺に対する想いを学び、レシピには苺をとり入れることとなった。

### 2.3.4 学生を中心とした食材の研究と試作

連携の内容が固まったことから、レシピ化について具体的に検討が進み、イベントの形式についても話し合いが進んだ。試行錯誤の末、イベントの第一回目にはマンションで栽培されたさつまいもを用いたイモンブランのトッピング、第二回目には Y' s farm の苺を用いたコンフィのトッピングを行うこととなった。また、生地には小麦粉ではなく、大豆粉を用いて生地の食感が一

番良い配合割合を研究した。読み聞かせには、ピアノを用いた演奏をつけ、読み手にはくまの耳をつけるなど、聴いている方が惹きつけられるような工夫を行った。プロモーション活動は、企業に協力を得て、企業の定期的に発行するチラシへの掲載を行っていただき、ポスター掲示などにより、できるだけ多くの地域住民の目に留まるような工夫をした。

### 2.3.5 イベントの施行

試食やイベントの流れなど、三ツ口氏との最終確認を終えたのち、企業からの意見、改善点の指導を受け、全二回の内容が決定し、本番を迎えた。イベント当日は、それぞれ12組の親子が参加し、三ツ口氏による紹介のあと、藤岡氏やY's farmの柳下氏による地域の食材の説明や読み聞かせ、調理実習を実施して交流を深めた。参加者の親子が自宅で再現できるような工夫として、絵本に出てくるエプロンを再現して縫い、作成したレシピもプレゼントをした。参加者アンケートの結果は、全て満足度が高く、何より親子との時間を共有し、反応を目の当たりにした学生は、机上では経験することができない感動を覚えていた。



## 3 まとめ

### 3.1 連携による成果と今後の展望

#### 3.1.1 連携による成果

以上のように、三年間、企業店舗との産学連携を継続し、その中で地域における住民や農家との交流も加わって産学民連携を達成することができた。このことは、学生が企業の方々、地域の住民の方々の反応と直接向き合うという貴重な経験となった。さらに、管理栄養士を目指す学生の取り組みとしては、小麦・乳製品を不使用として、地域の食材の研究を行い、その魅力をひき出せたことは大変意義が大きい。

地域の親子に対する調理実習において、園児と本学の学生双方にとって、調理実習体験で得た楽しさと美味しさはかけがえのない経験となった。学生にとっては、授業等で習う離乳食や幼児食といった内容が、実学として身についたことや、対象者の気持ちになって企画をする大変さが学べた。これをきっかけに、将来の管理栄養士としての活躍の幅が広がったことがうかがえる。

#### 3.1.2 管理栄養士教育の今後の展望

管理栄養士は、特定給食施設等における給食管理業務が重要なことは確かである。さらに、それ以外の活躍の場として、管理栄養士、栄養士が食を通じて地域に密着し、進出していくことにより、社会の食環境整備においてもっと活躍の場を広げ、国民一人一人に働きかけていく必要性があると考えられる。このことから、未来の日本の栄養学を担う学生を教育する立場として、実学を重んじ、地域に密着した教育を取り入れることで、学生が様々な立場で活躍できるように努力していきたい。

#### 3.1.3 総括

今回の取り組みによって、企業・大学・住民が手を取り合い、産学民の連携で地域にアクションを起こすことで、地域からの大きな反響を受けることができた。それぞれの立場の者同士が一

つの目標をもって地域へ進出していくことは、多くの成長を得られる良い機会となることが実感できた。地域への進出を実学教育として取り入れ、学生にとっての輝かしい未来の可能性を広げるために今後も継続していきたい。

#### 3.1.4 謝辞

本事業実施に際し、多大なるご協力いただきました、株式会社リブラン三ツ口拓也氏、かわごえ里山イニシアチブ 藤岡重歳氏、Y's farm 柳下稔氏・久実氏に厚く御礼申し上げます。

#### <参考文献>

- ・中村 征樹、2017、技術と学問のあいだ:一実学化と純化に揺れた革命期の学問、学術の動向、22 巻 2 号、公益財団法人 日本学術協力財団、2\_32-2\_36
- ・伊藤 敦俊、2016、融合・両立～基礎と実学の融合/教育と研究の両立に挑戦して、76 巻 2 号、薬剤学、公益社団法人 日本薬剤学会、80-82
- ・松原 優里、阿江 竜介、大矢 幸弘、穂山 浩、今井 孝成、松本 健治、福家 辰樹、青山 泰子、牧野 伸子、中村 好一、斎藤 博久、日本における食物アレルギー患者数の推計：疫学調査の現状と課題、67 巻 6 号、アレルギー、767-773
- ・金高有里、名倉秀子、2018、各種デンプンを用いたパウンドケーキの調製と課題、30 巻 0 号、日本調理科学大会研究発表要旨集、139

大学と地域の連携による教育及び表現活動の展開  
—公共ホールのピアノを活用した新座市の取り組みから—

A series of educational and expressive activities with students  
in cooperation between the people in the region and the University  
—From the Project: More Ideas and People into the Public Hall  
with piano music at Niiza City

久保田 葉子<sup>1)</sup>

Yoko KUBOTA

**キーワード**：音楽、地域連携、教育、表現活動、公共ホール活性化、ピアノ

**要旨**：本研究は、ピアノを活用した公共ホール活性化事業の取り組みを報告し、音楽が地域活性化や教育に果たす役割を示すものである。地域と連携した教育及び表現活動は学生の課題解決型の学びを促進し、来場者の姿を想像しながら全体を構成していく企画力、読解力、表現力、意見を表明する力をつけることにつながった。また、公共ホールは地域の魅力を発信し、人とのつながりを作り出す機能を持ちうることから、今後、児童への教育プログラムの開発、地域の才能あるアーティストの発掘、子どもから高齢者まで各世代に向けた内容の公演の立案などで大学と地域が連携することが考えられる。人と文化を「共に育てる」発想が地域の活性化につながるだろう。

## 1 はじめに

### 1.1 「地（知）の拠点整備事業」のねらい

十文字学園女子大学は2014（平成26）年に文部科学省「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」に採択された。これは自治体等と連携し、地域を志向した教育・研究・社会貢献を積極的に進める大学を国が支援する事業で、大学が地方創生を担う地域の「知」の拠点（Center of Community）となり、産学官民を越えた連携を生み出して、様々な問題解決に取り組み、さらには主体的に行動できる学生の育成を目指すものである。地域の複合施設として、2012（平成24）年に開館した「ふるさと新座館」ホールにはスタインウェイ・ピアノが常設されている。COC事業が展開された2014年からの5年間は、ふるさと新座館が知名度とホールの稼働率を高め、より地域に愛される文化施設となっていくためにアイデアが求められる時期と重なっていた。久保田は2015（平成27）年に十文字学園女子大学に着任し、専門分野であるピアノ演奏、音楽表現の指導を通して学生・教職員と共に「ふるさと新座館」ホール活性化事業に参加することになった。

### 1.2 ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業のねらい

地域を志向した研究・教育・社会貢献を目指すにあたり最も重視したのは教育的側面である。大学での学びには、授業だけでなく自主社会活動などの課外活動に積極的に参加し、学科や年齢を越えた学生同士の交流を持って視野を広げることや、課題を見つけて一つのことを深く探究することが必要だと考える。人と協力して一つの舞台を仕上げ、地域の人と共有していく表現活動や音楽には、教師や保育士、社会福祉士を目指す学生たちがどのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るかという「学びに向かう力・人間性等」を総合的に磨く力があると考えた。本企画では、プロのアーティストによるクラシック音楽の演奏と学生による舞台発表を組み合わせた構成で2時間程度のコンサートを実施し、ホールの活性化に寄与することを目指したが、学生の活動としては、①来場者の姿を想像しながら全体を構

1) 十文字学園女子大学 児童教育学科

成していく企画力 ②作品解釈を深めるための読解力 ③作品解釈だけでなく学生自身の生き方を伝える表現力 ④表現内容をより良いものにしようと追求する過程で学生が意見を表明できるようになることを重視した。また、地域をキャンパスとすることは教育活動にどのような意味があるのか、久保田自身が学ぶことにした。

今回、活動の場となった公共ホールは、どのような目的で置かれ、文化芸術には何が求められているのだろうか。日本の文化芸術全般にわたる基本的な法律として「文化芸術振興基本法」が2001（平成13）年に制定された。文化芸術は「人々の創造性をはぐくみ、その表現力を高めるとともに、人々の心のつながりや相互に理解し尊重し合う土壌を提供し、多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するものであり、世界の平和に寄与するものである。更に、文化芸術は、それ自体が固有の意義と価値を有するとともに、それぞれの国やそれぞれの時代における国民共通のよりどころとして重要な意味を持ち、国際化が進展する中であって、自己認識の基点となり、文化的な伝統を尊重する心を育てるものである。（前文）」とし、「国民がその居住する地域にかかわらず等しく、文化芸術を鑑賞し、これに参加し、又はこれを創造することができるような環境の整備が図られなければならないこと。（第二条第三項関係）」、「多様な文化芸術の保護及び発展が図られなければならないこと。（第二条第五項関係）」などが基本理念として掲げられた。

政府では同法に基づき4次にわたって策定された「文化芸術の振興に関する基本的な方針」のもと、文化芸術の振興に関する取り組みを進めてきたが、少子高齢化、グローバル化の進展など社会の状況が著しく変化する中で、文化芸術の振興にとどまらず、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業等の各関連分野との連携を視野に入れた総合的な文化芸術政策の展開が、より一層求められるようになってきたことから、2017（平成29）年に「文化芸術振興基本法」の一部を改正し、名称も「文化芸術基本法」へと改められた。改正後は、国、独立行政法人、文化芸術団体、民間事業者等の連携・協働についても新たに規定された。

文化芸術を継承・創造・発信し、人が集う場所である文化施設の活性化に関する法律としては2012（平成24）年に制定・施行された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」がある。この法律では劇場、音楽堂等を設置し、又は運営する者、実演芸術団体等、国、地方公共団体の役割を明確にするとともに、これらの関係者等が「相互に連携を図りながら協力するよう努めるものとする」と定められている。

比較的小さな町にもオペラやバレエが上演される劇場があり、様々なジャンルのコンサートが開催されているドイツと比較すると、日本では実演芸術団体の活動拠点が大都市圏に集中する傾向があり、相対的に地方では芸術に触れる機会が少ないという実感がある。どこに住んでいても多様な文化に触れる機会が保障され、幼児から高齢者まで生涯にわたり文化的な暮らしができるよう、鑑賞・創造・発信・学習・交流の場として公共ホールが地域の人の成長や自己実現を支援できることが望ましい。文化を通して人のつながりを作っていくことは、その地域の一員であると自覚し、地域を愛する人を増やすことにもつながり、ホールが活性化することは地域活性化にもつながっていく。

大学の教職員や学生と共に、公共ホールで活動する中で、地域の方と音楽・文化を通して交流し、共に課題に向き合い、音楽家としても教育者としても成長したい。そして、この活動によりホールで生演奏に触れる楽しみを見つけ、今後も鑑賞や創造的な活動を希望する方が少しでも増えたら、その方たちはより良い社会を作るため協力することのできる地域の仲間となるだろうと考えた。

## 2 ホールを取り巻く状況

### 2.1 新座市の特色

新座市は、埼玉県の南端に位置する人口16万5千人（2017年4月時点）の都市で、地形的には柳瀬川・黒目川の開けた沖積低地と、それに挟まれた野火止台地から成り、古くから

宿場や交通の要所として栄え、発展してきた。都心から 20km ほどの距離にありながら、平林寺の境内林は総面積 13 万坪の広さを持ち、かつての武蔵野の雑木林の面影を残す文化財として国の天然記念物に指定されている。また、市内には全長 24km の用水路「野火止用水」が文化遺産として残されている。

黒目川沿いには、旧石器時代から古墳時代まで、100 ヶ所以上の遺跡があり、3 万年前から人が住んでいたことが分かっている。一方で、野火止台地には遺跡はほとんどなく、江戸時代になって野火止用水が開削されるまで、台地での水不足は深刻な問題だった。その状況を一変させたのは、3 代将軍徳川家光を補佐し、川越藩主の座にもあった老中「松平伊豆守信綱」である。この人物は、玉川上水完成の功績により、玉川上水から 3 割の分水を許され、家臣の安松金右衛門に命じて 1655（承応 4）年にわずか 40 日で「野火止用水」を完成させたと言われている。この地の人々の生活を支えた用水路は、1973（昭和 48）年に水事情の悪化などから東京都が玉川上水からの分水を止めたことに伴い暗渠化していたが、文化的価値の高い野火止用水を絶やしてはいけないということで、1984（昭和 59）年には高度処理水を使用して流れが復活した。地域のボランティアによる清掃・美化活動、ホテルや野鳥のいる環境づくり、子どもが自然を体験できるようなサポート活動も頻繁に行われている。十文字学園女子大学はこの新座市に位置し、後述する学生たちが取り組んだ朗読詩には、野火止の歴史と、自然を守る現在の人たちの活動が描かれている。

## 2.2 新座市の公共施設「ふるさと新座館」の概況

ふるさと新座館は 2012（平成 24）年 11 月に開館した。ふるさと新座館ホール、野火止公民館、新座農産物直売センター（とれたて畑）、観光インフォメーションコーナーを併設する複合施設である。ホールは客席数 240 席（ほか車いすスペース 6 席）、舞台面積 154.2 平方メートル、残響時間（反射板使用時）は満席時で 1.0 秒である。小規模ながら固定席で座席の間隔がゆったり設計されており、音響的にも舞台と客席の一体感が作りやすいという特徴を持っている。またスタインウェイ・ピアノを常設している。公民館には講義室、体育室、調理室があり、料理教室や制作教室などのイベントで貸し出しが行われている。

開館当初から「ふるさと新座館」は新座市の直営であったが、2018 年（平成 30）年 4 月より、新座市立野火止公民館及びふるさと新座館ホールの管理・運営は指定管理者が行っている。2017（平成 29）年までは貸館としての利用が主であったが、2018（平成 30）年以降にはホールのスタインウェイ・ピアノ演奏体験、落語、影絵劇、尺八とギターのコンサートといったいくつかの企画が主催事業として行われている。

## 2.3 公共ホールが抱える課題

公立の文化施設は「平成 26 年度 地域の公立文化施設実態調査」によると全国に 3,056 施設ある。公共ホールは 1990 年代に約 1,000 館が新たにオープンしたが、施設建設というハード面の整備が進む一方で、運営や文化事業のソフト面の整備が追い付かない行政の姿勢に厳しい目が向けられていく。こうした状況の中で、文化・芸術の振興による創造性豊かな地域づくりを目的として、全国の地方団体等の出捐により 1994（平成 6）年に一般財団法人地域創造が設立された。主な活動内容は以下の 5 つで、各種支援事業（音楽・ダンス・演劇・邦楽・美術・助成）など、多彩なプログラムを実施している。

- (1) 地域における文化・芸術活動を担う人材の育成
- (2) 地域における公立文化施設の利活用の促進を支援
- (3) 地域において活動が期待されるアーティストの確保
- (4) 地方団体が単独では実施困難な連携事業等を支援
- (5) 文化・芸術活動を通じた地域づくりのための調査研究

多くの人にコンサートホールに足を運んでもらうためには、聴衆または利用者としてホールを活用している人だけでなく、無関心層・芸術未経験層にも働きかけ、芸術に関心のある人を増やす取り組みが必要となる。また、ホールに足を運べない事情のある人や子どもたちに生の音楽を聴く機会を提供し、音楽に触れる経験をしてもらうことが有効であるという考え方から、一般財団法人地域創造や文化庁は小学校などにアーティストが出向いて演奏を届けるアウトリーチの支援に力を入れている。近年では大学にアートマネジメントを専門的に学べる学科ができ、演奏者を育てる音楽大学でもアウトリーチの考え方や聴く人に寄り添った実践に関する授業をキャリア教育の一環として取り入れつつある。

公共ホールの年間平均稼働率は、「平成 26 年度 地域の公立文化施設実態調査」によると、専用ホールの設置主体別に見ると都道府県で 70.3%、政令市で 70.3%、市区町村では 56.0% となっている。文化に関心を持つ人を増やし、ホールの稼働率を上げていくためには、自主事業費の確保だけでなく、幼児・児童への情操教育と質の良い音楽などの文化に触れる機会の提供、ホール運営者の育成、アーティスト・イン・レジデンスを置くなど演奏家との連携、友の会・ボランティア団体・大学など施設の運営に協力できる人との協力体制の構築、地域のニーズに応え、地域の特長を生かした文化計画を立てられる芸術監督や民間プロデューサーの起用など、重層的かつ継続的な取り組みが求められる。

### 3 ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業の内容

#### 3.1 2015（平成 27）年「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」開始

初年度には、新たに企画の基盤を作ることに着手した。着任したばかりの 4 月のうちに、大学を挙げて取り組んでいる COC 事業に、公共ホールのピアノを活用したコンサート企画で参加することを検討し始めた。教職員に相談し、児童教育学科より狩野浩二教授、地域連携推進課より野口志都代氏（現広報課）・近藤優子氏・古澤まゆみ氏、メディアコミュニケーション学科より石野榮一教授・棚谷祐一准教授・川瀬基寛准教授、地域連携推進機構より名塚清特別招聘教授、広報課より原一彰氏（現学生支援課）、当時職員だった安達貞治氏・福島聡氏と人間的に温かく、尊敬する教育者である共同研究者を得た。続いて、久保田が担当していた「保育の表現技術Ⅰ（音楽表現）」履修者の中から人間福祉学科 社会福祉・保育コースの 1 年生 7 名、チラシ作成にメディアコミュニケーション学科 4 年生 1 名が参加することになった。採択が決まるとすぐに学生と教職員が集まり、公演名を検討し、チラシやプログラムに掲載するロゴについても話し合いを重ね決定した。公演名と学生の手書きのスケッチを基にデザインされたロゴは、次年度以降も後輩に引き継がれていった。コンサートは新座市教育委員会と十文字学園女子大学が共同で開催し、新座市と新座市文化協会が後援した。この形も 2018（平成 30）年の COC 事業最終年度まで継続された。新座市教育委員会にはホールの使用や広報に関して協力して頂くことができた。広報は、学生がデザインしたチラシ配布や「広報にいざ」で告知の他、棚谷准教授が COC 事業研究プロジェクトとして学生と共に制作していたラジオ番組「JUMONJI☆Campus Tea Party」（すまいる FM）内のコーナーに学生が出演し、朝霞市、志木市、和光市、新座市で放送された。



図 1) 学生がデザインしたコンサートチラシ



図 2) 地域連携を象徴するロゴ

コンサートの構成として、ふるさと新座館のスタインウェイ・ピアノの音色をできるだけ多彩なプログラムで地域の方に聴いて頂くため、ピアノソロと室内楽を両方演奏することにした。室内楽ではヴァイオリニストの上野真理氏の協力を得た。学生の発表内容については話し合いを持ち、教員からは観客とコミュニケーションが取れる参加型企画にすることを勧めた。協力アーティストがヴァイオリニストだったこともあり、①ヴァイオリン体験（公演当日に客席から希望者を募り、実演後に学生がインタビューを行う）②学生が手話ソングをステージで指導し、観客と一緒に歌と手話を体験するという2つのプログラムが決まった。手話ソングの選曲は学生が担当した。来場者アンケートの結果、全員合唱が好評を得たため、手話ソングをプログラムに入れることが後輩にも引き継がれていった。

ホール及びホール常設のピアノの知名度に関しては、来場者アンケートの結果、80.4%の来場者がふるさと新座館ホールにスタインウェイ・ピアノが常設されていることを初めて知ったと答えた。来場者は年によって変わるため単純な比較はできないが、2回目以降のコンサートでは「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」でホールのスタインウェイ・ピアノを初めて知ったと回答した人の割合は66.1%（2016年）、53.4%（2017年）、50.4%（2018年）と緩やかに減少したものの依然高い割合を示した。ホール常設の楽器が表現の幅と豊かな響きを持っていることはできるだけ早く、広く認識されるべきである。ホールの魅力の一つであるスタインウェイ・ピアノの、楽器一台一台で異なる音色や個性を来場者に新たに伝えることができればそれは意味のあることであると考えている。

### 3.2 2016（平成28）年「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」（2年目）

クラシック音楽と学生の発表2本という構成を継続することにした。2回目はNHK交響楽団のチェリストである渡邊方子氏と、ヴァイオリニスト渡邊史子氏の協力を得て、ピアノ・トリオのプログラムを組むことができた。出演学生は人間福祉学科の1年生5名と3年生4名、チラシ作成はメディアコミュニケーション学科の学生が担当した。新たな展開として大学図書館の職員であった久保裕子氏（現学生支援課）が共同研究者として加わり、朗読や創作の才能を生かして、新座の民話「妙音沢」を再構成したオリジナル台本を創作し、学生の朗読指導にも参加するようになった。久保氏は新座市で子ども時代を過ごし、新座市立東野小学校で「妙音沢」について学んでいた。新座の民話集が発行される際に小学生が挿絵を描くことになり、クラスの仲間の絵が採用されたことを図書館で久保氏に話したことがきっかけとなり、新たな挑戦として地域を題材にした創作活動を2回目のコンサートの課題にした。民話「妙音沢」には、新座市野寺付近を流れる妙音沢で主人公が琵琶の秘曲を聴く場面があり、そこから沢の名前がつけられたことから、詩の朗読の間に音楽を入れてイメージをふくらませることができるのではないかと思いついた。琵琶は手に入らず、民話とは違う楽器の音色となることについては何度も議論があったが、沢の音や木々の間に風が通りぬける雰囲気音を音にしてみようということになった。参加した人間福祉学科3年生が、中学生の時に吹奏楽部で吹いていたフルートを持って来て、創作した旋律で尺八のようなくぐもった音を出そうと工夫したり、学内にあるシェイカーやギロを使って沢のほとりに居るかのようなイメージを伝える音楽づくりに挑戦したりした。夢の中の音を表すならフィンガーシンバルの音色も合うのではないかと学外からも楽器の提供があり、たった一度だけその楽器を鳴らすために学生が試行錯誤して練習をする場面もみられた。また、民話、回想、現在と作品で扱う時間的な広がりが大きかったため照明を工夫することになり、学生がオリジナル作品の全体（言葉・音）を把握した上でホールの舞台技師にインカムで切り替えのタイミングの指示を出した。地域を題材にすることは最初から決めていたわけではなく、学内での会話から偶発的に生まれたものではあったが、知恵を集結すると創作活動ができることが分かり、聴いて下さる地域の方との一体感を強く感じることもできる舞台となった。

この年には、コンサート以外にも「ホール活性化」に貢献できないかという発想が生まれ、コンサートに出演した久保田のゼミ生と、メディアコミュニケーション学科の石野教授のゼミに所属する中国からの留学生が共同で「ピアノ体験事業」を開催した。大学より新座市教育委員会生涯学習スポーツ課に企画内容を提案し、抽選で選ばれた10人(組)の希望者にホールを1時間単位で開放し、ふるさと新座館ホールのスタインウェイ・ピアノを実際に演奏して直接知ってもらうことができた。厳正な抽選の結果、参加が叶わなかった方も多かったが、2018(平成30)年以降はホールの指定管理者が引き続きピアノ体験事業を月1回ほどのペースで開催している。敏感で表現の幅が大きい楽器に触れると、普段家庭では出せなかったピアノの音色に出合う。ホールに広がる音の伸びや響かせ方を知ることによって音の「聴き方」が変化し、家庭や別の場所でもホールで体験した音を再現したくなることだろう。



図3) 音楽でつながるひととき

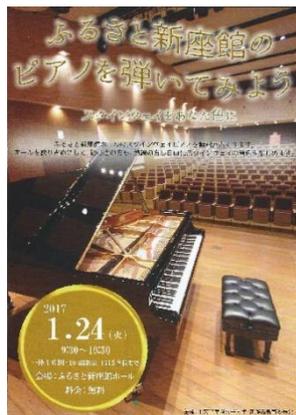


図4) 学生が企画運営した「ピアノ体験」チラシ

### 3.3 2017(平成29)年「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」(3年目)

2年目の企画で地域を題材にする発想を得て、3回目は十文字学園女子大学の学生と教職員で総合表現の作品を創ることを考えた。学長の横須賀薫氏(当時)に武蔵野をテーマとした詩が欲しいこととお話した。創作のための取材とフィールドワークでは、児童教育学科の星野敦子教授がCOC事業研究プロジェクトで行政と市民団体をネットワーク化し、野火止用水・雑木林の維持・保全活動や子ども自然体験学習などの活動を行っている「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」(HUG ネット)のメンバーに協力を頂いた。

横須賀前学長は野火止の歴史、地形、和歌に詠まれた武蔵野の昔の姿、現在地域に生きる人々の姿を5連から成る詩「野火止の水と緑と」に書き下ろして下さり、その詩を朗読してみたところ、野火止用水を引いた実在の人物の想いや、成し遂げた仕事の大きさが想像され、さらには今ある新座の景色も、ここで生きている私たち一人ひとりも、かけがえない存在なのだというメッセージが感じられた。横須賀前学長は、作曲は久保田が担当し、学生と協力して取り組めばよいとおっしゃり、プロの作曲家に任せたり専門家の協力を仰いだりすることを禁じてしまった。久保田は音楽大学で和声や音楽理論を学んだものの作曲の経験は皆無であった。作曲をする日が来ると考えたこともなかった。しかし、専門家であるかどうかに関係なく挑戦したい、なんとしてでも形にしたいと思った。

作曲は、水の流れる様子や描かれた景色を想像し、詩に導かれるように進められていった。しかし、詩を語りながらピアノを弾き、音を楽譜にしてみたものの、実際に全体を通してみると、大事な言葉が引き立つことも、ドラマの起伏が十分に伝わることもなかった。今回のコンサートに参加した人間福祉学科の1・2年生8名には、何度も部分的な修正に協力してもらった。複数の選択肢の中からどちらのリズムが言葉の抑揚に合うか比較検討したり、言葉が引き立つように間奏を加えるため、何度も同じ箇所を読みながら音と言葉の重なりを確かめたりした。手書きの楽譜には短冊状の修正譜がいくつも切り貼りされて

いった。こういった困難に直面する中で、学生や教職員は率直に意見を言い合うようになり、朗読・独唱・合唱からなる総合表現の作品が目の前に現れていた。2017（平成 29）年 10 月にはふるさと新座館で初演を行い、2018（平成 30）年 2 月に開催された「COC 事業地域連携フォーラム」で、第 5 連の最後を合唱にするなどの修正を加えた改訂版を児童教育学科の 1 年生 5 名と共に発表した。この時には身体表現も加わり、より総合表現に近づくものとなっていた。

この年には打楽器奏者の吉岡理菜氏がマリンバ、ヴィブラフォン、バラフォン、スネアドラムを会場に運び入れ、それぞれの楽器や奏法について興味が高まる解説を加えながら躍動感あふれる音楽を聴かせてくれた。ピアノの隣に並べられた打楽器からは振動が客席全体に広がり、ホールで音楽を聴く醍醐味が感じられる舞台となった。

地域連携フォーラムで「野火止の水と緑と」を発表した学生からは、実際に野火止用水を見た方が良いのではないかと提案があり、フィールドワークが行われた。野火止用水のせせらぎや鳥の声を聴き、水はけの良いこの地に育つ作物の様子や地域のボランティアの方の仕事を目の当たりにして、学生の声や身体表現はより実感のこもったものになっていた。地域を題材にしたこの表現活動に取り組んだ学生への自由記述のアンケートでは、「歌詞を読み込み、歌い、実際に見に行くことによって、自分の大学がある地域について深く知ることができた。地域愛が芽生え、より良い環境にしたいと強く考えるようになった」、「野火止用水が地域の方々にとって大切だということがわかり、活動を通して地域連携の大切さに気付くことができた。自分が新座の大学に通っていることに誇りが持てた」、「表現活動を通して、自分の伝えたい気持ちがどのようにしたら相手に届くのかを学んだ。たくさんの人の前に立っても、揺るぎない意志を持ち、相手の心に響くように、自信を持って表現することの大切さを学んだ。今後の教職に就く為の学びに生かしたい」、「表現力の点でまだ、言葉による発音、トーン、強弱、全身をまんべんなく使うこと、手の先まで意識のいった動き、など様々なことが欠けている。しかしプラスに考えればまだこれからも伸ばせるということなので、今回学んだことを生かしていく」と述べた。地域をテーマとした表現活動への取り組みが、より良い地域を作りたいという考えを呼び起こし、詩の舞台となった地域の大学に通っていることに誇りを持つことにつながり、自分はまだできるという向上心を育んでいた。



図 5) 野火止用水（2017 年 4 月撮影）



図 6) 「野火止の水と緑と」の楽譜

### 3.4 2018（平成 30）年「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」（4 年目）

COC 事業最終年度の 2018（平成 30）年は、プロのオペラ歌手である北澤幸氏（メゾ・ソプラノ）が共演者となった。鈴木三重吉が創刊した童話と童謡の児童雑誌「赤い鳥」発刊

100周年にちなんで、童謡とオペラアリアを中心としたコンサートとなった。また、学生参加プログラムでは、児童教育学科の1年生7名が「野火止の水と緑と」を再演し、手話ソングには「花は咲く」を選んだ。公演前の9月21日には、新座市立第二中学校の全校生徒930名の前で「野火止の水と緑と」を発表させて頂ける機会を得て、2つの発表に向けて練習を重ねていった。学内練習やホールでのリハーサルには、昨年度の出演者である学生が経験を後輩に伝えようと自発的に参加し、発声、言葉と言葉の間の取り方、視線、和歌を詠む際の息の使い方など実演しながらアドバイスを与えていた。1年生は、先輩たちのよく通る実感のこもった声、詩の内容に柔軟に反応し全身で表現していることに初めは圧倒された様子であったが、それぞれに言葉の中味を理解して表現しようと努力し、互いに率直な感想を述べて教え合うようになっていった。発表の際には自信を持って会場の隅々まで朗読や歌声を届けた。「野火止の水と緑と」は、学生の力で作品として育てていった。

この作品の楽譜は浄書・印刷がなされ、2018（平成30）年9月28日の新座市教育委員会への楽譜寄贈、10月4日の校長会における久保田のプレゼンテーションを経て、新座市内の全小中学校の図書館に楽譜を置いて頂くことになった。野火止用水の美化活動に参加している中学生、野火止用水の傍に立つ木々に種類が分かるよう名札をつけた小学生、地域の歴史や地理を学ぶ子どもたちが、地域をテーマとする表現活動に関心を持ってくれる日が訪れたら嬉しい。

また、この年には新座市観光ボランティアガイド協会が創立10周年を迎え、その記念式典で「野火止の水と緑と」のライブ録画の映像を用いて、地域連携から生まれた表現作品を鑑賞したとのことである。公共ホールで行われた「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」の来場者数は、2015（平成27）年には164名であったが、その後2016（平成28）年に177名、2017（平成29）年に206名、2018（平成30）年に208名と増加した。来場者アンケートによると、十文字学園女子大学の学生の発表とクラシックのコンサートを楽しみに毎年来場して下さる方もいて、手話ソングで会場が一つになることに出演者・大学スタッフ共に励まされた。



図7) 新座市立第二中学校で発表



図8) 学生の舞台挨拶で4年間の活動を締めくくる

## 4 地域連携による表現活動に関する考察

### 4.1 教育的意義

学生は、本事業を通して複数の役割を経験している。一つは多くの人の前に立って歌や朗読などを披露する表現者としての役割である。学生たちはさらに、公演までの5ヶ月ほどを企画制作者として、公演当日は会場の運営スタッフとして来場者のことを考え、行動していく。先の1.2で挙げた教育的ねらいがどのように達成されたと考えられるか、また、地域

連携による表現活動がどのような教育的意義を持つのか、練習や話し合いに共演者・教員として参加した久保田の目から見た学生の成長の様子を基に考察する。

### ① 来場者の姿を想像しながら全体を構成していく企画力

コンサートの企画・運営ができるためには、コンサートの実際のある程度知っており、起こりうる問題を事前に想像する力が必要となる。参加した本学学生の多くは舞台発表の経験を持っておらず、公演会場となったふるさと新座館ホールに足を運んだことがなかったため、事前にホールを見学し、複合施設である建物入口からホールまでの距離、案内が必要な場所、受付から客席内までの動線、避難経路、備品の収納場所と配置、客席からの見え方、音響などを確認した。また、受付等の会場設営については、シンポジウムや講演会で設営に慣れている地域連携推進課の職員が立ち合い、学生が人から教えられた通りに動くのではなく、来場者の身になって、安全性や快適さを考えながら準備できるよう指導した。学生は会場を見たことで発表への実感が湧き、互いに舞台に立つ姿を客席から見あうなどして、自分がどう見えるのかを把握しようとしていた。空間を知ったことで舞台への出入りや、演奏と演奏の間をつなぐ部分はどうしたら無駄がなく美しいか、学生自身が考えられるようになった。これまでに本企画に出演者として参加したのは人間福祉学科と児童教育学科の学生であり、将来は人前に立ち、子どもや利用者の表現活動を指導する仕事に就く。歌や朗読などの練習・発表にとどまらず、来場者と共に過ごす時間をどう作りたいか具体的に考える経験することは、学生の社会人としての基礎力を向上させるだけでなく、自分が地域とのつながりの中で生かされていることを知る機会となる。公共ホールで活動することにより、「表現」というものは聴いて下さる方とのコミュニケーションによって高められ、常に新しく創造されるものだということを体験的に学ぶことができる。

### ② 作品解釈を深めるための読解力

学生が取り組んだ「野火止の水と緑と」には、日常ではあまり使われない難しい言葉が登場した。辞書を引きながら言葉の意味を理解し、情景を想像していく必要があった。また、水道の蛇口をひねれば水が出る環境に暮らしている私たちには、「ぜひとも必要になったのが水だ」という詩を実感のこもったものにすることが簡単ではなく、解釈を深めるための議論や表現の工夫が欠かせなかった。練習の過程で「学生の声に切実さが足りないのは音楽のせいではないか」という狩野教授の指摘を受け、曲を部分的に修正しながら言葉と音による総合表現を研究し、自分たちなりの詩の解釈を試みた。今回の創作への挑戦は、言葉に立ち向かい、イメージがつかめなければ作品の方に修正を加えながら解釈を議論し、目の前で作品が作られ完成に向かっていくという創造的な活動であった。このことは、再現芸術であるクラシック音楽を研究してきた久保田にとって、発想が揺すぶられる感覚を伴うものであり、言葉の理解と解釈に完成はなく、再創造することで形づくられていくことを認識する場となった。地域を題材としたことにより、実際に現場の景色を見ることが可能であり、フィールドワークで各自イメージを深めることができたのも作品形成に大きな意味があった。児童が地域の地理や歴史を学び、言葉や絵画、踊りや音などによる表現活動を行っている実践報告が各地にあるが、今回の大学生による表現活動からも、言葉の読解力・イメージする力・表現力を高めるという点で、実際に足を運んで現場を見て、感じ取ることでできる地域を題材にするのは良い方法ではないかと考えている。

聴く人が詩の言葉から情景を思い浮かべ、頭の中で作品を再創造しながら鑑賞するためには、余計な飾りをそぎ落とすことも必要なプロセスである。練習の際には朗読に造詣の深い職員、久保氏が時にアクセント辞典を引きながら指導に当たり、ほんのわずかな言葉と言葉の間や抑揚の違いが場面全体に大きな影響を与え得ることを指摘した。読解力は、実際に見る、イメージする、声や身体を使って自分なりの解釈で表現する、客観的に聴く、必要に応

じて一度作り上げたものを捨てて再構築することを繰り返すことで身につけていくものである。

### ③ 作品解釈だけでなく学生自身の生き方を伝える表現力

作品の内容を音や言葉で伝えるだけでなく、学生自身の美しさ、生きる姿といったものが表れることが大学における表現活動の目的の一つである。本学では児童教育学科に「表現活動（基礎）」「表現活動（応用）」（担当：狩野・久保田）という授業があり、教員を目指す学生が声や身体による表現力を磨き、児童への指導力をつけることを目指して総合表現に取り組んでいる。COC事業は単位認定のない授業外の活動であり、自主的な活動であるが、4回目の「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」と3年目の「地域連携フォーラム」に出演した学生はこの授業の受講と並行して舞台発表に向けた練習に取り組んでおり、間違えずに発表することが目的なのではなく、自分なりのイメージを持って作品を表現することや、自分自身の良さを見つめてそれを堂々と表現することに意味があるという価値観を学んでいた。表現活動は誰でも持っている優れた性質や才能といったものを開花させるだけでなく、自分の周りの人の中にある美しさや一人ひとり違う個性を見抜く目を育てるものである。このことは、教育における表現活動の存在価値として注目されるべきものであると考える。実際の公演を聴いて下さった福祉施設の施設長が、数ヶ月後に大学の授業にゲストスピーカーとして来校された際に、参加していた学生をすぐに見抜き、「表情・顔つきから、表現活動をしたことのある学生かはすぐに分かる」とおっしゃっていた。表現活動の教育的な成果は、多くはこのような数値で計れない表情や積極性などの形で現れ、学生たちの今後の成長と生き方の中で明らかになるものではある。しかし、公演に向けた練習で徐々に仲間の良さに気づき、人の成長を我がことのように喜ぶようになり、互いにアドバイスをしている学生の姿に、自分と周りの人への信頼が高まっていくのを感じることができた。

### ④ 意見を表明できるようになる

地域を題材にしたオリジナル作品「野火止の水と緑と」を創作するにあたり、学生と教職員の率直な意見交換があったことを先に述べた。それがなければ作品は生まれなかったであろう。しかし、これまで独唱や朗読をする経験が多くなかった学生にとって、一人で言葉を発することは簡単ではなかった。公演に向けた練習の初期には、一文ずつ順番に朗読して聴き合い、良いところや前回の練習から変化した部分を言語化したり、評価し合ったりすることを取り入れた。友人の上達への感動は練習の大きな原動力となった。練習の中期では、学生から「今日は、言葉と言葉の間の取り方に注目しよう」、「感情をドラマチックに出す朗読にするのか、自分に語りかけるような内面的な朗読をするのか、両方やってみて考えよう」、「客席側からどう見えるか、誰か一人が見る役になって確認しよう」といった提案が出るようになり、見通しを持った練習を学生自ら組み立てられるようになった。この頃には、失敗したら恥ずかしいという感情は少なくなり、意見を表明することが当たり前になっていた。後期には、声を遠くまで響かせられるようになり、詩の内容への理解が進み、一人ひとりが自信を深めていった。また、練習の中期よりも学生自身が目標を高く設定するようになり、毎回もっとこうしたいという提案がなされた。朗読詩はピアノ伴奏と一体になっているため、言葉と音楽の重なりを聴き、息を合わせていく「縦の重なり」と、朗読で人の言葉を受けて自分の言葉を紡いでいく「横のつながり」の両方の要素がある。相手の表現を聴き、反応する中で信頼関係が深まり、学生からの提案や意見表明の頻度が数ヶ月の間に増えていった。

## 4.2 地域の一員として大学にできること

十文字学園女子大学の学生は、COC事業に参加する中で、地域の方からより顔の見える存在となり、たくさんの応援を頂いた。コンサートの来場者アンケートでは、学生の真剣に取

り組む姿、伝えようとする気持ち、息の合った歌声などを評価して頂いた。また、新座の色々な題材で朗読詩の創作を継続してほしいという要望や定期的なコンサート開催を望む声、児童が地域を学ぶ教材として「野火止の水と緑と」を活用してほしいとの意見も寄せられた。学生の表現活動から地域の自然環境の魅力を再認識し、地域の自然を守りたいという気持ちを高めたという声や、地域の人たちが大学に協力し共に学生を育てている新座市に魅力を感じたという反響もあった。公共ホールはアイデアと人が集まれば、地域の魅力を発信することや、人と人とのつながりを新たに作り出すことを可能にする。大学と地域で人と文化を「共に育てる」発想が地域を活性化していく。大学は、児童が公共ホールに足を運びたいような教育プログラムの開発、地域の才能あるアーティストの発掘、児童から高齢者まで各世代に向けた内容の公演の立案など、地域の文化活動においても連携することができるだろう。

## 5 おわりに

本事業を開催するにあたりご協力頂いた地域の皆様、4回の公演においてそれぞれの専門知識を持ちより惜しめない助言で導いて下さった皆様、主催者である新座市教育委員会と十文字学園女子大学の関係者の皆様に心より感謝している。今後も、十文字学園女子大学の学生が学内外で人と協力して課題解決に向かい、周りの人とのつながりを豊かに紡ぎながら、常に変化していく社会を感性豊かに生きていくことを願っている。また、地域に根ざした大学の一員として、COC事業終了後も、地域に学び、地域をキャンパスとする姿勢を持ち続けたいと考えている。

### <参考文献>

- ・一般財団法人地域創造、2015年、「平成26年度 地域の公立文化施設実態調査」報告書、一般財団法人地域創造
- ・一般財団法人地域創造、2004年、「公立文化施設職員のための制作基礎知識」、一般財団法人地域創造
- ・「文化芸術基本法」（平成29年6月23日公布・施行）
- ・「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」（平成24年6月27日公布・施行）
- ・十文字学園女子大学地域学習テキスト制作委員会、2016年、「いいね！にいざ2016」、十文字学園女子大学
- ・山本美紀、2013年、「地域の音楽資源の活用による子どもの表現活動充実への一考察—初等教育における音楽体験の場の創造をめぐる—」、環太平洋大学研究紀要、環太平洋大学実践教育研究センター編（7）、43-51頁
- ・ぎょうせい、2004年5月、「公共施設の再生・活性化を探る（1）、公共文化ホール運営に一石を投じた小出郷文化会館」、ガバナンス（37）、ぎょうせい、98-100頁
- ・ぎょうせい、2004年6月、「公共施設の再生・活性化を探る（2）総合プロデューサーを登用して音楽ホールの独自性を発揮—さぬき市志度音楽ホール」、ガバナンス（38）、ぎょうせい、98-100頁



## 地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用

Effective use of local vegetables through cooperation activity with region

曾矢 麻理子<sup>1)</sup>      小林 三智子<sup>1)</sup>  
Mariko SOYA      Michiko KOBAYASHI

**キーワード**：にんじん、ドレッシング、商品開発、産官学連携、地域活性化

**要旨**：近年、地産地消商品の取り組みが盛んであり、道の駅や農産物直売所等で販売する様子が多く見受けられる。また、大学が地域と連携し産官学連携の事業を行う動きも盛んである。このような社会動向を踏まえ、本学の立地する新座市において産官学連携で地域の活性化を目指して地産地消商品の開発に取り組んだ。本稿では、商品化したドレッシングの開発から販売までのプロセス、参画した学生の教育面からの考察、および産官学連携の事業を通して挙げた課題について提示する。

### 1 はじめに

近年、道の駅やアンテナショップなどで、農産物を加工した地産地消商品を販売している様子が多く見受けられる。地産地消の取り組みは、食料自給率の向上に加え、6次産業化にもつながり、農産物加工の成長が期待できる。農林水産省の報告によると、平成27年度の加工・直売所等の農業生産関連事業の年間総販売金額は、平成26年度に比べ、1,008億円増加し、特に加工品においては346億円も前年度を上回っている<sup>1)</sup>。このような動きから、消費者の食に対する安全、安心、また健康志向、地域志向への関心の高さが伺える。さらに、次世代を担う若手農業者からは、「農業関連事業で今後伸ばしていきたい方向」として、「農産物の加工・販売」との声が多く挙げられ<sup>2)</sup>、加工品への注目度が高いことがわかる。一方で、商品を開発する上でのノウハウや人材の不足も課題となっている。

また、大学が地域と関わり、産官学連携のプロジェクトを実施する動きが盛んである。多くの地域で、大学が知の拠点として機能し、地域のニーズと大学のシーズをマッチングさせ、地域の活性化を目的とした社会貢献が展開されている。

このような社会動向から、本学においても、本学の立地する新座市において、大学のシーズを活用した「地場野菜の加工食品の開発」に着手し、地域の活性化に貢献することを目指して活動した。本稿では、本取り組みにおいて得た、企画・開発から商品化までのプロセスと、参画した学生の社会人教育の側面からの考察、および、産官学連携事業を行う上での課題について触れる。

### 2 新座市の農業とドレッシング開発に至った経緯

本学の立地する新座市は東京都に隣接する都市農業地帯で農業の盛んな地域である。にんじん、ほうれんそう、さといもを主要作物とし、耕作面積の大半をこの3つで占める。関東ローム層で覆われた水はけのよい土壌は根菜類を栽培するのに適しており、冬にんじんにおいては、国の指定産地に認定された<sup>3)</sup>一大生産地である。新座市内には80を超える農産物直売所があり、地域の方に新鮮な野菜を直売する地産地消の取り組みが盛んである。埼玉県においても、農産物直売所の年間総販売金額は全国2位であり<sup>4)</sup>、県内でも地産地消に積極的に取り組んでいるといえる。

新座市で収穫された農産物の大半は生鮮食品として販売され、加工食品の数は少ない。既に「にんじんうどん」や「にんじんこんにゃく」が商品化されているが、農産物の加工食品としての開発には展開の余地がある。そこで、新たな加工食品として調理の必要性がなく、簡単に使用でき、新座市の土産物になるような商品として「ドレッシング」に着目した。ドレッシングに用いる野菜は指定産地となっているにんじんを活用することとした。

1) 十文字学園女子大学 食物栄養学科

### 3 学生の取り組み

#### 3.1 社会人基礎力の育成

食物栄養学科の学生は「食と栄養と健康の専門家」として管理栄養士職に就くことを目指している。卒業研究の一環として地場野菜を活用した加工食品の開発を研究している学生もおり、例年地域の催事にてレシピを提供している。ドレッシングの開発に産官学連携で取り組むことは、地域をフィールドとして今までの研究成果を実践し、専門的な知識を発揮できる貴重な契機となる。また、商品化するまでにはコンセプトの立案やターゲット層の選定、レシピの開発、ラベルデザインの考案、販売および普及活動などと、開発から流通までのプロセスを把握しておかなければならない。その工程の中で、直面した課題を解決する能力や、コミュニケーション能力が醸成され、学生にとって社会に出た時に必要なスキルとなる社会人基礎力の育成が期待できる。

#### 3.2 農業体験

学生は月に一回ほど市内の農家にて農業体験を行い、農業を通して野菜の専門的な知識を得る機会とした。手作業で行う収穫は予想以上に重労働であり、「食と栄養と健康の専門家」を目指す学生にとって、食物の大切さを知る貴重な経験となった。収穫物は、傷の確認や大きさの選別などを行い、品質や規格の順守も体験を通して学ぶことができた。その他にも新座市の農業の歴史や特徴をはじめ、周年販売されている野菜の旬の時期、品種による調理用途の違い、野菜のおいしい食べ方など、野菜についての知識を農家の視点から教わった。また、本農家は学校給食にも地場野菜を供給しており、給食調理も担う管理栄養士として野菜の供給者の声を聴くことができた。



写真1 にんじんを収穫する様子1



写真2 にんじんを収穫する様子2

## 4 商品化までの流れ

### 4.1 商品コンセプトの立案とターゲット層の選定

にんじんを活用したドレッシングを開発するにあたり、商品のコンセプトを定めた(図1)。ターゲット層、地域のニーズ、商品の特徴を決定し、継続して取り組めることもコンセプトに組み込んだ。子供のいる保護者をターゲット層に入れたのは、育児に忙しい保護者がドレッシングを活用することで料理の中ににんじんの栄養素を少しでも取り入れやすくなること、またにんじんが苦手な子供でも、ドレッシングを活用して食すことで克服のきっかけを作ることを目的にしたためである。

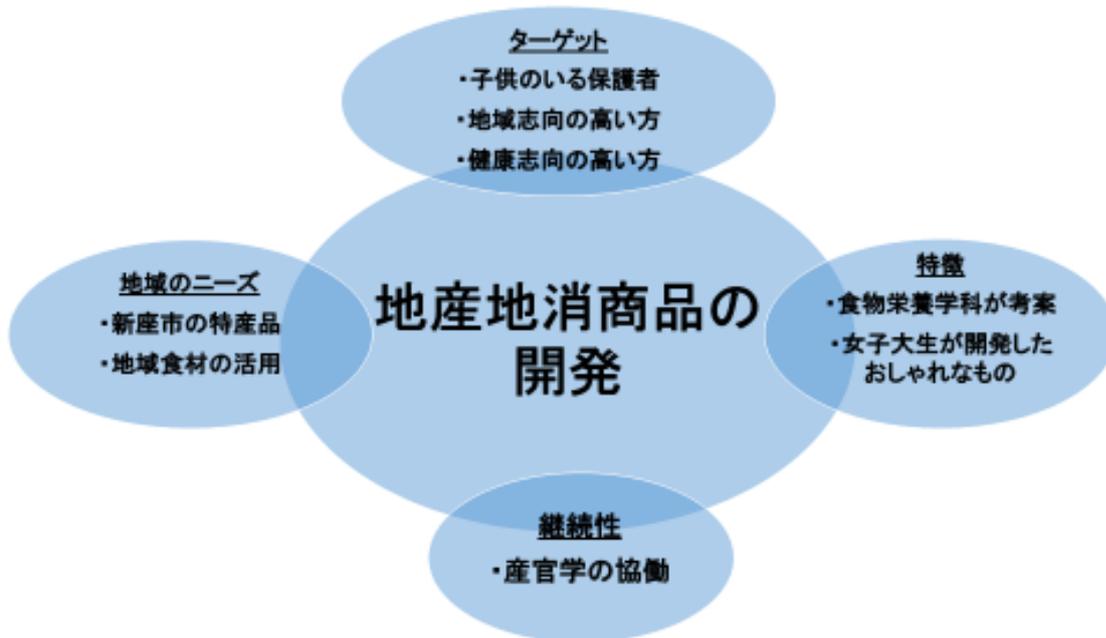


図1 商品コンセプト

### 4.2 にんじんの品種選定と正規品の使用

ドレッシングに適しているにんじんの品種選定を行った。学生が農業体験で収穫したにんじんを用いて、調味料の検討、微生物検査、味の官能評価(十文字学園女子大学研究倫理審査 2015-018)等を行い、比較調査した。新座市内で栽培されているにんじんの中から、 $\beta$ -リッチ、 $\beta$ -312、愛紅、向陽、金美の5種類に絞り、色、糖度、 $\beta$ -カロテン量、味を比較した。その結果、 $\beta$ -312が $\beta$ -カロテン量が多く、加工後の色も鮮やかであったことからドレッシングに最適と判断した。また、加工するにんじんは規格外品のものではなく、通常出荷される正規品を使用した。農産物の加工品の事例では、規格外の野菜で加工する取り組みが多い。しかし実際はにんじんのまた割れや小さいものなどは一次加工に手間を要し、そこに人件費がかかるとの指摘を企業側から受けた。本取り組みでは、野菜の一次加工を企業が行うため、規格外品の加工にコストがかかると商品の価格アップに繋がってしまう。さらに、規格外の野菜を用いることは農家の収入には反映しない。正規品を使用することは農家の収入にも繋がり、将来事業が広がることで、加工用野菜の作付面積の拡大が見込める。また、需要に応じた生産が可能になることもメリットになるといえる。

### 4.3 ドレッシングの調味料割合と配合

「にんじんを食べているようなドレッシング」をコンセプトに、にんじん量の多いドレッシングを試作した。ドレッシングはビンに充填する際の粘度が製造過程での重要な要素になるため、最大限に入れられるにんじんの割合を調整した。また、調味料に関しては、酢、油、砂糖、塩、醤油、本みりん等の配合割合を変えて試作を繰り返し、その都度開発している学生と嗜好調査を行った。酸味の強さが改善事項となったため、糖の種類によるドレッシングの酸味抑制効果を調査した。糖

を上白糖、黒砂糖、きび砂糖、水あめの4種類に変えて官能評価を行い、最も酸味抑制効果があると思われたものを使用した。また、賞味期限や衛生面、製造の方法など、大学側では判断できない点に関しては、企業側から知見を得た。試作は少量で行っていたため、大量製造になると観点が変わってくるのがわかり、大学側と製造業者とで視点のすり合わせをし、商品化を進めた。



写真3 学生が試作をしている様子



写真4 学生が試食をしている様子

#### 4.4 ラベルデザインと商品名の決定

女子大生が開発する商品として品の良さにこだわり、百貨店等でも取り扱えることを想定してラベルデザインの考案を行った。ラベルデザインは開発に携わった学生で原案を起し、それを基にデザイン業者(事務所名:デザイン想)に依頼した。新座の特産品になることを意識して「新座」の文字をロゴマークに入れ、地産地消商品であることを強調した。ラベル裏面のQRコードからは大学のホームページにアクセスできるようになっており、本学の宣伝効果も付随させた。また、商品名は学生たちが考案したもので「にんじん畑ドレッシング」とした。農業体験を踏まえた、にんじん畑を想像できるような商品名となった。

#### 4.5 製造

にんじんの収穫期に合わせて、平成29年2月下旬ににんじん(β-312)を収穫し、ドレッシングへの加工を製造業者に依頼した。3月初旬には約1,300本の製造が完了した。1本当たりの単価を抑えるため、学生でドレッシングにラベルシールを貼付する作業を行った。平成30年も継続して製造することができた。



写真5 「にんじん畑ドレッシング」

## 5 販売促進

### 5.1 リーフレットの作成

商品化したドレッシングの販売を促進するため、レシピを掲載したリーフレットを作成した。ドレッシングの酸味を活かしたレシピを学生が考案し、健康に留意している方にも取り入れやすいように栄養価を掲載した。サラダに使用するだけでなく、新しい利用方法を提案することでリピート率が増すことを目指した。リーフレットには商品に掲載できなかった開発の経緯や学生の声を載せ、商品に関する情報を提供した。



写真6 配布したリーフレット

### 5.2 学生による店頭販売

JA あさか野、丸広百貨店（川越店）、地域の催事等で、商品の販売を学生自ら行い、商品のコンセプトや付加価値について説明をした。開発に携わった4年生と研究を引き継ぐ3年生が協同して販売することで、先輩の研究内容を後輩が具体的に把握する契機にもなった。また試食を提供し、アンケート調査をすることで、直接消費者の声を聞く機会を得られ、今後の課題を収集することができた。JA あさか野での店頭販売の様子は日本農業新聞に掲載された。



写真7 学生がアンケートを取る様子  
JA あさか野にて



写真8 店頭販売の様子  
JA あさか野にて



写真9 丸広百貨店出店ブース



写真10 学生が商品を説明している様子  
丸広百貨店にて

## 6 ドレッシングのシリーズ化

「にんじん畑ドレッシング」は平成29年、30年と継続して製造することができた。完売するまでに日数を要さなかったことから、地域のニーズに合致していると思われる。また、地域の方や販売者からドレッシングのシリーズ化を提案され、2品目として新座市のごぼうを活用した「ごぼう畑ドレッシング」の開発に着手し、平成31年1月に商品化に至った。平成31年度からは2種類のドレッシングが販売され、両ドレッシングともノンオイルドレッシングとして製造することとした。消費者の声からノンオイルドレッシングの要望が多くあったことを含め、近年注目されているえごまオイルやオリーブオイルなど、好みのオイルを使用してオリジナルのドレッシングをカスタマイズできるようにした。ノンオイルドレッシングにすることで汎用性が期待できる。現在は「ごぼう畑ドレッシング」を用いたレシピの考案や、3品目の商品として枝豆ドレッシングの開発に着手している。



写真11 「ごぼう畑ドレッシング」



写真12 「ごぼう畑ドレッシング」を用いた料理

## 7 まとめ

### 7.1 地域のニーズ

本研究は、産官学が連携し、地産地消商品を商品化するという本学において初めての試みであった。今回商品化に至った「にんじん畑ドレッシング」は、地域に十分需要があることが、店頭販売を通じた購入者の反応からわかった。この商品は地域の野菜で製造した地域志向商品であることをはじめ、企画から製造までのシナリオ、産直による鮮度の良さなど、付加価値が高い。また大学の食物栄養学科が開発したという経緯から信頼できる商品として認知されたものと思われる。この活動を通して、改めて消費者の食に対する関心の高さ、特に安全性への意識が高いことがわかった。

本商品は市販のドレッシングに比べて価格が割高であったが、上記のような付加価値もあつてか、価格への指摘はあまりなかった。当初は食育の観点から、子供を持つ保護者をターゲットとしていたが、結果として年齢層の高い方の購入者が多い傾向にあった。商品の価格が割高であったことが子供を持つ若年層の購入者が少なかった要因と考察するが、購入者の年齢層、商品を購入する際のポイント等の消費者ニーズを今後さらに調査する必要がある。

### 7.2 学生の教育的側面

学生は、本研究を通してプレ管理栄養士という立場で企業と接し、専門的知識を発揮しながらドレッシングの開発に積極的に参画することができた。大学で習得した知識や技術を、地域をフィールドとして実践できたことは、社会人基礎力を育成する側面からも大変成果のあるものであった。特に管理栄養士職に就いた時に必要なスキルとして問われるコミュニケーション能力は、企業との意見交換を重ねることで培われた。さらに農業体験を行ったことで食物を扱うことの大切さに気づき、「食と栄養と健康の専門家」としての自信の創出に繋がった。

### 7.3 大学と企業とのネットワーク

ドレッシングの商品化までには大学と製造会社、販売会社の三者を軸にして、その他、野菜を栽培する農家、野菜の一次加工をする企業とネットワークを組んだ。開発の面では、調味料の割合、試作、アンケート調査等を本学が、サンプルの作製等を企業が行った(図2)。販売の面では、製造数の決定、販路の確保、販路の拡大等を本学が、商品の品質管理や販売促進を企業が行った(図3)。

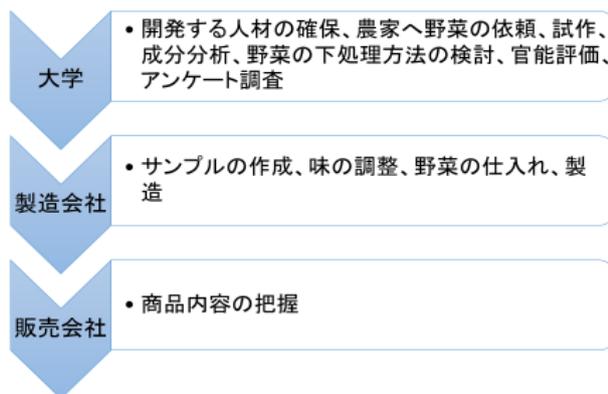


図2 開発の流れと担当項目

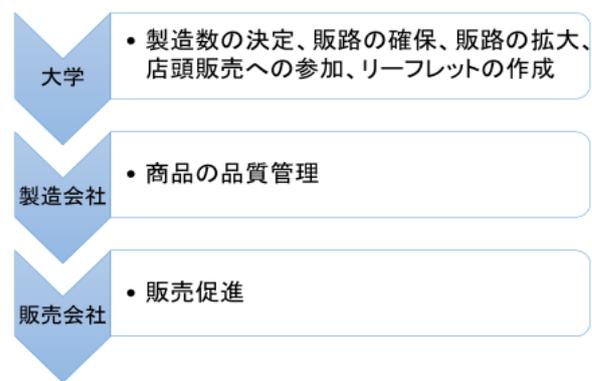


図3 販売に関する担当項目

大学側で行った研究は、知的資源として地域企業に還元し、開発のノウハウとして取り入れた。ごぼうのように下処理方法の違いによってドレッシングの色に大きな差がでるような商品は、本学で官能評価を行って嗜好調査をし、その結果から下処理の方法を決定した。大学側では、マーケティングに関しての知識が浅く、商品化から販売までを見通すことは困難であり、企業側から指導を受けた。このように大学の知的資源と企業のノウハウを合わせ、協働で取り組める体制を整えることが望ましいと思われた。

### 7.4 産官学連携

産として地域の製造会社、販売会社、官として新座市役所、学として大学が、各々「製造・販売」、「広報」、「開発・販路の確保・販路の拡大」を担当した。結果として、大学のみでは販路の確保が難しく、販売の規模は広がらなかった。このような小規模での展開を企業側から見解すると、経済効果の低さが取り組みに対する意欲の減退を招く恐れがあると思われた。地域の活性化にまで発展させるには、製造数や販路を増やし、企業や農家にとって経済効果のあるものにすることも重要である。山本(2017)によると、産官学連携事業の問題点を扱った研究は多く、ここでは「責任の所

在の不明確」、「具体的な事業目標の欠如」、「事業を進めるリーダー企業の不在」などが指摘されていると述べている。また、飯塚（2018）は大学と地域が関係を結ぶということは、双方にとって有益なものになることが基本であるとし、両者の理解と受容、信頼と協力などの関係、協働・協創の関係を築けるかが重要な鍵となると述べている。本取り組みにおいても、関連者が意欲的に取り組めるような組織を構築し、産官学をまとめる核となるコーディネーターを地域の中から創出する必要があった。今後このような産官学連携事業を地域において発展させるには、各々が事業内容を十分に理解し、「地域活性化」という目的の方向性を揃え、役割を認識しながら協働することが鍵となることを強調したい。地場野菜を活用する地産地消商品の開発は、食の安全と安心、農家の安定収入、さらには食料自給率の向上に繋がる今後の発展が見込める取り組みである。食のあり方が多様になった現在の食生活において、地域の食材を見直す意味でもスローフード運動として更なる展開をし、地域の活性化に繋げていきたい。

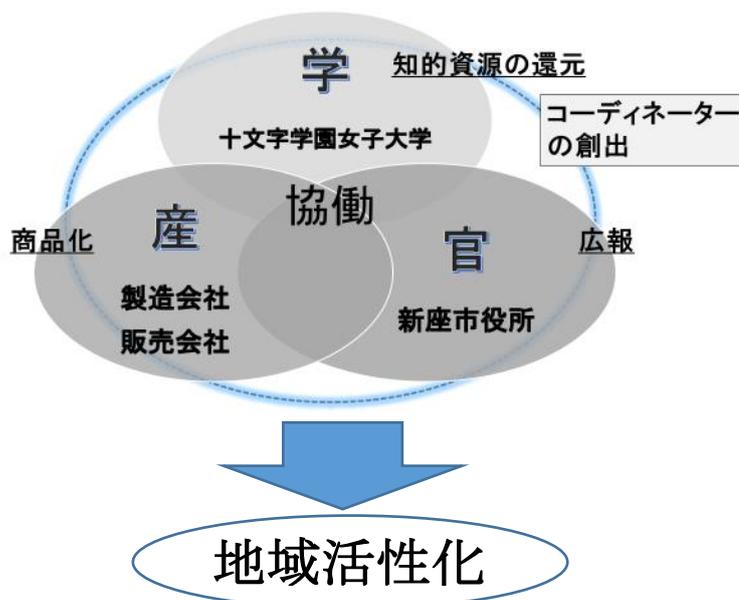


図4 産官学連携の取り組み

注

- 1) 農林水産省, 2018, 『食料・農業・農村白書』, 日経印刷 p 101.
- 2) 農林水産省, 2018, 『食料・農業・農村白書』, 日経印刷 p 17.
- 3) 野菜指定産地告示, 平成 30 年 4 月 27 日農林水産省告示第 967 号.
- 4) 農林水産省, 2018, 『食料・農業・農村白書』, 日経印刷 p 103-104.

<参考文献>

- ・湖中齊・前田啓一・糸野博行編, 2005, 『多様化する中小企業ネットワーク 事業連携と地域産業へ再生』ナカニシヤ出版.
- ・山下慶洋, 2009, 地産地消の取り組みをめぐる, 立法と調査, 12, 299, pp67-75.
- ・関智宏, 2011, 『現代中小企業の発展プロセス サプライヤー関係・下請制・企業連携』ミネルヴァ書房.
- ・高垣行男, 2014, 経営学を通じた大学における地域連携の現状と課題, 駿河台大学経済研究所所報, 18, pp27-42.
- ・池田幸代, 小早川睦貴, 中尾宏, 2016, 大学の地域連携による学生教育の取り組み-地域資源を活用した商品開発プロジェクト-, 東京情報大学研究論集, 20, 1, pp1-13.
- ・山本俊一郎, 2017, 産官学連携事業における中小企業が抱える問題-大阪市東淀川区を事例として-, 大阪経大論集, 67, 6, pp95-108.

- ・飯塚重善, 2018, 大学教育における地域連携活動のあり方に関する一考察, 国際経営論集, 55, pp97-111.
- ・曾矢麻理子, 小林三智子, 2017, 地場野菜を活用した加工食品の開発－新座産にんじんを用いたドレッシングの商品化－, 十文字学園女子大学紀要, 48, 1, pp269-276.
- ・曾矢麻理子, 小林三智子, 2018, 産官学連携による地産地消商品の開発, New Food Industry, 60, 9, pp25-28.
- ・農林水産省, 2018, 『食料・農業・農村白書』, 日経印刷.
- ・日本農業新聞, 平成 29 年 4 月 27 日, 埼玉県版, 新座産ニンジンでドレッシング.

<参考 URL>

- ・新座市ホームページ, 2014, にいざ農産物直売所発見マップ,  
<http://www.city.niiza.lg.jp/life/7/21/77/>.



## 子育てをキーワードとした豊かな社会システムのあり方について

Study on an ideal way of well-being social system which emphasis on child care

鈴木 康弘<sup>1)</sup> 宮野 周<sup>1)</sup> 藪崎 伸一郎<sup>1)</sup> 川瀬 基寛<sup>2)</sup> 大山 博幸<sup>3)</sup>  
 Yasuhiro SUZUKI Amane MIYANO Shin-ichiro YABUZAKI Motohiro KAWASE Hiroyuki OYAMA  
 名塚 清<sup>4)</sup> 山本 悟<sup>5)</sup> 竹迫 久美子<sup>6)</sup>  
 Kiyoshi NAZUKA Satoru YAMAMOTO Kumiko TAKABA

**キーワード：**幼児、高齢社会、社会システム

**要旨：**いくつかのプロジェクトを積み重ねながら、子育てをキーワードとした豊かな社会システムのあり方について追及してきた。各プロジェクトの実践から、「運動と造形、音楽と運動、造形と音楽といった異なる専門性の共創から生み出される遊びの豊かさ」、「プロジェクトに関わる学生の学習機会充実に向けた課題」、「地域社会と大学をつなぐ接点へのアプローチの在り方」等を確認したが、これらの研究成果を統合し、新たな価値に基づいた実践モデルを明確に示すまでに至らなかった。しかしながら、「子育てをキーワードとした豊かな社会システムのあり方」のキーワードが「共創」にあるという知見に実感を持って辿り着き、「共創社会」を構築していくために必要な要素や手立ての糸口をつかむことができたことは一つの大きな成果であった。プロジェクトの実践を通して「共創理念」を具体的に表現していくことを次の課題として捉え、子ども元気プロジェクトを深化させていきたい。

## 1 研究の背景と目的

我が国の人口は10年連続で減少し、少子高齢化が急速に進展している。さらに、2015年には社会保障費が110兆円を越えた事が報告され、2025年には150兆円規模となると予想されている。少子高齢化や社会保障費の急速な増加に象徴されるように、今後の我が国の財政的基盤は脆弱であり、教育（子育て支援）への資源投入はますます難しくなることが予想される。我々は今までのシステム（行政主導、行政依存）から脱却し、パラダイムシフトを模索しなければならない時期に来ているといっても過言ではないであろう。

このような状況を鑑み、本研究では、パラダイムシフトのひとつの方向性として、子育てをキーワードとした豊かな地域社会のあり方について検討することを目的として行った（2015年度、2016年度、2017年度、2018年度各プロジェクト）。

## 2 研究Ⅰ 子ども元気プロジェクト(1)～育ち合う関係の構築に向けて～（2015年度）

### 2.1 研究の目的

プロジェクト初年度となった2015年度は、プロジェクトに関わる保護者および大学生の育ち（子育てカアップ）を促すためのプロジェクトの在り方について検討を行った。

### 2.2 研究の方法

#### 2.2.1 対象者

十文字学園女子大学附属幼稚園に通う幼児（4～5歳児）およびその保護者を対象として、子ども元気プロジェクトへの参加を呼びかけた。場所の広さや遊具の数を考慮して、募集人数は親子15組（名）として募集を行った。参加希望者が多数であったため、幼稚園側での調整を実施した。最終的な参加人数は表2-1の通りであった。

1) 十文字学園女子大学 幼児教育学科 2) 十文字学園女子大学 メディアコミュニケーション学科  
 3) 十文字学園女子大学 人間福祉学科 4) 十文字学園女子大学 地域連携推進機構  
 5) 十文字学園女子大学 児童教育学科 6) 十文字学園女子大学 附属幼稚園

表 2-1：子ども元気プロジェクト参加者数一覧

	年中親子	年長親子	合 計
第1回目参加者	22名(11組)	28名(14組)	50名(25組)
第2回目参加者	20名(10組)	14名(7組)	34名(17組)
第3回目参加者	24名(12組)	6名(3組)	30名(15組)
第4回目参加者	8名(4組)	26名(13組)	34名(17組)

## 2.2.2 プロジェクト実施日と主な内容

プロジェクト実施日と主な内容は以下の通りであった。なお、全てのプログラムは10時30分～11時30分の1時間で実施した。

- |     |                |              |           |
|-----|----------------|--------------|-----------|
| 1回目 | 2015年9月19日(土)  | 造形あそびプロジェクト  | 土粘土遊び     |
| 2回目 | 2015年10月17日(土) | 音楽あそびプロジェクト  | 子どもの歌遊び   |
| 3回目 | 2015年11月21日(土) | 運動あそびプロジェクト① | コマ遊び、跳ぶ遊び |
| 4回目 | 2015年12月12日(土) | 運動あそびプロジェクト② | 竹馬、投げる遊び  |

## 2.3 結果と考察

### 2.3.1 造形あそびプロジェクトについて

造形あそびプロジェクトでは子どもが土粘土で遊ぶ姿を保護者がそばで見守り声かけをしながら、普段は気がつかない子どもの遊びへの新たな発見・理解につなげていくような活動を行った。活動後のアンケートの結果、以下のような保護者の気づき、子どもへの理解がみられた。①「粘土で何かをつくる」ということだけではなく、子どもによって粘土へのかかわり方が異なること。(個々の遊びの違い) ②何かをつくるよりも紐で切ったり、棒で刺したりすることを繰り返し遊ぶ姿がみられた。(素朴な造形行為を楽しむ姿) ③大量の粘土の塊から色々なもの作り出す子どもの発想力・創造力に驚いた。(子どもの発想力・創造力) ④友だちと一緒にすることで友だち関係もみることができた。(人とのかかわり、友人関係)

### 2.3.2 音楽あそびプロジェクトについて

音楽あそびプロジェクトでは、保育の場で用いられている『アブラハムの子』を使った新たな歌あそびの創造を試みた。はじめに、参加した子どもは全員『アブラハムの子』で遊んだことがなかったため、音楽と動きを連動させる目的で既存の遊び方を用いて参加者全員で実施した。そののち、子どもたちが主体となって提案した新たな動きを、学生、保護者が汲み取り、援助し、三者で形にした。既存の動きをまねて動くことに容易な子どもたちも動きを考えてみようという提案すると困難を感じている様子であったが、自分の提案が形になり共有されていくことに喜びを見出している様子もあった。保護者からは、遊びの中で自主的に自分の意見をグループ内で共有できるよう発言していく体験は貴重であるとの意見もでた。

### 2.3.3 運動あそびプロジェクトについて

運動あそびプロジェクトでは、子どもがイメージを豊にして主体的に動けるようになる(動いてみたいと感じられる)ための工夫について検討を行った。具体的には、3回目のプロジェクトでは「跳ぶ動き」、4回目のプロジェクトでは「投げる動き」を子どもがより楽しんで活動できるようになるための絵本活用法について検討した。プロジェクトを担当した学生から、①印象的なオノマトペ、②身体を動かしたくなるような色彩、③短いストーリー、④絵本の中身に関連した活動中の言葉かけの4点が絵本活用法のポイントであるという気づきのあったことが報告された。

実際に、上記4点について改善した4回目のプロジェクトでは、「運動遊びを楽しむために絵本のイメージは役に立っていたか」という保護者への質問に対する回答ポイントが第3回目のプロジェクトよりも上昇していた。

\*本研究は、文部科学省「2015年度地（知）の拠点整備事業（大学COC）」の助成を受けておこなわれたものの一部であり、研究成果は日本保育学会第69回大会（2016.5.7東京学芸大学 掲示番号G9-1 発表ID 24043）にて発表した。

### 3 研究Ⅱ 運動遊び場面における保護者の子どもへの言葉かけについて（2015年度）

#### 3.1 研究の目的

本研究では、遊び場面における保護者の子どもへの関わり方について検討することを目的とした。特に、親の性別、運動経験、運動への意識などにより運動遊び場面での子どもへの言葉かけがどのように異なるかについて検討を行った。

#### 3.2 研究の方法

##### 3.2.1 対象者

十文字学園女子大学附属幼稚園で実施された「子ども元気プロジェクト」（親子を対象とした運動遊びプロジェクト）に参加した4～6歳児とその保護者、計66名（33組）。データに関して研究利用の承諾を得た33組のデータを分析対象とした。

##### 3.2.2 プロジェクト実施日と主な内容

プロジェクト実施日と主な内容は以下の通りであった。各プロジェクトとも時間は10時～12時の2時間で設定して実施した。

- 1回目 2015年11月21日（土） コマ遊び、跳ぶ遊びを中心とした親子遊び
- 2回目 2015年12月12日（土） 竹馬、投げる遊びを中心とした親子遊び

##### 3.2.3 調査内容

先行文献（樟本ら, 2002、大久保ら, 2007）を参考として、言葉かけの 카테고리（「励まし」、「指示的リード」、「非指示的リード」、「情報の伝達」、「相手への注目」、「傍観」の6カテゴリ）を設定し、遊び場面における保護者の子どもへの関わりについて参与観察を行った。6カテゴリに分類される言葉かけが、プロジェクトの時間中に保護者から子どもへどの程度認められたかについて、「まったくなかった」、「ほとんどなかった」、「少しあった」、「たくさんあった」の4段階で評定を行った。

プロジェクトに参加した保護者には、保護者自身の運動経験、プロジェクトでの子どもの様子等に関する質問紙調査を実施した。

#### 3.3 結果と考察

年中児の保護者と年長児の保護者で言葉かけの様子を比較したところ、年中児の保護者は年長児の保護者に比べて、「情報の伝達」に関する言葉かけが多く見られた（図3-1）。また、年長児の保護者は年中児の保護者に比べて、傍観している割合が多かった（図3-2）。母親と父親で言葉かけの様子を比較したところ、父親は母親に比べて「指示的リード」に関する言葉かけが多く見られた（図3-3）。また、母親は父親に比べて、傍観している割合が多かった。「運動がとても好き」な保護者とそうでない保護者を比較したところ、運動がとても好きな保護者はそうでない保護者に比べて、「非指示的リード」に関する言葉かけが多く見られた（図3-4）。

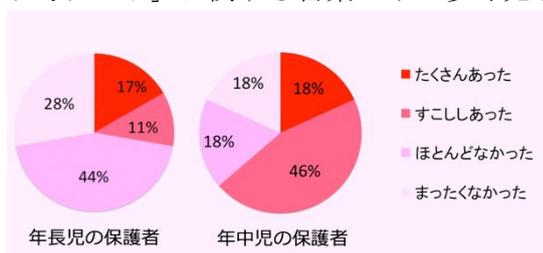


図 3-1：情報の伝達に関連した言葉かけの比較

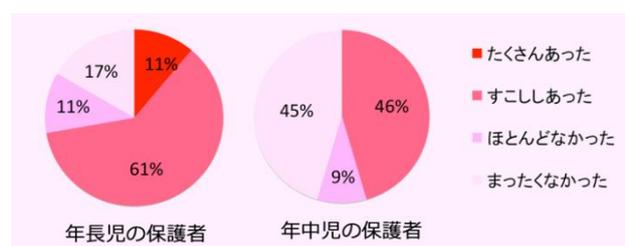


図 3-2：傍観している程度の比較

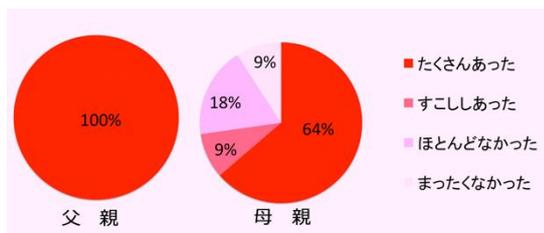


図 3-3：指示的リードに関係した言葉かけの比較

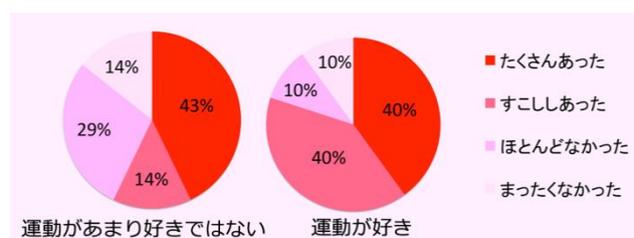


図 3-4：非指示的リードに関係した言葉かけの比較



写真 3：跳ぶ遊びの様子

\*本研究は、文部科学省「2015年度地（知）の拠点整備事業（大学COC）」の助成を受けておこなわれたものの一部であり、研究成果は日本発育発達学会第14回大会（2016.3.5神戸大学百周年記念館）にて発表した。

#### 4 研究Ⅲ 幼児の走る意欲を高める取り組み～かけっこ忍者塾の実践より～（2016年度）

##### 4.1 研究の目的

子どもの走る意欲を高めるために、「かけっこ忍者塾」を計画した。「かけっこ忍者塾」が子どもの走る意欲にどの程度の影響を及ぼすのかを知るために忍者塾の前後で「活動欲求調査」を実施した。本研究の目的は、「かけっこ忍者塾」前後における活動欲求の変化を捉え、その効果を検証することであった。また、「かけっこ忍者塾」における子どもの反応を観察し、子どもの「走る意欲」を高めるための援助のあり方について基礎的な資料を得ることを研究の第二の目的とした。

##### 4.2 研究の方法

###### 4.2.1 対象者

十文字学園女子大学附属幼稚園で実施された「かけっこ忍者塾」に参加した年長児48名（24名・2クラス）とした。

###### 4.2.2 調査期間

事前調査から事後調査まで2016年9月～2016年10月にかけて実施した。

###### 4.2.3 調査内容

###### 4.2.3.1 活動欲求事前調査（2016年9月12日）

動的な遊び（すべり台、ボール投げ、かけっこ、なわとび、マット、鉄棒の6種類）と静的な遊び（折り紙、テレビ・ゲーム、絵本、すな場、ブロック・ままごと、お絵かきの6種類）が2種類ずつランダムに描かれた調査用紙（図4-1）を6枚用意し、個別対面型で実施した（写真4-1）。

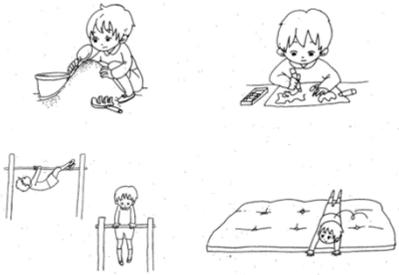


図 4-1:活動欲求調査用紙



写真 4-1:活動欲求調査の様子

子どもは、調査用紙を見ながら自分が一番行いたい遊びを選択した。さらに、選択した遊びを行いたい程度（「とてもやりたい」か「少しやりたいか」）について、○の大きさの大小で選択した。

調査内容は、以下の基準得点化し、6枚の平均値を子ども活動欲求得点とした。

- 「動的な遊び」を「とてもやりたい」と選択した場合は4点
- 「動的な遊び」を「すこしやりたい」と選択した場合は3点
- 「静的な遊び」を「すこしやりたい」と選択した場合は2点
- 「静的な遊び」を「とてもやりたい」と選択した場合は1点

#### 4.2.3.2 かけっこ忍者塾（2016年9月14日）

地域で「かけっこ忍者塾」を開催している大内恵史也氏を講師として招き、忍者になりきって様々な走る体験を楽しみながら、速く走るためのポイントを子どもに伝えてもらった。「かけっこ忍者塾」は年長児クラス(24名)を対象として各クラス30分間ずつ、合計60分実施した(写真4-2、写真4-3)。

#### 4.2.3.3 活動欲求事後調査（2016年10月25日）

「かけっこ忍者塾」での経験が子どもの活動欲求にどのような影響を与えているかについて検討するために事後調査を実施した。事後調査は事前調査と同様の手順で行った園の行事等があり、事後調査は「かけっこ忍者塾」終了から約1ヶ月後に実施した。

### 4.3 結果と考察

事前調査において、自分が行いたい遊びとして「かけっこ」が選択された回数は、男児で20回(選択率42%)、女児で7回(同15%)であったものが、事後調査では、男児で21回(同44%)、女児で13回(同27%)となっていた(図4-2)。また、「かけっこ」に対する活動欲求調査得点の平均値は、事前調査では男児女児ともに3.6であった。事後調査の平均値は、男児が4.0であり、女児が3.7という結果であった(図4-3)。事前事後調査間の平均値の比較(対応のあるt-test)を行った結果、有意な差は認められなかった。このことから、今回の「かけっこ忍者塾」の取り組みは、忍者塾に実施前に「走る」ことに興味のなかった女児の関心をやや高めた(選択回数が約2倍)可能性はあるものの、その意欲が大幅に向上したわけではないこと(活動意欲得点の変化に有意差なし)が明らかになった。



写真 4-2: 忍者をイメージして走る！



写真 4-3: 忍者にコツを教わる子どもたち

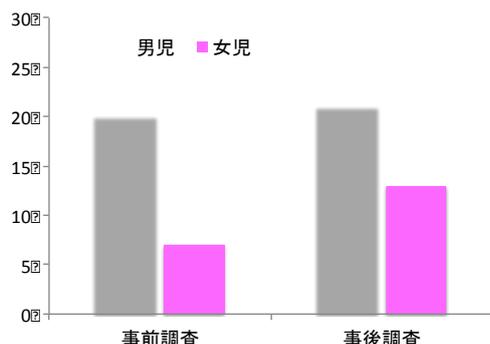


図 4-2: 「かけっこ」忍者塾前後で「かけっこ」が選択された回数の比較

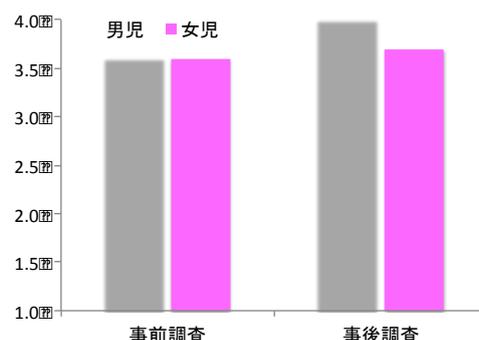


図 4-3: 「かけっこ」忍者塾前後で「かけっこ」に関する活動欲求得点（平均値）の比較

\*本研究は、文部科学省「2016年度地（知）の拠点整備事業（大学COC）」の助成を受けておこなわれたものの一部であり、研究成果は日本発育発達学会第15回大会（2017.3.18 岐阜大学 掲示番号 P-B-7）にて発表した。

## 5 研究Ⅳ 子ども元気プロジェクト(2)～異なる表現領域の連携による育ち合いの関係の構築に向けて～（2016年度）

### 5.1 研究の目的

2016年度子ども元気プロジェクトでは、異なる表現領域の連携によりプロジェクト内容を充実させることを試みた。具体的には、「運動と造形」、「運動と音楽」、「音楽と造形」といった連携プロジェクトを実施した。複数の領域が連携することにより内容がどのように広がり、また深まる可能性があるのか、それらのポイントはどのようなところにあるのかについて、実践を通して検討することを目的とした。

### 5.2 研究の方法

#### 5.2.1 対象者

十文字学園女子大学附属幼稚園に通う幼児（4～5歳児）およびその保護者を対象として、子ども元気プロジェクトへの参加を呼びかけた。場所の広さや遊具の数を考慮して、募集人数は親子15組（30名）として募集を行った。参加希望者が多数であったため、幼稚園側での調整を実施した。最終的な参加人数は表5-1の通りであった。

表 5-1: 子ども元気プロジェクト参加者数一覧

	年中親子	年長親子	合計
第1回目参加者	22名（11組）	16名（8組）	38名（19組）
第2回目参加者	20名（10組）	24名（12組）	44名（22組）
第3回目参加者	20名（10組）	20名（10組）	40名（20組）

#### 5.2.2 プロジェクト実施日と主な内容

- 1回目 2016年11月5日（土）運動・造形あそびプロジェクト
  - ・つくったものを活かして走る・投げる遊び
  - ・絵の具を活かして跳ぶ遊び
- 2回目 2016年11月5日（土）運動・音楽あそびプロジェクト
  - ・音のリズムを活かして跳ぶ遊び
- 3回目 2016年12月3日（土）音楽・造形あそびプロジェクト
  - ・様々な音を感じて描く遊び

### 5.3 結果と考察

#### 5.3.1 運動・造形あそびプロジェクトについて

子ども自身で製作したものを運動遊びに活用すること、そして、その作成した遊具を自宅に持ち帰ることにより、自宅での遊びにプログラムの経験が活かされる傾向のあることが明らかになった。プログラムとして「作ったもので遊ぶ」経験は、その活動時間ばかりでなく、その後の日常生活での活動量を増加させるために有効であることを示唆するものとして興味深い結果となった。具体的な活動内容の企画・進行については学生が中心に行ったが、プロジェクト前後において学生同士の共通理解を綿密に図る必要性のあることを確認することができた。

#### 5.3.2 運動・音楽あそびプロジェクトについて

運動場面で音楽を活用し、そのリズムやテンポを変化させることにより、子どもから動きのバリエーションを効果的に引き出す事ができる可能性が示唆された。また、プログラムに参加した保護者に実施した調査結果より、音楽的な要素が子どもの活動性を高めている可能性が示唆された。特に、運動が苦手であり意欲が低い子どもに身体活動への主体的な参加を促す手立てとして、音楽的な要素は有効な刺激となる可能性を示唆するものとして興味深い結果となった。

#### 5.3.3 音楽・造形あそびプロジェクトについて

保護者と子どもが紙を破く「音」、緩衝材（発砲スチロール製）を落とす「音」、バケツ（金属製）をたたく「音」、シンセサイザーによる電子音等の「音」だけを聴き、自分なりに感じたままを形や色で表現する活動を行った。表現していく過程を通して音を「感じる」ことに関する子どもの意識が高まったように感じられた。また、親子でのお互いの描画表現の違い（音の感じ方の違い）を見合いながら楽しむ姿が見られた。保護者からは、子どもの姿をあらためて見つめ直す機会となった感想が述べられた。プロジェクト内容の充実のためには、子どもの作品の比較・検討や音を描くことの意味や意義について考察していく必要性のあることを確認した。

\*本研究は、文部科学省「2016年度地（知）の拠点整備事業（大学COC）」の助成を受けておこなわれたものの一部であり、研究成果は日本保育学会第70回大会（2017.5.20 川崎医療福祉大学 掲示番号 PB-10-11）にて発表した。

## 6 研究Ⅴ 子ども元気プロジェクトの取り組み(3)～地域と連携した育ち合う関係の構築に向けて～（2017年度）

### 6.1 研究の目的

2017年度プロジェクトでは、プロジェクト対象者とプロジェクトの実施者を広く地域に拡大することを試行した。具体的には、立川文化芸術のまちづくり協議会主催「ワークショップ×ワークショップ edu 2017」に参加し、お花紙を素材としたワークショップ「はって！けずって！おはながみマジック！」（造形遊び）および地域自治体（新座市）や企業（埼玉西武ライオンズ）と協同した「親子でベースボール体験」を実施した。対象者や共同実施者を広げたことによる多様な関わりや実施方法の課題等について検討することを目的として行った。

### 6.2 研究の方法

#### 6.2.1 対象者

「はって！けずって！おはながみマジック！」（造形・音楽遊び）への参加者は、子ども（1歳～11歳）91名、保護者56名、学生スタッフ24名、教員2名の合計173名であった。「親子でベースボール体験」（運動遊び）への参加者は、広報にいざ（新座市広報誌）12月号にて参加者募集の告知を行い、FAX及び市ホームページの電子申請届け出サービスにより応募を受け付けた。最終的な参加者は子どもと保護者を合わせた67名、ライオンズコーチ2名、ライオンズスタッフ2

名、新座市教育委員会関係者1名、十文字学園女子大学教員2名、東京スポーツ&リゾート専門学校学生10名、十文字学園女子大学学生8名の合計92名であった。

### 6.2.2 プロジェクト実施日と主な内容

「はって！けずって！おはながみマジック！」

- ・実施日時：2017年11月18日（土）10:00-16:00
- ・実施会場：立川市子ども未来センター・たましん RISURU ホール

立川文化芸術のまちづくり協議会主催「ワークショップ×ワークショップ edu 2017」に参加し、お花紙を素材としたワークショップを実施した（写真6-1、写真6-2）。ワークショップ後には他大学の学生スタッフや教員と写真によるスライドショーを活用してそれぞれのワークショップの実施報告・交流会も行われた。



写真 6-1: 子どもとの関わり



写真 6-2: 紙をはりつける子ども

「親子でベースボール体験」

- ・実施日時：2018年1月20日（土）10:00-12:00
- ・実施会場：十文字学園女子大学メインアリーナ

新座市・埼玉西武ライオンズ・十文字学園女子大学の共催事業として、「親子でベースボール体験」を実施した。ライオンズアカデミーコーチが課題と感じている課題（打つ経験）についてその解決策を十文字学園女子大学として提案し、実践を試みた（写真6-3）。学生はライオンズアカデミーの指導を実際に見ながら「投げる動き」や「打つ動き」を子どもがどのように経験できるのかについて、その可能性を実践的に学ぶ貴重な機会を得た（写真6-4）。



写真 6-3: 打つ遊びを楽しむ子ども



写真 6-4: 投げる遊びを楽しむ子ども

## 6.3 結果と考察

### 6.3.1 「はって！けずって！おはながみマジック！」について

造形保育論を履修する幼児教育学科3年生（24名）が、学生同士アイデアを出しあいながら計画を進めた。当日は、乳幼児と積極的に関わることで様々な子どもの姿を感じ、保護者と子どもの関わる様子や兄弟の活動の様子を見て学ぶ機会となった。また、学生の活動後の気づきや感想の記述から、子どもが自分なりにさまざまな遊び（紙をひたすらはりつける、重ねてはる、集め

た紙自体で何か別の物をつくって遊ぶ等)をみつけ楽しんでいる姿に驚かされ、あらためて乳・幼児の発想の豊かさや指先を使うことの大切さを感じ取ったようであった。このワークショップの計画・参加・実施を通して、他大学の学生との交流や子どもが安心して遊べる場を作ることの意義やその難しさなどを感じられた。

### 6.3.2 「親子でベースボール体験」について

2018年1月20日に実施した「親子でベースボール体験」(新座市・埼玉西武ライオンズ・十文字学園女子大学の共催事業)では、ライオンズアカデミーコーチが感じている課題(子どもの打つ経験)についてその解決策を十文字学園女子大学として提案し、実践を試みた。具体的には、これまでにライオンズスタッフが使用してきたスポンジボール(小)に加え、新聞紙で学生が作成した3種類の大きさのボール(小・中・大)や風船にビニールテープを巻いたボールの合計5種類のボールを学生が準備し、子どもが「打つボールの大きさを選択できる」ように工夫した。そして、実際に子どもがどのようなボールを選択するかについてのデータを収集(表6)し、ライオンズへのフィードバックを行った。結果として女兒のライオンズボールの選択率(35%)は男児(48%)に比べて13%ほど低下すること、日頃の野球への関心があまり高くはない子どもの選択率(41%)は関心が高い子どもの選択率(50%)より9%程度低下することが明らかになり、多様な種類のボールを準備することの有効性が示唆された。

表6:子どもが選択したボールの種類一覧

性別	野球への関心	楽しんでいたか?	できていたか?	1回目選択	2回目選択	3回目選択	4回目選択	5回目選択	6回目選択
女兒	あるほう	とても	ほぼできた	風船	新聞大	新聞大	新聞小	新聞小	ライオンズ
女兒	あるほう	とても	ほぼできた	風船	新聞大	ライオンズ	ライオンズ	ライオンズ	ライオンズ
女兒	あるほう	とても	ほぼできた	新聞大	新聞小	ライオンズ	ライオンズ		
男児	あまりない	とても	ほぼできた	ライオンズ	新聞大	風船	ライオンズ	ライオンズ	新聞中
男児	あるほう	とても	すべてできた	ライオンズ	ライオンズ	ライオンズ	ライオンズ	ライオンズ	ライオンズ
男児	あるほう	とても	ほぼできた	ライオンズ	ライオンズ	風船	ライオンズ	ライオンズ	ライオンズ
男児	あるほう	とても	ほぼできた	ライオンズ	ライオンズ	ライオンズ	新聞小	新聞小	新聞大
男児	どちらとも	とても	ほぼできた	新聞中	ライオンズ	新聞小	ライオンズ	新聞中	ライオンズ
男児	あるほう	とても	ほぼできた	風船	風船	ライオンズ	ライオンズ	新聞大	風船
男児	あまりない	とても	ほぼできた	ライオンズ	風船	新聞大	新聞小	ライオンズ	風船
男児	あるほう	とても	ほぼできた	ライオンズ	ライオンズ	ライオンズ	新聞小	ライオンズ	ライオンズ
男児	どちらとも	とても	ほとんどできていない	ライオンズ	新聞大	ライオンズ	新聞小	ライオンズ	ライオンズ
男児	あるほう	とても	ほぼできた	ライオンズ	風船	新聞中	新聞小	ライオンズ	ライオンズ
男児	あまりない	とても	ほぼできた	ライオンズ	新聞小	新聞大	新聞小	ライオンズ	新聞大
男児	あるほう	とても	ほぼできた	新聞大	新聞大	新聞大	風船	ライオンズ	新聞中
女兒	あるほう		すべてできた	新聞大	風船	新聞大	風船	ライオンズ	新聞中
男児	あるほう	ほぼ	ほぼできた	風船	新聞大	ライオンズ	新聞小	風船	新聞大
男児	どちらとも	とても	ほぼできた	ライオンズ	新聞大	風船	ライオンズ	新聞中	風船
男児	どちらとも	とても	ほぼできた	新聞小	風船	ライオンズ	新聞大	風船	ライオンズ
男児	あまりない	ほぼ	ほぼできた	ライオンズ	風船	新聞小	ライオンズ	新聞小	新聞小
女兒	あまりない	とても	ほぼできた	風船	ライオンズ	新聞中	風船	ライオンズ	風船
男児	あるほう	とても	ほぼできた	ライオンズ	新聞中	風船	ライオンズ	ライオンズ	ライオンズ

\*本研究は、文部科学省「2017年度地(知)の拠点整備事業(大学COC)」の助成を受けておこなわれたものの一部であり、研究成果は日本保育学会第71回大会(2018.5.13 宮城学院女子大学 掲示番号 P-D-11-6)にて発表した。

## 7 研究VI 子ども元気プロジェクトの取り組み(4)～共創関係の構築に向けて～

### 7.1 研究の目的

これまでのプロジェクトでは、主にプロジェクト企画者の主導の下、参加者がプログラム内容を消化していくといった形式に留まっていた。2018年度プロジェクトでは、そのようなプロジェクトの在り方から脱却し、当日に参加した子どもの発想や考えを柔軟に取り入れるとともに、地域高齢者の経験や智慧を活用していくことにより共創関係を構築し、参加者相互の経験や関係性が豊かになるような仕組みを検討することを目的とし、「親子で伝承遊び」(地域高齢者、参加幼児、参加保護者との共創)を試行した。

### 7.2 研究の方法

#### 7.2.1 対象者

十文字学園女子大学附属幼稚園年中クラス(2クラス)、年中クラス(2クラス)の計111名の子どもを対象とし、案内のチラシを配付した(子どもが家庭に持ち帰る。12月17日)。参加者応募には、Googleフォームを活用した。チラシにQRコードと応募サイトのアドレスを記載し、スマートフォンやパソコンから応募できる体制を整えた。応募期間は12月17日～25日として設定した。

応募者は年中男児2名、年中女児2名、年長男児4名、年長女児1名の合計9名であり、応募率は約8%であった。

#### 7.2.2 プロジェクト実施日と主な内容

- ・実施日時：2019年1月12日(土)14:15-15:30
- ・実施会場：十文字学園女子大学メインアリーナおよびグラウンド

十文字学園女子大学アリーナおよびグラウンドを会場として伝承遊びプロジェクトを実施した。町内会より6名の高齢者からの協力を得ることが出来た。インフルエンザが流行し始めたことや当日の朝が雪模様であったことなどが重なり、子どもの参加見送り(キャンセル)が多く発生した。最終的な子どもの参加者は参加幼児の兄弟姉妹を加えると、7名であった。大学生の参加が10名、保護者や地域高齢者を含めると本プロジェクト参加者の総数は28名であった。具体的には、「コマ」、「竹馬」、「ゴム跳び」、「お手玉」、「おはじき」、「けん玉」、「凧あげ」を遊びの達人(地域高齢者)に教わるという形態で行った。学生(幼児教育専攻の大学生)は地域高齢者と子どもの共創関係が豊かになるための役割を担う(機能を果たす)ことを主な目的として参加した。また、伝承遊び経験の少ない学生は、地域高齢者より昔遊びの多様な遊び方や工夫の仕方を学び、保育者としての資質を高めることも参加目的の一つとした。

### 7.3 結果と考察

これまでのプロジェクトでは、主にプロジェクト企画者の主導の下、参加者がプログラム内容を消化していくといった形式に留まっていた。本研究では、そのようなプロジェクトの在り方から脱却し、当日に参加した子どもの発想や考えを柔軟に取り入れるとともに、地域高齢者の経験や智慧を活用していくことにより共創関係を構築し、参加者相互の経験や関係性が豊かになるような仕組みを検討することを目的としていた。

準備期間に共創関係構築の在り方について、プロジェクト実施者である学生との協議を十分に深められなかったこと、また参加予定であった子どもの当日欠席者が多かったこともあり、共創関係の在り方について十分な検証を行うことはできなかった。しかしながら、例えば、「地域高齢者のアドバイスを参考にして大学生が子どもと共にお手玉遊びを楽しむ姿」や「ゴム跳び遊びの場で、子どもから出てきたゴムの跳び方(アイディア)に大学生と地域高齢者がそれぞれの立場からアドバイスを行う姿」など、豊かな共創関係の芽になりそうな場面をいくつか確認することができたことは本プロジェクトの大きな収穫であった。また、地域高齢者の生き活きとした表

情や積極的な姿を確認することができたことも、今後の豊かな共創関係を考える上での重要なヒントとなった。

## 8 総合考察

本プロジェクトで一貫して追及してきたことは、子育てをキーワードとした豊かな社会システムのあり方である。社会はそこに生活する多様な人々のそれぞれの思い、生活史、家庭の都合、地域の文化的社会的慣習等、様々な要因が複雑に絡み合う中で成立している。これら個別の事情や社会的慣習の枠を越えた新たな社会的豊かさ（価値）を創造し、その具体的なあり方をモデルケースとして提示することを最終的な目標としてプロジェクトを積み重ねてきた。各プロジェクトの実践を通して、「運動と造形、音楽と運動、造形と音楽といった異なる専門性の共創から生み出される遊びの豊かさ」、「プロジェクトに関わる学生の学習機会充実に向けた課題」、「地域社会と大学をつなぐ接点へのアプローチの在り方」等を確認してきたが、これらの研究成果を統合し、新たな価値に基づいたモデルを明確に示すまでに至らなかった。しかしながら、「子育てをキーワードとした豊かな社会システムのあり方」のキーワードが「共創」にあるという知見に実感を持って辿り着き、「共創社会」を構築していくために必要な要素や手立ての糸口をつかむことができたことは一つの大きな成果であった。これらの成果は、専門分野の異なる研究者との多様な議論、共同研究者の協力により得られた新座市政に携わる様々なキーマン（教育委員会関係者、町内会会長、子どもの放課後居場所づくり事業コーディネーター）との交流、地域高齢者や埼玉西武ライオンズスタッフおよび幼稚園教諭との意見交換、プロジェクトを遂行することにより明確になった課題の振り返り、そういった様々な経験の積み重ねの上に辿り着いたものであることを考えれば、一貫して継続してきたプロジェクトの意義をそこに見いだすことができるであろう。

プロジェクトの実践を通して「共創理念」を具体的に表現していくことを次の課題として捉え、子ども元気プロジェクトを深化させていきたい。

### <参考文献>

- ・ハワード・ガードナー（著）・松村暢隆（訳）、2001、MI：個性を生かす多重知能の理論、新曜社
- ・神原雅之、2006、体を楽器にした音楽表現リズム&ゲームにどっぷり！リトミック 77 選、明治図書出版
- ・鯨岡峻、2016、関係の中で人は生きる、ミネルヴァ書房
- ・樟本千里・山崎晃、2002、子どもに対する言語的応答を観点とした保育者の専門性-担任保育者と教育実習生の比較を通して-、保育学研究 40-2、90-96
- ・松尾知明、2015、21 世紀型スキルとは何か、明石出版
- ・松岡宏明、2017、子供の世界 子供の造形、三元社
- ・松下佳代（編）、2015、ディープ・アクティブラーニング、勁草書房
- ・文部科学省、2014、大学教育の質的変換に向けた実践ガイドブック、株式会社リベルタス・クレオ
- ・宮台真司、2009、日本の難点、幻冬舎新書
- ・岡上直子（編）、2017、ワクワク ドキドキが生まれる環境構成、ひかりのくに
- ・大久保英哲・岩崎裕香、2004、幼稚園に於ける保育者の役割についての研究-保育者の言葉がけが幼児の遊び行動に及ぼす影響-、金沢大学教育学部教育工学研究・実践研究 3、31-42
- ・田澤里喜、2018、あそびの中で子どもは育つ、世界文化社
- ・東間掬子、2017、乳幼児がぐんぐん伸びる幼稚園・保育園の遊び環境 25 の原則、黎明書房
- ・ヴァスデヴィ・レディ（著）・佐伯胖（訳）、2015、驚くべき乳幼児の心の世界、ミネルヴァ書房
- ・W. グレツィンゲル（著）・鬼丸吉弘（訳）、2000、なぐり描きの発達過程、黎明書房
- ・柳澤秋孝・柳澤友希、2014、0~5 歳児の発達に合った楽しい！運動あそび、ナツメ社
- ・吉富功修・三村真弓、2015、幼児の音楽教育法 美しい歌声をめざして、ふくろう出版





## 2.1.2 研究期間

2014年11月～2014年12月

## 2.1.3 研究内容

保護者に対する質問項目は以下の2項目を設定し、自由記述方式での回答を得た。

1. 日常生活の中でこどもの運動遊びに関して、困っていること、不安に感じていること、気になっていること、疑問に思っていることなどについて
2. 日常生活の中で子どもの運動遊びに関わる際、特に留意していることや気をつけていることなどについて

幼稚園教諭に対する質問項目は以下の3項目を設定し、自由記述方式での回答を得た。

1. 運動指導や援助、運動遊びに関する環境の構成に関して、特に留意していることや気をつけていることについて
2. 運動指導や援助、運動遊びに関する環境の構成に関して、困っていることや気になっていることについて
3. 健常児の統合保育を行う際に、保育者が特に考慮していることや留意していることについて

## 2.2 結果と考察

### 2.2.1 保護者が抱える悩みについて

5歳児クラスの保護者が子どもの運動遊びに関して困っていることや不安に感じていることは、以下のような内容であった。

「友人と公園で遊んでいる時に、(友達同士の会話が聞こえないことによって) 上手くその遊びに入り込めないこと」、「家の中の遊具を投げ散らかすこと」

4歳児クラスの保護者が子どもの運動遊びに関して困っていることや不安に感じていることは、以下のような内容であった。

「補助輪なしの自転車に乗ってもいい年頃だが、乗れるようになった後のことが怖く、練習を始められない」、「公園へ行っても、なかなか同年代の子どもと関わろうとしない(拒絶する)」、「サッカーなどのチームプレイは本人の努力と周囲の理解が不可欠なため入団にためらいを感じている」、「自分から高いところやジャングルジム等足場の不安定なところに行きたがらないので運動神経が上手く発達していないような気がする」

5歳児クラスの保護者が日頃の運動遊びに関して特に留意していることは、以下のような内容であった。

「近所の公園に行くまでの危険性(とびだし、後方からの車に気付きにくいなど)」、「公園での遊びに内包される危険性(後方からのボール飛来や子どもの走行に気付きにくいなど)」

4歳児クラスの保護者が日頃の運動遊びに関して特に留意していることは、以下のような内容であった。

「聞こえないので、危険があったとき、すぐに助けられる距離にいる」、「トラブル(の意味)や終了の合図がわからず、ポカーンとしていることがよくあるが聞こえなかったことによる失敗は責めないようにしている」、「音声ではすぐに対応できないので、本人と保護者が周囲に危険がないか留意しながら活動している」

保護者から得られた自由記述の内容を整理し、保護者が子どもの運動遊びに関して抱える悩みや不安を以下の3点に再構成した。

- ①遊び環境に関する危険性(公園までのアクセスなど)
- ②遊ぶこと自体に内包されている危険性(友達との衝突など)
- ③遊びにともなう子ども同士のコミュニケーション

上記のような懸念が、降園後に子どもと一緒に外遊びをすることに保護者が躊躇してしまう理由の一つとなっている可能性を確認することができた。

### 2.2.2 幼稚園教諭が抱える悩みについて

幼稚園教諭が運動指導や援助、運動遊びに関する環境の構成に関して、困っていることや気になっていることは以下のような内容であった。

「ろう児、難聴児だからではなく、幼児にとって保育の中でどう運動遊びを取り入れるか？その環境作りについて困っている」、「時間の感覚（リズム感など）を子どもたちはどう捉えているのかがわからないので気になる」、「リズム運動などの振りやリズムを楽しく身につけるにはどのような方法が効果的か？」、「ルール説明をできる限り簡潔に伝える方法について悩んでいる」、「人数が少ないこと」

幼稚園教諭が運動指導や援助、運動遊びに関する環境の構成に関して、特に留意していることや気をつけていることは以下のような内容であった。

「絵、写真、身振り、実際の見本など視覚的情報で伝える」、「遊びの中で取り入れるようにする（←なかなか難しい）」、「子どもが全員注目してから話したり、指導したりすることを心がけている」、「友達と一緒に遊ぶことでやってみたくなるようにする」、「出来るところまで見守り、ムリに先にすすまない」

健常児の統合保育を行う際に、保育者が特に考慮していることや留意していることについての質問項目に対する回答（自由記述）は特になかった。

幼稚園教諭から得られた自由記述の内容を整理し、運動指導や援助、運動遊びに関する環境の構成に関して、困っていることや気になっていることを以下の4点に再構成した。

- ①聴障幼児だからではなく、幼児にとって保育の中でどう運動遊びを取り入れるかということ
- ②リズム運動などの振りやリズムを楽しく身につけるにはどのような方法が効果的かということ
- ③ルール説明を簡潔に伝える方法について
- ④（クラスの子どもの）人数が少ないこと

## 3 研究Ⅱ 聴覚障害を抱える子どもへの運動援助の実践について

### 3.1 研究の方法

#### 3.1.1 対象者

S特別支援学校幼稚部幼児9名、7名S特別支援学校幼稚部教員7名、幼児教育専攻大学生4名

#### 3.1.2 研究期間

2014年9月～2015年2月

#### 3.1.3 研究内容

研究Ⅰの結果として明らかになった幼稚部教諭が抱えている課題の中から「ルール説明を簡潔に伝える方法」、「（クラスの子どもの）人数が少ないこと」に焦点を絞り、幼児の運動遊び指導を専門とする大学教員、特別支援学校幼稚部教諭、幼児教育専攻大学生が意見を取り交わしながら、運動援助の実践を通してその在り方を探ることを目的として、以下の通り事前協議、運動遊びプロジェクトの実施、事後検討を繰り返した。

2014年9月24日（水）事前打ち合わせ（大学教員1名、坂戸特別支援学校教員3名）

2014年9月29日（月）聴障幼児の活動見学（坂戸特別支援学校教員1名、大学教員1名、大学生2名）

2014年10月28日（火）事前打ち合わせ（大学教員1名、坂戸特別支援学校教員3名）

- 2014年 11月 25日（火） 事前打ち合わせ（大学教員1名、坂戸特別支援学校教員3名）
- 2015年 1月 21日（水） 事前打ち合わせ（坂戸特別支援学校教員5名、大学教員1名、大学生2名）
- 2015年 2月 2日（月） 第1回運動遊びプロジェクトの実施（幼児9名、坂戸特別支援学校教員7名、大学教員1名、大学生2名）  
実施した運動遊びの内容と時間は以下の通り  
9時45分～10時00分（セッティング等）  
10時00分～10時10分 新聞紙を使った遊び  
10時10分～10時20分 ボールを使った遊び  
10時20分～10時30分 鉄棒を使った遊び
- 2015年 2月 9日（月） 事後検討および第2回に向けた事前打ち合わせ（坂戸特別支援学校教員4名、大学教員1名）
- 2015年 2月 18日（水） 第2回運動遊びプロジェクトの実施（幼児9名、坂戸特別支援学校教員7名、本学教員1名、大学生2名）  
実施した運動遊びの内容と時間は以下の通り  
9時45分～10時00分（セッティング・準備）  
10時00分～10時15分 鉄棒を使った遊び  
10時15分～10時25分 新聞紙を使った遊び  
10時25分～10時40分 竹馬につながる遊び

### 3.2 結果と考察

#### 3.2.1 新聞紙を使った遊びについて

新聞紙を棒状にした物を床面に立てて支えながら1～2m程度離れた距離にお互いに向かい合っ  
て立ち、タイミングを合わせてお互いの場所を交代する際に相手が床面に立ててある新聞紙が倒  
れないうちに相手の場所まで移動する遊びを行った（写真1）。この遊びは、互いの目線や身体  
の雰囲気を感じ取りながら動くことが要求される。相手とのコミュニケーションをとりなが  
ら身体を動かす楽しさを経験してもらうことを目的として計画したものである。

第1回プロジェクトを実施し、「子どもと子どもの組み合わせで初めから行ったため、お互いの  
タイミングを合わせて早く移動することで成功率が高まるということとその楽しさが子どもにう  
まく伝わらないまま終わってしまった」点が課題としてあげられた。第2回プロジェクトでは、  
始めに「幼稚園教諭や大学生が新聞紙を棒状にした物を床面で支えながら立ち、その棒を離した  
瞬間に子どもがやや遠い位置から走ってきて棒が倒れる前にキャッチする」という課題を取り入  
れた。この遊びを何度か繰り返した後に2人でタイミングを合わせるやり方へ移行したところ、  
ほとんどの子どもが、相手とのタイミングを合わせて移動することを楽しめるようになった。

#### 3.2.2 鉄棒を使った遊びについて

鉄棒に親しむ機会が少ないので、鉄棒を使った遊びを子どもに経験させたいといった要望が幼  
稚園教諭からあり、「ブタの丸焼きでジャンケン（両手両足を使って鉄棒にぶら下がり、片手を離  
して近くにいる教諭とジャンケンをするといった遊び）」と「すずめのおやど（鉄棒にお腹をつ  
けた状態でバランスをとり、反動をつけて後方に足からとびおる遊び）」の遊びを行った（写真  
2）。第1回プロジェクトを実施し、「ブタの丸焼きでジャンケン」遊びを行う際、「足が地面に着  
くまで手を離さない（鉄棒遊びで頭部から落下することの危険性を防止するため）」という留意事  
項、「ジャンケンで先に2回勝った人が勝ち（そこで終了）」といったルールをジェスチャーだけ  
で子どもに伝えきることの困難さが課題としてあげられた。第2回プロジェクトでは、鉄棒から  
手を離すと頭から落下する危険性があることについて絵を使って示すこととし、「鉄棒から手を離  
してしまっている絵」、「鉄棒から落下し頭を打ち、泣いている場面の絵（痛い）」の2枚を準備す

ることとした。また、必要に応じて幼稚園教諭の手話による補助的な説明を加えたところ、情報がきちんと子どもに伝わっている様子を確認することができた。

### 3.2.3 ボール遊びについて

子どもにダイナミックに身体を動かして遊ぶ楽しさを経験してもらうことを目的として、ボール遊びを行った。始めに「ボールをだっこ→おんぶ→投げてキャッチする」といったボールに慣れる遊びを行った。次に、ボール転がしてイスの下をくぐらせるといったボールを操作する遊びを行った。ボールを使った鬼ごっこを行う事も計画していたが、時間の都合上鬼ごっこは実施することができなかった。ボールを転がす遊びは待ち時間が多く、子どもの運動量として十分なものではなかったことが実施後の課題としてあげられた。

### 3.2.4 竹馬につながる遊びについて

幼稚園教諭よりバランス能力を刺激する遊びを子どもに経験させたいといった要望があり、第2回プロジェクトでは、ボール遊びの代わりに「竹馬」と「パカポコ」（プラスチック製の缶ぽっくり）遊びを実施した。マットを海に見立て、海に浮かんだ島（マットに紙で作った島を貼り付けた）をパカポコや竹馬で上手に渡る遊びに挑戦した（写真3）。子どもはこの活動をとっても楽しんでおり、何度も繰り返し挑戦する姿が確認された。事後検討会ではプロジェクトへ参加した大学生より、「音声による言葉が通じなくても、表情や仕草で思いを伝え合うことができるのだと思った。子どもたちの“楽しい”という気持ちを強く感じた」、「運動を支援する際、言葉で簡単に助言できることも手話や身振り等で目を合わせて伝える必要があることを学んだ」という感想が述べられた。



写真1：新聞紙遊びの様子



写真2：鉄棒遊びの様子



写真3：パカポコ遊びの様子

## 4 総合考察

特別支援学校幼稚部教諭及び保護者への質問紙調査を通して、聴覚障害を抱える幼児への運動支援については、それぞれに悩みや不安を抱えていることが明らかになった。保護者の不安の主なものは、「遊び環境に関する危険性（公園までのアクセスなど）」や「遊ぶこと自体に内包されている危険性（友達との衝突など）」に代表されるように、聴覚障害を抱える子どもがダイナミックに身体を動かす中で、どれだけ危険を予知し回避できるのかを心配するものであった。そのような不安を抱えたまま子どもと共に外遊びを楽しむことのハードルは低くないことが推察された。このような状況で聴障幼児が日々生活している現実を鑑みれば、比較的守られた空間である幼稚園での身体を使った遊びの経験はとても貴重なものであると感じられた。

特別支援幼稚部教諭は子どもの運動遊びへの援助に関して、「ルール説明を簡潔に伝える方法」や「クラスの子どもの人数が少ないなかで楽しめる運動指導」について悩みを抱えていることが明らかになった。本研究では「ルール説明を簡潔に伝える方法」に焦点を当て、特別支援学校教諭との協議や子どもへの実践指導を通して、実践的にその解決方法を探ることを試みた。その結果、「運動

指導に関する説明では、健常幼児よりもスモールステップを意識して進めていく必要性のあること」、「絵やジェスチャーだけでルールや留意点を伝えていくには限界があり、手話による補助的な説明が必要となる場合が少なくないこと」を確認することができた。本研究での知見は2回の実践を通して見いだされたものであり、今後さらなる実践研究を積み重ねが必要である。一方、聴障幼児を対象として運動援助の在り方を実践的に検討した研究は我が国において例をみない試みであり、学生を交えてその一步を踏み出すことができたことには重要な意義があるものと考えている。

<参考文献>

- ・及川力・齊藤まゆみ・稲垣敦、2004、4～6歳の聴覚障害幼児の運動能力に関する横断的研究、障害者スポーツ科学 2 (1)、14-24
- ・及川力・橋本有紀・齊藤まゆみ・稲垣敦、2007、聴覚障害児童・生徒の体格、体力・運動能力に関する調査研究、リハビリテーションスポーツ 26(1)、2-12
- ・大原重洋・廣田栄子、2012、聴覚障害幼児における聴児との社会的遊びの発達的变化と関連要因の検討、音声言語医学 (53)、319-328
- ・大塚明敏、2002、聴覚障害幼児に対する遊びの指導について、長野大学紀要第24巻第1号、9-30
- ・都築繁幸、2002、聾学校幼稚部における教師の発話行動の分析、愛知教育大学教育実践センター紀要 (5)、79-88

## 「地域密着型メディアによる情報発信」への取り組み

## Case Study of Broadcasting via Community-based Media

棚谷 祐一<sup>1)</sup>

Yuichi TANAYA

キーワード：地域メディア、コミュニティメディア、コミュニティFM

**要旨：**近年、ラジオは「古くて新しいメディア」といわれるようになった。ひとつの要因として、いわゆるコミュニティFMの全国的なひろがりにより、地域密着型のメディアとしての機能を獲得したことが挙げられる。本研究では、大学生が制作するラジオ番組の制作、放送を通じて地域のコミュニティへの貢献、情報支援、学生の学びなどを報告、検証するものである。

## 1 はじめに

コミュニティFM（以下CFM）は、戦後、1951年の民間放送（AM放送）開始以後のラジオの歩みのなかで、1992年に北海道函館市の函館山ロープウェイ（株）が運営する「FMいるか」の開局を皮切りとして全国に広まっていったナローエリアを対象とするラジオ局である。2019年現在、CFM局は（JCBA 日本コミュニティ放送協会会員のみ）関東エリアだけで46局、埼玉県では4局をかぞえ<sup>1</sup>、全国で見ると平成4年から平成27年のデータでは年間平均10局程度が開局している<sup>2</sup>。このコミュニティ・メディアの発展にはさまざまな要因が考え得るが、マス・メディアの全国ネットワーク化、一極支配に対するカウンターとしての側面は強調してもいいだろう。また、阪神淡路大震災、東日本大震災等の大規模災害において災害・防災情報を支援・発信するメディアとしてラジオの存在意義が再評価された流れの影響もまた大きい。このCFMに大学生が発信するラジオ・プログラムとして参画することは、大学の地域連携、地域貢献としても意義深いものと考えられる。

## 2 活動報告

## 2.1 概略

本研究「地域密着型メディアによる情報発信」プロジェクトは、平成27年度の採択以降、十文字学園女子大学のクラブ活動である「十文字ラジオ研究部」（以下「ラジオ研究部」）をベースに、近隣のコミュニティFM局でレギュラー番組を制作、放送してきた。地域のコミュニティFMでレギュラー番組を放送近隣の志木市に本拠地を置く株式会社クローバーメディア内「クローバーラジオ」<sup>3</sup>において、毎週日曜日の22:30～23:00（再放送は毎週金曜日深夜1:30～2:00）に放送されているレギュラー番組「十文字プレゼンツ Campus☆Radio」（旧「JUMONJI☆Campus Tea Party」、2018年度から現番組名に改称）を制作してきた。年間制作本数は平均55本（年始の番組宣伝を除く）をかぞえ、教員（筆者）の指導のもと、基本的には学生が運営、制作を行う。教員は検聴を兼ねて編集および納品を担当、必要に応じて助言や技術的な指導を行う。2018年度からは、本学メディアコミュニケーション学科の自主活動である「メディア・ワークショップ」のサブ活動として「Radio CLIP」を立ち上げ、現在では1ヶ月に4本ペースで制作する番組のうち3本をラジオ研究部、1本をRadio CLIPが制作するローテーションで共同運営を行っている。ま

<sup>1</sup> JCBA 日本コミュニティ放送協会サイトより <https://www.jcba.jp/map/index.html>

<sup>2</sup> 総務省「電波利用ホームページ」より <https://www.tele.soumu.go.jp/j/adm/system/bc/now/>

<sup>3</sup> 旧すまいるFM。平成30年よりクローバーメディア内クローバーラジオに改称、移行。志木市、朝霞市、和光市、新座市および練馬区の一部を聴取可能エリアとする

1) 十文字学園女子大学 メディアコミュニケーション学科

た、筆者の担当する授業「音声制作（ラジオ）」、「音声制作（ラジオドラマ）」との連携も実施した。具体的には授業内で課題として作成した番組のうち、優秀作品を「十文字プレゼンツ Campus☆Radio」内で放送する。

## 2.2 番組構成

「十文字プレゼンツ Campus☆Radio」は30分番組である。局の規定により番組の前後に30秒ずつ、合計1分間のCMを放送するため番組は実質的に29分、そのうち締め挨拶から番組終了までエンディングBGMが30秒間挿入されるため、トークは28分30秒を目安に終了させる必要がある。番組のスタイルとしてはエンタテインメント番組であり、「女子大生が送る等身大のトーク番組」を基調として親しみやすい番組作りを心がけているが、CFMとしての社会的な位置づけや、取り組みの趣旨を汲みつつ、地域のイベント、文化の紹介、あるいは地元新座市とのコラボレーション企画等を随時取り入れ、独自性を打ち出している。パーソナリティは原則的に2名（他に収録あるいは進行担当として1.2名が加わることもある）、会話形式で進行するが、新入生加入後しばらくは新入生をゲストとして加えた3人ないしは4人で担当する。全体は5部構成となり、筆者が学生に示しているそれぞれの時間的な目安は次のようなものである。

1. 0'00" ~2'00" オープニング
2. 2'00" ~12'00" コーナー1
3. 12'00" ~16'00" 楽曲紹介
4. 16'00" ~26'00" コーナー2
5. 26'00" ~28'30" エンディング

ただし、番組は時間的な制約その他の理由により生放送ではなく、事前に学内のスタジオで収録したものを筆者が検聴・編集し、デジタル音声ファイルとして送信・納品するため、タイムラインは音声編集ソフト上で自在に動かすことが可能である。したがって上記の各コーナーの時間配分はエンディングの末尾28'30"を厳守すること以外、比較的緩やかなものであり、各コーナーの長さや楽曲紹介の部分を調整することによって全体の帳尻を合わせている。それぞれ約10分間を割り当てられているコーナー1とコーナー2が番組の柱となる。番組編成は学生主体で行われるため、教員は原則的に関与しないが、前述したようにCFMの特性や本研究の意図を汲み、できるだけ地域志向のテーマを取り上げるよう指導した。これらのコーナーで扱われる内容を頻度順に整理すると以下のような傾向に分類される。

### A. トーク番組

- ①グルメ、ファッション、観光等、学生目線での日常生活に密着した話題
- ②映画、アニメ、音楽、マンガ等、趣味に関する話題
- ③「にいぷら」のコーナータイトルで取り上げる、地元新座市のイベントや文化など街の話題
- ④心理テスト、クイズなど
- ⑤フリートーク（テーマは予め紙に記されたものからランダムに拾い上げる）

### B. ボイスシアター

- ①パブリックドメインとなった文芸作品の朗読
- ②創作ラジオドラマ

### C. 学外および学内連携企画

- ①行政との連携企画（新座市のマスコットキャラクター「ゾウキリン」インスタグラムとの連動）
- ②学内のクラブ活動「ライターデザイン部」と連携、取材記事の提供

※C-①はショートコーナーとしてコーナー内もしくはコーナー1・2の前後に設置される

### 2.3 各年度ごとの取り組み

3年次生が10月下旬の学園祭を持って引退すること、また随時の退部・新規入部などもあるため年度内における学生の参加人数は流動的であるが、いずれも各年度の4月末日付けでクラブ活動届けに記された人数に基づく。また、平成30年度のデータは本学メディアコミュニケーション学科に組織された「Radio CLIP」の参加メンバーを合算している。

#### 2.3.1 平成27年度

参加人数 10名

スタートアップの年度でもあり、実質的に初のレギュラー番組がCFMの電波に乗って放送されるという高揚感と緊張感を覚えつつ、学生たちも、そしてラジオ番組の制作についてはこれまで門外漢であった筆者も、手探りで番組のあり方を模索していた。本研究の採択決定を待ち、放送開始は平成27年7月5日。初のデータ納品はレベル（音量）上の技術的な問題があり、リテイク（差し戻し）となった。技術的な課題については後述する。放送開始から間もなくして学内で発行する新聞「JUMONJI MEDIA NEWS」にラジオ研究部の活動が掲載された。平成27年度は環境整備としてインタビュー用のハンディ・デジタルレコーダーとヘッドフォン及びインタビュー用マイクロフォンを購入。12月20日に本学で開催された「埼玉クイズ王」予選のインタビュー収録を行った。また、10月下旬に開催される本学の学園祭「桐華祭」にてラジオ番組の宣伝フライヤーを作成、配布した。

図1. ラジオ研究部を広告として掲載した学内新聞



図2. 収録風景



図3. 宣伝フライヤー



#### 2.3.2 平成28年度

参加人数 16名

2年目を迎え、ラジオ研究部は部員数も増加、本学においては比較的大所帯のサークルとなった。とくに活気のある2年次生がリードし、積極的に番組内容を提案するなど内容の向上に努めてくれたことは筆者にとっても大きな助けとなった。環境整備としてモニター用ヘッドフォン3台、収録用ダイナミックマイクロフォン3本を新規に導入した。この年度から学内のサークル活動である「ライターデザイン同好会」（現ライターデザイン部）と連携を開始した。目的は、地域に取材して記事化し、Facebookに投稿する活動をしている当該サークルに記事の提供を依頼し、ラジオで台本化、読み上げることで双方にとってのメリットを得ることである。しかし、この連携は年間2記事の紹介にとどまり、残念ながら活動実績としては不活発であった。一方、この年度はオリジナル・ジングル<sup>4</sup>の制作、収録の技術的スキルの向上、有機的な組織づくり、ボイスシ

<sup>4</sup> コーナーの転換などに用いる短い音楽

アターの充実など、多くの収穫があった。また、平成 29 年 2 月には、番組の放送先である「すまいる FM」(当時) パーソナリティの美和さなえ氏を講師に迎え、番組制作や話し方についての講座を開いた。参加者は 7 名。ラジオのパーソナリティとして長年現場に携わってこられた美和氏のお話を伺い、話題の選び方。リスナー目線でのわかりやすい話し方、適切なマイクロフォンの使い方など、学生たちも得るところが大きかったようである。

図 4. 図 5. 美和さなえ氏による講座の様様



### 2.3.3 平成 29 年度

参加人数 14 名

この年度はとくに地域行政、具体的には地元新座市の行政との連携を強化することが目標として掲げられた。新座市観光推進課(現シティプロモーション課)との連携活動として、新座市のイメージキャラクター「ゾウキリン」のインスタグラムにおける PR 活動「ゾウキリン Instagram 企画『新座愛を届けるゾウ』」で収録されたボイスメッセージを紹介するショートコーナーを設け、数回に渡って放送した。また、新座市のふるさと納税スペシャル企画として、新座市出身の漫画家、月山可也氏のサッカー漫画「エリアの騎士」とのコラボレーション企画を番組内で紹介した。しかし、大人数で活動をリードしてきた 3 年生が 10 月で引退すると、一気に部員数が減少。1 年次生の新規入部がなかったため、少数の 2 年次生のみでの運営を強いられることになった。在籍していても休みがちなメンバーもあり、実質的に 2~3 名の学生で番組作りを続けていかなければならない状況が生じることとなった。懸念されたのは次の 3 点である。

- ①特定の学生への高負担が続くこと
- ②十分な取材や台本を準備するための時間が取れないため、番組の質的な維持が困難になること
- ③1 年生不在はクラブ活動自体の存続が危ぶまれ、放送の継続に支障をきたすこと

この状態を解決するため、筆者の所属するメディアコミュニケーション学科の学生に声をかけをし、前述の「Radio CLIP」を発足させたことにより、番組は「ラジオ研究部」と「Radio CLIP」の 2 団体で共同運営する新体制となった。平成 30 年 1 月からは志木市に「クローバーメディア」が発足、朝霞市に拠点のあった旧「すまいる FM」は「クローバーラジオ」として再スタートすることになった。当番組の継続も叶うこととなったが、新体制にふさわしい番組名称が必要ではないかとの提案が局側よりなされた。そこで、平成 30 年 1 月より番組名を前述の「十文字プレゼンツ Campus☆Radio」へと改称し、学生に周知した。

### 2.3.4 平成 30 年度

参加人数 19 名

ラジオ研究部に新生が入り、廃部の危機は回避された。前年度から加わった「Radio

CLIP」の登録学生数が多いため、見かけ上の増員があるが、常時活動しているコアメンバーはラジオ研究部の部員中3名程度である。2年次生不在のため、技術的な継承がうまくなされず、収録時のテクニカルな課題が障壁となった部分があるが、短期間で一定レベルの収録ができるようになったことは、学生たちの努力の結果であると評価したい。収穫としては、地域に根ざした番組作りを心がけるという意識が定着し、前述の「にいぷら」コーナーなどを自主的、定期的に制作するようになったのは前進である。今年度の課題として、番組の質的向上を図ることを掲げ、教員はレクチャーおよび定期的な助言を行った。また、2団体運営におけるコミュニケーション不足も散見され、ローテーション上のトラブルが重なるなど、ガバナンス上の課題があらたに加わった。

図6. 図7. 平成30年度ラジオ研究部1年次生による収録の様相



### 3 まとめ

#### 3.1 学生たちの成長

CFMでのレギュラー番組放送を開始してから約3年半を経過し、初年度に1年次生だった学生たちもとうに引退し卒業を迎えようとしている。その間、学生の成長を観察して最も向上したものは言語運用能力である。はじめの頃はたどたどしく、原稿を棒読みに近い者が1年後にはパーソナリティとして一人前とはいかないものの、いきいきと話することができるようになるという事例を筆者は数多く見てきた。また、ラジオの公共性を意識することで、友達同士のプライベートな会話とは大きく異なる話題選択・言葉遣いのリテラシーを考え、社会的に適切な表現を身につけることができたのは、社会人基礎力の向上を図る意味において大きな収穫であるといえよう。指導の過程では過去に不適切と判断される話題選択があり、筆者の判断で放送前に番組差し替えとしたケースも何度かあったが、当該学生には理由を説明し、理解を促すよう努めた。結果的にそれらの経験から不測の事態に備え、季節に関係なくいつでも放送可能な番組ストックを自主的に録りためることが習慣化されたのはプラスの副産物である。また、コーナーの企画から取材、台本作成、収録、パーソナリティなどを分担してひとつの番組を作り上げることを積み重ねたことにより、リーダーシップの育成、協働力の向上に貢献することができた。

#### 3.2 今後の課題と展望

CFMの公共性を念頭に置いた場合、当番組がエンタテインメント番組であるという基本姿勢を保ちつつ、それがマス・メディアの劣化版縮小コピーに陥ることなく、地域のコミュニケーション・メディアとしての機能を果たすことは可能であると考えられる。生放送であれば可能なリスナーとのリアルタイムなコミュニケーションは、スマートフォンアプリでのタイムフリー、エリアフリーなサービスなどによって近年、電波メディアとしてのラジオを補完する立場にあるインターネットを活用すれば一定の実現は可能になるはずである。現在、FacebookとTwitterにアカウントを開設しているが、必ずしも活性化しているとはいえない。番組内容の見直し、ブラッシュアップを通じて、大学と地域を結びつけるメディアとしてさらに貢献できるよう、努力を重ねる必要がある。

技術面の課題もある。ラジオ放送の性格上、作業をしながら、運転をしながらといったいわゆる「ながら聴取」される機会が多いため、周囲の雑音に埋もれることのないよう安定した音量レベルが求められる。基本はやはり一定のレベルを維持した話し方にあるが、そのほかにも録音時のマイキング、チャンネルゲインやミキシングコンソールの各フェーダー設定、オーディオインターフェイスのレベル設定、DAW\*側入力チャンネルのリミッター設定などに加え、DAW編集時のレベル調整、コンプレッサーおよびメインチャンネルのマキシマイザー設定など、実に多くのファクターが関与する。多くのプロセスは筆者が設定、プリセット化しているため、学生が調整しなければならない部分は限られているが、それでも多くの学生にとっては技術的なハードルが高いと感ぜられるようである。定期的な技術講習を行ってはいるが、未だに安定した収録レベルの維持には困難を感じているというのが率直なところであり、最終的には教員の補助なしに収録・編集ができるようなプログラムの構築もひとつの課題である。

\*Digital Audio Workstation の略。コンピューターベースの統合的な音楽制作ツールをさす。代表的なソフトとして Pro Tools、Cubase、Logic Pro、Studio One 等がある。

<参考文献>

- ・紺野 望、2010、コミュニティ FM 進化論、株式会社ショパン
- ・北郷裕美、2015、コミュニティ FM の可能性、青弓社

## 小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合

On a fusion of establishment of an incumbent elementary school teachers' training program to improve their class performance and teacher training curriculum

日出間 均<sup>1)</sup>                      山本 悟<sup>1)</sup>                      富山 哲也<sup>1)</sup>  
Hitoshi HIDEWA                      Satoru YAMAMOTO                      Tetsuya TOMIYAMA

**キーワード**：教員、授業力、研修、教員養成

**要旨**：新座市公立小学校の教育現場では、団塊世代の教員退職及び新学習指導要領改訂期を迎え、校内研修活動の充実とその実践が喫緊の課題となっている。そこで平成 27 年度より 3 年間、COC 研究事業の一環として小学校現職教員研修システムの新たな方向性と教員養成カリキュラムの接点を模索してきた。特に平成 29 年度には、野寺小学校（以下野寺小）と新開小学校（以下新開小）を対象に現職研修システムの充実に向け、①野寺小と新開小の研修交流会実施、②現職研修システムと本学教員養成課程を連携する方策の明確化を目的に COC 事業を展開した。

この 3 年間の研究により、現職研修の有効なシステムについて、具体化の方向性が見えてきた。現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムを融合させることでお互いに機能しあい、大きな成果を得ることができた。

そして、現職教員研修と小学校教員養成課程の接点をさらに深めるには、現職教員と児童教育学科の学生が共に学ぶ場を提供する授業科目の構築とその実現が効果的であることが明らかになった。本稿では、平成 29 年度の実践を中心に述べることとする。

## 1 研究の意義と目的

新座市公立小学校では、団塊世代の教員退職及び新学習指導要領改訂期を迎え、校内研修活動の充実とその実践が喫緊の課題となっている。一方、日々の授業実践や児童管理に追われ効果的な現職研修プログラムの確立は難しい傾向にある。

そこで、平成 27 年度より COC 研究事業に採択され野寺小で算数科と体育科、平成 28 年度は野寺小で算数科と理科、新開小で国語科と体育科を対象に現職教員研修システムの新たな方向性と小学校教員養成カリキュラムの接点を模索してきた。

第 3 年次として平成 29 年度も野寺小と新開小を対象に、現職教員研修システムの充実に向け、(1)野寺小と野寺小の研修交流会の実践、(2)現職教員研修システムと本学小学校教員養成課程を連携する方策の明確化を目的に COC 事業を展開した。

## 2 研究活動計画

- ① 国語科、算数科、体育科の研究授業および実技指導等の現職教育に関する校内研修会を実施する（野寺小学校：算数科 3 回、体育科 1 回、大和田小学校（以下大和田小）：国語科 3 回、体育科 1 回、野火止小学校（以下野火止小）：算数科 2 回、体育科 2 回）。
- ② 新学習指導要領改訂に関する講演会等を 3 回程度実施する（小学校教育全般および道徳科、英語教育、プログラミング教育等を専門とする大学教員等に依頼）。
- ③ 野寺小、大和田小、野火止小合同研修会を 1～2 回程度実施する（授業研究会、講演会の合同開催）。
- ④ 先進的な授業研究会に現職教員を派遣し、実践的な授業力の向上を図る（各小学校 5 名：合計 15 名）。

1) 十文字学園女子大学 児童教育学科

- ⑤ 児童教育学科の時間割を調整し、上記①～③の研修プログラムに学生を参加させ研究課題に関する資料を収集する（下記⑥に示す3科目履修学生および研究代表者と共同研究者のゼミに所属する3・4年生を対象）。
- ⑥ 児童教育学科専門科目（「教職発展演習」「教育実習事前事後指導」「教職実践演習」）において、現職小学校教員を臨時講師に迎える機会を設定し、教職に関わる資質・能力を向上させる教育プログラムを試行する。
- ⑦ 以上の活動成果を整理し実践報告書を作成するとともに、新座市現職教員研修システム（3年次研修制度）の改善に向けた実践的プログラムの試案をまとめる。

### 3 先進的な私的教育研究会の参加活動と成果

#### 3.1 新開小学校の研修事例と成果

平成29年度は次の3つの研究会に若手教員を派遣し研修を行った。

- ① 「第19回全国国語授業研究会：1名」
- ② 「第2回夢の国語授業研究会：1名」
- ③ 「学習公開・初等教育研修会：1名」

いずれも公開授業と協議会、ワークショップ、講演という活動内容であった。

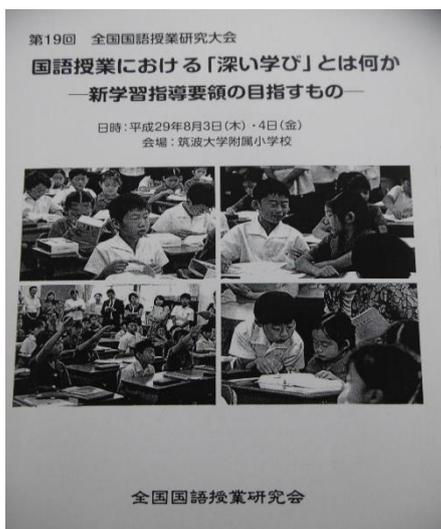
#### 3.2 新開小学校での参加実績の報告

- ① アクティブ・ラーニングを国語の授業で実践する考え方を理解できた。
- ② 単なる提案授業だけでなく、予め教材の内容を参会者で学び合う研修スタイルは、校内の現職研修に活用できる。
- ③ 学習指導要領に関わる考え方についての学びを深めるとともに、新しい授業づくりに関する情報を確認できた。

#### 3.3 野寺小学校の研修事例と成果

平成29年度は次の研究会に若手教員を派遣した。「学習公開・初等教育研修会：4名」

公開授業と研究協議会、教科別の分科会という活動内容であった。また筑波大学附属小学校に月1回の頻度で合計10名の教員が授業を参観する研修を実施した（理科、算数、国語、体育、生活、総合、他）。



#### 4 校内授業研修会（研究授業）の実践報告と成果 新開小：国語科、体育科

##### 4.1 研究授業の概要

###### 4.1.1 国語科

- ① 平成 29 年 5 月 29 日（月） 第 5 学年「見立てる」「生き物は円柱形」  
授業者：大内敦司 教諭
- ② 平成 29 年 10 月 23 日（月） 第 6 学年「やまなし」  
授業者：村上辰徳 教諭
- ③ 平成 29 年 11 月 13 日（月） 第 4 学年「アップとルーズで考える」  
授業者：斎藤紗也加 教諭  
学生参加者 7 名

###### 4.1.2 体育科

- ① 平成 29 年 11 月 7 日（火） 第 4 学年「ポートボール」  
授業者：前原和美 教諭
- ② 平成 30 年 2 月 1 日（木） 第 3 学年「台上前転」  
授業者：佐久間琴弓 教諭  
学生参加者 11 名

##### 4.2 協議会のまとめ

- ① 筆者の考えを捉えて要旨をまとめる活動が深まった。文章をよくする意識の向上、教師との対話が見られた授業であった。
- ② 児童のやり取りの言葉が豊かで読む力の定着が窺える。朗読会への深まりを期待したい。
- ③ 児童が言葉に拘り、よい話し合いが展開された。まとめの場面で児童に発表させ、交流を深め合う姿を目指したい。
- ④ 学習の成果を可視化する手立てを工夫し、児童の意欲を高める指導が必要である。
- ⑤ 児童のつまずきへの対処法、個人差を意識した学習の場づくりの必要性が明確になった。

##### 4.3 教育講演会・公開研究発表会の概要と成果

- ① 平成 30 年 2 月 9 日（金）野寺小学校研究発表会（新座市委嘱事業）において、文部科学省初等中等教育局教育課程調査官の鳴川哲也氏を招聘して教育講演会を行った。参加者は本学教職員、市内小学校、西東京市等から計 113 名の参加があった（本学学生 15 名）。
- ② 平成 30 年 2 月 14 日（水）新開小学校研究発表会（新座市委嘱事業）において、筑波大学准教授根津朋実氏の教育講演会：テーマ「次期学習指導要領に向けて、今、すべきこと」を実施した。参加者は計 40 名（本学学生 14 名）であった。
- ③ いずれの講演でも、新学習指導要領の方向性、カリキュラムマネジメントの視点の具現化、主体的・対話的で深い学びの実践に関する今後の示唆を具体的にいただき、現職教員の授業力を向上する上で大変有意義な会となった。
- ④ COC 事業による校内研修プログラムは、野寺小と新開小が新座市から委嘱を受けて展開する事業と相乗的に連携し、研究発表会の内容や児童の学習活動を向上させていた。



#### 4.4 野寺小・新開小の研修活動の交流とその成果

新座市の研究委嘱事業として、野寺小と新開小の双方が公開した研究発表会を研修活動交流の機会とした。

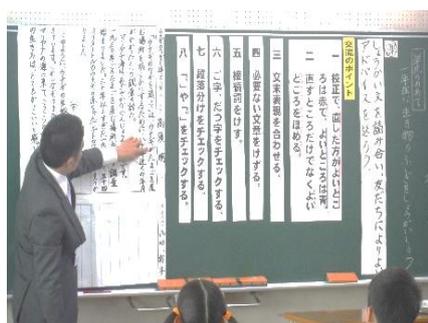
##### ■野寺小「学び合い・聴き合う児童の育成と授業づくりの研究」

平成30年2月9日(金)～新開小5名参加

##### ■新開小「心ゆたかで笑顔あふれる新開っ子を目指して～主体的に読む力を育てる国語科授業の創造～」

平成30年2月14日(水)～野寺小5名参加

- ・お互いの研究発表会に触れる機会により、授業づくりの工夫により、児童の活動や学びの変容する姿を感じ取る機会となったようである。
- ・現在、それぞれの学校で取り組んでいる研究のあり方や進め方、方向性について、改めて見つめ直す機会になったことを交流会の成果に挙げていた。



#### 4.5 初任者研修活動との連携

平成30年2月1日(木)に研究構成員：山本、弘中の2名、新開小教諭2名、野寺小教諭1名、本学児童教育学科学生11名が参加して、3年生・「跳び箱運動:台上前転」を題材に研究授業と協議会を開催した。初任者研修も兼ねた研究授業の参観は昨年同様、参加学生に大きな刺激と影響を与えている。「現職研修」と「教員養成課程」を融合させる新たな方策かもしれない。以下、協議会の論旨を紹介する。

- ① 児童のつまずきに対する練習の場づくりが不十分で活動が停滞気味になった。
- ② 児童同士の教え合いや学び合いを導き出す手立てを講じ、主体的・対話的な学びを意識させるべきである。
- ③ 学習規律と授業運営に関わるマネジメントは確立されているが、台上前転に関する教材研究を深める必要がある。

#### 4.6 COC 事業参加学生の感想

- ・自分と3歳しか変わらない女性の先生が、38名のクラスをまとめて落ち着いて授業を進める様子に感動するとともに、将来への不安を抱いた時間でした。
- ・様々な場面で児童に発問して、言葉のキャッチボールが成立していたと思います。技能差と個々の子供の躓きに対応する難しさが話題になりましたが、そのレベルまで要求される体育授業の厳しさがわかりました。
- ・場づくりの難しさを感じた授業でした。また40人近いクラスを受け持つ事実を知り、学級経営の大変さを改めて理解しました。このような機会に恵まれないと、大学で学修したことを本当の意味で深める重要性に気づかないように思いました。これからの学生生活に役立たいです。



## 5 研究成果のまとめと課題

### 5.1 研究成果のまとめ

平成 29 年度も予算を柔軟に活用できる利点を生かし、野寺小、新開小とも私的研究会への若手教員派遣、教材備品と研究図書購入、講師派遣による先進的な講演会実施、及び校内の研究授業研修等、充実した現職研修プログラムを展開できた。少額予算を有効に活用した研修成果は評価できると言える。

本事業で展開した現職研修プログラムをもとにして、新座市研究委嘱事業である「学習公開授業研究会」が、野寺小、新開小の双方で実施された。近隣の小学校教員や本学学生など多くの参会者を集め、発表内容や公開された提案授業等も質的に高い評価を受けた。本 COC 事業の発展的活動と思われる。

また現職研修と教員養成課程の融合という視点では、4 年生必修科目「教職実践演習」やゼミ活動を中心に、本事業への参加も含めた現職研修プログラムへの体験学習への参加を授業シラバスに位置づけたことが大きな成果である。

研究成果は次の 4 点に総括できる。

- ① 予算の有効活用により、先進的な研究会に若手教員を派遣して実践的な授業力を育成できた。
- ② 4 教科の研究授業と授業協議会の実践を通して、現職研修を継続的に深めることができた。そして、その研修活動をもとに、学習公開授業研究会を開催し、近隣の教育施設に成果を発信することができた。
- ③ 野寺小、新開小とも教材教具や授業研究に関する資料が充実し、COC 事業研究を進める環境が整った。
- ④ 現職研修プログラムに学生が参加する機会を授業科目に位置付け、授業シラバスにも掲示した。学校インターンシップの学びとの接点についても研究を深める予定である。

### 5.2 今後の課題と反省

現職研修の有効なシステムについては、3 年間の研究により具体化の方向性が見えてきた。それには大学と教育現場の有益なつながりと情報交換、少なくとも 1 小学校あたり 10 万円程度の予算が必要である。

そして、現職研修と小学校教員養成課程の接点をさらに深めるには、現職教員と児童教育学科の学生が共に学ぶ場を提供する授業科目の構築とその実現が必要である。

〈参考文献〉

- ・文部科学省、2017 年、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編、国語編、算数編、理科編、体育編、東洋館出版社
- ・新座市立野寺小学校、新座市立新開小学校、現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合 平成 27 年度実績報告書 地域志向教育推進費
- ・新座市立野寺小学校、新座市立新開小学校、現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合 平成 28 年度実績報告書 地域志向教育推進費



## 本学における放課後児童クラブとの協働を考える

### The Consideration to cooperate with After-School Child-Care Club in Jumonji-University

布施 晴美<sup>1)</sup>      風間 文明<sup>1)</sup>      安田 哲也<sup>2)</sup>      加藤 陽子<sup>1)</sup>  
Harumi FUSE      Humiaki KAZAMA      Tetsuya YASUDA      Akiko KATO  
平田 智秋<sup>1)</sup>      長田 瑞恵<sup>3)</sup>  
Chiaki HIRATA      Mizue NAGATA

**キーワード**：放課後児童クラブ、連携、支援のあり方

**要旨**：平成26年度から30年度までのCOC事業として、新座市および新座市社会福祉協議会と連携し、新座市内の放課後児童クラブ（以下、学童保育）の支援を展開した。支援としては、学童保育の子ども達を対象に凧作り凧揚げイベントを大学構内および学童保育現場で開催をした。学生の協力を得て、日頃学童保育職員のみでは実施が難しいイベントの開催ができ、子どもたちにとって充実感・達成感の得られる体験企画となった。学童保育職員対象には、職員のニーズを踏まえた研修会を開催した。特に事例検討会では、職員の日頃の子どもたちへの取り組みを肯定的に支持することができ専門職としての自信をつけることにつながった。さらに学童保育職員の支援を検討するために質問紙調査を大学近隣3市の協力を得て実施した。職員は職務に対して使命感を持って取り組んでいるが、大規模化や安全配慮のストレス、専門職としての知識・能力不足、気になる子どもへの対応がストレスとなっていることが明らかになった。ただし、このストレスに対して、職員は学ぶことで乗り越えようとしている姿勢が見られた。学びのための研修開催も必要であるが、バーンアウトに陥らないための支援の重要性と、支援方法の検討が必要であることが示された。

#### 1 はじめに

学童保育とは、児童福祉法に基づいた放課後児童健全育成事業を展開する場として定められ、正式な名称は「放課後児童クラブ」という。放課後児童健全育成事業とは、「小学校に就学している児童であって、その保護者が労働等により昼間家庭にいないものに、授業の終了後に児童厚生施設等の施設を利用して適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全を図る事業」をいう。

放課後児童クラブ（以下、学童保育）は、全国学童保育連絡協議会（2016）によると、全国平均開設日数は283日であり、1～3年生においては年間1,221時間を過ごし、年間を通してみると学校よりも長い時間子どもが過ごす場となっているという。学校での学びの場と同様に学童保育の現場は、子どもの健全な成長発達に大きな影響をもたらす場であると言える。

本プロジェクトでは、「学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み」をテーマに掲げ、学童保育の現状を精査し、課題を明らかにし、課題解決に向けての取り組みを検討し、地域との連携の中で大学の役割を模索することを狙いとして活動した。平成26年度から平成30年度の5年間の活動と成果について報告する。

#### 2 学童保育現場における課題の精査

平成26年度（初年度）の本プロジェクトの活動として、まず全国的な学童保育の現場が抱えている課題について、文献検索及び学童保育関係者の聞き取りから明らかにした。学童保育での関心事や問題として、学童保育の制度的なもの、子どもの発達支援に関するもの、発達障害児に関するもの、学童保育職員の資質やスキルアップに関連したもの、安全と危機管理に関するもの、食物アレルギーに関するもの、疾病看護・応急手当に関するもの、保護者との関係性、学校と連

1) 十文字学園女子大学 人間発達心理学科 2) 東京電機大学 理工学部 3) 十文字学園女子大学 幼児教育学科

携に関するもの等、多岐にわたっている現状が示された。また、特に大きな問題として、小学1年生の待機児童の増加（いわゆる、小1の壁）、大規模化・狭隘化、児童指導員の処遇や人員不足等が指摘されていた。

国の施策としては、放課後の子どもの安全で健やかな活動場所を因るため、厚生労働省所管の放課後児童クラブと文部科学省所管の放課後子ども教室を一体型した「放課後子ども総合プラン」への取り組みが始まっていた（図1）。放課後児童クラブについては、平成26年度当時今後5年間（平成31年度末まで）のうちに90万人の利用をさらに拡充して30万人分整備（待機児童も解消）することを目指すとしていた。また、一体型を600か所から平成31年度末までに1万か所以上を目指すとしていた。これらの取り組みは、子どもの心の成長を促し子どもの放課後の居場所を提供するという目的においては、放課後児童クラブも放課後子ども教室もどちらも同じであるが、家庭の代替機能と学校外教育的視点という異なった視点がある。そのため一体型の「放課後子ども総合プラン」の取り組みの中では、放課後児童クラブ在籍の児童と未在籍の児童に対して、子どもの生活面での養護的な視点や安全等に関する責任の所在などで課題が多いことも示され、さらなる整備の必要性が求められていることが明らかとなった。

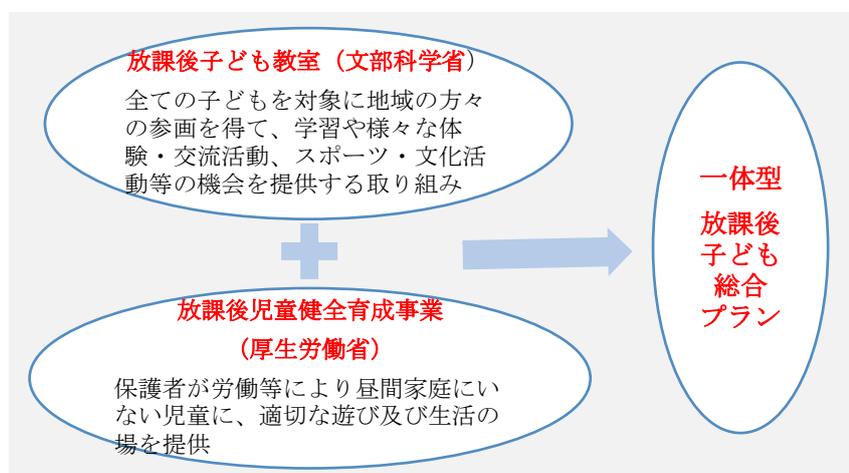


図1 放課後子ども総合プラン

### 3 学童保育の変革期の中で国が目指すものを理解するための公開講座の開催

平成27年度は、学童保育にとって大きな変革期の年であった。子ども・子育て支援新制度がスタートし、放課後児童クラブ運営指針が策定され、放課後児童支援員認定資格研修が開始された。本プロジェクトでは、国の目指す施策を理解し、学童保育職員との連携や大学の貢献策の手がかりを得るための活動として、学童保育職員や関係者向けの公開講座「子ども・子育て支援新制度の中で学童保育のこれからについて考える～子どもたちの安全安心と健やかや成長のために～」を開催（平成28年2月20日（土）13：00～15：00、9417教室）した。

放課後児童クラブ運営指針および放課後児童支援員認定資格研修が厚生労働省から示されたことから、その策定に関わった厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化総合対策室室長補佐（当時）の竹中大剛氏の基調講演、および新座市子育て支援課長（当時）の鈴木義弘氏を話題提供として講師に招き、公開講座を開催した。

公開講座では、51名が参加した。参加者の所属は、新座市の放課後児童保育室職員が約半数を占め、他に社会福祉協議会職員、市議会議員、学童保育の保護者、本学教員・学生であった。基調講演では、国が目指す学童保育の展望と自治体で推進すべきこと、職員の処遇改善や質向上に関する話等を聞いた。話題提供では、新座市の現状と課題（大規模化と狭隘化、処遇改善等）に対する今後の取り組みが紹介された。参加した職員からは、国や新座市が学童保育のことをどのように捉えているのか直接話を聞くことで、閉塞気味であった気持ちが明るくなり元気に仕事に取り組みそうだという感想がきかれた。講座内容について「非常に満足」の5点を最高

点とした評価に対して、平均得点は4.43 (SD 0.56) 点と概ね高評価であり、学びの多い有意義な時間となった。公開講座を開催したことにより、新座市および新座市内の学童保育室や社会福祉協議会との関係性をつくることもできた。成果物として、「公開講座『子ども・子育て支援新制度のなかで学童保育のこれからについて考える～子どもたちの安全安心と健やかな成長のために～』報告書」を作成した。

#### 4 学童保育領域における大学の地域貢献策の展開

平成26年度、27年度の活動から、国が目指す施策を理解し、学童保育支援員との連携や大学の貢献策の手がかりを得た。そこで本プロジェクトでは、平成28年度～平成30年度の活動として、子どもへの支援、職員への支援、現状の調査の3本を柱とした活動を展開した。具体的には、①子どもへの支援：新座市放課後児童保育室の子ども向けイベントの開催、②職員への支援：新座市放課後児童保育室職員向け研修会の開催、③現状の調査：放課後児童クラブ職員を対象とした職務に対する使命感やストレス等を明らかにするための調査を実施した。

##### 4.1 学童保育の子どもたち向けのイベント

###### 4.1.1 子ども向けイベント開催の意義

平成27年3月に放課後児童クラブ運営指針が示され、その中には、「子どもの最善の利益を考慮して育成支援を推進」することが明記されている。放課後児童クラブにおける育成支援については、「子どもが安心して過ごせる生活の場としてふさわしい環境を整え、安全面に配慮しながら子どもが自ら危険を回避できるようにしていくとともに、子どもの発達段階に応じた主体的な遊びや生活が可能となるように、自主性、社会性および創造性の向上、基本的な生活習慣の確立等により、子どもの健全な育成を図ること」を目的としている。

こうした目的と照らして、本プロジェクトでは、放課後児童クラブ（学童保育室）の大規模化・狭隘化の課題の中で、日頃支援員が実施したくても安全面や支援員の不足等により実施できない行事等について、子どもたちを対象とした体験型のイベントを企画した。大学構内でのイベント開催では、安全面に配慮した広いエリアが確保でき、子どもを支援するにあたっての学生というマンパワーの確保も可能である。子どもたちにとって、体験型イベントの参加は発達支援においても意義のある体験と考えられる。子どもたちが設定課題に取り組むことで、創造性、自立性、達成感を得ることができ、育成支援の一つとなる。

###### 4.1.2 子ども向けイベントの展開の実際と成果

子どもたちの体験型イベントとして、「凧作り・凧揚げイベント」を開催した。凧作りは身近にあるレジ袋とストローを用いて、型紙に合わせて切りとり、セロハンテープを使って組み立て、さらに、自作の凧に張り付ける絵柄を紙に書き完成となる。こうした子どもの取り組みが創造性や達成感を促進するものと考えた。

企画を展開するにあたっては、以下の3点を準備し、配慮した。

- ①冬休み中（小学校が冬休みに入った年末）に「凧揚げ・凧作りイベント」を計画し、学生を募集した。
- ②イベント参加希望学生に対して、事前の凧作り講習会を開催し、当日子どもたちに凧作りを指導できるように準備した。
- ③子どもたちは学童保育室から徒歩で本学に来るため、往復の歩行移動における事故防止のため、学生の引率支援の手配をした。

平成28年度から30年度のイベントの活動状況については、表1に記した。

表1 凧揚げイベントの活動状況（平成28～30年度）

年度	実施日	参加保育室 及び参加人数	活動の様子
平成28年度	12月27日（火） 10：00～13：30  会場：本学	新座市立野火止 放課後児童保育室 参加児童：95名 保育室職員：10名 本学学生：14名 本学教員：4名	当日は雨天のためグラウンドでの凧揚げは実施できなかったが、カフェテリア内で試し揚げをし、自作の凧に満足していた様子だった。子どもに提示した課題を学年別に変えたため、指導が慌ただしい状況になってしまっていた。
平成29年度	12月27日（水） 10：00～13：30  会場：本学	新座市立新開 放課後児童保育室 参加児童：60名 保育室職員：8名 本学学生：21名 本学教員：5名	絶好の凧揚げ日和であった。昨年の反省から、学年別の課題はやめ、皆同じスタイルの凧作りをした。短時間で自作の凧が出来上がり、凧揚げの時間を十分取ることができた。自作の成果物を皆に披露することもでき、子どもの達成感・満足感を満たすことができた。
平成30年度	12月27日（木） 10：00～13：30  会場：新座市立 陣屋放課後児童 保育室	新座市立陣屋 放課後児童保育室 参加児童：45名 保育室職員：5名 本学学生：15名 本学教員：3名	会場をこれまでと変え、プロジェクトチームが現地の学童保育室に赴き、凧揚げイベントを開催した。スムーズに凧作り・凧揚げが行われた。敷地内の小学校校庭が凧揚げ会場となり、参加児童の小学校担任も様子を見に来て、子どもたちの成果を褒めてくれていた。子どもの達成感・満足感を満たすことができた。

## 4.2 学童保育の職員への支援

### 4.2.1 研修会の開催の意義

平成27年3月に厚生労働省が示した「放課後児童クラブ運営指針」に学童保育職員（以下：職員）の「子どもの育成支援」が挙げられていることは上記に記した。こうした目的を達成するためには、学童保育の現場では、子どもを自由に遊ばせるなど単に居場所を提供するだけではなく、子どもの安全安心な生活と健全な成長発達支援が職員に求められているということである。それゆえ学童保育職員の専門性と質向上について求められ、それを保障するために放課後児童支援員資格認定研修（以下、資格認定研修）が行われ始めた。資格認定研修は、6分野16科目24時間のカリキュラムを受講しなくてはならない。しかし、このカリキュラムだけでは、日常業務の中で子どもと関わるための知識の獲得は十分とは言えない。また、職員自身も更なるニーズがあり、研修会を開催した。研修会は、①事例検討会、②全職員参加型研修会の2種類のものを準備した。

### 4.2.2 研修会の展開と成果

職員が日頃の支援の中で感じている事象について、自己の価値観に依存した支援になってはいないか、根拠に基づくものであるのかを客観的に分析し、問題点を見極める能力をもち、児童及び家族、あるいは職員自身にとってどのような対応が望ましいのか、建設的に支援展開ができるよう、職員の専門性の認識が重要である。そのためには、具体的な事例を教材として、支援の検討機会をもち、職員の知識・態度・情意の振り返りをし、職員の専門性や質の向上を目指すために、事例検討会の開催は必要で意義あるものと考えた。

事例検討会は希望者の参加としたが、研修会は新座市放課後児童保育室の全職員を対象とし

た。研修会参加を勤務とみなす対応となるよう、新座市社会福祉協議会と連携した。強制性を持たせることで、正規職員・非正規職員・パート職員等の参加が可能となった。この研修会は、放課後児童支援員資格認定研修の参加要件を満たしていない職員の参加も可能としたことに意義があるものとなった。全職員を対象としたため、分科会としてテーマを3つ用意し、参加したいテーマを選んでもらった。研修会の具体的な展開内容は、表2に示した。

表2 学童保育職員対象研修会の内容（平成28～30年度）

事例 検討会	<p>事例検討会（H29. 1. 21、H29. 9. 12）</p> <p><b>【事例検討会の目的】</b></p> <p>①児童の健やかな成長発達のために、事例を通して、児童や家族、学童保育職員の抱えている問題や背景を理解し、建設的な意見を出し合いながら、対応を考える。</p> <p>②情報の整理、アセスメント、具体的な支援を検討するプロセスを通して、学童保育職員が相互に実践力を高め合い、より良い支援につなげていくことができる。</p> <p>③子どもの最善の利益について考えることができ、学童保育職員の倫理観を養う。</p> <p><b>【活動の様子】</b></p> <p>20名ほどの職員が参加した。児童に対する関わり等について、事例を通して振り返り、対応を考えた。参加者は使命感が強く、子どもへの寄り添いの気持ちがあり、スーパーバイザーの示唆から自分の取り組みを肯定的にとらえることができ、充実した時間となった。（使用した資料は検討会終了後に回収し廃棄した）</p>
全職員 研修会	<p>職員研修会（新座市放課後児童クラブの全職員参加型）（H30. 2. 19、H31. 2. 21予定）</p> <p><b>【研修会の目的】</b></p> <p>学童保育職員として必要な知識・技術を学び、現場で活用することができる。</p> <p>3つの分科会 ①子どもの発達～気になる子どもの理解と対応</p> <p>②対人関係と集団遊戯</p> <p>③子どもの健康管理</p> <p>講師はCOC事業の教員および外部講師が担当し、参加者は興味関心のある分科会に分かれ、計100名以上の職員が参加した。</p>

#### 4.3 学童保育職員の職務に対する使命感やストレス等に関する調査

##### 4.3.1 調査研究の目的と方法

学童期の子どもの発達課題には、基本的な生活習慣獲得や身辺自立ができること、集団生活の中で社会性を身につけること、社会のルールを学び規範意識の基礎を形成していくことなどがあげられる。また有能感を育み、劣等感を克服することを学ぶ大切な時期でもある。そのような時期の子どもたちの放課後および夏季休業期間などに親（保護者）に代わって支援しているのが、学童保育職員である。現在学童保育の現場は、社会の求めに応じて受け入れ利用児童数も増加し規模が拡大する一方で、大規模化、狭隘化、支援員の専門性、発達障害やアレルギー疾患など配慮を有する児童の増加、職員の不足や処遇などが問題として取り上げられている（全国学童保育連絡協議会, 2016、上村他, 2013、木村他, 2015）。こうした現状の中で、職員は困難性やストレスを抱えながら、やりがいや使命感を持って子どもの成長を支えている。

本研究では学童保育職員が持つ職務に対する「やりがい」「ストレス」「学びのニーズ」についての実態を把握し、現状の問題点を明らかにすることを目的とし調査を行った。得られた結果については、学童保育職員を支援するための方策を検討するための資料としたいと考えた。

調査方法は、郵送法による無記名の質問紙調査（本学の研究倫理委員会承認）を大学近隣3市の協力を得て、学童保育職員を対象に実施し、115人（回収率49.6%）の回答を得た。

#### 4.3.2 調査研究の結果と考察

図2に示すように、学童保育職員は、研修の必要な専門職でもあり、社会貢献としての意義を感じ、やりがいを感じているが、大規模化・狭隘化による安全配慮の負担や学童保育職員としての知識・能力不足を感じ、多様な特徴と背景を持つ児童への関わりにストレスを感じていた。一方で学びのニーズとして挙げられたのが、子どもの健全な発育促進のための知識と支援方法や安全を守るためのスキル、連携や関係性の構築が挙げられた。こうしたことから、学童保育職員は、困難性やストレスはあるが、子どもの健全な成長を支える仕事に使命感を持ち、困難性を学ぶことによって少しでも解決につなげていこうという思いを持っていることが示された。また、学童保育職員を支援する際に、学びのニーズに応じた内容の研修機会を提供することも必要であるが、仕事に対するバーンアウトに陥らないための支援も重要であることがわかった（詳細は、本学紀要に報告、布施他、2017）。

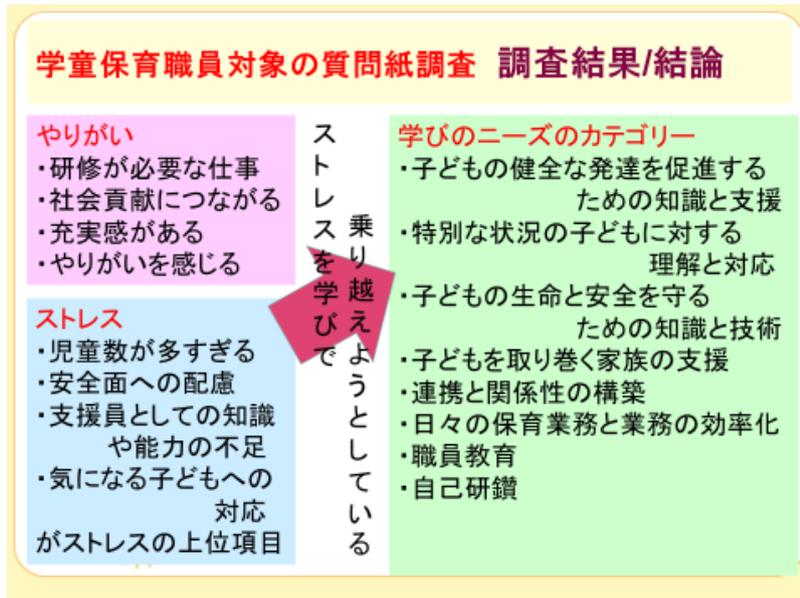


図2 調査の結果と結論

#### 5 これまでの振り返りと今後の展望

COC 事業としての5年間の活動を振り返り、地域との連携の中で放課後児童クラブへ大学が果たすことができる役割を見出すことができた。また、学生が支援を展開する際に重要なキーパーソンであることも示すことができた。今後も支援の継続を検討していきたいと考えている。また、調査研究については、平成30年度は調査対象を埼玉県全域に広げ、現在データを収集中である。今後その成果を公表し、学童保育現場の支援に役立てたいと考えている。

これまでの活動に対してご理解・ご協力を賜り、行政、社会福祉協議会、放課後児童クラブ職員、子どもたち、学生の皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

#### <参考文献>

- ・厚生労働省編（2017）、放課後児童クラブ運営指針解説書、フレーベル館。
- ・布施晴美、風間文明、安田哲也他（2017）、放課後児童クラブ職員の職務に対する思い—やりがいとストレスと学びの仁^図との関係から—、十文字学園女子大学紀要、48（2）、29-38。
- ・木村文香・中村千城（2015）、学童保育サポートシステムの構築に関する研究—指導員が感じている問題—、日本教育心理学会総会発表論文集、57、661。
- ・全国学童保育連絡協議会（2016）、2016年5月1日現在の学童保育実施状況調査—報道発表資料 <http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/>

# 地域環境を生かした子どものための自然体験活動の実践と評価

## Practices and evaluation of nature activities for the area environment

星野 敦子<sup>1)</sup>

Atsuko HOSHINO

**キーワード**：自然体験活動、生活科、環境保全、異年齢集団、スタートカリキュラム

**要旨**：COCの採択を契機として発足した「HUG ネット」は、新座市の生涯学習制度の一つである「市民総合大学」の修了生を中心とした組織であり、十文字学園女子大学がハブとなり、地域で活躍する13団体、及び新座市関係6課をネットワーク化したものである。現在では「自然環境保全」「子どもの自然体験」「研修」及び「ホテル再生」の4つのプロジェクト組織で活動を推進しており、それぞれについて成果をあげている。本論文においては、子どもの自然体験活動の成果を分析するために、「木の名札と竹パンづくり」(H30.11)について活動分析ならびにエピソード記述による分析を行った。その結果、自然体験の実践が、生活科の内容を多く含んでいること、また幼児を含む異年齢集団による活動が、児童の表現力、コミュニケーション力、学びに向かう力などを育てていることが明らかとなった。

### 1 はじめに

「雑木林とせせらぎのまち」埼玉県新座市では、ボランティア活動が盛んで、市内に数多く残っている雑木林や、野火止用水の保全活動などをおこなっている団体が複数存在している。これらの団体は似通った活動をしているものの、横のつながりがなく、連携協力することもなかった。そこで、「COC 地(知)の拠点整備事業」の採択を契機として、平成26年3月、市内で地域連携活動を展開していた十文字学園女子大学がプラットフォームとなり、「新座市グリーンサポーター」「雑木の会」など12団体とそれらを支援する新座市の関係6課との連携を図る「ふるさとの緑と野火止用水を育む会(通称：HUG ネット)」を創設した。平成30年7月現在、「ミョウオンサワハタザクラ守る会」及び「畑中ホテル愛好会」が加わり、1団体が解散したため、現在13団体が加盟している。

「HUG ネット」は5年間に渡り、「子供の自然体験活動」を軸に、次世代に向け「ふるさとの緑と野火止用水」を継承していくための活動を継続してきた。本論文においては、これらの活動の実践と成果について報告する。

### 2 「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」(HUG ネット)の概要

#### 2.1 組織の特徴

「HUG ネット」は、野火止用水や周辺の雑木林に関わる保全活動や観光推進活動を行っている団体や町内会、及び、これらの団体を支援する新座市の関係6課のネットワークを、十文字学園女子大学が拠点となる形で組織されている。13団体のうち9団体が、「新座市民総合大学」の修了生により運営されている(星野、2018)。

「新座市民総合大学」は、新座市制30周年事業として平成12年度に始まった独自の生涯学習制度である。設置の目的は、「市民が自分を高め、地域を高める学習の場を創出し、学んだことを地域で活かし、市民一人ひとりが生き生きとした人生を送れるようにするため」であり、発足当初から学習の成果を地域に活かすことが明確に示されている。講座内容、施設ともに3大学の協力を得ており、各大学で最低1学部を担当し、教員がコーディネーターを務めて講座を運営している。

1) 十文字学園女子大学 児童教育学科

図1はHUG ネットを構成している団体ならびに「新座市民総合大学」との関係を示している。雑木林や野火止用水周辺の環境保護活動を中心に行っている7団体（図の①から⑦）は主として環境系学部の修了生によって構成されている。また観光関連活動を行っている2団体（⑧、⑨）は、観光系学部の修了生によって構成されている。⑩から⑬の団体は、町内会を基盤として成り立っている団体である。

新座市の関係6課のうち「生涯学習スポーツ課」が市の取りまとめを行い、HUG ネット全体の取りまとめは十文字学園女子大学が行った。HUG ネットの組織としての特徴は以下の通りである。

- 1) 新座市の生涯学習制度の成果として活動を継続している団体により組織されている。
- 2) 関連性の深い活動をしていたにも関わらず、これまで連携をもたなかった団体の情報のネットワーク化を実現し、情報と技術の共有化を行った。
- 3) HUG ネットとして、子どもの自然体験活動を軸とした独自の活動を展開し、地域においてこれまでにない新しい活動団体としての存在意義を示した。
- 4) 各団体の特徴を生かす形で、共通の活動をプロジェクト化し、プロジェクトごとの独立性を保持している。

「サンアール10」や「チームキャロット」のように同期の修了生が立ち上げた団体もあり、また複数の団体で活動している修了生も多い。さらに直接の野火止用水に関わらないためにHUG ネットには属していないが、実際にはHUG ネットのメンバーが所属し、活動している団体も多数存在している（星野、2016）。

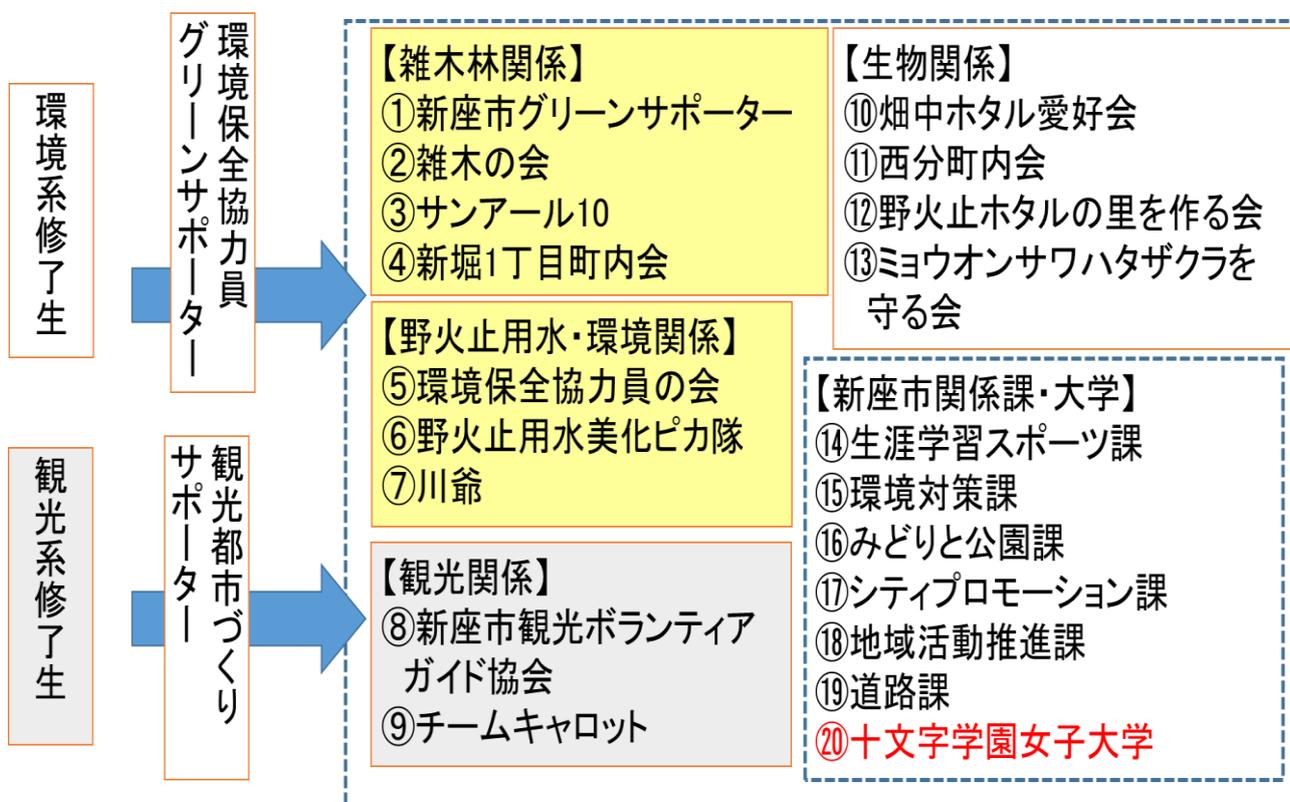


図1 「HUG ネット」と「新座市民総合大学」

## 2.2 各プロジェクトの活動

HUG ネットは移行期間を経て、平成 28 年度から 4 つのプロジェクトで活動を展開している。プロジェクトごとに、リーダー、サブリーダーを中心として事業計画を策定し、年 4 回開催される代表者会議において内容を議論したうえで HUG ネットメンバーとそれ以外の地域の協力者、ならびに十文字学園女子大学の学生も加わって事業を実施してきた。表 1 は各プロジェクトの活動の経緯を示している。

表 1 HUG ネットの主な活動の経緯

NO	年	月	プロジェクト	主な活動
1	27	3	-	「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」(HUG ネット)キックオフイベント
2	27	3	-	ネットワークロゴ、ユニフォームベストの製作
3	27	11	-	三島市源兵衛川における研修
4	27	11	-	「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」(HUG ネット)リーフレットの作成
5	27	12	-	「野火止用水ゆるキャラフェスティバル」におけるミニクリスマスツリーづくりと魚の展示
6	27-30	11	A	樹木プレートの設置
7	28	2	A	冊子『森の四季だより』製作
8	28	7	B	【子ども自然体験】竹細工と森の冒険
9	28-30	8	A	野火止用水沿いアジサイ等剪定
10	28	11	C	青木が原樹海、生物多様性センター研修
11	28-30	10	A	「野火止用水樹木マップ」作成
12	28-30	10	A	「プラスの森」(十文字学園女子大学に隣接する新座市管轄の雑木林)樹木伐採
13	28-30	11-12	A	野火止用水沿い児童の絵画展示
14	28	12	B	【子ども自然体験】ミニ正月かざりと落ち葉さがし
15	29-30	8	B	【子ども自然体験】川ガキの黒目川探検
16	29	10	C	研修「野火止用水の歴史と痕跡を訪ねて」
17	29	11	B	【子ども自然体験】雑木林で炭焼き体験
18	30	4	D	ホテル放流事業
19	30	9	C	荒川知水資料館・荒川下流域見学研修
20	30	11	B	【子ども自然体験】木の名札と竹パンづくり
21	30	12	A	野火止用水クリーンデー(東京都との連携)

※注 A : 自然環境保全プロジェクト B : 子どもの自然体験プロジェクト  
C : 研修プロジェクト D : ホテル再生プロジェクト



## B. 子どもの自然体験プロジェクト

地域の自然環境の素晴らしさや、我が国の文化や地域の農作物について子どもたちに伝えていくために、市内の幼児や小学生を対象として、平成28年度から自然体験活動を実施している。学生も積極的に参加し、子どもたちや高齢者との関わりを通して多くの学びを得ている。図3は活動の様子とプログラムの一部を示している。

- ・「竹細工と森の冒険」 雑木林散策、地元の竹林から切り出した竹を切って箸やお椀の作成、さらに竹を使った「流し人参うどん」（「人参うどん」は新座の名産品）などを行った。
- ・「ミニ正月かざりと落ち葉探し」 雑木林で落ち葉を探して木の名前や特徴を学び、樹木プレートをつけた。たき火を囲んで、地元の野菜たっぷりの豚汁とすいとんを味わい。藁や稲穂を利用して「ミニ正月かざり」を作成した。
- ・「川がきの黒目川探検」：市内の黒目川で網をつかった魚取りをして、捕まえた生物を水槽に入れ、種類や外来種の現状などを学んだ。また水質検査も実施した。
- ・「雑木林で炭焼き体験」：雑木林の中で、自分で拾った材料を炭焼きし、松ぼっくりや木の実の花炭を作った。さらにその花炭で小さなオーナメントを製作した。また地産の野菜を使ったシチューを味わった。
- ・「木の名札と竹パンづくり」 木の板やドングリなどを利用して、子どもたちがオリジナルの樹木プレートを作成し、雑木林に入り、自分が作成したプレートを樹木に設置した。また竹にパン生地をまきつけて炭火で焼く「竹パン」を作り、地元産の野菜シチューと共に味わった。



図3 (上) 自然体験チラシ(部分)  
(下)「木の名札と竹パンづくり」の様子

### C. 研修プロジェクト

メンバー向けに地域環境保全に関わる研修を実施している。平成 27 年度は静岡県三島市において、蘇った清流“源兵衛川”の見学、平成 28 年度は青木ヶ原樹海と「生物多様性センター」における研修を行った。平成 29 年度は地元において、「志木市東北部に展開された、野火止用水の痕跡を訪ねて」をテーマに専門家の指導により実地研修を実施した。また平成 30 年度は「荒川知水資料館」ならびに、船に乗って荒川の下流域の見学研修を実施した。いずれも定員を超える申し込みがあり、参加者の 9 割以上から「良かった」または「とても良かった」という評価を得ている。

### D. ホタル再生プロジェクト

HUG ネットにはホタルの育成事業をしている団体が 2 団体含まれている。例年、各団体が市の事業としてホタル観賞会を実施しているが、「いずれは野火止用水にホタルの復活を」との思いで活動してきた。現在の野火止用水の水は東京都の処理水であるが、水質はホタルや餌であるカワニナが息できる程度になっている。そこで平成 30 年 4 月に野火止用水の 2 地点にヘイケボタルの幼虫とカワニナを試験的に放流し、観察を行った。その結果、数 10 匹の幼虫が上陸し、その後飛翔も確認された。今後市とも相談のうえ、放流について継続していく予定である。

## 3 子どもの自然体験を軸にした活動の教育的評価

### 3.1 自然体験学習の意義

平成 29 年 3 月に公示された新学習指導要領では、教育内容の主な改善事項として、以下の 6 点が挙げられている。

- ・言語能力の確実な育成
- ・理数教育の充実
- ・伝統や文化に関する教育の充実
- ・道徳教育の充実
- ・体験活動の充実
- ・外国語教育の充実

このうち、「体験活動の充実」については 20 年度の改訂時にも改善事項となっており、「主体的で深い学び」を実現し、目指すべき資質・能力の 3 つの柱である①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性、を養う上でも重視されている。特に幼小接続をスムーズに進めるための「生活科」を中心とした「スタートカリキュラム」の充実においては、体験活動の充実と地域連携の推進は欠かすことのできない要素となっている。

国立青少年教育振興機構（2014）の調査によると、自然体験が豊富な青少年ほど、「自己肯定感」及び「道徳観・正義感」が強く、得意な教科が多い傾向にある。また山本ら（2005）が、幼児期の自然体験活動の影響を、小学校 1 年生から 4 年生の児童とその保護者を対象として分析を行った結果、自然体験活動が正しい生活習慣や健康な体、積極性などに影響を与えていることを明らかにしている。また若杉ら（1997）は幼児期の自然体験が感性の向上にもたらす影響の重要性を示唆している。

### 3.2 「生活科」と自然体験活動

平成 29 年に告示された学習指導要領において、生活科の目標は以下のように定められている。今回の改定により、3 つの目標が具体的に示された。

#### 【生活科 目標】

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を活かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴や良さ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

これらの3つの目標は、育むべき資質能力の「3つの柱」である「知識及び技能の習得」「思考力、判断力、表現力等の育成」ならびに、「学びに向かう力、人間性等の涵養」に対応している。また目標を実現するための内容として9項目が挙げられている。このうち「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」は以下の5項目である（【 】内は著者による略称）。

- (4) 公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり働きを捉えたりすることができ、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用しようとする。【公共物・公共施設】
- (5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることなどに気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。【自然観察・生活】
- (6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。【自然の利用・遊び】
- (7) 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。【動植物への関心】
- (8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。【人との関わり】

HUG ネットにより実践された自然体験活動は、生活科の「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」にあたるものが多く、小学校低学年の参加が多い点、また兄弟姉妹として幼児の参加もあることなどから、幼小接続のための「スタートカリキュラム」としても有効であると考えられる。図4は、HUG ネットの自然体験活動のうち、「木の名札と竹パンづくり」(H30 実施)について、実際に行われた活動と生活科との関係を表したものである。

主な活動は「樹木プレートづくり」「竹パンづくり」及び「雑木林でのプレート設置」の3つである。自然を楽しみながら、グループのメンバーと助け合いながら作品を製作したり、竹パンを焼いたり、プレートを設置している児童の姿が生き生きとしており、無理のない形で、生活科の「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」について学んでいることがわかる。また会場は「児童センター」と「市営体育館会議室」を利用しており、公共施設の良さを感じ、正しく利用する姿勢も学ぶことができた。

「竹パン」については時間の関係で生地から作ることはできなかったが、生地を作ってください地域の方のお話を聞き、焼き方についても位置や焼き時間などの指示を受け、よく考えながら行動していた。地元の野菜を利用したシチューを地域の方たちにつくっていただき、ふるさとを感じながら、感謝の気持ちをもつことを学ぶ機会となった。

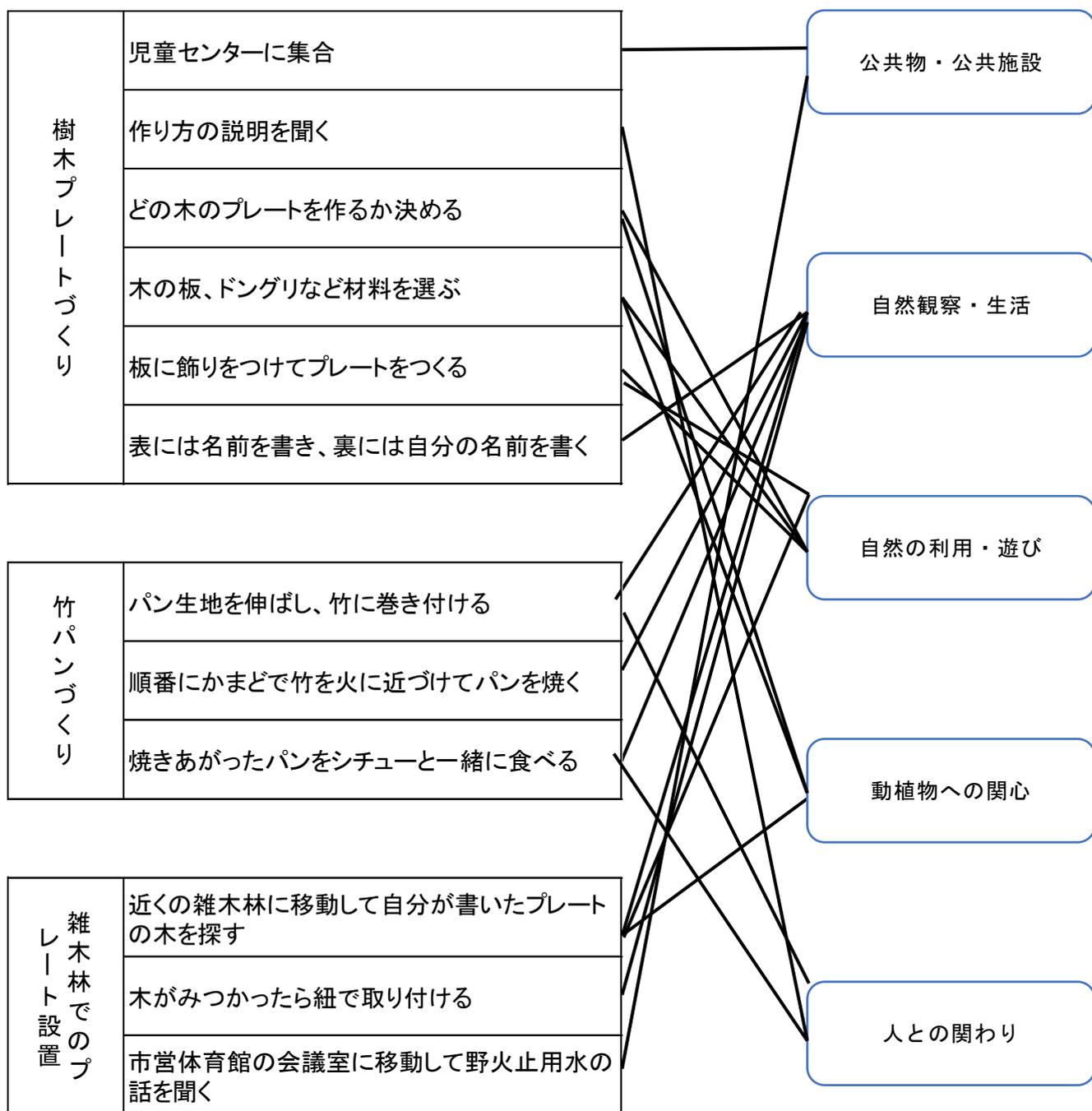


図4 「木の名札と竹パンづくり」の活動と生活科との関係

### 3.3 異年齢集団による学びの意義

表2は、「木のプレートづくり」について、子どもたちの活動の様子を観察し、行動と発話についてエピソード記述を行ったものである。鯨岡（2008）によれば、エピソード記述は2つの可能性を示唆しており、1つは保育における振り返りであり、今1つは質的研究の方法論としての意義である。主として保育の場面において利用されてきたエピソード記述は、総合学習や体験学習などの質的評価を行うツールとして有効であると考えられる。今回活動に参加した学生が記述を行ったが、活動全体を振り返り、評価できるだけでなく、学生本人が自らの活動を振り返ることで、客観的に活動を見直し、課題を見つけることができる。

表2 「樹木プレートづくり」のエピソード記述

場面	学年	行動	発話
木の板を決める (くじ引き)	全	順番を待つ間、木の名札のお手本や材料を見て想像を膨らませます。	
	1	それぞれのドングリの特徴を捉え、名前をつけていた。	「まんまるどんぐり」
			「長いドングリ」「赤ちゃんドングリ」
	2	2年生の女の子は感じたこと気がついたことや自分の気持ちをたくさん言っていた。	「このドングリかわいい！」
			「へえ～、松ぼっくり痛い、」
			「こっちはきれいな色のドングリだ！」
	6	6年生は共感しつつ学校で学んだ知識を教えてあげていた。	「くぬぎのドングリだね！！かわいい～」
「学校で勉強したから知ってるの」			
指導者	児童の様子を見つつ、誉めたり、材料についての指導を行う	「よく知ってるね！！」 「これはコナラのどんぐりだよ」	
・班ごとにテーブルに座り、作り方の説明を聞いたあと、各自材料を選んで製作	全	シーソーのような遊びをまねる みんな使う分の材料だけ持って行き、譲り合いながら材料を使っている姿が見られた。 児童は作業に夢中であまり説明を聞いていないようだった。	
	1	1年生男の子は、一緒に来た妹を手伝いながら自分のものを作る。 材料がなくなったら走って取りに行く。 習った漢字だけ使い名前を書く	「もうやっていいの？」
			「エノキってきのこ？」
			「お姉ちゃんとおんなじ材料がほしい！！」
			「俺の席とるな～」
			「かわいくできたよ！見てみて」
	2	板の裏に石やドングリを置き、シーソーみたいにして遊ぶ。 木の名前を書く工夫をしていた 木に直接書く文字と(エ、ノ) 木に丸い木を貼り付けてその上に書く文字(ゴ、キ) 小さいものから手に乗せてたりと工夫する姿が見られた。 木の表面だけでなく、側面にも色をつける。みんな真似し始める。 他の友達の作品を見に行きアイデアをもらいに行っていた。	「キノコのエノキもあるけど、今日は木の名札だからキノコじゃないよ」
			自分の名前を全部漢字で書く
			「みて！漢字で書けるんだ～、読める？」
			「この木小鳥みたい！形がとっても不思議」
			「彩りがいいでしょ～ グルーガン使うのどくいなんだ～♪」
			「材料が多くて一度に持てない。」
	3	6年生の様子を気にする	「やだ～自然の感じがなくなる。」
「グルーガンは順番に使うんだよ！」			
4	時間を気にしながら作業をする 下級生に材料を譲る 1年生にグルーガンの使い方を教えていた。 使ったペンや材料をしっかりと片付けてから次の作業をしていた。	「6年生なんだからすごいの作ってね！」	
		「家に飾ったら虫が出てきそう」	
6	材料を木に何度も置き直して、貼り付ける場所をしっかりと計画してから作業していた。	「ええ～ひとついいよ あげる。」	
		「グルーガンののりがラーメンみたい！！」	
指導者	活動途中でそれぞれの木の説明をしていた作品について助言をするが、児童なりの考えがあり、拒否される	「できるかな…」	
		「いいよ」 「もう少しペンを使ってカラフルにしてみたら？」	

場面は「木の板を決める」「班ごとに説明を聞き製作」の2つである。学年ごとに行動と発話の記録を整理している。これを見ると、学年の違いによる行動や発話の違いが顕著であり、また異年齢集団による学びの効果が表れていることがわかる。活動の様子は以下の4点にまとめることができる。

- ①低学年の児童は、視線が自分中心であり、感じたことをそのまま表現したり、自分の要望を伝えたりしているが、幼児に対しては思いやりをもって接している。
- ②学年が上がるにつれ、表現力が豊かになり、感じたことや気づいたことを表現するようになっている。
- ③中学年以上になると、年下の児童の様子を見て教えたり、材料を譲るなど、客観的に状況をとらえ、他者への配慮ができるようになっている。
- ④異年齢集団による活動において、年上の児童が年下の児童を気遣い、班のメンバーが自然に仲良くなり、一体感が生まれてきた。

#### 4 まとめ

「HUG ネット」においては、活動のプロジェクト化により、地域の方たちが主体的に高度な活動を展開してきた。本論文ではその中でも中心的な活動である、「子供の自然体験活動」について、活動の内容と生活科との関係、またエピソード記述を通じた分析を行った。その結果、自然体験の実践が、生活科の「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」にあたる活動を多く含んでいること、また幼児（参加児童の弟・妹）を含む異年齢集団による活動が、児童の表現力、コミュニケーション力、学びに向かう力などを育てていることが明らかとなった。地域人材と地域資源を活用した異年齢集団による体験活動は、今後幼小接続をスムーズに行うためのスタートカリキュラムや、生活科の学習に活かすなど、広く学びの場に展開していく可能性が示唆された。

#### <参考文献>

- ・鯨岡 峻、2008、主体として「育てられ-育つ」：質的発達研究に寄せて、『質的心理学講座Ⅰ 育ちと学びの生成』（無藤 隆、麻生 武編）、東京大学出版会、pp19-43
- ・国立青少年教育振興機構、2014、「青少年の体験活動等による実態調査」報告書平成24年度調査
- ・星野敦子、2018、新座市における地域人材育成のための生涯学習制度と地域ボランティアの展開、十文字学園女子大学紀要 48-1、pp255-268
- ・星野敦子、2016、新座市における大学との協働による人材育成— 地域に貢献する人材を育てる—、産学官連携ジャーナル Vol. 12 No. 2、pp20-22
- ・星野敦子、2015、大学と行政の連携による地域人材育成制度の評価、地域活性学会 第7回研究大会 年会論文集、pp219-222.
- ・文部科学省、2013、「人材認証制度のニーズ及びマッチングに関する調査研究」
- ・山本裕之、平野吉直、内田幸一、2005、幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究、国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 第5号、pp69-80
- ・若杉純子、川村協平、山田英美、1997、幼児における自然体験と感性の関わり、日本保育学会大会研究論文集 (50)、pp690-691

## 大学マスコットキャラクターを活用した地域連携活動

A study of using a university mascot in collaborations with local communities

星野 祐子<sup>1)</sup>

Yuko HOSHINO

**キーワード**：大学キャラクター、マスコット、着ぐるみ、地域連携

**要旨**：本学のマスコットキャラクター「プラスちゃん」は2014年秋に誕生した。マスコットキャラクターの誕生を受け、2015年度より「プラスちゃん」の活動を支える「プラスちゃんくらぶ」がスタートした。「プラスちゃんくらぶ」には、学年や学科を越えた学生が所属し、それぞれが自分の得意なことで活動に参加する。学生たちは、着ぐるみの「プラスちゃん」と共に様々な地域活動に取り組み、地域の方々のご縁をつなぎ、活動の範囲を広げた。また、マスコットキャラクターと共に大学をPRするという意識が、責任感や大学への帰属意識を芽生えさせ、「プラスちゃん」をもっと知ってもらいたい、という学生の願いが、積極性や主体性、創造力を高める原動力となった。これらの教育効果を支えるサイクルには、①「プラスちゃん」をめぐる物語を「つくる」、②人や地域と「つながる」、次回への出演に「つなげる」、③活動の幅を広げるチャンスを「つかむ」、④活動を振り返りノウハウを「つみあげる」という段階が認められる。中でもキャラクターを活用した活動では、①物語をつくる、という段階が重要である。学生たちは、キャラクターに愛着を持ち、キャラクターをとりまく物語に自分自身も参加する（時には「プラスちゃん」になる）ことで、楽しみながら成長する。

### 1 はじめに

本稿では、本学マスコットキャラクター「プラスちゃん」を活用した地域連携活動について、これまでの成果を振り返ると共に、学生たちの成長を報告する。

「プラスちゃん」の誕生は2014年秋のことである。その選定に係るプロジェクト「大学キャラクター検討プロジェクト」が発足したのは2013年冬であった。2013年といえば、『2013年・新語・流行語大賞』において、「ご当地キャラ」がトップテン入りを果たした年である。受賞者は熊本県のキャラクターくまモン。「ゆるキャラ」を活用した地域おこしがブームとなった。

では、大学キャラクターはどうであろうか。2007年3月3日、朝日新聞社会面に「大学マスコット花盛り 学内公募でフクロウ…民話からタヌキ…PRへ懸命」という記事が掲載された。同記事では明治大学のマスコットキャラクター「めいじろう」の誕生に触れている。ちなみに、ゆるキャラ®の火付け役とされる「ひこにゃん」が誕生したのは2006年である。つまり、地域や大学といった組織体を問わず、キャラクターが持つ力を活用した広報活動やブランディングが注目され始めたのが2006年前後であるといえるだろう。

そして「プラスちゃん」が誕生した頃は、大学がマスコットキャラクターを活用することそのものは、珍しいことではなくなった。パンフレットや大学グッズにデザインされるだけでなく、着ぐるみ化され、キャラクターが活躍するフィールドは広がった。着ぐるみ化されたキャラクターは、愛らしい姿とコミカルな動きで、募集活動や大学行事を盛り上げる。もちろん、「プラスちゃん」も誕生以来、様々な場で活躍を続けている。

そんな「プラスちゃん」に課せられたもう一つの役割が「大学と地域をつなぐ」ということであった。地域に愛され、地域に親しまれる大学の象徴として「プラスちゃん」を活用する。そうはいっても誕生したばかりの「プラスちゃん」と何ができるだろうか。試行錯誤の中「プラスちゃん」の活用がスタートする。手探りの中で学生と歩んだ軌跡を振り返ってみたい。

1) 十文字学園女子大学 文芸文化学科

## 2 本学マスコットキャラクター「プラスちゃん」

「プラスちゃん」の誕生日は2014年10月10日である。本学が「地（知）の拠点整備事業」に正式採択されたのが同年9月26日であるため、プラスちゃんの誕生と本学におけるCOC事業のスタートはほぼ同時期である。ただし、既に述べたように、マスコットキャラクターの企画・制作そのものは、COC事業の採択以前からスタートしていた。

デザインは学内外で募集した。デザインの条件は「本学の魅力をPRするにあたってふさわしいデザイン」「誰にでも親しまれるようなデザイン」「歩くことのできる着ぐるみ、ホームページやグッズ制作など、幅広く展開できるデザイン」であり、既に誕生していた本学図書館公式キャラクター「もっくん」のお友達としてふさわしいことも選考にあたって考慮された。募集期間は2014年4月10日から6月10日までで、日本全国から394件のデザイン案が集まった。1次選考は「大学キャラクター検討プロジェクト」で行い、2次選考はオープンキャンパスやwebページを活用し、受験生・本学学生・教職員など幅広い層に投票を求めた。そして、支持を集めた上位のデザイン案から、コンセプトや親しみやすさ、展開のしやすさなどを考慮した結果、しろうまの女の子「プラスちゃん」が誕生した。

「プラスちゃん」のコンセプトは「きよく かわいく たくましく」である。これはプラスちゃんの作者によるもので、「たくましく」が、「世の中にたちてかひある」人の育成を目指す本学の方向性と一致している。また「プラスちゃん」と名付けたのは当時の学長の横須賀薫前学長であり、親しみやすく、本学を連想しやすい名前ということで「プラスちゃん」となった。

その後、キャラクター名称の「プラスちゃん」には、様々な意味が込められることになる。成長やプラス思考などの「+（プラス）」、人が行き交い、集う交差点をイメージする「+（クロス）」。プラスちゃんのチャームポイントは、十文字のキラキラの瞳。キラキラの瞳で日々「+（プラス）」になることを探す「プラスちゃん」は、「プラスちゃん」と共に成長する学生の姿と重なる。



図1 プラスちゃん

## 3 プラスちゃんくらぶ

「プラスちゃん」と共に成長する学生たちは「プラスちゃんくらぶ」という学内組織に属する。「プラスちゃんくらぶ」は「プラスちゃん」が誕生した2014年の冬に発足した。「プラスちゃん」の誕生に関わった教員が、所属学科の学生やオープンキャンパススタッフに声をかけて、初期メンバーは9名となった。

「プラスちゃんくらぶ」の特徴として、その実施主体が授業でもサークルでも部活動でもないことが挙げられる。学年も学科も異なる学生が集まって、教職員と共に「プラスちゃん」の活動をサポートする。活動が始まった頃は、オープンキャンパスで配布するグッズの考案や、依頼されたイベントへの参加が中心であった。「キャラクターが好き」「着ぐるみに入りたい」という、ゆるいつながりでつながったメンバーであるため、定期的なミーティングは設けるものの、活動のコンセプトや目的などは明確には設定しなかった。もっとも、担当教員にも組織運営のノウハウや見通しがあったわけではないので、教員も学生も手探り状態の2014年度であったといえる。ただし、組織としての形をある程度整えるために「部長」「副部長」を任命、「くらぶ」の会員証を発行し、参加メンバーの帰属意識を高めた。なお、着ぐるみの「プラスちゃん」が初めて登場したのは2015年2月28日のCOCキックオフシンポジウムであり、着ぐるみを活用した本格的な地域活動は次年度から始動することになる。

2015年度のスタートは新メンバー勧誘のための説明会から始まる。メンバーが増えることで活動の範囲が広がり、地域連携活動にも安定的かつ継続的に参加できるようになった。着ぐるみが誕生して活動の方向性が見えてきた2015年度は、初めてのイベントを楽しみながら、経験値を蓄える1年となった。

2016年度は活動を支えた1期生の卒業を経て、新たな組織作りに着手することから始めた。1年次から4年次までの全学年が揃い、縦のつながりがより一層意識されるようになったのも、2016年度である。また、前年度の経験や知見を活かし、活動の質的向上を図るとともに、参加するイベントを主催者と共に盛り上げようとする意識が、より一層高まった。そして、メンバーが増えたことにより、分業が可能となり、それぞれが自分の得意な分野で活動に貢献しようとする姿勢が感じられた。

2017年度は組織としても安定し、学生主体による活動がさらに充実した。メンバーも40名ほどになり、複数のプロジェクトを同時に展開することができるようになった。着ぐるみ「プラスちゃん」の活用も積極的になり、「プラスちゃんくらぶ」への帰属意識はもちろん、「プラスちゃん」を「プロデュース」するという意識が強くなった1年であった。

そして、2018年度を迎え、1年次より「プラスちゃんくらぶ」に参加した学生が間もなく卒業を迎える。「プラスちゃんくらぶ」は、メンバーの加入・卒業をくり返して成長してきた。では、「プラスちゃんくらぶ」は学生の成長にどのように寄与することができたのだろうか。

#### 4 先行事例

「プラスちゃんくらぶ」は、サークル活動でも部活動でもなく授業に基づく組織でもない。以下で扱う事例は授業や学科を単位とした活動も含むが、「プラスちゃんくらぶ」の活動を考えるうえで参考になる点も多いため、先行事例として確認する。

キャラクターを学生の学びに活かす事例としては、安藤他(2013)、有田(2014)、安井・木村(2014)などがある。

安藤他(2013)は、山梨県立大学国際学部で実施したサービス・ラーニングの一例として、「大学キャラクタープロジェクト」(平成23年度)、「キャンパスキャラクタープロジェクト」(平成24年度)を取り上げる。2年間に渡って実施されたキャラクタープロジェクトは、あくまでも複数のプロジェクトの中の一例であるため、具体的な内容は詳らかではないが、23年度が「大学キャラクターを各種地域活動と連動させ、地域の活性化に寄与するとともに、情報発信の戦略を立て実践する」ことを目的とし、24年度が「地域活動への大学キャラクターの参加及び大学間の組織の立ち上げ」を企図としていることから、大学キャラクターを用いた地域活動は、近隣の大学との協働も可能な広がりのある活動であることがわかる。

安井・木村(2014)は、公立はこだて未来大学の情報デザインコースの機能を活用し、ご当地キャラクター「ずーしーほっきー」のデザインを通じた大学と地域の共創について考察する。長期的な活動の結果、考案したキャラクターが北斗市の知名度アップに貢献したこと、自治体との協力関係がプロジェクト成功に不可欠であること、現実に使用されるキャラクターをデザインする経験という得難い経験が学生の成長につながったこと、などを指摘する。

有田(2014)は、学生が考案した学科キャラクターの教育的活用について、大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科での事例を紹介する。フィールドワーク的意義として、学科キャラクターへの愛着が、学生たちの主体的な活動を促し、行動力・問題解決力の醸成に繋がったことが述べられている。また、「キャラクターを用いた学生たちの活動は、演技=遊戯(playing)の要素を教育に導入することにほかならない」(p.104)とし、キャラクターの衣装を身につけたり、キャラクターの「中の人」になってツイートしたりすることを「普段の自分」とは違うコミュニケーションの仕方を可能にする」(p.101)とし、コミュニケーションスキル向上のきっかけにもする。

以上が、大学教育の場でキャラクターを学びのツールとした先行事例となる。

また、大学や地域をPRするキャラクターではないが、今城(2015)は“着ぐるみ”を活用したコミュニケーション能力育成プログラムの効果を報告する。今城(2015)では、1年生を対象とする共通教育「課題探究実践セミナー地域協働入門Ⅱ(1学期集中講義)」の受講生10名を対象に、“着ぐるみ”を活用した授業プログラムを施行する。具体的には、交代で着ぐるみを着て商店街を

歩いたり、子ども向けの着ぐるみショーをグループで考案したりと、着ぐるみをテーマに据えた学びを展開する。授業実施後は、受講生全員が“コミュニケーションに自信が持てるようになった”と回答し、授業初回はコミュニケーションに苦手意識をもっていた5名も、活動を経ることで自信が持てるようになったと報告する。そして、本プログラムが高めた学生の力として「自己客観力」「他者思慮力」「協働達成力」「社会関心力」「自己突破力」の5点を挙げる。

それでは、本学マスコットキャラクター「プラスちゃん」は学生にどのような成長を与えたのだろうか。5年間の歩みを振り返ると共に、本学らしいキャラクターの活用を考えてみたい。

## 5 活動の紹介

ここでは「プラスちゃんくらぶ」の活動を時系列で整理する。年度毎に活動内容を挙げ、特徴的な活動と学生の成長については別途記述する。ここでは、地域活動と関わりの深い着ぐるみの「プラスちゃん」の活動を中心にみていこう。

### 5.1 2014年度

2014年度は、着ぐるみ「プラスちゃん」が2月に納品されたこともあり、着ぐるみと一緒に活動はわずか3回であった（表1）。その分、「プラスちゃん」を学内外に広めるためのデザイン活動に注力した。学生がデザインを担当したものは、クリアファイル、クッキー缶、マグネット、「プラスちゃん」の名刺、会員証など多岐に渡る。これらの作成に携わったのは、主としてメディアコミュニケーション学科の学生であり、学科での学びを活かすことで、「プラスちゃんくらぶ」の活動に貢献することができた。

表1 2014年度の活動

実施日	イベント名	場所
2015/02/28	COC キックオフシンポジウム	ふるさと新座館
2015/03/28	さくらまつり黒目川ウォーキング	朝霞台駅～黒目川周辺
2015/03/30	本学サッカーグラウンド開所式	本学サッカーグラウンド

また、「プラスちゃんくらぶ」立ち上げの頃のミーティングには、複数の教職員が参加し、大学として「プラスちゃん」を盛り上げていくという想いを学生と共有していた。部活動でもサークルでもない、ましてや授業でもない。そんな「プラスちゃんくらぶ」に参加する意味は何か。純粋にキャラクターが好き、ということも動機の一つとして考えられるが、教職員と協働してキャラクターを育てるという活動に、参加学生がやりがいを感じていたことも要因の一つであろう。

初期メンバーであった学生が卒業前にこんなことを話していた。当時は、テレビをつければ「ゆるキャラ®」が活躍していた頃である。「私は、テレビでゆるキャラ®が出ると『プラスちゃんならどんなことができるかな』と考えるんですよ」。自分がキャラクターを育てる、そうした責任感と「プラスちゃん」への愛情が、活動の原動力であることを実感した。

### 5.2 2015年度

季節毎のイベントを経験し、また、地域における「プラスちゃん」の存在が徐々に浸透してきた1年であった。雨天により着ぐるみによる出演が中止となったイベントもあったが、その際はイベントの運営サポートに励み、地域の方との親交を深めた。

表2 2015年度の活動

実施日	イベント名	場所
2015/04/05	春のいろは親水公園まつり	いろは親水公園
2015/05/21	ひばり通りクリーン大作戦	ひばり通り

2015/05/23	志木市ガイドブック撮影	志木市内
2015/07/04	田子山富士山開き	田子山富士塚
2015/07/18	大江戸新座まつり	ふるさと新座館周辺
2015/07/25	子ども大学しき入学式	本学
2015/07/25	志木市民花火大会（運営補助として参加）	秋ヶ瀬総合運動場
2015/09/12	子ども大学にいざ入学式	本学
2015/10/11	新座市民まつり産業フェスティバル	新座市役所周辺
2015/10/24・25	本学学園祭「桐華祭」（「そうだ埼玉.com」の取材）	本学
2015/11/01	志木駅南口すきっぷたうん商店会チャリティー屋台村	三軒屋公園
2015/11/08	第9回大学人サミット「大学自慢コンテスト」	松本大学
2015/11/29	志木市民まつり	志木市民会館周辺
2015/12/20	野火止用水ご当地グルメゆるキャラ®フェスティバル	新座市役所正面玄関前市民広場
2015/12/20	第4回埼玉クイズ王決定戦予選会	本学
2016/02/06	ふるさと新座商店会チャリティーもちつき大会	新座市野火止ふるさと広場
2016/02/27	COC シンポジウム	ふるさと新座館
2016/03/26	さくらまつり黒目川ウォーキング	朝霞台駅～黒目川周辺

2015年度は、依頼頂いたイベントすべてに積極的に参加した。そのイベント時の取り組みを評価して頂き、次のイベント参加につながるという好循環が生まれた。

イベント時には様々な役割がある。まず、着ぐるみは視界が悪いので、誘導係（アテンド）は、周りの状況を観察し、安全に気を付けながら、着ぐるみを誘導する必要がある。場合によっては、着ぐるみに飛びついてくる子どもを注意することも求められる。一方、「中の人」もアテンドを信頼し、アテンドにジェスチャー等で気持ちを伝える。「アテンド」と「中の人」の連携が、着ぐるみを安全に動かすにあたって重要となる。

また、「プラスちゃん」をPRするという事は、大学をPRすることと同義である。そのため、来場者との対応にも学生たちは丁寧に取り組んだ。「プラスちゃん」の存在と同じくらい、本学の学生のひたむきさが地域の方に伝わった1年であったと回想する。

2015年度で特筆すべきイベントは、11月7日・8日に参加した「第9回 大学人サミット“信州まつもとカレッジ2015” 大学自慢コンテスト」である。学生と共に10分ほどのプレゼンテーションを行った。内容は、キャラクターを活用した地域活性化であり、着ぐるみの「プラスちゃん」も登場し会場を盛り上げた。発表資料の作成は、同行したメディアコミュニケーション学科の学生2名が担当した。もともと、学科の有志で作る情報番組の制作に携わっている2名であったため、当日のプレゼンテーションはもちろん、事前の資料作成においても、日頃から鍛えている「効果的な伝え方」を十分発揮することができた。

そして、2015年度は、はじめての活動報告書「プラスレター」を年度末に発行した。編集担当は短期大学部表現文化学科の学生である。彼女たちは、どちらかといえば物静かで、イベントを牽引するようなタイプではなかったが、与えられた任務を着実に取り組む力を持っていた。「プラスレター」作成においても、丁寧な作業ぶりを発揮し、無事に第1号を発行するに至った。その後、「プラスレター」は毎年度発行されることになる。

学科の学び、学生の特性を活かした活動を展開し、その教育効果を実感した2015年度。当時は意識していなかったが、「できるときに、できる人が、できることを」というモットーが「プラスちゃんくらぶ」のメンバーにも教職員にも生まれたのが、この頃であったと振り返る。

### 5.3 2016年度

昨年度に引き続き、多くのイベントに参加した。新座市を中心とする近隣市以外のイベントにも招かれるようになった。教育機関としてはじめて認定された「ゆる玉応援団」（埼玉県内のご当地

キャラクターが所属する応援団。団長は県のキャラクターコバトン)の一員として、熊谷市にも遠征した。

表3 2016年度の活動

実施日	イベント名	場所
2016/04/06	春の交通安全運動出発式・パレード	志木駅南口周辺
2016/05/28	路上喫煙防止啓発運動、清掃キャンペーン	新座駅南口周辺
2016/07/16	子ども大学しき入学式	本学
2016/07/23	大江戸新座まつり	ふるさと新座館周辺
2016/09/01	和光市文化振興公社と本学の相互協定調印式	和光市民文化センター
2016/09/17	くまフェス@熊谷(ゆる玉応援団)	熊谷スポーツ文化公園
2016/09/24	子ども大学にいざ入学式	本学
2016/10/23	十文字+のりさん kids&girls フットボールフェスティバル開会式	本学
2016/10/23・24	本学学園祭「桐華祭」	本学
2016/10/29	イオン新座ハロウィンイベント	イオン新座店
2016/10/30	のりさんサッカーフェスティバル	大宮NACK5スタジアム
2016/11/06	志木駅南口商店会青年部 チャリティー屋台村	三軒屋公園
2016/11/20	世界キャラクターさみっと in 羽生(視察)	羽生水郷公園
2016/11/23	野火止用水ご当地グルメゆるキャラ®フェスティバル	新座市役所正面玄関前市民広場
2016/11/27	志木市民まつり	志木市民会館周辺
2017/02/04	ふるさと新座商店会チャリティーもちつき大会	新座市野火止ふるさと広場
2017/02/15	宇～太×プラスちゃんの仲良し交流会 —大学×地域×キャラクターの可能性を探る—	宇都宮大学
2017/02/25・26	男女共生フォーラム 2017 プラザまつり	にいざほっとぶらざ
2017/03/03	プラスちゃん・ピーチくんのひなまつり	成蹊大学

2016年度で特筆すべき点は、学生プロデュースの企画を実施したことである。イオン新座店ハロウィンイベントでは「キーワードラリー」を、チャリティー屋台村では「プラスちゃんパネルクイズ」を、「プラザまつり」では、パズルや福笑い、投げ縄、ボーリングなどのアトラクションを設置した「プラスちゃんランド」を企画した。

これまでの活動で、地域や企業の信頼を得たからこそ、自分たちの創意工夫を発揮する場を提供していただくことができたと考える。また、この頃からプロジェクトリーダーを決め、リーダーの責任のもと、企画・立案をし、イベントを遂行できるようになった。特にイオン新座店との共催イベントでは、学生が主体的にミーティングを開き、イベント時に使用するカードや展示物の作成に意欲的に取り組んだ(図2)。企業と共同で行うイベントは、スケジュールが細かく設定されている。企画書を提出し、事前にチェックを受け、適宜進捗状況を報告する。そうした「社会人」として求められる姿勢や心構えを、「プラスちゃん」の活動を通して鍛えることができた。

また、大学キャラクターとの交流会を2件実施した。2月に宇都宮大学の「宇～太」、3月に成蹊大学の「ピーチくん」に会いに出かけた(図3)。学生にとっては念願の交流会である。宇都宮大学



図2 キーワードラリーカード



図3 大学キャラクターとの交流

は、本学と同様にCOC事業に取り組む大学であるため、交流会のテーマは「大学×地域×キャラクターの可能性を探る」とし、キャラクターの活用した地域活動についてそれぞれ報告を行った。成蹊大学では「桃の節句」に因んだイベントを実施した。

そもそも交流会が実施されたきっかけは、学生が始めたTwitterにある。「プラスちゃん」の情報発信は、これまで教員が更新するFacebookのみであったが、Twitterを開設してから、学生の「プラスちゃんを知ってもらいたい」という想いは、より一層強くなった印象がある。あわせて、「公式」として情報を発信する責任感が芽生え、イベント告知や活動の振り返りなど、情報発信に意欲的に取り組む姿勢がみられた。また、イベントがない時期は、「プラスちゃん」の日常をツイートし、フォロワーの関心を繋ぎとめることも怠らない。いずれも学生たち自らが考え、主体的に行ったことである。フォロワー数の増加も担当学生にとっては励みになったようだ。

#### 5.4 2017年度

2017年度もレギュラーイベントをこなしながら、新しいことにチャレンジした。それは、学生自らがイベントを主催する側になるということである。

「ご当地キャラクターが演じる七夕物語」と「プラスちゃんといっしょ」は、学生が企画やキャスティングを考え、関係各所との交渉を行った大きなイベントである。

表4 2017年度の活動

実施日	イベント名	場所
2017/04/01	さくらまつり黒目川ウォーキング	朝霞台駅～黒目川周辺
2017/04/02	いろは親水公園まつり	いろは親水公園
2017/05/20	クリーン作戦	志木駅南口周辺
2017/06/24・25	男女共生フォーラム2017 プラザまつり	にいざほっとぷらざ
2017/07/07	十文字織姫祭 「ご当地キャラクターが演じる七夕物語」	本学
2017/07/08	子ども大学しき入学式	本学
2017/07/22	大江戸新座まつり	ふるさと新座館周辺
2017/07/23	イオン新座夏まつり	イオン新座店
2017/08/12	キャラダイスジャパン	グランドプリンスホテル新高輪
2017/08/19	子ども大学にいざ入学式	本学
2017/10/14	いろはふれあい祭り	いろは遊学館
2017/10/21	かみってる!?!上宗岡ハロウィンまつり	宗岡第二小学校
2017/10/28・29	本学学園祭「桐華祭」	本学
2017/11/20	野火止用水ご当地グルメゆるキャラ®フェスティバル	新座市役所正面玄関前市民広場
2017/11/26	世界キャラクターさみっと in 羽生 (視察)	羽生水郷公園
2017/12/02	十文字元気プロジェクト「プラスちゃんといっしょ」	本学
2017/12/03	志木市民まつり	志木市民会館周辺
2017/12/16	志木瑞穂の森でのクリスマスイベント (FC十文字 VENTUS の高齢者施設慰問)	特別養護老人ホーム 志木瑞穂の森
2018/01/20	くまプラススイーツプロジェクト (食物栄養学科のゼミイベント応援)	ふるさと新座館
2018/02/25	西武所沢店コラボメニュー試食会	西武所沢店
2018/03/31	志木さくらフェスタ	いろは親水公園

「ご当地キャラクターが演じる七夕物語」では、埼玉県マスコット「コバトン」、新座市イメージキャラクター「ゾウキリン」、(財)志木市文化スポーツ振興公社マスコットキャラクター「カバル」、小川町商工会青年部「星夢(すたむ)ちゃん」をイベントに招き、七夕の物語を披露した。

附設する幼稚園の降園時間に合わせてイベントを行ったこともあり、園児とその保護者の方、さらには、学外のご当地キャラクターファンが集まり、イベントは大盛況だった。

12月に開催した「プラスちゃんといっしょ」は、前期末より準備をスタート。授業の合間にミーティングを重ね、長期にわたるプロジェクトとなった。イベントを主催するという事は、ゴールまでの見通しを持ち、ご協力頂く方々の関わりを考慮しながら、計画的に事業を進めることが求められる。プログラムの立案、キャラクターの出演依頼、広報活動など、様々な準備が必要であったが、部長のリーダーシップのもと、何とか当日を迎えることができた。当日は午前中に大学キャラクターの交流会、午後には地域のキャラクターも参加の「ゆるゆる運動会」を実施した。交流会には、宇都宮大学、成蹊大学、首都大学東京の学生を招き、キャラクターを活用した活動について意見交換を行った。「ゆるゆる運動会」には、地域の子ども達も参加。8キャラクターが4チームに分かれ、その運動能力を競った。

また、「プラスちゃんといっしょ」の宣伝活動は、J:COM デイリーニュース（練馬・新座・和光）内で行うことができた。学生3名と着ぐるみの「プラスちゃん」がスタジオ生放送に出演。打ち合わせやリハーサルを重ね、告知を行った。後日には、イベント当日の様子が放送された。

こうして、メディア出演を果たしたメンバーたちは「プラスちゃんくらぶ」のロールモデルとして、他のメンバーにより刺激を与え、後輩たちの成長を促すことになる。また、愛情の対象である「プラスちゃん」をメディアを通じて知ってもらえたという意識が、組織に一体感を与え、活動のやりがいにつながっていった。学生主体の活動が積極的になることで、「プラスちゃんくらぶ」への所属意識、さらには、大学への帰属意識が醸成されることになった。

## 5.5 2018年度

2018年度の学生企画は、小学生向けの企画「プラスと学ぶ理科実験教室」である。前年度の「プラスちゃんといっしょ」が「交流を楽しむ」ことがテーマなら、「プラスと学ぶ理科実験教室」は「学びを楽しむ」ことがテーマとなる。

実施にあたっては、新座市が推進している子どもの放課後居場所づくり（ココフレンド）事業に、活動の場所を提供していただき、市の関係課と調整を行いながら、企画、立案を行った。なお、リーダーとなった学生は学校外教育に関心を抱いており、これまでも多くの子ども向けイベントに参加している。「今度は自分で企画してみたい」——そうした願いが形となったのが「プラスと学ぶ理科実験教室」であった。当日は、ペーパークロマトグラフィーを使って、水性ペンの色の分離を行い、学生のサポートを受けながら、子どもたちは色とりどりの作品を作った。



図4 イベントのチラシ

表5 2018年度の活動

実施日	イベント名	場所
2018/04/08	さくらまつり黒目川ウォーキング	朝霞台駅～黒目川周辺
2018/05/03	FC 十文字 VENTUS 開幕戦セレモニー	大宮NACK5スタジアム
2018/06/22・23	男女共生フォーラム 2018 プラザまつり	にいざほっとぶらざ
2018/07/16	イオン新座夏まつり	イオン新座店
2018/07/21	大江戸新座まつり	ふるさと新座館周辺
2018/07/30	子ども大学しき入学式	志木市民会館
2018/08/02	十文字元気プロジェクト プラスと学ぶ理科実験教室①	大和田小学校
2018/08/07	プラスと学ぶ理科実験教室②	東野小学校
2018/08/21	子ども大学にいざ入学式	本学

2018/08/23	プラスと学ぶ理科実験教室③	東北小学校
2018/10/07	新座市民体育祭	総合運動公園陸上競技場
2018/10/13	いろはふれあい祭り	いろは遊学館
2018/10/14	新座市民まつり産業フェスティバル	新座市周辺
2018/11/24	世界キャラクターさみっと in 羽生 (視察)	羽生水郷公園
2018/12/02	志木市民まつり	志木市民会館周辺
2018/12/09	からだにベジプラスプロジェクト～北海道復興&新座活性化!!～ (食物栄養学科のゼミイベント応援)	ふるさと新座館周辺
2018/12/22	志木瑞穂の森でのクリスマスイベント (FC 十文字 VENTUS の高齢者施設慰問)	特別養護老人ホーム 志木瑞穂の森
2019/02/02	ふるさと新座商店会チャリティーもちつき大会	新座市野火止ふるさと広場
2019/02/03	志木駅南口商店会青年部 チャリティー屋台村	三軒屋公園
2019/02/24	笑顔あつまれ! さいたまキッズまつり	プラザウエストさくらホール
2019/03/30・31	志木さくらフェスタ	いろは親水公園

※参加予定も含む

2018年度も多くのイベントに参加したが、2018年度の特筆すべき点は、頂いた縁を確実に次のステップにつなげているという点である。実は「プラスちゃんくらぶ」の活動がきっかけで、担当教員のゼミの学生が、webライターの実験をさせて頂くことになった。地域情報サイトを運営している方が、イベント時での活動を評価し、声をかけて下さったのである。ありがたいことに、担当教員の所属学科は「ことばに強い女性を育てる」ことをミッションにしている。目的や相手に合わせた文章を書く実践の場として、ゼミ生の情報発信活動が本格的にスタートした。執筆する内容は、グルメやイベント情報など様々で、定期的な情報を発信することを心掛けた。12月には同サイトが関連するラジオ番組にも出演。今春卒業する4年生にとっては得難い経験となった。

また、2月24日にはさいたま市のイベントに出演する。こちらのイベントは、志木市民まつりでキャラクターステージの司会を担当した方にお誘い頂いた。近隣市以外の場でも活動できるのは、学生にとっては大きな励みとなる。

さらに、2018年度中に、世界キャラクターさみっと in 羽生の視察で知り合った「手話大使 やる気なし男」とコラボ企画をスタートさせる。本学には聴覚障害の学生が数名在籍している。担当教員が所属する文芸文化学科にも、2018年度現在2名の聴覚障害学生が在籍しており、「手話」は学生にとっては身近な“ことば”である。その“ことば”に親しみをもてる活動を、2019年度から本格的に始動させたい。ご縁を確実に次のイベントにつないでいく。それが無理なく自然な形で広がりをみせたのが、2018年度の成果といえよう。

## 6 5年間の歩みを振り返って

COC事業の採択を受け、より一層充実した「プラスちゃん」の活動であるが、ここで、活動が好循環をもって展開していった経緯を改めて考えてみたい。

### 6.1 つくる

振り返ると、組織を「つくる」ところから「プラスちゃん」の活動はスタートした。組織を作った後は、活動のしやすさを考えプロジェクトを作り、学生がプロデュースするイベントや企画が、

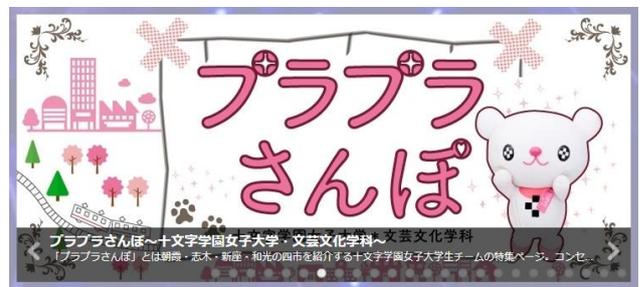


図5 まいふれ「朝霞・志木・新座・和光」内に開設の学生ページ「プラスプラスさんぽ」バナー  
<https://asaka-shiki-niiza-wako.mycl.net/>

精力的に作られた。キャラクターの活動は学生の主体的な「つくる」によって成り立っている。こうした様々な「つくる」において、強調したい「つくる」は、「物語をつくる」ことである。

「プラスちゃんくらぶ」に所属する学生は別名「お世話係」と呼ばれる。担当教員は「お世話係のお世話係」となるわけだが、役割名称一つとっても「プラスちゃん」を中心に多くの「物語」が生まれている。有田（2014）は、キャラクターを大学教育現場に導入する意義として「コミュニケーション論的意義」を指摘する。

キャラクターを用いた学生の活動は、演技＝遊戯（playing）の要素を教育に導入することにはほかならない。コスプレをしたり、キャラクターの「中の人」となってツイートしたりするという点ではまさに直接的にキャラクターの「役になりきる」という意味において。

（有田 2014：104）

「プラスちゃんくらぶ」の活動も同様であろう。学生が始めた Twitter では「プラ語」なるものが登場している。一人称は「プラス」、終助詞は「プラ」。さらには「プラよ」「プラね」とバリエーションも豊富だ。ご当地キャラクターや、他大学の大学キャラクターは「お友達」で、着ぐるみのクリーニングは「お風呂に入る」。バッテリーの故障は「けが」で、修理に出すことは「入院」と表現される。

そんな物語を共有できるのは、ご当地キャラクターを愛するファンたちで、地域のイベントに行けば、多くの方々が親しみをもって声をかけてくださる。学生たちはその励ましを受け、「プラスちゃん」をとりまく物語を、より一層魅力的にみせようと努力する。共有している世界観を大切にしながら、地域の方と交流する。

一方で、大学生が、「ごっこ遊び」に興じることを、幼いとする向きもあるだろう。しかし、自分が「中の人」となることで、「プラスちゃん」らしさを追求し、「プラスちゃん」らしい言動を考えるというプロセスは、相手や目的に合わせて対応を考える、実際のコミュニケーションと何ら変わらない。学生たちは「プラスちゃん」になることで、また、「プラスちゃん」のお世話係を意識することで、実は社会人に求められるスキルを無意識のうちに学んでいるといえる。

## 6.2 つながる・つなげる

イベントに出向けば、キャラクター好きの方や地域の方と自然に縁がつながる。行政が主催しているイベントであれば、市役所の方、商工会の方とも関わりを持つことになる。イベントに参加するたびに、ネットワークが広がり、活動の幅も広がっていることを実感する。地域から期待されているという意識が、学生の自己有用感や責任感の醸成につながっていく。

そうした「つながり」を「つなげる」のが次の段階である。活動を持続的に展開するためには、地域の方、主催者の方に「プラスちゃんくらぶ」の活動を評価してもらう必要がある。イベントでのパフォーマンスに良い印象を持ってもらえれば、次のイベントにつながるきっかけとなるからだ。お世話係の学生は「プラスちゃん」を多くの人に知ってもらいたい、という内発的な動機があるため、その時々でイベントに参加するメンバーが変わっても、一定のパフォーマンスを維持することができている。次につなげたい、という学生の思いが、次のイベント出演につながっているのである。

続いて、「プラスちゃんくらぶ」という組織のあり方に論点を移そう。「プラスちゃんくらぶ」は、授業の一環として組織されたわけでもなく、学科の組織でもない。部活動・サークルでもない有志の組織体である。そのため、学年や学科を越えて、そして教職員が「つながる」場として機能している。例えば、大学マスコットキャラクターは広報活動や募集活動においても有効活用されるため、「プラスちゃんくらぶ」の学生たちは大学職員との関わりも深い。学生・教職員の一体感を生み出すにあたって、キャラクター活動は効果的だといえる。

ところで、平野（2017）は、地域協働型 PBL を実施する教育上の課題として、以下のことを指摘している。

毎年の学生の活動の蓄積を、教員側の教育手法としてだけでなく、どのように年次の異なる学生間で引き継いでいくかということであり、できれば卒業した学生に大学に訪問してもらう機会を設定し、学生間の引き継ぎや蓄積が起こるような仕組みづくりを設計したい。

（平野 2017：165-166）

「プラスちゃんくらぶ」には基本的には「引退」はない。多くの学生が、4年次になっても、就職活動や卒業研究の合間に活動に参加する。そのため、平野（2017）が述べる「仕組み」は自然と構築されているといえる。また、2017年度に卒業した「プラスちゃんくらぶ」の元部長は、現在、新座市役所の職員として活躍している。入庁直後の配属先は「地域活動推進課」であり、身近な先輩が、次は地域振興を共に支える「パートナー」となった。そうした先輩とのつながりも、「プラスちゃんくらぶ」の学生にとっては貴重な財産であると考えられる。先輩とつながることで、ノウハウもつながっていく。

### 6.3 つかむ

地域イベントに参加することでつかむもの。1つ目は「ファン」である。地域イベントへの参加を重ねていくことで、縁を確かなものにするができる。最近は、「プラスちゃんに会いに来た」と声をかけてくださる方も増えている。そうした声に励まされ、学生たちはますますやりがいを感じ、モチベーションを高くもってイベントに参加する。

そうした前向きな姿勢が評価されると、新たなステージに進む機会をつかむことができる。2つ目のつかむは「チャンス」である。メディア出演も web ライターの活動も、ご当地キャラクターとのコラボ企画も、地域イベントに積極的に参加することでつかんだ機会である。

この5年間、学生たちは、新しいことに主体的に取り組む積極性を身につけた。チャンスを逃さない主体的な活動が、「プラスちゃん」の「物語」に新たな1ページを加えることを理解しているからである。特にキャラクターイベント参加の際は、そこに集う人々が皆、キャラクターの世界観、すなわち「物語」を共有しているため、活動を温かく見守ってもらえる安心感がある。「とりあえずやってみよう」——そうした意識が新しいステージに進むきっかけとなっている。

### 6.4 つみあげる

経験をつみあげ、ふり返り、その蓄積から次の活動の方針を立てる。多くのイベントに参加することで、学生たちは PDCA サイクルに則り活動をデザインするようになった。ミーティングを定期的で開催し、活動の良かった点、改善すべき点を共有し、次のイベントにつなげる。

そうした活動のつみあげを報告するのが年度末に発行する「プラスレター」である。「プラスレター」には多くの学生の声が掲載され、「プラスちゃん」の1年を振り返ることができる。次回の「プラスレター」は第4号となる。一段とパワーアップした「プラスちゃん」の活動が掲載されるに違いない。

そして、活動のつみあげを振り返りながら、学生たちは新しい「つくる」を模索する。

## 7 おわりに

本稿ではプラスちゃんの活動を振り返り、5年間の歩みと活動の広がりを確認した。その活動は①「**つ**くる」→②「**つ**ながる・**つ**なげる」→③「**つ**かむ」→④「**つ**みあげる」の4つの段階で捉えることができる。特にキャラクターを活かした活動においては、「(物語を) つくる」段階が重要であることを強調したい。キャラクターが愛情を注ぐべき存在となればなるほど、学生たちは豊か

に「物語」を紡ぎ出していく。そして、その「物語」が魅力的だからこそ、サークルでもなく授業でもない、任意の活動を継続する動機となっているといえる。

最後に今後の課題を述べる。

今後も継続的に「プラスちゃん」の活動を推進していくためには、活動費用と活動スペースの確保が重要となる。まず、活動費用については大学の支援ばかりに頼ることなく、学生自らが資金を調達できるようなシステムを考えたい。企業にプロジェクトの支援を依頼する、商品開発により利益を生み出すシステムを構築する、などが想定される。また、学内における活動スペースを確保し、学生が主体的かつ自由に活動できる場を用意したい。そして、何よりも学生の活動を大学が応援している、という姿勢を、折に触れて伝えていくことが大切となろう。

さらに、担当教員としては、大学マスコットキャラクターの活用による教育効果を検証するため、「個」の成長にも注目する。ジェネリックスキルの伸長を測定するテストとの相関や、ポートフォリオの記述を資料にしながら、学生の成長を明らかにしたいと考える。

今後も、学生とそして「プラスちゃん」と、「プラスの物語」を紡いでいけることを願ってやまない。

#### <参考文献>

- ・有田亘（2014）「キャラクターを大学教育の現場に導入する試みについて」『国際研究論集』28（1）大阪国際大学 pp.91-107
- ・安藤他（2013）「学部専門教育と連動した地域課題対応型サービス・ラーニングの試み」『山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要』8 山梨県立大学 pp.9-22
- ・今城逸雄（2015）「着ぐるみを活用したコミュニケーション能力育成プログラムの効果の検証」『高知大学教育研究論集』19 高知大学教育創造センター pp.41-58
- ・平野真（2017）「大学教育と地域資源開発—福知山公立大学でのPBL教育事例を通じて—」『福知山公立大学研究紀要』1（1）福知山公立大学 pp.141-168
- ・安井重哉・木村健一（2014）「「ずーしーほっきー」のデザインを通じた大学と地域の共創」『デザイン学研究 日本デザイン学会第61回研究発表大会概要集』日本デザイン学会

## 親子支援プロジェクト

## Parent and child support project

山口 由美<sup>1)</sup>

Yumi YAMAGUCHI

**キーワード**：親子支援、子育て支援ネットワーク、KAPLA ブロック、父親講座、母親講座

**要旨**：私は平成 27 年度から 30 年度まで、NPO 法人志木市子育てネットワークひろがる輪（以下、ひろがる輪）<sup>注1)</sup>の方たちと協力して志木市の子育ての課題を考え、課題を解決する取り組みをおこなった。ひろがる輪のみなさんと一緒に取り組むようになったきっかけは、本校での COC 事業の募集にエントリーしようと考えたときに、筆者もこの会の会員であったことや、この会の運営方法に関心をもっていただいていたからである。また、テーマを「親子支援プロジェクト」としたのは、実際に子育てネットワークの活動に参加させていただくと、親と子ども、どちらへも支援の必要があると感じたからである。4 年間の活動を通して、母親と父親のアプローチには違いがあることや少しずつネットワークが広がっていることを実感することができた。

## 1 はじめに

COC 事業が始まった際に、地域の方々と何かできることはないかと考えていた時に、以前から関わらせていただいていたひろがる輪に協力していただき、一緒に課題を解決していけないかと考えるようになった。

子育てネットワークは、子育てママや地域と行政等と、それぞれの課題に親子で参加し、解決をする場所であり、社会的欲求を満たすための場である。子育てしやすい社会にするにはどうすればよいかを考え、学び、実行している。

そこでひろがる輪の代表理事の小笠原順子氏、副代表理事の山下美香氏に相談し、志木市の子育て支援に関する課題を解決することを目的として研究を進めること、学生たちに参加してもらい、課題を解決していくことにした。

## 2 平成 27 年度の活動

地域志向研究の初年度ということもあり、志木市の子育て支援における課題を挙げ、学生が参加でき、実現可能な内容を考えた。父親と子どもを対象とした KAPLA ブロックを活用したワークショップ及び、母親を対象とした子育て支援講座（ママサブリ）の開催をすることとした。

### 2.1 主に父親と子どもを対象とした KAPLA ブロックを活用した親子ワークショップの開催

平成 27 年 10 月 4 日（日）、志木ふれあいプラザにおいて KAPLA ワークショップ及び、子育て相談をおこなった。父親と未就学児が遊べるように開催日を日曜日の午後にしたこともあり、参加者は 207 名（子ども 96 人、保護者 91 人、関係者 20 人）であった。専門相談では、専門相談機関にもつなげることができた。

「KAPLA ブロック」のワークショップを企画した理由は、KAPLA ブロックは、木製ブロックで手のひらに乗るほどの小さな板で、大きさはたった 1 種類のシンプルなブロックだからである。KAPLA ブロックは小さな子どもから、大人までが楽しむことができ、親子で力を合わせて作品を作ることも可能なブロックである。父親と子どもたちがシンプルなブロック遊びから、遊びを一緒に楽しむことを知り、遊ぶ機会を増やし、父子による遊びの継続につながればという思いからワークショップを開催した。

1) 十文字学園女子大学 人間福祉学科

ワークショップ当日は、受付や準備にひろがる輪のメンバーと人間福祉学科の学生が参加した。学生たちは、会場づくり、受付や参加者の案内、ワークショップ中は参加した子どもたちと作品作りなどを行った。

インストラクターはKAPLA ジャパンのA氏で、まずKAPLAの楽しみ方についてお話いただいた。その後、参加者それぞれが作品を作っていた。インストラクターの巧みなリードで参加者が力をあわせて「かまくら」も作り上げた。

大人は自分たちの作品作りに夢中になり、大がかりな作品を作り上げた。最後にそれぞれの作品をブロックでつなぎ、会場で一体感を味わった。作品を鑑賞後は片付けも参加者の手で行われた。

## 2.2 母親を対象とした子育て支援講座（ママサプリ）の開催

平成28年2月2日（火）・2月26日（金）・3月1日（火）に志木市いろは遊学館において子育て支援講座（以下、ママサプリ）を開催した。子育て支援センターを利用している母親たちなどを中心にチラシを配布し、12名のお母さん方がママサプリへの参加を希望された。母親たちに講座に集中していただくため、講座中は研修室で約16名の子どもたちをお預かりした。講座中の保育に関しては、人間福祉学科の学生たちが協力した。子育て支援講座は「フォーカシング的要素」を講座に取り入れ、母親たちがほっとしながらできる子育てについて考えられるように進めた。

## 2.3 平成27年度の活動を通して

KAPLAブロックで遊ぼう&専門相談においては、父親、母親、子どもだけでなく、祖父母の参加もあり、子どもと大人が楽しく作品を作ることができた。また、インストラクターのリードのもと、「かまくら」を作った。特に父親が大がかりな作品を作り、最後に作った作品をつなぎ、一体感を味わった。子どもはKAPLAで遊び、母親は専門相談を利用された方もいた。志木市内在住の方は児童発達相談センターの発達相談につなぐことができた。学生たちも主体的に参加者に関わったり、作品作りに加わったりした。

子育て支援講座は3回の講座を「フォーカシング的要素」を用いて行った。話し合いやロールプレイを通して、母親たちが様々な気持ちを共有し整理することができていた。講座を通して、一人だけが大変なのではないこと、同じ立場にある母親同士で認め合うことでほっとできる時間をもつことができていた。最初は保育を依頼することにためらいがちだった母親たちも、3回目には安心した様子で子どもを預けていかれるようになり、学生たちも責任をもって保育に携わることができていた。

## 3 平成28年度の活動

平成28年度はKAPLAブロックでの遊び支援を充実したものにし、学生たちが遊び支援を主体的に進めることができるように児童関係の専門職及び専門職を目指す学生を対象としたKAPLAワークショップを開催することとした。ワークショップで学んだことを実践する場として、子育て支援センターでKAPLAブロックを用いた遊び支援を行った。

### 3.1 児童関係の専門職及び専門職を目指す学生を対象としたKAPLAワークショップの開催

平成28年8月6日（土）、志木市健康増進センター2階にある、西原ふれあいセンターで、児童関係の専門職及び、専門職を目指す学生を対象としたKAPLAワークショップを開催し、学生と、様々な作品を作ることができた。まず支援する側が楽しめることが大切であると感じた。

### 3.2 志木市の子育て支援センターで KAPLA を用いた遊び支援

平成 28 年 11 月 5 日（土）、平成 29 年 1 月 7 日（土）の 2 回、志木市西原子育て支援センターで親子を対象とした、KAPLA ブロックを用いて遊び支援をおこなった。子育て支援センターでの、親子（特に父子）に対する遊び支援では、子育て支援センターを利用する未就園児には難しかったということがうかがえた。KAPLA ブロックは、作り上げる楽しみもあるものの、壊す楽しみもあり、子どもの中には、ほかの子の作品を壊す様子が見られた。2 回目の遊び支援以降は KAPLA ブロックで遊ぶ際のルールの説明し、作って楽しみたい子どもと、壊したりしたい子どものスペースを分けて楽しんでもらうようにし、作り上げたい子どもも満足した様子が見られた。

### 3.3 平成 28 年度の活動を通して

子育て支援センターを利用している父親は、子育てに積極的な様子が見られた。しかし、父親たちは、子育て支援センターにおいて、母親たちのように父親同士で話す様子はあまり見られなかった。今後、父親たちへの子育て支援に関するニーズを知る必要があると感じた。

## 4 平成 29 年度の活動

平成 29 年度は、父親たちへの子育て支援のニーズを知るために何が出来るか「ひろがる輪」の理事であり、子育て支援センターの職員である会員の方と話し合い、新米パパたちが子育てを楽しみながら語り合える場としての「お父さん講座」を開催すること、子育て支援センターでの遊び支援は継続することを確認した。お父さん講座の開催については、同性が行う方が効果があると考え、自身も“子育て”経験のある人間福祉学科 伊藤陽一氏が担当することとした。

### 4.1 お父さん講座の開催

第 1 回目は平成 29 年 9 月 30 日（土）、第 2 回目は平成 30 年 1 月 20 日（土）共に志木市市民会館で行った。テーマは、第 1 回目は「子どもとの関わり貯蓄」、第 2 回目は「これからの発達と関わり～しつけて必要?!～」と、父親が初めての子どもと関わるうえで、疑問や不安を少しでも軽減できるアドバイスをを行った。また、母親と子どもの関わりについて積極的に父親も参加することや、気遣う視点や方法について話した。参加者は少ない状態であったが、深く話ができて内容が濃いものとなった。お父さん講座の間は子どもの保育や、母親にはリラックスしていただけるようなハンドマッサージを行うことをチラシで告知した。

#### <第 1 回目 お父さん講座>

##### ～保育担当学生感想～

実習などでは、未就園児に関わる事がなかったので、とても勉強になった。子どもたちの言動について保育士さんから話を聞きながら子どもたちと接することができて良かった。

##### ～お母さん担当学生感想～

私はハンドマッサージを実施し、子育て中のお母さんに様々な話を聞きながら楽しんだ。また、実際にお腹に触れさせていただいたり、お腹に赤ちゃんがいる様子の事を聞いたり等とても貴重なお話を聞くことができ、勉強になった。

#### <第 2 回目 お父さん講座>

##### ～保育担当学生感想～

実際、子どもと遊ぶ機会はなかったが、保育士さんからいろんなアドバイスをいただいた。子どもは泣くことで気持ちを落ち着かせることが出来るなど教えていただいた。私が海外に行きたいという話をしたら童歌を覚えておくといよいよというアドバイスもいただいた。保育士さんは本当に手慣れていて子供が大泣きしているにも関わらず上手にあやしていて凄いと感じた。

#### 4. 2 志木市の子育て支援センターで KAPLA を用いた遊び支援

第1回目 KAPLA ブロックを用いた遊び支援を平成29年11月18日（土）に、第2回目 KAPLA ブロックを用いた遊び支援を平成30年1月5日（金）に志木市A子育て支援センターで行った。  
～遊び支援担当学生感想～

今までの実習では、主に高齢者と接してきたので生まれて数ヶ月の赤ちゃんから未就学児のお子さんとふれあうことは本当に新鮮で楽しかった。KAPLA ブロックでも、写真を見ながら一生懸命飛行機を作っている子がいたり、崩すことが楽しくて喜んでいる子もいた。赤ちゃんが、ブロックを口に入れてどんなものか確認している様子も見られた。

#### 4. 3 平成29年度の活動を通して

平成29年度のお父さん講座の1回目は「にこにこお父さん講座」としていたが、父親たちからは、講座名と内容が一致していないという意見をいただいた。2回目は「パパの会」（仮称）ということで、周知した。チラシには母親への対応について明記していたものの、参加者が少なく、周知の方法などに課題があることが分かった。学生たちは未就園児に関わることがこれまでなかったこともあり、満足した様子うかがえた。母親にハンドマッサージを担当した学生も、緊張はしたものの、満足した様子うかがえた。

参加した父親からは「先生の子育ての体験を交えて話が聞けたので大変参考になりました」との感想をいただいた。また、子育て支援センターを利用し、講座に出ようとする父親たちは、子育てに参加しようという意識の高い人が多い。子育てに関心をもっている人たちの支援が重要である一方で、子育てに大変さを感じている人たちへの支援も必要である。子育てに大変さを感じている人へ接することは現状において困難であることがわかった。今後も地域に子育て支援センターや講座等で親子を支援する体制があることを周知していくことは重要である。

### 5 平成30年度の活動

平成30年度は、平成29年度からの事業を継続するのにかついて、親子プロジェクト運営委員会議を開催することにした。「お父さん講座」については、効果はあるものの、場所や人の確保等を考えると継続がむづかしいという結果となり、親子への遊び支援を中心に活動が続けることとなった。

日時：平成30年7月26日（木） 15:00～

会場：十文字学園女子大学9号館3階 9301教室

出席者：ひろがる輪2名、学生2名、筆者（山口）

#### 5. 1 児童関係の専門職及び専門職を目指す学生を対象とした KAPLA ワークショップの開催

平成30年9月2日（日）に、親子支援プロジェクトで、KAPLA ブロックの指導者養成ワークショップを実施した。カプラジャパンインストラクターから KAPLA の遊び方や発展のさせ方等を学び、学生が行う子育て支援センターでの「遊び支援」の活動に役立てることとした。参加者は学生4名、専門職12名、教員1名であった。

#### 5. 2 志木市の子育て支援センターで KAPLA ブロックを用いた遊び支援

第1回目

平成30年11月17日（土）に、志木市A子育て支援センターで、KAPLA ブロックを用いた遊び支援を行った。

参加者：乳幼児5名、保護者4名、学生2名

学生がリードして作品を見せながら、小さな子どもたちと街を表現する作品を作り上げた。午前中の活動で汽車をつくり、ブロックを線路に見立てて遊ぶことができた。

## 第2回目

平成31年1月12日（土）に 志木市B子育て支援センターで、KAPLAブロックを用いた遊び支援を行った。

参加者：乳幼児23名、保護者21名、学生1名

参加予定の学生が体調不良となり急きょ、教員及び学生で遊び支援をおこなった。B子育て支援センターで初めての遊び支援を行ったが10時の開始前より、KAPLAブロックの遊びを楽しみにしてくださっていた方がおられ、到着してすぐにKAPLAブロックでの遊びに取り掛かった。乳幼児や保護者と白木1,000ピースとカラー100ピースを用いて造形を行った。子どもと一緒に高く積み上げる人や、保護者が真剣に造形に取り組んでいた。A子育て支援センターと違い、専用の部屋を使用できることもあり、子どもや保護者の皆さんとゆっくりKAPLAブロックを楽しむことができた。

### 5.3 平成30年度の活動を通して

児童関係の専門職及び専門職を目指す学生を対象としたKAPLAワークショップの開催においては、講座後に簡単なアンケートを取ったところ、講座についてはとても良かったという感想であった。講座についての感想は3名の方からいただいた。

- ・KAPLAのワークショップは3回目であるが、毎回新たな学びや発見があり、KAPLAブロックの魅力を再認識している。今回の講座では子どもたちへの伝え方、積み方のコツなど、とても参考になった。実践の機会があれば役立てたい。
- ・KAPLAブロックは、私の子どもが好きで、イベントがあれば参加していますが、遊びが発展できるような関わり、声掛けが難しいと感じていたところでした。なかなか子ども中心（小さい子が多い）の会場では今回のような作品をつくるのが難しいので、貴重な体験でした。段階的に進めたり、大きなものを作って達成感を味わったり「楽しい」「うれしい」を実感して楽しませていただきました。今後の参考になりました。ありがとうございました。
- ・作品集や映像等で見ることがあってもよかったかもしれない。今後、十文字学園女子大学と共同で行う講座として、人間福祉学科と健康栄養学科や食物栄養学科がコラボして子ども食堂や親子カフェの開催ができないでしょうか。

## 6 全体を通して

平成27年度から講座をはじめ、様々な方たちと関わる事ができた。地域の親子と私たちが顔見知りの関係になってきたと感じる。遊び支援等に参加した学生たちは、今まで関わる事がなかった未就園児やその父母たちの関わりを通して、実習や就職についていろいろと考えることができるようになった。

子育てネットワークに関して考えると、相戸（2001年）<sup>1)</sup>は、「子どもの育ちには、子ども自身の発達と共に親が成長していくことが必要であることがわかった。親も多くの生活体験をすることによって、『子どもの育ちに必要な何か』を学び、環境を醸成していく力を養うのである。」と述べている。

今後も子育てネットワークの方々と協働し、親子が成長できる親子支援を継続することが重要と考えた。今後もひろがる輪の皆さんと一緒に子育ての課題の解決を継続していきたい。



KAPLA ワークショップ



KAPLA ワークショップ



ママサブリ中の保育



ママサブリ



専門職ワークショップ



お父さん講座



子育て支援センターでの遊び支援



子育て支援センターでの遊び支援

注1)

・ NPO 法人志木子育てネットワークひろがる輪は、平成 18 年に地域の子育てネットワーク作りを目的として結成された特定非営利活動法人である。子育て交流事業、地域交流事業、社会全体で支えあうネットワーク作りに関する事業、子育てサークル等への活動支援相談事業、子育て情報事業、人材育成及び研修事業、行政・各機関との協力事業、子育て支援センター等の受託事業を行っている。筆者は、平成 26 年度から学生の卒業研究にご協力いただき、実践的な学びをさせていただいている。

<引用文献>

- ・ 相戸晴子 (2001) 「子育てネットワークの必要性と課題について：筑豊子育てネットワークの活動事例より」『生活体験学習研究』日本生活体験学習学会 pp71-80



## 学生のジェネリックスキル伸長状況の分析

### Analysis of students' generic skill growth situation

安達 一寿<sup>1)</sup>

Kazuhisa ADACHI

**キーワード**：ジェネリックスキル、リテラシー、コンピテンシー、学修評価、学修成果の可視化

**要旨**：本研究では、2015年度から2018年度で実施したジェネリックスキルの測定結果を分析、本学の学生の特徴や伸長状況を明らかにし、さらにその要因に関して傾向を洗い出して、対応策を検討することを目的とする。ジェネリックスキルの測定には、PROG（株式会社リアセック社・学校法人河合塾の共同開発）を用いる。分析の結果、学生の特徴として、リテラシー・コンピテンシーとも様々なレベルの学生の存在が明らかになった。また、伸長に関わる要因として、大学での目標の明確度やキャリア・地域活動への関心度に関係があることが明らかになった。今後の課題として、学生の特徴に応じた教育方法の開発や教育課程の見直しの必要がある。

#### 1 はじめに

本学では、2014年度から2018年度の間に、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（以下COC事業）の採択を受け、「新座市をキャンパスに！ +（プラス）となる人づくり、街づくり」をテーマに、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献分野で取り組みを推進してきた。そして、本COC事業で目指す学生育成方針を「Jモデル・プラス」とし、「“地的好奇心”に満ちた、活力・実践力のあるPro-act型の学生の育成」を目指し、次の3点を視点に置いた教育課程や教育方法等の開発をおこなってきた。

- ・地域を学ぶ 地域を理解、地域の課題解決を通して、社会人としての基礎力養成
- ・地域で学ぶ 地域とのふれあい・活動を通して、コミュニケーション力養成
- ・地域に活かす 自らの「可能性＝伸びしろ」に気づき、積極的に地域に貢献する心の養成

同時に、新しい人材像に必要とされるリテラシー等の枠組み、並びに地域における実践型の学びにより人材を育成するためのルーブリックやeポートフォリオなどの教育指標・評価ツールの開発研究と活用も推進してきた。特にルーブリックに関しては、本COC事業での人材育成の評価指標として活用することを前提に、表1で示す項目で構成した。これらの項目は、ジェネリックスキルと呼ばれるものであり、経済産業省の「社会人基礎力」や文部科学省の「学士力」、及びOECD「キー・コンピテンシー」と重なるものである。

従来、ジェネリックスキルの評価は学生自身の自己評価によるものが中心であった。ある授業や活動を通してどれだけ能力が身についたのか学生自身が振り返ることは、学生の成長を促すために大いに役立つ評価方法である。しかし実際には学生の力が上がっていても、自分を見る評価基準が上がったために自己評価が下がるということもある。また、他の学生と相互の比較をしようとする際には客観的な基準が必要となる。そこで、本学では学生のジェネリックスキルを測定するツールとして、PROGを採用した。理由としては、表1に示す通り本学のルーブリックの評価指標とPROGの測定項目には相当性があることがある。これは、いずれも「社会人基礎力」等が基になっているためである。

PROGは、現実的な場面を想定して作成されている。知識の有無を問うものや自己診断的なものが多かった従来のテストと異なり、実際に知識を活用して問題を解決することができるか（リテラシー）、実際にどのように行動するのか（コンピテンシー）を測定している。その特徴を一言でいえば、ジェネリックスキルを要素的に捉え、一定の文脈の中で直接評価する標準化されたテストということになる。

1) 十文字学園女子大学 メディアコミュニケーション学科/地域連携推進機構 地域教育開発部門長

表1 本学ルーブリックの項目と PROG 測定項目の対応

本学ルーブリックの項目			PROG測定能力・要素
中項目	領域	小項目	
知的コンピテンス (リテラシー相当)	知識を活用する力	読み解く力	言語処理能力
		書き表す力	言語処理能力
		資料を活用する力	非言語処理能力、情報収集力
		創造する力	課題発見力、構想力
		論理的に表現する力	情報分析力
社会的コンピテンス (コンピテンシー相当)	対人領域	他者を思う力	親和力
		話し合う力	統率力
		協働する力	協働力
	対自己領域	前を向く力	自信創出力、行動持続力
		自己を理解する力	感情抑制力
		就業観を養う力	—
	対課題領域	目標を決める力	課題発見力
		計画を立てる力	計画立案力
		実践する力	実践力

そこで本研究では、2015年度から2018年度で実施したPROGによるジェネリックスキルの測定結果を分析し、本学の学生の特徴や伸長状況を明らかにし、さらにその要因に関して傾向を洗い出し、対応策を検討することを目的とする。今回は、主として全体の状況に関わる分析内容に関して報告する。

## 2 試験概要と受検方法

### 2.1 測定する指標の構成概念

PROGでは、大きく分けて「リテラシー」と「コンピテンシー」を測定している。以下にその概要を述べる。

#### 2.1.1 リテラシーの構成概念

PROGでは、リテラシーを「新しい問題や経験のない問題に対して、知識を活用して問題を解決する能力」と定義し、問題解決のプロセスに即した、「情報収集力」、「情報分析力」、「課題発見力」、「構想力」、「表現力」、「実行力」の6つの能力として定義<sup>(1)</sup>している。この内PROG受検では、ペーパーテストでの測定にはなじまない「表現力」、「実行力」を除いた、「情報収集力」、「情報分析力」、「課題発見力」、「構想力」の4つの能力に加えて、「言語処理能力」、「非言語処理能力」を測定対象としている。各能力要素は5ランクで、リテラシーの総合力は7ランクで測定される。

#### 2.1.2 コンピテンシーの構成概念

PROGでは、コンピテンシーを「周囲の状況にうまく対処するために身につけた、意思決定・行動指針などの特性」と定義<sup>(1)</sup>している。これは、内閣府の人間力戦略研究会によって策定された「人間力」の定義<sup>(2)</sup>に基づいている。この人間力は、「知的能力的要素」、「社会・対人関係力的要素」、「自己制御的要素」の3つが必要能力として考えられるとしており、PROGではそれを、「対人基礎力」、「対自己基礎力」、「対課題基礎力」の3つの大分類として定義している。そして、それぞれの大分類を構成する要素を中分類に整理し、それぞれの中分類の要素を7ランクで測定している。大分類と中分類の要素の対応は以下の通りである。

- ・対人基礎力 — 親和力、協働力、統率力
- ・対自己基礎力 — 感情抑制力、自己創出力、行動持続力
- ・対課題基礎力 — 課題発見力、計画立案力、実践力

## 2.2 受検方法と人数

PROG の受検は、1 年次生と 3 年次生とし、それぞれ前期授業期間中に実施した。各年度での受検人数を表 2 に示す。分析にはこれらを母集団とした。

表 2 年度毎の PROG 受検人数

学科	学年	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
幼児教育学科	1 年	190	194	174	199
	3 年	163	174	183	180
児童教育学科	1 年	67	77	97	95
	3 年	58	56	63	74
人間発達心理学科	1 年	121	109	114	128
	3 年	120	101	109	96
人間福祉学科	1 年	76	65	47	59
	3 年	80	48	67	63
健康栄養学科	1 年	116	84	91	80
	3 年	-	-	103	74
食物栄養学科	1 年	136	131	128	122
	3 年	119	124	132	129
文芸文化学科	1 年	40	54	50	76
	3 年	-	-	47	55
生活情報学科	1 年	74	62	84	100
	3 年	107	79	84	66
メディアコミュニケーション学科	1 年	25	35	24	44
	3 年	59	51	26	37

※健康栄養学科と文芸文化学科は 2015 年度設置のため、2015、2016 年度の 1 年次生の受検はない。また、3 年次生には編入生を含む。

## 3 分析結果

### 3.1 リテラシーの状況

表 3 に各年度・学年別にリテラシーの平均、標準偏差を示す。また、図 1、図 2 に各年度・学年別にリテラシーのレベル分布の割合を示す。

リテラシーは約 30 問での測定するため、各年度比較はスコア差が大きい。(2016 年度は、最後まで回答をおこなうために問題順を易→難としたため、0.94 ほど高く値が出ている。)

3 年生のリテラシーの傾向は 1 年生とほぼ同傾向である。分布は、L4～L5 にピークがあり、1 年生との比較では、L6、L7 の割合がやや増えている。

表 3 リテラシーの各年度・学年別平均・標準偏差

入学年度	1 年次生		3 年次生	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
2013	-	-	4.67	1.50
2014	-	-	4.82	1.19
2015	4.13	1.47	4.58	1.34
2016	4.77	1.25	4.48	1.40
2017	4.17	1.40	-	-
2018	4.13	1.51	-	-

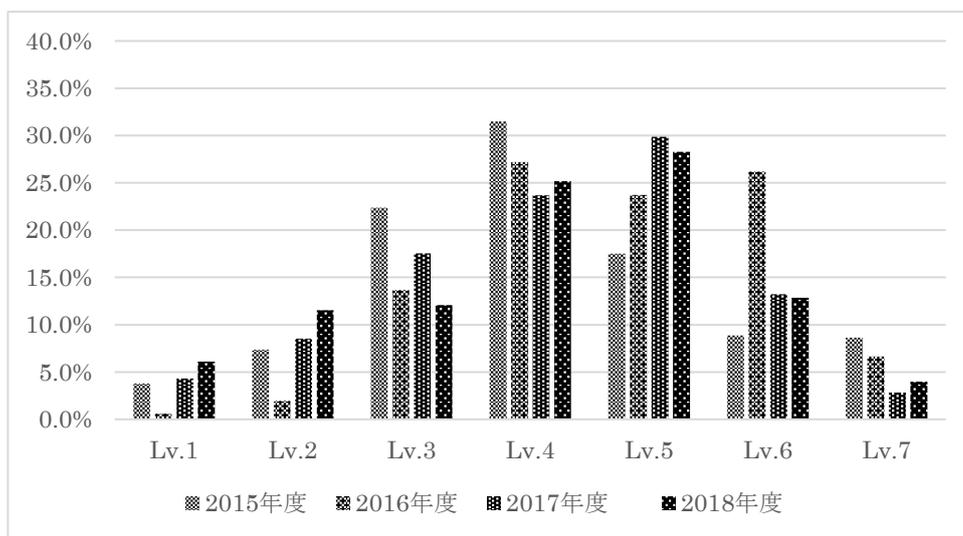


図1 リテラシーのレベル分布（1年次生）

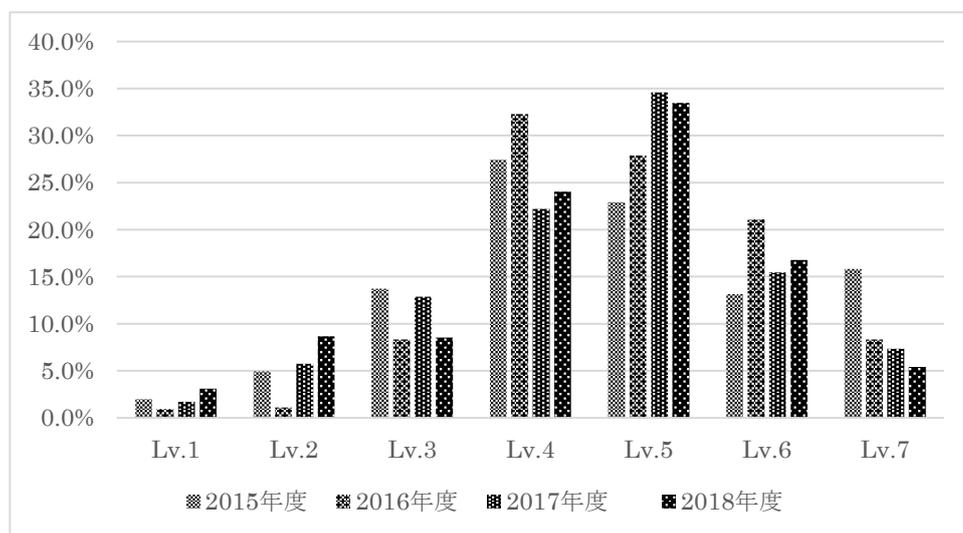


図2 リテラシーのレベル分布（3年次生）

### 3.2 コンピテンシーの状況

表4に各年度・学年別にコンピテンシーの平均、標準偏差を示す。また、図3、図4に各年度・学年別にコンピテンシーのレベル分布の割合を示す。

コンピテンシーは全体的に学生間のばらつきが大きい。分布を見ると、Lv.1～3に約60%の学生が存在している。

表4 コンピテンシーの各年度・学年別平均・標準偏差

入学年度	1年次生		3年次生	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
2013	-	-	2.79	1.47
2014	-	-	2.77	1.51
2015	2.78	1.50	2.73	1.49
2016	2.95	1.52	2.83	1.52
2017	2.75	1.52	-	-
2018	2.68	1.43	-	-

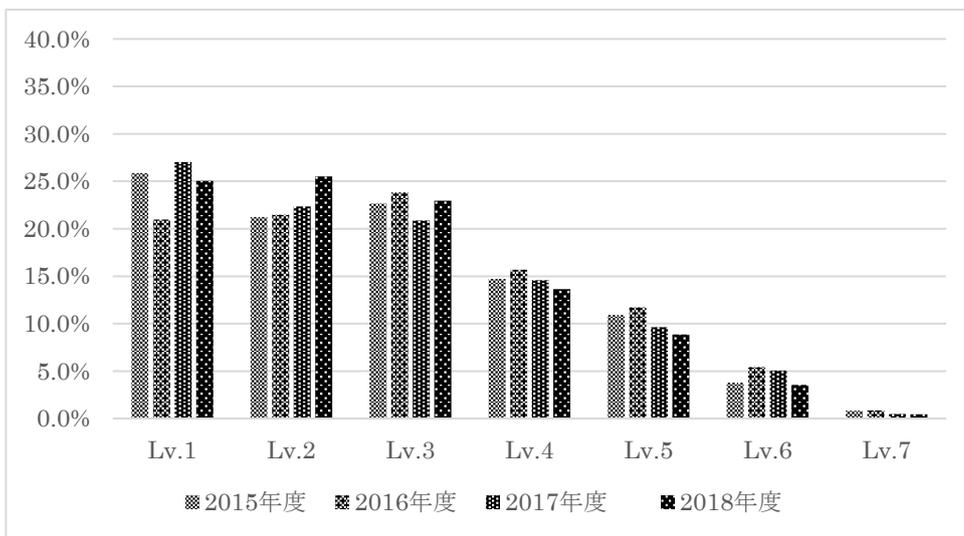


図 3 コンピテンシーのレベル分布（1年次生）

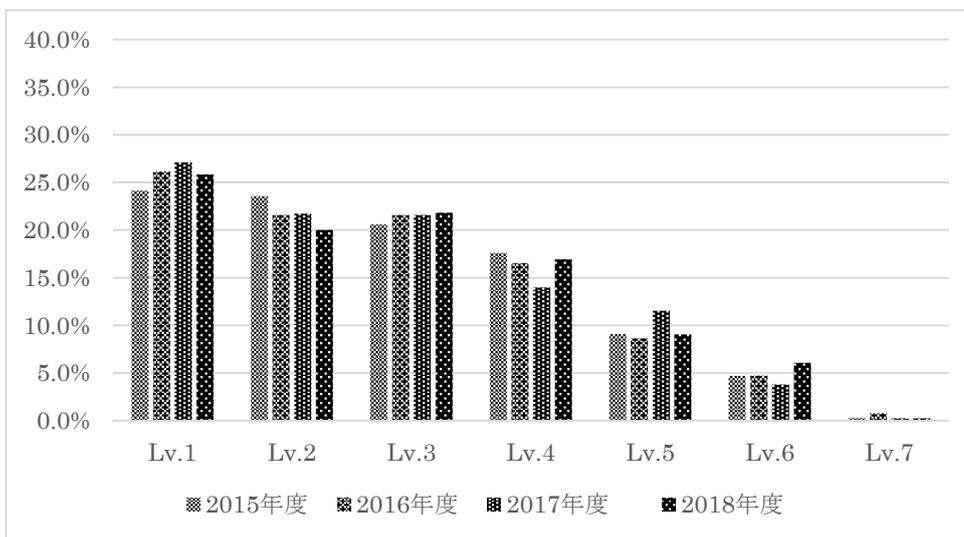


図 4 コンピテンシーのレベル分布（3年次生）

3.3 コンピテンシーレベルの差異と目標明確度等の関係性

PROG 受検時に同時にアンケートを実施している。アンケート項目は、「大学での目標明確度」、「大学生活への期待」、「自分のキャリア関心度」、「地域活動への関心」等を回答（5 反応形式 5:高-1:低）するものである。

2018 年度 1 年次生に関して、コンピテンシーレベルの差異とアンケート項目間の関係性を分析した。コンピテンシーレベルは、Lv. 5 以上を上位層、Lv. 1 を下位層とし、上位層と下位層の回答値の差、及び有意差検定をおこなった。結果を表 5 に示す。

表 5 コンピテンシーレベルの差異と目標明確度等の関係性

	大学での 目的明確度	大学生活への 期待度	自分のキャリア 関心度	地域活動への 関心度
レベル上位層(Lv>5)	3.72	3.90	4.34	3.84
レベル下位層(Lv=1)	3.24	3.65	3.65	3.24
上位層-下位層	0.48	0.25	0.69	0.60
有意差	1%有意	1%有意	1%有意	1%有意

過去3年間に関しても分析したが、同様の傾向が見られた。コンピテンシーレベル下位層に関しては、1年次の大学入学時点で、進学目的を明確にし、入学の動機形成を促す支援が望まれる。

### 3.4 リテラシー、コンピテンシーの伸長

2018年度3年次生に関して、1年次から3年次の伸長状況を分析した。図5、図6にそれぞれの受検年度の分布を示す。

本分析にあたっては、他大学などの受検データベース（約2万人）から得られている伸長予測値（リアセック社算出）との比較もおこなった。それによると全学平均では、リテラシーは伸長予測値(4.62)とほぼ同値(4.54)であり大きな変化はなかったが、コンピテンシーは伸長予測値(3.08)よりも下回る結果(2.77)となった。（なおここでの平均値は、1年次と3年次両方を受検した学生で集計したため、表4で示した平均値とは異なる。）

リテラシーに関しては、1年次のピークがLv.4であるが、そこからレベルが上がる学生も下がる学生も見られる。コンピテンシーに関しては、1年次のピークがLv.3に対して、3年次のピークはLv.1となっている。

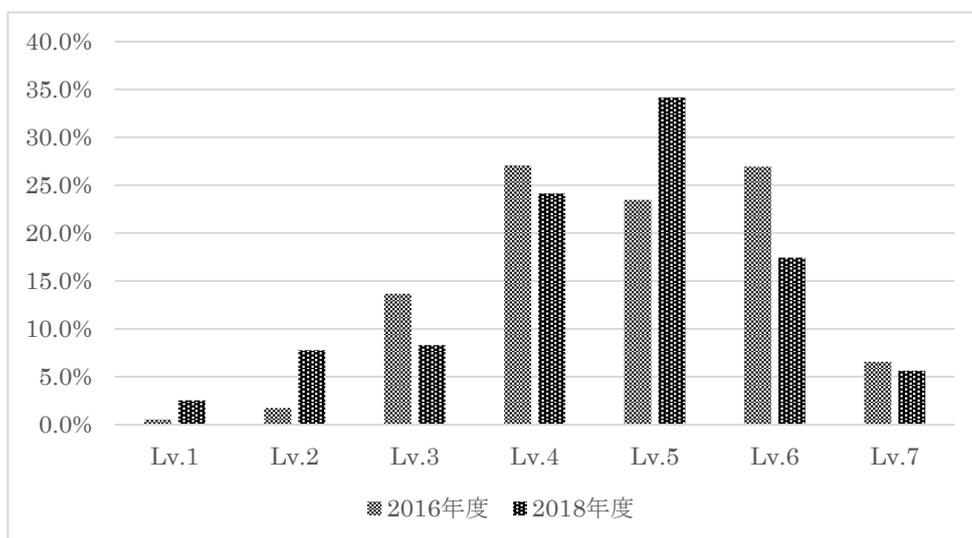


図5 リテラシーの伸長分布

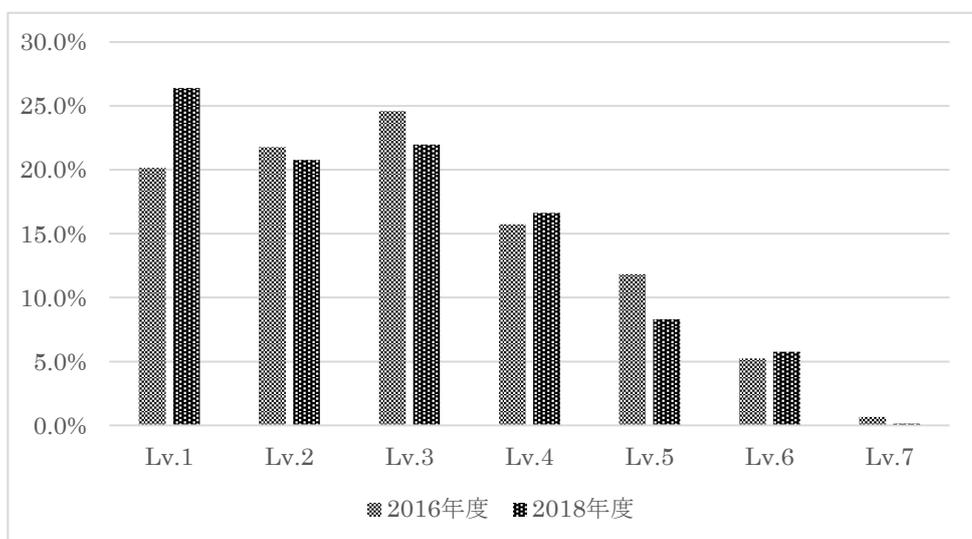


図6 コンピテンシーの伸長分布

また、この分析に合わせて、1年次にLv.1からLv.2であった学生が、どのようにレベルが変化しているかも分析した。その結果、上記レベル学生の約78%がそのままのレベルで停滞している傾向にあった。入学時にLv.1からLv.2の学生が能力開発をしきれないまま学生生活を送っていることが予想される。

#### 4 対応策のまとめと今後の課題

本研究では本稿で分析した内容以外にも、リテラシーの各能力要素やコンピテンシーの中分類要素の傾向を分析した。これらの結果と併せて、特に強化すべき要素とよりよい能力育成を図るための対応策について表6にまとめる。

表6 強化すべき要素と対応策

強化すべき要素	目指す状態	対応策	
リテラシー	基準集団と比較して、特に課題のある要素は見当たらない	低・中レベル学生の一層の能力引き上げが望まれる	
コンピテンシー	協働力	人から相談された際に、本人がやる気が出るよう働きかけることができる 雰囲気づくりなどを通じてチームに貢献できる 誰かを支援する時には全力でサポートする 周囲との協力や働きかけを通じて、チームの成果に貢献することができる	相手の意図をよく考えて返答するように指導している 各自が持っている知識や情報を体系立てて整理し発表する機会を設ける 互いに協力し、補い合いながら、課題を遂行するようにさせる
	統率力	自分の考えを整理し、筋道を立てて伝えることができる 話し合いの場では、議論の目的を見失わずに意見を述べることができる 自分の考えを論理的かつ気持ちを込めて相手にわかりやすく伝えることができる 意見の異なる相手でも、粘り強く自分の考えを伝えることができる	自分の考えを整理して、相手にわかりやすく伝えられるようにする 周囲に対して、自分の要望をはっきり伝えるようにする 表現豊かに話したり、書いたりする機会を設ける 粘り強く周囲に説明をするような機会を設ける
	感情制御力	ストレスやプレッシャーがかかる場面でも、落ち着いて対処できる 難しい課題に対しても前向きに取り組むことができる 自分がストレスを感じやすい場面を知っており、対処法を知っている 失敗に向き合い原因を徹底的に考えることができる	ストレスやプレッシャーを与えて、その中で結果を出すことを求める 限られた時間の中でも、物事に優先順位を付けて、ベストを尽くすよう指導する 難しい課題に対しても前向きに取り組む、結果を振り返るよう指導する 自分がストレスを感じやすい状況について自覚を促す
	自信創出力	自分ならではの強みや持ち味を活かせる場面をイメージすることができる 初めてのことで、臆せず取り組むことができる 難しいことでも、積極的に挑戦し、失敗しても何かを学ぼうとする 好きではない仕事でも、自分なりに工夫して取り組むことができる	他者との比較の中で、自分の強みや弱みを自覚させる 初めてのことに積極的に挑戦させる 将来の価値を期待せず、眼前のことに楽しんで工夫して取り組むよう指導する
	行動持続力	何かに取り組む時には、自発的に考え行動に移すことができる 取り組んだことに対しては、自分なりに工夫しながら最後までやり抜くようにしている なすべきことや他者の期待を自ら考え、責任をもって行動することができる 周囲からの期待以上のことを主体的に行うようにしている	人に頼らず自分の意思で判断し、課題に取り組ませるようにする 学習方法などについて、自分なりに良いやり方を見出すよう指導する 授業期間を通じて、一つあるいは複数の課題を成し遂げる経験をさせる 周囲からの期待以上の結果を求める

課題発見力	課題に応じて様々な方法で情報を集めることができる 定量データを客観的に分析し、複数の因果関係の仮説を立てることができる 課題に応じて、定性的な情報や、定量的なデータを収集し、適切に整理・分析できる	物事の因果関係を、論理的に考える機会を設ける 問題の本質に迫るために、自分で納得するまで深く考えさせるようにする 定性的な情報と定量的な情報の両方の観点から分析させる
計画立案力	課題に対して、目標と計画を大まかに立てることができる 立案した計画や目標に自分なりに取り組むことができる 条件が明確な課題であれば、発生しそうな問題を予め考えることができる 起こりうる事象を予測し、計画を立て取り組むことができる	ゴール(目指す姿)をイメージしてから、課題に取り組みさせる 想定される障害を考慮して代替案を考えるよう指導する 立てた計画について、達成の見込みや問題点を客観的にあげさせる
実践力	計画を実行しながら、遅れや予想外の事態に応じて行動を修正することができる うまくいかなかった場合、原因を追求し次に役立てることができる チームの他の人の様子に気を配りながら、物事を進めることができる 進捗状況を確認しつつ、自ら率先して行動することができる	想定外の事態に対処して、計画を変更しながら目標に向かうような経験をさせる グループ全体の進捗状況に配慮しながら、自ら率先して行動するようにさせる 行動の結果を振り返り、良かった点、悪かった点を考え、改善策を考える機会を設ける グループで活動を振り返り、各自の役割貢献について内省する機会を設ける

今後の課題としては、ここに挙げた対応策に基づいた授業や活動をどのように開発するか、また、個々の学生の状況に応じた能力育成のモデル開発がある。

#### 付記

本研究は、本学研究倫理委員会の審査の結果、承認されたものである。(承認番号 2018-009)

#### 謝辞

本研究の分析では、灘成昭氏(株式会社リアセック・熊本大学大学院社会文化科学研究科教授 システム学専攻 博士前期課程)の多大なご協力を得た。ここに感謝申し上げます。

#### <参考文献>

- (1) PROG 白書プロジェクト編著、2015、PROG 白書 2015、学事出版株式会社
- (2) 人間力戦略研究会、2003、人間力戦略研究会報告書、内閣府、<https://www5.cao.go.jp/keizai1/2004/ningenryoku/0410houkoku.pdf>

# 資料



## 地域活動に関する学生アンケートの集計

## Total of student questionnaires on community activities

安達 一寿<sup>1)</sup> 星野 敦子<sup>2)</sup> 名塚 清<sup>3)</sup>  
 Kazuhisa ADACHI Atsuko HOSHINO Kiyoshi NAZUKA

キーワード：アンケート、集計、地域活動、COC

**要旨：**COCセンターでは、2018年度後期にCOC事業の評価として本学学生へのアンケートを実施した。アンケート内容は、本学学生の地域活動に関する実態や身についた能力等で、その結果を集計した。社会活動への参加経験や社会活動を通じた能力の伸長度合い、参加意思などの傾向が明らかになった。

### 1 はじめに

COCセンターでは、2014～2018年度の5年間に渡り、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（大学COC（Center of community）事業）」（以下、COC事業）を推進してきた。その事業評価の一環として、2018年度後期に本学学生へのアンケートを実施した。このアンケートは、COC事業での学生育成目標である「“地的好奇心”に満ちた、活力・実践力のあるpro-act型の学生」に関して、本学学生の地域活動への参加状況や形態、学生自身が身についたと自己評価している能力を調査することを目的とするもので、平成30年9月13日（木）の後期オリエンテーション時に実施し、その後集計をおこなった。本稿では、その集計結果を報告する。

### 2 対象者の状況

アンケートを実施・回収した学生の所属学科・学年を表1に示す。なお、アンケートの回収率は88.4%(2,973/3,364名)である。

表1 アンケート実施学生数

学年	幼児教育	児童教育	心理	人間福祉	健康栄養	食物栄養	文芸文化	生活情報	メディア	合計
1年	193	87	115	55	78	117	71	95	39	850
2年	166	80	104	45	84	117	43	78	18	735
3年	174	69	94	50	72	118	50	56	30	713
4年	163	43	89	46	89	124	34	63	19	670
過年度	—	—	1	—	—	3	1	—	—	5
計	696	279	403	196	323	479	199	292	106	2,973

(注) 心理：人間発達心理、メディア：メディアコミュニケーション

### 3 設問項目

今回実施したアンケート項目と回答形式を以下に示す。項目Ⅰ～Ⅲは参加状況や形態、項目Ⅳは能力育成に関する自己評価、項目Ⅴは今後の地域活動に関する意向、を問うものになっている。

- 1) 十文字学園女子大学 地域連携推進機構 地域教育開発部門長／メディアコミュニケーション学科  
 2) 十文字学園女子大学 地域連携推進機構 機構長代理／児童教育学科  
 3) 十文字学園女子大学 地域連携推進機構 副機構長

I. 大学入学後に、以下の社会活動に参加したことがありますか。(複数選択)

- ①お祭りなど地域のイベントに関わる活動 ②障害者や高齢者の支援に関わる活動 ③学校インターンシップ、放課後子ども教室など小学校に関わる活動 ④子育て支援、乳幼児に関わる活動 ⑤子どもの自然体験に関わる活動 ⑥献血、募金などに関わる活動 ⑦その他

II. I の社会活動にはどのような形で参加していましたか。(複数選択)

- ①授業を通して ②ゼミ活動を通して ③サークルを通して ④地元の活動 ⑤COC センターを通して ⑥ボランティアセンターを通して ⑦知り合いを通して ⑧その他

III. I の社会活動には合計で何回参加しましたか。(単数選択)

- ①1回 ②2回 ③3回 ④4回 ⑤5回 ⑥6回 ⑦7回 ⑧8回 ⑨9回 ⑩10回

IV. 大学生活や社会活動を通して以下の能力がどの程度高まりましたか。(各4反応形式)

- ①地域に関する知識・技能 ②専門分野に関する知識・技能 ③思考力や判断力 ④表現力・プレゼン力 ⑤コミュニケーション能力 ⑥積極性 ⑦地域活動に対する意欲 ⑧人とうまく関わる能力

V. 今後地域に関わる活動をしたいと思いますか。(単数選択)

- ①積極的に活動に関わりたい ②機会があれば活動に関わりたい ③直接活動したいとは思わないが興味はある ④活動したいとは思わない

## 4 集計結果

### 4.1 社会活動への参加経験

表2、図1に、社会活動への参加形態を示す。割合の母数は、各学年全体数である。

表2 社会活動への参加経験

学 年		1年	2年	3年	4年	過年度	全学年
		850	735	713	670	5	2,973
①お祭りなどの地域イベントに関わる活動	ある	157 18.5%	237 32.2%	275 38.6%	252 37.6%	2 40.0%	923 31.0%
	ない	693 81.5%	498 67.8%	438 61.4%	418 62.4%	3 60.0%	2,050 69.0%
②障害者や高齢者の支援に関わる活動	ある	75 8.8%	148 20.1%	149 20.9%	163 24.3%	1 20.0%	536 18.0%
	ない	775 91.2%	587 79.9%	564 79.1%	507 75.7%	4 80.0%	2,437 82.0%
③学校インターンシップ、放課後子ども教室など小学校に関わる活動	ある	94 11.1%	124 16.9%	184 25.8%	175 26.1%	1 20.0%	578 19.4%
	ない	756 88.9%	611 83.1%	529 74.2%	495 73.9%	4 80.0%	2,395 80.6%
④子育て支援、乳幼児に関わる活動	ある	53 6.2%	64 8.7%	74 10.4%	72 10.7%	1 20.0%	264 8.9%
	ない	797 93.8%	671 91.3%	639 89.6%	598 89.3%	4 80.0%	2,709 91.1%
⑤子どもの自然体験に関わる活動	ある	35 4.1%	70 9.5%	85 11.9%	80 11.9%	1 20.0%	271 9.1%
	ない	815 95.9%	665 90.5%	628 88.1%	590 88.1%	4 80.0%	2,702 90.9%
⑥献血、募金などに関わる活動	ある	85 10.0%	76 10.3%	99 13.9%	100 14.9%	1 20.0%	361 12.1%
	ない	765 90.0%	659 89.7%	614 86.1%	570 85.1%	4 80.0%	2,612 87.9%

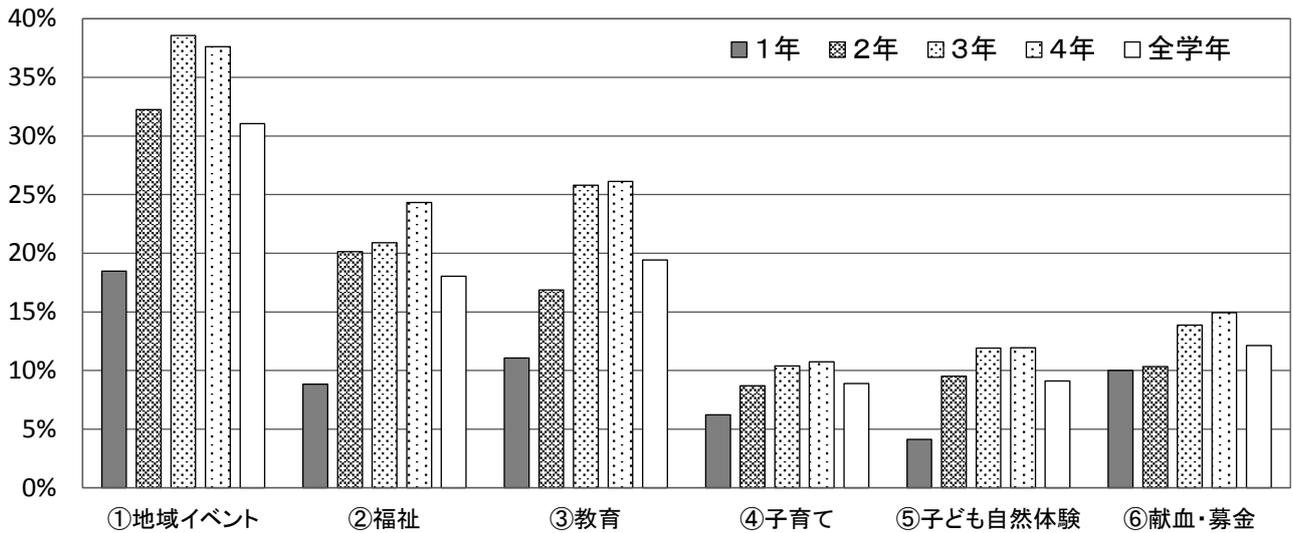


図 1 社会活動への参加経験の割合

#### 4.2 社会活動への参加形態

表 3、図 2 に、社会活動への参加形態を示す。割合の母数は、各学年全体数である。

表 3 社会活動への参加形態

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	過年度	全学年
	850	735	713	670	5	2,973
①授業を通して	142 16.7%	230 31.3%	197 27.6%	187 27.9%	1 20.0%	757 25.5%
②ゼミ活動を通して	0 0.0%	4 0.5%	67 9.4%	71 10.6%	1 20.0%	143 4.8%
③サークルを通して	32 3.8%	23 3.1%	68 9.6%	39 5.8%	0 0.0%	162 5.5%
④地元の活動	59 6.9%	53 7.2%	60 8.4%	67 10.0%	1 20.0%	240 8.1%
⑤COCセンターを通して	5 0.6%	13 1.8%	11 1.5%	17 2.5%	0 0.0%	46 1.5%
⑥ボランティアセンターを通して	28 3.3%	48 6.5%	59 8.3%	43 6.4%	0 0.0%	178 6.0%
⑦知り合いを通して	55 6.5%	57 7.8%	78 10.9%	63 9.4%	0 0.0%	253 8.5%
⑧その他	48 5.6%	46 6.3%	43 6.0%	51 7.6%	0 0.0%	188 6.3%

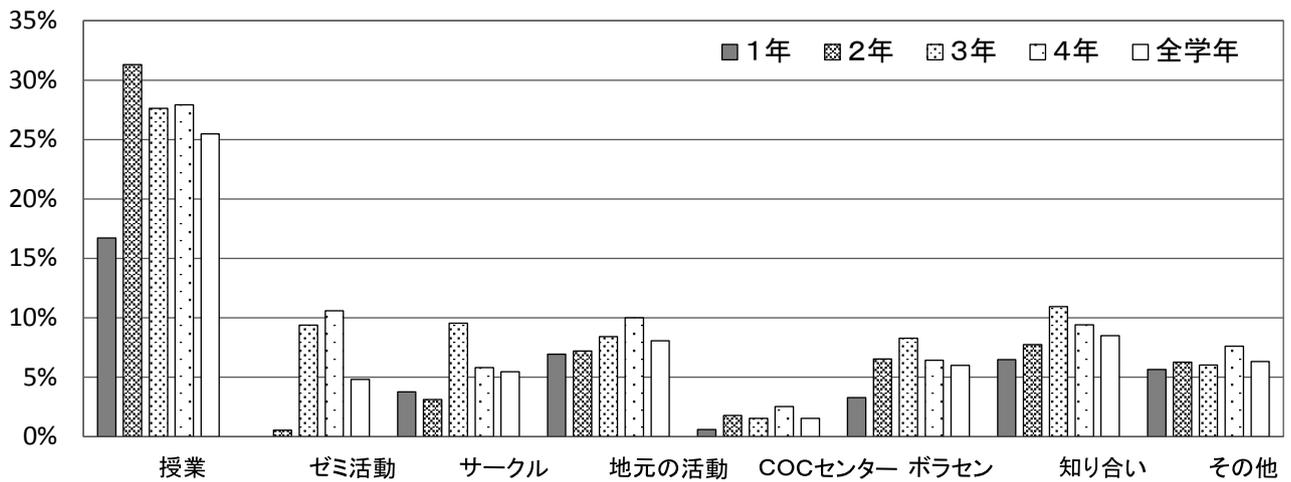


図 2 社会活動の参加形態の割合

#### 4.3 社会活動への参加回数

表 4、図 3 に、社会活動への参加形態を示す。割合の母数は、各学年全体数である。

表 4 社会活動への参加回数

参加回数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10以上	合計
回答数	1330	470	314	212	126	114	38	32	17	7	313	2,973
割合	44.7%	15.8%	10.6%	7.1%	4.2%	3.8%	1.3%	1.1%	0.6%	0.2%	10.5%	100%

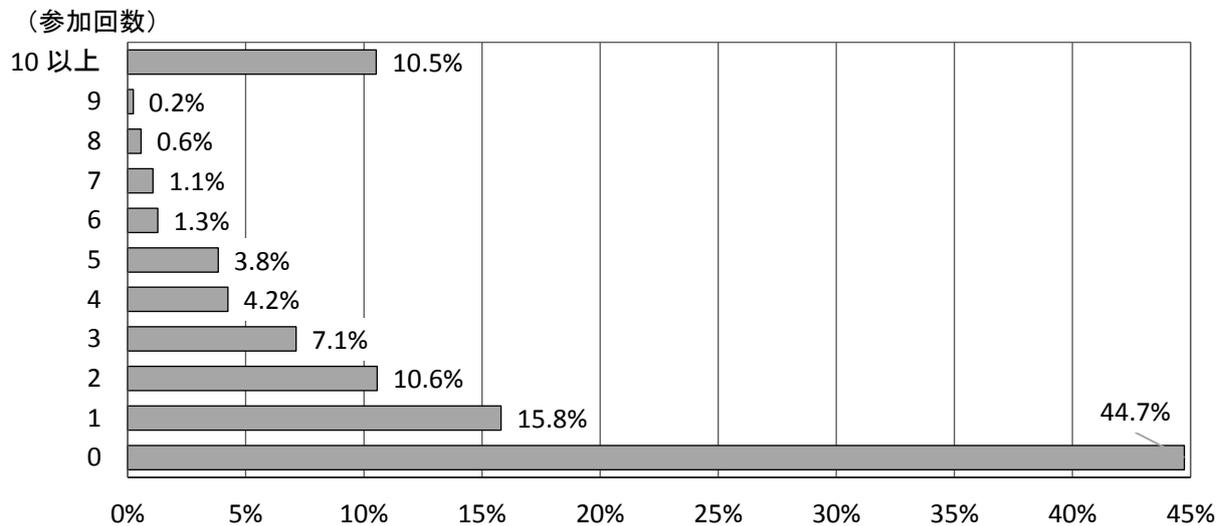


図 3 社会活動の参加回数の割合

#### 4.4 大学生活・社会活動を通じた能力の伸長度合いの自己評価

図 4～図 11 に、大学生活・社会活動を通じた能力の伸長度合いの自己評価結果を示す。(アンケート設問によって未回答などの理由で有効回答数に違いがある)

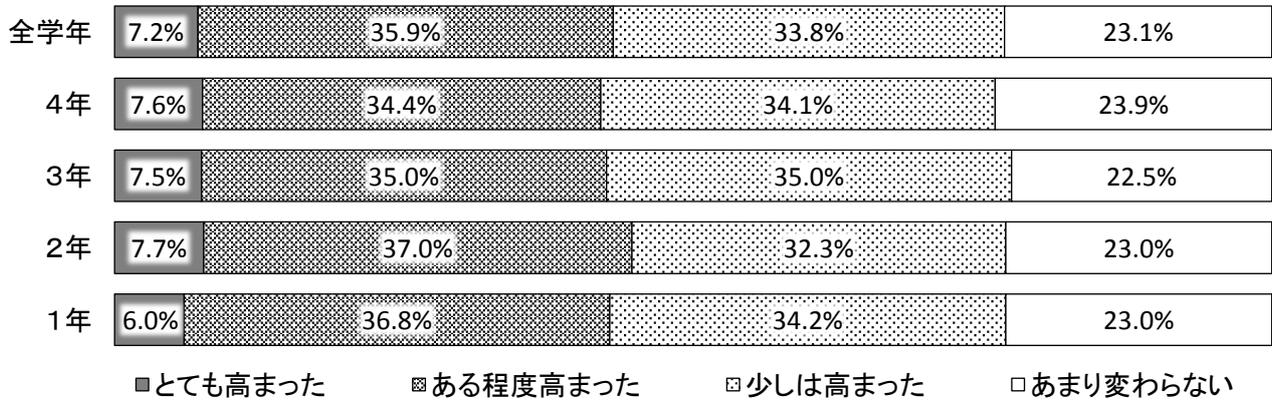


図 4 地域に関する知識・技能(対象数 2,973 有効回答数 2,739 (92.1%))

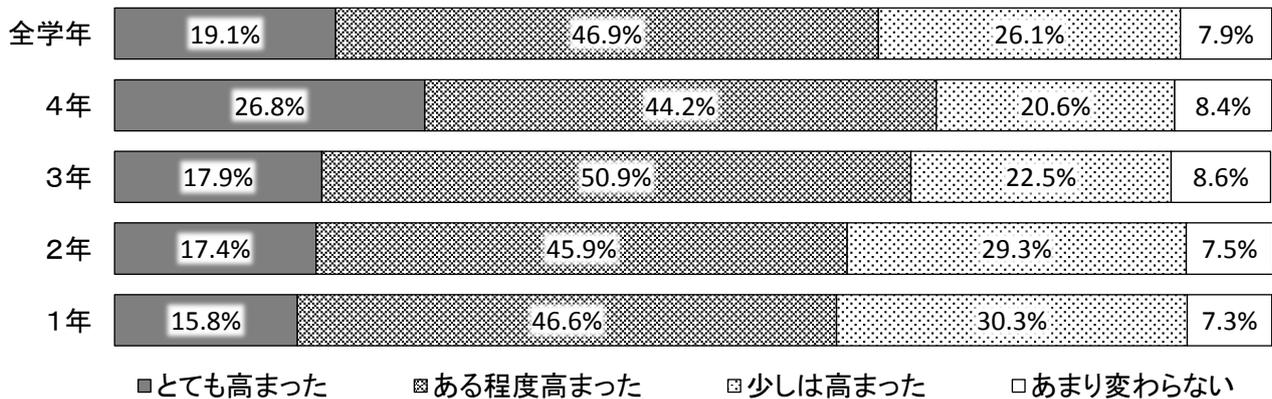


図 5 専門分野に関する知識・技能(対象数 2,742 有効回答数 2,739 (92.2%))

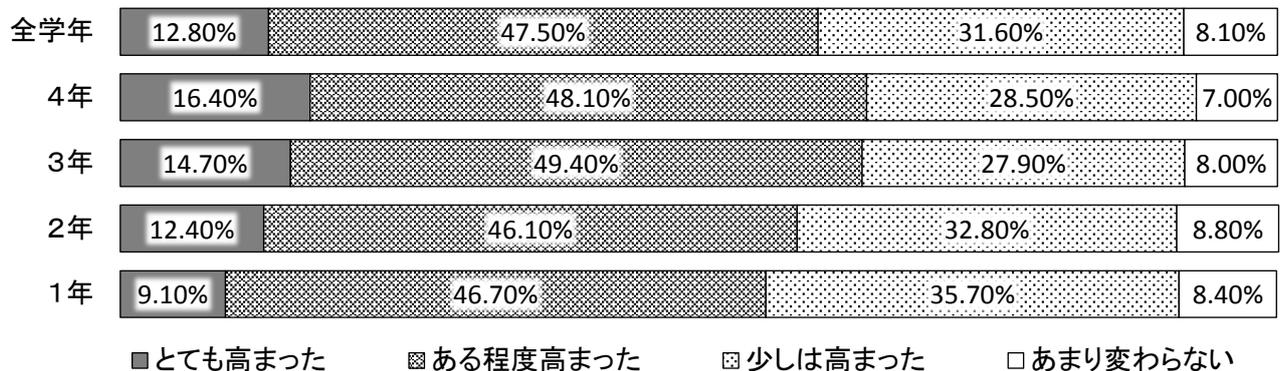


図 6 思考力や判断力(対象数 2,742 有効回答数 2,736 (92.0%))

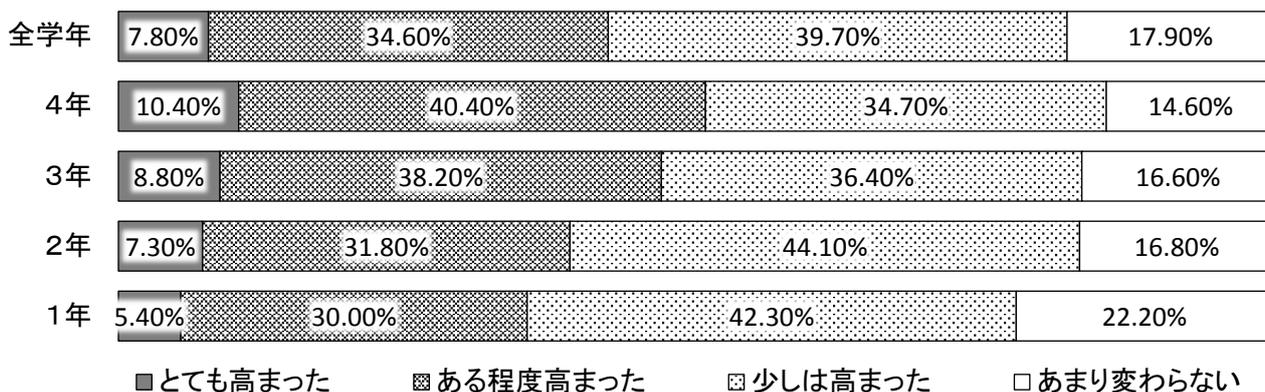


図 7 表現力、プレゼン力(対象数 2,737 有効回答数 2,739 (92.10%) )

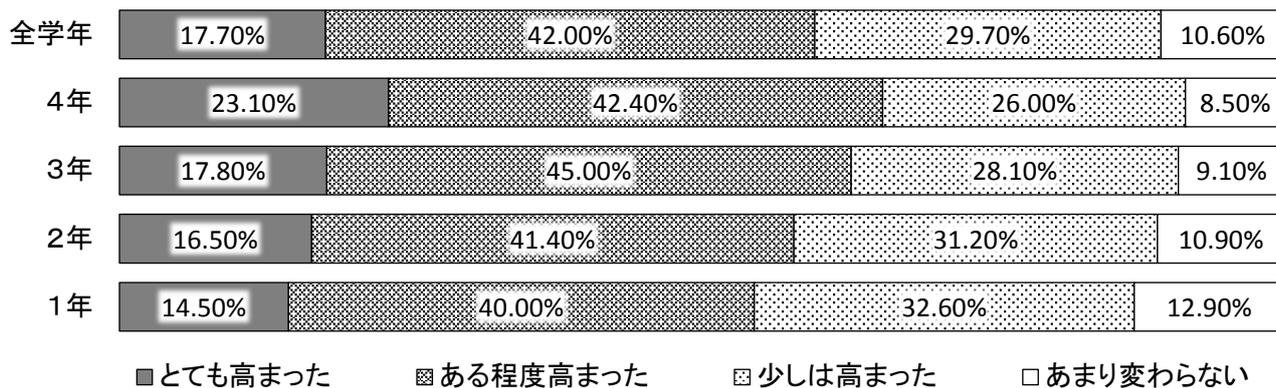


図 8 コミュニケーション能力(対象数 2,742 有効回答数 2,741 (92.2%) )

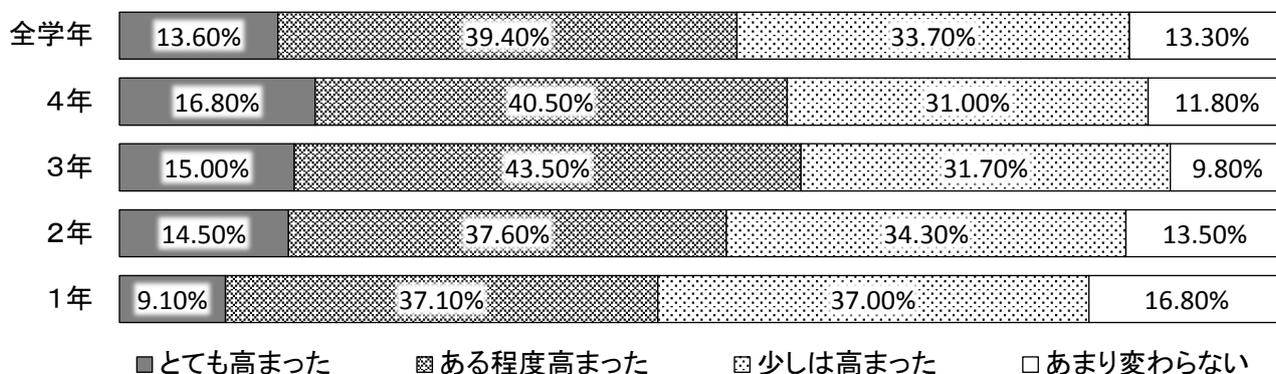


図 9 積極性(対象数 2,742 有効回答数 2,738 (92.1%) )

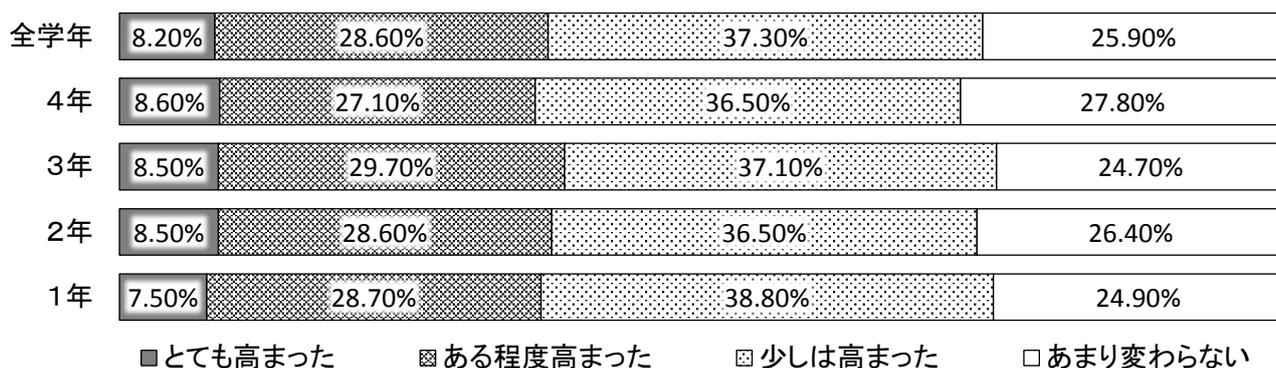


図 10 地域活動に対する意欲(対象数 2,742 有効回答数 2,739 (92.1%) )

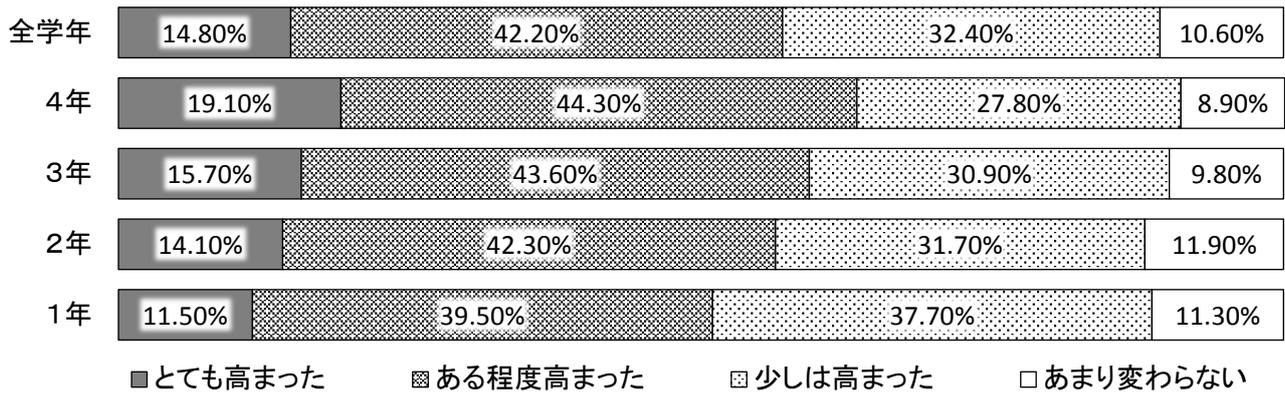


図 11 人とうまく関わる能力(対象数 2,740 有効回答数 2,740 (92.2%) )

#### 4.5 地域活動への参加意思

表 5、図 12 に、地域活動への参加意思の自己評価結果を示す。

表 5 地域活動への参加意思

	1年	2年	3年	4年	過年度	全学年
積極的に活動に関わりたい	125 16.9%	104 16.2%	79 13.4%	53 9.4%	0 0.0%	361 14.2%
機会があれば活動に関わりたい	518 69.9%	437 68.0%	435 73.6%	363 64.1%	0 0.0%	1,753 69.0%
直接活動したいとは思わないが興味はある	64 8.6%	70 10.9%	41 6.9%	97 17.1%	1 100.0%	273 10.7%
活動したいとは思わない	34 4.6%	32 5.0%	36 6.1%	53 9.4%	0 0.0%	155 6.1%
合計	741	643	591	566	1	2,542

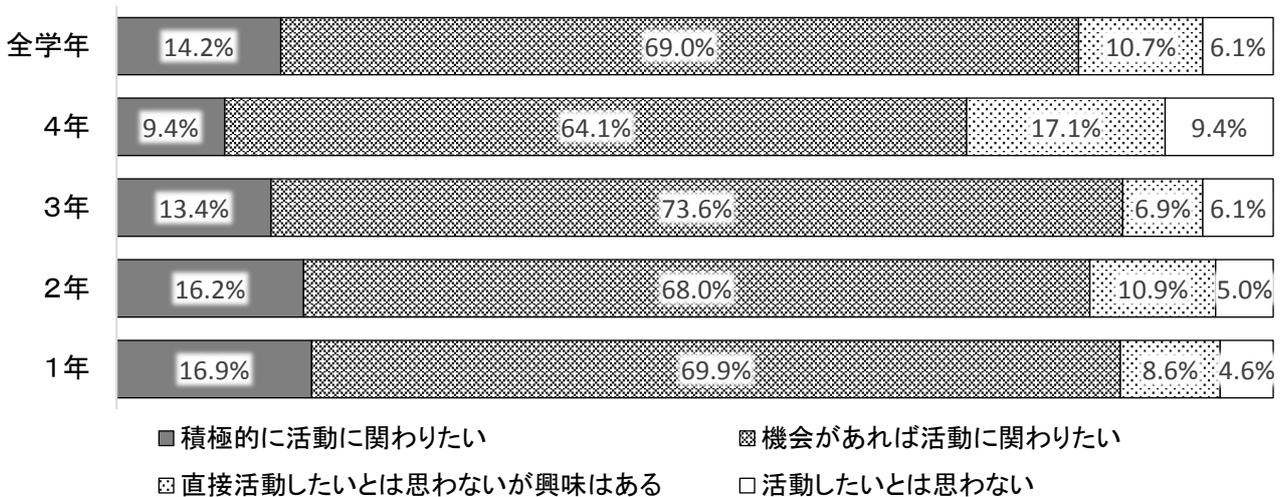


図 12 地域活動への参加意思の割合

## 5 まとめと今後の課題

今回実施したアンケート結果より、以下のことが明らかになった。

- ・社会活動への参加回数より、半数強の学生が何らかの形で社会活動の参加経験があることがわかった。また、1割強の学生は比較的多数の参加経験があることもわかり、経験している学生とそうでない学生の差が見られる。
- ・社会活動への参加形態としては、授業やゼミ活動などの教員からの紹介がきっかけになることが多い。本学では、専門の紹介機関としてCOCセンターやボランティアセンターがあるため、この間の連携体制をより拡充することが、学生の参加を促進することにつながると考えられる。
- ・大学生活・社会活動を通じた能力の伸長の自己評価では、「専門分野に関する知識・技能」、「思考力や判断力」、「コミュニケーション力」、「積極性」、「人とうまく関わる能力」について、半数以上の学生が肯定的な評価をおこなっている。これらの内、「思考力や判断力」、「コミュニケーション力」、「積極性」、「人とうまく関わる能力」は、コンピテンシーに相当する能力である。自己評価の結果だけでなく、相互評価や客観評価も加味して、社会活動と能力育成の関係に関して検討する必要がある。
- ・地域活動への参加意思に関しては、8割強の学生が積極的な態度を示している。ただし、「機会があれば」という学生の割合が高いことから、大学として社会活動の機会を設ける必要があると考える。

十文字学園女子大学

地域志向教育研究プロジェクト 研究成果論文集 2014～2018

2019年2月28日発行

発行者 十文字学園女子大学 地域連携推進機構

発行所 十文字学園女子大学 地域連携推進機構

〒352-8510 埼玉県新座市菅沢 2-1-28

TEL 048-477-0958 FAX 048-477-0764

<http://www.jumonji-u.ac.jp/coc/>

